梁武帝「斷酒肉文」譯法

「中國在家の佛教觀: 唐道宣撰 『廣弘明集』 を讀む」 研究班

卢

本稿は京都大學人文科學研究所共同研究班「中國在家の佛教觀:本稿は京都大學人文科學研究所共同研究班「中國在家の教理と經典」(二〇一六年四月~二〇二〇年三月)の實績を蹈國在家の教理と經典」(二〇一六年四月~二〇二〇年三月)の實績を蹈國在家の教理と經典」(二〇一六年四月~二〇二〇年三月)の實績を蹈國在家の教理と經典」(二〇一六年四月~二〇二〇年三月)研究成果の一部である。本研究班は、これに先行する共同研究班「中國在家の佛教觀:本稿は京都大學人文科學研究所共同研究班「中國在家の佛教觀:

☆。 本研究班に會讀する『廣弘明集』の原文校勘は前研究班の方針に本研究班に「東方等と經典」研究班編「沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」譯注」(『東方學從う。木版大藏經をめぐる近年の動向については「中國在家の教理本研究班で會讀する『廣弘明集』の原文校勘は前研究班の方針に

本班は、二〇二〇年九月より二〇二一年十二月の隔週金曜、梁武

稿は, 泰生, 子, 帝 の表記を統一的に修訂した。 擔當者は,古勝隆一,魏藝,趙ウニル, 「斷酒肉文」の全體を二十二囘に分け,譯注稿を準備した。各囘 中西竜也,魏藝,趙ウニル,倉本尚德, 倉本尚德, 中村愼之介、船山徹、趙ウニル、 擔當者が作成した最終稿を基に、 船山徹,ウィッテルン・クリスティアン,河上麻由 中西俊英,船山徹,久永昂 班長の船山徹が譯語と語釋 魏藝, 船山徹,船山徹,稻本 趙ウニルである。本

ちに實踐させようとした講錄である。そこには武帝の論說のほか,定めた規則集)との關係を論じ,食肉飲酒の全面的撤廢を出家者た部認める律典(ヴィナヤ・聲聞乘の立場から出家教團の日々の生活規則を選として,酒肉を攝るべからずと說く大乘の經典(スートラ)であ題として,酒肉を攝るべからずと說く大乘の經典(スートラ)であ題として,酒肉を攝るべからずと說く大乘の經典(スートラ)であり、資本の担害では、一個人間で表表。

食肉飲酒の是非を巡る出家者との問答や, 關連經典の文言その他

(二〇二三) がある。 顏尙文 (一九八八) (一九九九), 斷酒肉文_ 道端(一九七九 a)(一九七九 b), 一の內容・意義・成立時期を取り上げた主な先行研究 陳思遠 (二〇一三), 諏訪 (一九八八) (一九九七): 遠藤 (二〇二一)

半は梁代に成立したと考えられるが、一部に僅かながらも後代の補 いては本稿【三・二、語注】で取り上げる。 して, [唐] 自らの文に暗々裏に取り込んで「斷酒肉文」の語句を用いる文獻と であろうという說もある (西山一九九五)。 更に,書名を明記せずに 宗時代初年の閒に成立したと考えるべきであり,撰者は[唐] 藏で [唐] 懐信撰とするのは確實でなく、むしろ、武周期末から玄 る後代の文獻に『釋門自鏡錄』二卷がある。『釋門自鏡錄』 足を含む(船山二〇二一)。「斷酒肉文」という書名を明記して引用す 十卷(李秀花二〇〇八、船山二〇二一)がある。 『慈悲道場懺法 東都發願文」(黃·吳一九九五, また、「斷酒肉文」と同じ語彙・語法を示す同時代文獻として、 道世の『法苑珠林』と『諸經要集』がある。これにつ 郭麗英一九九三)と『慈悲道場懺法』 は大正 の大

す版本六種を年代順に示すならば以下の通りである。 う必要がある場合に限り、 せず、可能な限り初雕本の字を採用した。どうしても他本の字に從 高麗大藏經初雕本で內容を理解可能な場合は, 本(十二世紀)を底本とする。他の版本の讀みも勿論有用であるが に收める梁武帝「斷酒肉文」に基づく。原則として高麗大藏經初雕 本稿に收める現代日本語譯は,六種の木版大藏經本『廣弘明集 初雕本以外の字を採擇した。 恣意的な取捨選擇を 校勘記に記

高麗大藏經初雕本

(一〇一一頃~一〇八七)

對校本 金藏廣勝寺本(一一 四九~一一七三頃

|盧大藏經=福州開元寺版(一一四八)

=大正新脩大藏經校勘「宮」

(宮內省一九三〇:九〇~九一頁 本

思溪大藏經=大正新脩大藏經校勘 本 (一二三九)

高麗大藏經再雕本(一二三六~一二五一)

(南宋~元頃

そこで本稿校勘記では系統・年代の雙方を考慮し次の順に排列する 系の毘盧藏・思溪藏・磧砂藏の二種に大別される(竺沙二〇〇一)。 以上六本は北宋開寶藏系の高麗初雕本・再雕本・金藏と江

開寶藏系 1高麗大藏經初雕本

2金藏廣勝寺本

略號 略號

金 一麗初

3高麗大藏經再雕本 略號

略號 毘

4毘盧大藏經 思

江南諸藏

5思溪大藏經 略號

號で示し,以下,採用しなかった異本を「:」で區切って列擧する このような排列順に基づいて先ず冒頭に、 磧砂大藏經 採用した版本の字を略 略號

校勘記を作るに當たって常に惱ましい問題となるのは,異體字の

扱いである。本稿では意味を異にする字とそうでない字に大別し、 例を順不同に幾つか擧げると、礙 意味の相違を示さない漢字は正字で統一表記するものとする。その (荅·答), (施·陀), 斷 無 (慙・慚), (亂・亂), 宜 禮 (导・碍・礙), 殺 (宜・宜), (禮・禮), 爾 (介・爾), (羣・群),

原文表記の原則

三,原文中に〈〉で示した文言は,原文中の夾注である(「子注まとまりの文言であることを示す。『』は書名を表す。二,必要に應じて,原文の文言を「」で括り,それが引用等の一擧を示す「、」(現代中國語「頓號」)の三種を用いる。一,原文の句讀には,文末を示す「。」と,句末を示す「,」と,列

現代語譯の原則

とも言う。日本語「割注」,英語 "interlinear note")。

頭に「*」を付す。また一部例外的にパーリ語形を示す場合もある。一、現代語譯は、原文になるたけ忠實で平易な逐語譯を心懸ける。一、現代語譯は、原文になるたけ忠實で不易な逐語譯を心懸ける。一、現代語譯は、原文になるたけ忠實で不易な逐語譯を心懸ける。一、現代語譯は、原文になるたけ忠實で不易な逐語譯を心懸ける。

(株) - ら。 下)」は大正新脩大藏經第十二卷四五頁中段~下段を 蔵經の册と頁である。例えば「(大正一二·四五中~ 原文直後に付す「(大正X・Y2中~下)」は大正新脩大

(船山 御

【二、原文と校勘記】

【二・一、原文】

斷酒肉文」 梁高祖

1

閉,內懷忿異。 「佛法寄囑人王」。是以弟子不得無言。今日諸僧尼開意聽受,勿生「佛法寄囑人王」。是以弟子不得無言。今日諸僧尼開意聽受,勿生夫匡正佛法,是黑衣人事,迺非弟子白衣所急。但『經』敎亦弟子蕭衍敬白諸大德僧尼、諸義學僧尼、諸寺三官。

① a

報者,復何以異。此事與外道是同。子甘酒嗜肉,不畏罪因,不畏苦果。卽是不信因.不信果,與無施無子甘酒嗜肉,不畏罪因,不畏苦果。卽是不信因.不信果,與無施無報。今佛弟何謂同於外道。外道執斷、常見,無因無果,無施無報。今佛弟

他の略號

大正藏=大正新脩大藏經 Sanskrit =サンスクリット語=梵語

無所疑難。 有不及外道是何。外道各信其師, 猶自噉肉。] 言, 「迦葉: 『戒律』言,「飲酒, 一不及外道。 我今日制諸弟子不得食一切 師所言是 犯波夜提」, 弟子言是。 猶自 師所

受戒已, 又外道雖復邪僻. 輕於毀犯。 邪僻,持牛狗戒, (6) 是二不及外道。 既受戒已,後必不犯。 今出家人旣

今出家人噉食魚肉。是三不及外道 又外道雖復五熱炙身, 投淵赴火, 窮諸苦行, 未必皆噉食眾生。

(肉,於所親者乃自和光,於所疎者則有隱避。如是爲行,又外道行其異學,雖不當理,各習師法,無有覆藏。今出 今出家人噉 四不及

魚肉, 邪志,崎嶇覆藏。然後方得一過噉食。如此爲行,五不及外道。 於諸異人無所忌憚。今出家人,或復年時已長,或復素爲物宗 又外道各宗所執, 極自艱難, 或避弟子, 各重其法, 或避同學, 或避白衣, 或避寺官, 乃自高聲大唱云,「不如我道眞」, 懷挾 噉食

諸惡。是則六不及外道。 嫌」。白衣愚癡, 食魚肉,或爲白衣弟子之所聞見, 本存遠因。在於卽日, 又復外道直情逕行,能長己徒眾惡, 聞是僧說 未皆悉斷。以錢買肉,非己自殺, 謂眞實語: 內無慙愧,方飾邪說云,「佛敎爲 便復信受, 不能長異部惡。今出家人噉 自行不善, 此亦非 增廣

自死者猶斷. 出家人,噉食魚肉。或云「肉非己殺, 二業俱不善 又外道雖復非法說法, 法說非法. 如是說者,是事不然。『涅槃經』 此是以網網肉。 何況不自死者。 死墮叫呼獄」。 若於屠殺人閒 『楞伽經 何謂 以錢買肉。 猶自得噉。以錢買肉, 云,「一切肉悉斷,及自死者」。 「以財網肉」。陸設置罘, 굿, 各信『經書』,死不違背。 「爲利殺眾生, 此是 「以財網肉」。 以財網諸 亦復非 今

> 此是灼然違背『經』文。是則七不及外道。 亦復別有所擬。 若令此人不以財網肉者, 若別有所擬, 習惡律儀, 向食肉者豈無殺分。 捕害眾生 此人爲當專自供 何得云我不殺生。

爾止住。 默然低頭, 其教戒。裁欲發言,此今出家人,或爲師長, 又復外道同其法者和合, 異其法者苦治. 所以在寺者乖違, 面赤汗出, 他卽譏刺云,「師向亦爾 不復得言。身既有瑕, 或爲寺官, 自開酒禁, 不能伏物。 噉食魚肉, 不能伏物。便復摩何直 寺官亦爾」。心懷內熱: 令行禁止. 不復能得施 莫不率從

烏戒人終不覆戒受鹿戒施。鹿戒人終不覆戒受烏戒施。今出家人云, 「我能精進」、「我能苦行」。一時覆相, 入卽噉肉,集眾苦本。此是九不及外道。 誑諸白衣。 出卽飲酒, 開眾惡

又外道受人施與,

又外道雖復顚倒, 無如是眾事

① b

緣故,受此惡觸。此非正眞道法, 酒者(18) 謂是臭氣水穀, 失其正性, 亦非甘露上味 成此別氣。 眾生以罪業因

惡本, 且開放逸門, 於何科中而出此文。其餘眾僧,故復可可。至學『律』者, 某甲汝就我受五戒,不應如是」。若非受戒者, 何翻自飲酒, 云何出家僧尼猶生躭嗜。僧尼授白衣五戒, 酒是魔事。檀越, 集眾惡本。若白衣人甘此狂藥,出家人猶當呵止,云[此文。其餘眾僧,故復可可。至學『律』者,彌不宜爾 違負約誓。七眾戒、八戒齋、五篇七聚、 今日幸可不飲」。云何出家人而應自飲 令不飲酒. 亦應云「檀越, 長短律儀:

1

尼羅浮陀地獄, 身如段肉, 無有識知。 此是何人。 皆飲酒者。 出

在家人雖飲酒噉肉 豈可不深信 若飲酒食肉 豈不內愧。 無犯戒罪。 如是等事, 敎, 猶服如來衣, 自棄正法, 此一不及居家人。 出家之人不及居家。 行於邪道, 受人信施。 長眾惡根, 何故如是。 居處塔寺,

及居家人。 在家人雖復飮酒噉肉, 各有丘窟, 終不以此仰觸尊像。 此是二不

。此是四不及居家人。 (%) 在家人雖復飲酒噉肉, 無有譏嫌。出家人若飮酒噉肉,使人輕賤終不吐泄寺舍。此是三不及居家人。

人。臭氣薰蒸, 在家人雖復飲酒噉肉 一切善神皆悉遠離,一切眾魔皆悉歡喜。此是五不及居家 門行井竈, 各安其鬼。 出家人若飲酒噉肉

自 破善法, 家人雖復飲酒噉肉, 出家人飲酒噉肉

信施。是則七不及居家人。 在家人雖復飲酒噉肉, 皆是自力所辦。出家人若飲酒噉肉, 皆他

眾魔外道各得其便。是則八不及居家人。 ⁽³⁾ 在家人雖復飲酒噉肉, 是常罪業,更非異事。出家人若飮酒噉肉

出家人若飲酒噉肉,若多若少, 在家人雖復如此飲酒噉肉, 皆斷佛種。是則九不及居家人。 指部不失世業,大耽昏者,此則不得。 條流甚多,

可以例推 不及外道不及居家 不復具言 略出所以各有九事。 論欲過患

① d

、懈怠不遵佛教 今日大德僧尼. 循是梁國編戶一民。弟子今 今日義學僧尼,今日寺官, 弟子今日力能治制: 宜自警戒嚴淨徒眾 若猶不

是障十八不共法。

若食肉者,

是障一切種智。

若食肉者

是障無上菩

佛法。 是諸僧官宜依法問

曾聞, 不許食」。何況非自死者。 曾聞,今宜憶持〉。『佛經』『涅槃經』爲當〈曾聞。此 今日重令法雲法師爲諸僧尼講 京師頃年講『大涅槃經』, 此說爲當不聞。 一中究竟說, 法輪相續便是不斷, 「四相品」 斷一切肉, 若已曾聞, 四中少分, 洒至自死者,亦 (37) 不應違背。若未 至於聽受動有千 諸僧尼常聽

若食肉者, 斷大慈種」。何謂「斷大慈種」。凡大慈者. 諸僧尼出家名佛弟子, 云何今日不從師教。 一切眾生皆爲怨對同不安樂 皆令一切眾生同得安樂。 經 言 「食肉者

若食肉者,是遠離大涅槃。 是遠離菩薩法。若食肉者, 若食肉者,是遠離聲聞法。若食肉者, 是遠離菩薩道。若食肉者,是遠離佛 是遠離辟支佛法。

定法。若食肉者,是障慧法。若食肉者, 若食肉者,是障 若食肉者, 摩〈四空法。若食肉者,是障戒法。若〉 障生六欲天。何況涅槃果。若食肉者, 是障信根。若食肉者, 食肉者, 是障四 禪法。

慧根。 進根。 是障四無礙智。 若食肉者,是 是障十二因緣。 五 食肉者, 眼。 擧要爲言, 若食肉者, 若食肉者, 是障首楞嚴三昧。若食肉者, 若食肉者,是障一切三昧。 是障九次第定。若食肉者, 若食肉者, 〈障四攝法。若食肉者,是障四無量心〉。若食肉者, 若食肉者,是障六波羅蜜。若食肉者, 障三十七道品。若食肉者,是障四眞諦。 是障念根。若食肉者, 是障十力。若食肉者, 是障三三昧。若食肉者,是障八解脫。若 是障六神通。若食肉者,是障百 是障金剛三昧。若食肉者, 若食肉者, 是障定根。若食肉者, 是障四無所畏。 是障海印三昧。 是障四弘誓願 若食肉者 若食肉者. 若食

提

續。 故 所以 何以 地。 以食肉故 經 故。 若食肉者 無四無量心故, 「食肉者, 障不能得二地, 障菩提心, 斷大慈種」。 無有大慈大悲。 乃至障不能得十地。以無菩薩法無有菩薩法。以食肉故,障不能 以是因緣. 佛子不

近與此等同甘臭腥, 修聲聞、監為不能忍此臭腥, 修聲聞、監為不能忍此臭腥, 修聲聞、監 諸大德僧諸解義者講『涅槃經』。何可不慇懃。 諸出家人雖復不能行大慈大悲, 量直常懷殺心斷大慈種。 野干,皆知嗜肉。人口辟支佛道。鴟鴉嗜鼠, 究竟菩薩行。 凡食肉者, 人最有知: 此句令聽受者心得悟 螂蛆甘螮。以此。成就無上菩提, 勝諸眾生 自是可鄙 以此而 何

食肉者, 不殊水陸, 又有一種愚癡之人云, 如前所說。此皆是陸,眾生同名爲肉。 當知噉食眾生者是魔行。噉食眾生是地獄種。唸。此皆是遠事,未爲近切。 「我止噉魚 諸聽講者, 豈可不審諦受持如說修行。 實不食肉」。 亦應開示。 17。此處

腸因。噉食眾 生是斷足因。 噉食眾生是截耳因。 噉食眾生是自剝因。噉食眾生是斷頭因。噉食眾生是斷手因。 自煑因。噉食眾生是自炮因。 眾生是恐怖因。噉食眾生是斷命因。噉食眾生是自燒因。噉食眾生是 諸大德僧尼, 噉食眾生是碎髓因。 噉食眾生是破腹因。 噉食眾生是抉目因。 噉食眾生是自炙因。噉食眾生是自割因 噉食眾生是破背因。噉食眾生是刳 噉食眾生是割鼻因。 噉食眾 噉食

是瘡因。噉食眾生是賜因。 食眾生是醜陋因。 噉食眾生是瘂因。噉食眾生是跛因。 食眾生是貧窮因。 噉 食眾生是癭因。 噉食眾生是韻因。 噉食眾生是下賤因。 噉食眾生是疥因。 噉食眾生是寫因。 噉食眾生是盲因。噉食眾生是瘖 噉食眾生是蹇因。 噉食眾生是凍餓因。 噉食眾生是癬因。 噉食眾生是疵因。 噉食眾生 噉食 噉

> 因。 食眾生是瘫 噉食眾生是瘻因。 噉食眾生是癤因。 噉 食眾生是癩因。 噉食眾生是痔因。 噉食眾 生是疽

食眾生是致虻因 食眾生是致蚤因。 噉食眾生是致虱因。 噉食眾生是致蚊 因 噉

噉食眾生是遭毒蟲因。 噉食眾生是遭惡獸因。 噉 食眾生是 痩 因

啖60

是足痛因。 食眾生是胸痛因。 噉食眾生是頭痛因。 (6) 噉食眾生是髓痛因。 噉食眾生是背痛因。 噉食眾生是心痛因。 噉食眾生是腸痛因 噉食眾生是手痛因 噉食眾生是腹痛 噉食眾生 因

是五不調適因。噉食眾生是六腑不調適因。 生是狂因。 噉食眾生, 是風病因。 食眾生是血流因。噉食眾生是咽塞因。 噉食眾生是筋縮因。 噉食眾生是水病因。噉食眾生是四大不調適因。 乃至是四百四病: 噉食眾生是胃反因。 噉食眾生是喉痛因 一切眾苦因。 「⁽⁶⁾」 回。噉食眾生是顚因。 噉食眾生是脈絕因 噉食眾生 噉食眾生 噉食眾

偸因。 因。 噉食眾生是辱因。噉食眾生是繫因。 食眾生是杖因。噉食眾生是笞因。噉食眾生是督因。 生是遭水因。噉食眾生是遭火因。噉食眾生是遭風因。 噉食眾生是閉因 噉食眾生是熱因。 噉食眾生是遭劫因。噉食眾生是遭賊因。噉食眾生是鞭因。噉 噉食眾生是惱因。 噉食眾生是縛因。 噉食眾生是受壓因。 噉食眾生是罵因 噉食眾生是遭 噉食眾生是幽 食眾

噉 食眾生是死苦因。噉食眾生是怨憎會苦因。 食眾生是求不得苦因。 食眾生是生苦因。 噉食眾生是五受陰苦因 噉食眾生是老苦因。 噉食眾生是愛別離苦因。 噉食眾生是病苦因。

獄因。 噉食眾生是想地獄因 噉食眾生是行苦因。 食眾生是想地獄因。 噉食眾生是叫喚地獄因。 噉食眾生是壞苦因。噉食眾生是苦苦因 噉食眾生是黑繩地獄因。 噉食眾生是大叫喚地獄因。 噉食眾生是眾合 噉食眾

地

生

切眾生惡知識

是

切眾生怨家

如是怨家遍滿六道。

大德僧尼、

諸義學僧尼、

諸寺三官.

又復當思

事。

凡噉

說鬲子地 是八寒八熱地獄因。 地 噉 食眾生是大熱地獄因。 乃至是八萬四千鬲子地獄因 噉食眾生是阿鼻地獄因。 乃至是不可 66

食眾生乃至是 一切餓鬼因。 噉食眾生乃至是

食眾生父, 害眾生。 擧要爲言, 若噉食眾生子, `有無量怖畏 諸大德僧尼、 當知餓鬼有無量苦。 略擧一隅 無有窮已。 眾生亦報 同一苦果。 ?一苦果。中自有輕重。 展轉不窮盡,大地草木 死時有無量怖畏。 諸義學僧尼、 眾生亦報: 粗言少分。 如 噉食其父。 經 當知畜生有無量苦。 大地草木亦不能容受。 說, 噉食其子。如是怨對, 諸寺三官, 「有一女人, 若噉食眾生母,眾生亦報 所以今日致眾苦果, 此皆是殺業因緣 推列可知。根,鬼亦五百世斷其命根」。 復當應思一大事。 畜生蹔生蹔死爲物所: (65) (88) (88) 五百世害狼兒: 向來所說雖復多途, 報相噉食, 受如是果。 皆由殺業惱 噉食, 歷70其 若使噉 狼兒 若 害

從無始以來,至于非諸大德僧尼、註 直以經生歷死, 神明隔障, 而今日無有道眼,不能分別,還相噉食,或經是師長,或經是兄弟,或經是姉妹, 衣居家, 卽生忿恨 至于此生, 未可適道。 ,此生,經歷六道,備諸里 諸義學僧尼、諸寺三官, 一時少味, 還成怨對。 是諸眷屬不復相識。 出家學人, 永與宿親長爲怨對, 還相噉食, 向者至親 備諸果報, 被如來衣 叉有一大事, 或經是兒孫 還成至怨。 不自覺知。 今日眾生 一切親緣遍一切處 習菩薩行, 可爲痛心, 如是之事 噉食之時. 當應信受。 或經是父 宜應 難以

如此皆是『經』說,

不可不信。其餘相報,

亦五百世害其子。 又有女人五百世斷鬼命根,

行, 皆爲障難。 理中障難。 事中障難

無有方便。 者是理中障難。 設値善知識 以業因緣自生障難, 不能信受。 設復信受, 令此行人愚癡. 不能習行。 不知

惱令心亂。 是舊怨起諸對障。 或在大力龍中, 事中障者, 遇善知識, 修戒、 修定、修慧: 深心信受, 諸怨對, 或在魔中. 或在惡鬼中, 適欲習行, 修諸功德, 或在天中, 或在毒獸 便復難起。 常不清淨, 如是處處來作留難。 中, 常不滿足。 或在有大力神

中

是理中障難

出

修

皆同過患。 有 如是種種過患。 如是之事, 相與宜深自覺察, 又宜深心思。但是 障。此是事中障難。 **貪毒亦如是。瞋毒亦如是。** 善思方便。 是。瞋毒亦如是。癡毒如是。三毒等分,但以一噉食眾生因緣,能遠離一切佛法 切佛法

佛法, 食僧者, 北山蔣帝, 得教想。今日大眾已應聞知。弟子已勒諸廟祝及以百姓凡諸群祀。若《劉 諸出家人云何反食眾生,行諸魔行。一日北山爲蔣帝齋, 有祈報者,皆不得薦生類。各盡誠心, 弟子蕭衍, 又復敬白諸大德僧尼、 怪望弟子。 正以幽靈悉能鑒見。若不菜食僧, 猶且去殺。若以不殺祈願, 是請法師, 當見此意。 | 軟得上教。若: 止修蔬供。 作菜食往 。 若以殺祈願, 尼、諸寺三官· 蔣帝今日行菩薩道 將恐蔣帝懷賤 黨,所以皆請菜

來行, (飲酒噉肉不如法者) 諸僧尼, 衍 弟子蕭衍, 於十方一切諸佛前, 是假名僧 共申約誓。今日僧眾還寺已後, 又敬白大德僧尼、諸義學者、 與賊盜不異 弟子當依王法治問。 於十方一切尊法前, 諸僧尼若披如來衣, 各各檢勒, 切寺官84 於十方一 使依佛教。若 切聖僧前

復86與

蕭

如

司 察所得, 如是行者猶是弟子國中編戶一 若爲寺家自相糺擧: 民 不問年時老少. 今日以王力足相治問。 不問門徒多少,

畟塞虛空。如是幽顯,莫不鑒觀。 (w) 大威德力八部神王,皆應在此。今日,土地、山川、房廟諸神, 天神、 俗策使。唯取老舊者、最多門徒者,子當令寺官集僧眾,鳴揵槌,捨戒灃 羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王、 薩龍王, 神足力、有大威德力,以如是一切善神,遍滿虛空。五方龍王、十八部夜叉神王、一切持咒神王、六方大護都使安國,如是一切 富尼跋陀羅伽王、 世四王亦應在此。 計名德大僧, 今日集會, 阿耨龍王、難陀龍王、 摩醯首羅、 直一切聖僧在此. 亦應遍滿在此。天、龍、 不應有此 坐僧在此,諸天亦應遍滿虛空,諸仙亦應遍滿虛空,護此是大事因緣。非直一切諸佛在此,非直一切尊法在 不足以改革物心。 散脂大將、 阿修羅伽王、 金剛密迹、 設令有此, 跋難陀龍王、 大辯天神、 地神堅牢、 捨戒還俗, 人非人等, 摩尼跋陀羅伽王、金毘羅王、 夜叉、揵闥婆王、阿修羅王、 治如是一大僧: 當依法治問。 此 迦毘羅王、 功德天神、 著在家服 如是一切有大神足力、有 ,伊那滿龍王, 最宜先問。 足以驚動視聽。 其餘小僧故自妄言 韋駄天神、 孔雀王、 如是一切有大 修羅王、迦婁 , 如是一切菩 『涅槃經』 何以 十方二 封頭王、 亦應 娑竭 毘紐

古人有言,「非知之難,其在行之」。僧尼必當有不平色。設令刳心擲地, 唯無瑕者, 可以戮人。唯自淨者, 以示僧尼,正數片肉,無以取信。者,可以淨人。弟子今日昌言此事,

切大力鬼神亦應如此治問: 先當苦治蕭衍身, 誑妄語, 弟子蕭衍猶在阿鼻地獄中。 ,弟子蕭衍,從今以去,至于道場,诺飮酒放逸,起禁弟子蕭衍,雖在居家,不持戒,今日當先自爲誓, 猶在世者. 噉食眾生, 弟子蕭衍當如法治問. 然後將付地獄, 乃至飲於乳、蜜及以蘇、酪,願一切有大力鬼令以去,至于道場,若飲酒放逸,起諸婬欲, 增廣善眾, 僧尼若有飲酒噉魚肉者而不悔過 閻羅王與種種苦, 驅令還俗. 清淨佛道。 若未爲幽司之所治 與居家衣 乃至眾生皆成佛 切有大力鬼神 以明本心 隨時役 欺

使

若不禁斷, 有事四天王、 經106 皆依僧制如法治問。 願今日二部 者如說修行, 寺官任咎亦同前科。 迦毘羅神, 僧尼, 不可復令斷大慈種, 各還本寺, 若有容受不相治學者, 猶設鹿頭及羊肉等, 別宣意 匡正正佛法, 〈是義論竟。宣意如此 使佛子不續。 是事不可, 當反任罪。 合時 若有犯法破戒 眾 急宜禁斷 皆令聽

可発乎。 忽便及。欲離地獄, 刹那」。生老無常, 閒 肉障纍, 雖復長齋菜食, 罕聞其人。 遷變零落, 弟子蕭衍敬白諸 招致苦果。 後報業强,現無方便,三途等苦,不能遮止。況復良,不勤方便,欲免苦報,亦無是處。何以故爾。此 謝不移時。 其事甚難。 戒德淸淨, 今重復欲通白 大德僧尼、 移時。蹔有諸根,(18),亦無宿少。『經』 諸義學僧尼、 一 言。 閻浮提壽云百二十, **猶懼不免。況於毀犯,** 俄然衰滅。三途等苦 言 諸寺三官。 「以一念頃, 向已粗陳魚 至於世 安

飲酒噉食眾生。 生 |雖可不犯眾罪

有 信心, 諸僧尼必信佛語, 宜應自强。有決定心, 宜自力勵。若云菜食爲難, 菜食何難。菜蔬、 魚肉, 此是信心薄少。若 俱是一惑。

者,歷惡菜茹。事等如此,宜應自力。迴不善惑以爲善惑。就善惑中經』言,「受食之時,令作子肉想」。如俱非惑,豈須此法。經』言,「受食之時,令作子肉想」。如俱非惑,豈須此法。以若能安,便是甘露上味。心若不安,便是臭穢下食。所以『涅槃 多患熱。 榮衞流通, 重爲方便。食菜子想,以如是心,便得決定。凡不能離魚肉者,皆云 菜蔬冷, 今試復粗言,其事不爾。 令人虚乏。 則能飲食 魚肉溫, 若久食菜人, 於人補益」。 以飲食故 作如是說, 氣力充滿 榮衞流通 凡如此人,法 皆是倒見。 是則菜蔬不冷

能

是倒見,事不可信。 是倒見,事不可信。 是倒見,事不可信。 是倒見,事不可信。 是個見,亦皆楽蔬,多悉患熱,類皆堅强,神明清爽,少於昏脏苦行人,亦皆楽蔬,多悉患熱,類皆堅强,神明清爽,少於昏脏苦行人,亦皆菜蔬,多悉患熱,類皆堅强,神明清爽,少於昏

所以惑者云,「菜爲性冷」。 魚肉,如水與火。食菜裁欲得力,復噉魚肉。魚肉腥臊,能滅菜力,魚肉,如水與火。食菜裁欲得力,復噉魚肉。魚肉腥臊,能滅菜力,復有一種人,食菜以爲冷,便復解素。此是行者未得菜意,菜與

多衰惱。 故不待言。凡食魚肉嗜飲酒者,善神遠離,內無正氣。如此等人,法故不待言。凡食魚肉嗜飲酒者,善神遠離,內無正氣。如此等人,法定,多有留難,內外眾魔共相嬈作。所以行者思念魚肉。酒是魔漿,是諸僧尼,復當知一事。凡食魚肉是魔境界,行於魔行,心不決

之人,亦墮魔界,多於衰惱。 沒有一種人,雖能菜食,恃此憍慢,多於瞋恚,好生貪求。如是

若心力決正蔬食苦節,如是等人多爲善力所扶,法多堪能。有不不善,皆悉覆相。如是等人亦行魔界,雖復菜蔬,亦多衰惱。 又有一種人,外行似熟,內心麁惡,見人勝己,常懷忿嫉,所行

直者,宜應思覺。勿以不決定心,期決定人。若心力決正蔬食苦節,如是等人多爲善力所扶,法多堪能。有不

今日相與共爲菩提種子,勿怪弟子蕭衍向來所白。今去皆得。若巳習行,願堅志力。若未曾行,願皆改革。諸大德僧尼,有行業巳成者,今日以去,善相開導。令

2

寺官三百六十八人、宿德二十五人、義學五百七十四人、導師三

十九人,

右牒眾僧合一千六人

並以五月二十二日五更:

唱

并右牒僧尼合一千四百四十八人,四十二人,

3

到鳳莊門。

③ a

僧尼二眾,各以次列坐。「食肉者斷大慈種」義,法雲解釋。輿駕親御,地鋪席位於高座之北。「食肉者斷大慈種」義,法雲解釋。輿駕親御,地鋪席位於高座之北。寺慧明,登西向高座爲都講。唱『大涅槃經』四相品四分之一,陳二十三日旦,光宅寺法雲,於華林殿前登東向高座爲法師,瓦官

③ b

③ c

唱竟,又禮拜懺悔,普設中食。竟出。

二十三日會,其後諸僧尼或猶云,「『律』中無斷肉事,及懺悔食

4

肉法」。

華林華光殿,使莊嚴寺法超、奉誠寺僧辯、光宅寺寶度等三律師昇高,其月二十九日,又敕請義學僧一百四十一人、義學尼五十七人於

a

作若爲開導, 聞諸僧道, 弟子無言, 制旨問法超等三律師曰, 兼卽事中, 乃復甚易, 「『律』 使人致有此疑」。 ·] 中無有斷肉法, 亦不得默已。故 但欲成人之美,使佛種相續 「古人云,「止沸莫若去薪。 故今集會, 又無懺悔食肉法」。諸律師, 於大眾前 與諸僧尼, 息過莫若無言」。 求 律 從來 中意。 共弘

日講 令食三種淨肉,末令食九種淨肉。 (IB) 雖許噉三種淨肉, 法超奉答,「『律』教是一,而人取文下之旨不同。法超所解, 恒作如此說」。 而意實欲永斷。 如此漸制。 何以知之, 先明斷十種不淨肉,次 便是意欲永斷。法超常 律

制叉問僧辯, 「法師,復作若爲開導」。

物。 僧辯奉答,「僧辯從來所解大意,亦不異法超。 若論噉三種淨肉: 理當是過, 但教既未極, 所以許其如此」。 但教有深淺, 階級引

寶度奉答,「愚短所解, 制叉問寶度,「法師, 『涅槃』 究竟, 若鈍根之人,方待後教」。 那於正理,不許食肉。若利根者, 復若爲開導」。 只是漸敎。所以 「律」

制叉問法超, 得悉不食解。 「法師向答是文外意。若依 文 作若爲判」。

奉答, 「常日解義, 只作向者所說」。

制問僧辯, 「法師意復云何。 同超法師不」。

奉答, 「同法超所解」。

法超奉答 制問法超 「不知餘人並若爲 法師從來作此解 法超從來自不食肉」。 諸律師並皆噉肉 爲不噉肉」。

制問僧辯 法師復食肉不」。

> 僧辯奉答, 「昔恒不食肉, 中年疾病: 有時暫開」。

制問寶度, 「法師復云何」。

奉答,「本住定林,末移光宅, 二處不得進肉。 若在餘處 爲疾病亦

不免開」。

問 「講『律』時噉肉不」。

奉答, 「講時必有徒眾, 於徒眾中不敢

問 「不敢有兩義。爲不敢食,爲不敢不食」。

爲當許徒眾食肉

爲當不許

若不許噉肉,有食肉者,應駈遣去。若許者,制又問僧辯法師,「常日講』律』時,爲當 奉答,「若約敎解, 不全言不許。若論其意: 未常開許」。 作若爲說

問 「今正問。約敎時, 爲許,爲不許」。

答, 「約敎不遮」。

問 「不遮,是許, 爲是不許」。

答,

問 「見殺亦可不見,聞殺亦可不聞。疑作若爲得免」。 「引其向理,許其得食三種淨肉」。

「若見因緣,不假疑。 非領因緣, 亦不假疑 唯遇得者疑」。

問 以錢買魚肉, 是疑,

文許噉三種淨肉,

於三種淨肉,

教卽 若

「若理中,理自是疑」。

問 是疑不」。 「不得以理中見答。若理中爲論, 眾僧不應市魚肉。 今所問事中

「若約敎, 非疑」。

問 「市中人爲誰殺」。

答. ·乃爲買者殺。但買者不作此想」。

問 買肉者,此人既不惛 豈得不知是爲買者殺而不作此想」。

「爲自死詻作死,爲咎 「于時作現死肉心」。 爲殺詺作死」。

爲具足者說」。

此旨是理中言。 約敎辯, 只得如此

問 問 作意使人買時, 法師旣爲人講說, 作若爲意」。 爲人明導, 爲人法城, 云何言只得如此。

但

答, 「買自死者意」。

問 ·若自死者處處應有,

答, 理中居然是疑」。 寺中亦應有自死者, 何假往屠肉家買」。

僧辯無復對。

問

「若理中居然是疑者,

云何得不疑肉食」。

僧辯奉答,「猶作肉味」。 ||文問 「此肉爲當作肉味, 爲當作菜味」。

答, 此非慈心」。

「爲是慈心故食肉,

無慈心故食肉」。

問 ·若非慈心,豈得非殺耶」。

答, 理中常應不得,約事故如此」。

問 『律』教欲使人出離不」。

答, 令人出離」。

問 食肉得出離不」。

答, 不得」。

問 「若爾, 云何令食肉」。

答問 答 爲淺行者說, 引其令深」。

爲具足戒者說, 爲不具足者說」。

問 既爲具足者說, 不爲童蒙, 云何令食肉而是引其令深」。

云何初教教具足戒人」。 答, 僧辯所解正自齊此」。

答. 初發如此, 教起何時」。 非是極敎」。

叉問,

律

僧辯奉答, 「起八年已後至涅槃」。

亦斷肉, 「若如此『涅槃經』 『大雲經』、 『縛象經』 有斷肉, 並斷肉。 楞伽 經 律 若至 有斷肉, 『涅槃』 「央掘摩羅經」 云何無斷

接續初敎, 所以如此」。

肉事」。

「『律』 既云接續初教至於涅槃, 既至涅槃則應言斷肉」。

正齊此」。 「若制敎邊, 此是接續初教, 通於五時, 不言一切皆同。 僧 辯解

齊此亦不得住, 「法師既是大律師, 不齊此亦不得住。 爲眾開導。 只問此是優波離 今日大眾取判: [律] 不」。 法師不得言齊此

是」。

「此是接續前近教」。 「佛般泥洹時, 優波離既親在坐, 云何

『律』文不斷食肉」。

說以化群僧」。 法。『律』若異此. 「若言接近教 近教亦不明食肉。 則非優波離 律」 且涅槃前迦葉已持修行 是異部家 『律』。云何用此講

不食肉

僧辯不復奉答。

制問寶度法師, 「說旣同德同行, 云何解此語」。

寶度奉答, 若 『律』中事是優波離所出, 經經 事悉是阿難所出」。

「若爾『律』 中事便當皆不出 經過。

「若『經』中事牽 『律』,『律』中事牽

問

「佛說

時有所制約,

便集以爲

律具

何

處方復牽

若 律 是則說 經 應在 『律』後」。

只言『經』 中有明戒處, 愚謂應相關涉」。

答

尼中亦有修多羅與毗曇。 若論相涉 三藏義何嘗不相涉。 毗曇中亦有修多羅與毗尼。 修多羅中亦有毗尼與毗曇。 不言無此義。 但 毗

問法師, 「今所講是優波離 今所講 是優波離『律』,義不違 律』與 『經』不違」。

問 不違 經 者, 則斷肉義不應異

答, 殊爲進退, 只可爲寺中沙彌、 既是具教, 顯斷肉. 優波離既不開肉: 『律』文雖不明: 式叉摩尼說: 律 而優波離意未常開肉」。 不得以此答弟子」。 何得無文。 法師此解

(4) b

「寶度愚解,

正自極此」。

制叉問,「下座諸律師, 復云何解

龍光寺道恩奉答,「『律』文不斷 『涅槃經 方圖。

一法師所講是誰 律』」。

問 答, 「是佛『律』」。

所引乃極弘曠, 只未知此 是優波離 『律』不」。

答, 優波離仰述佛 律』。

問 優波離悉集佛所說不」。

答, 集前四時, 不集涅槃時」。

修多羅藏」, 「若爾, 語優波離道「佛從何處說法。 迦葉那得語阿難道「佛從何處說法。至 至 『涅槃』 時, 『涅槃』 集毘尼藏」 時, 集

云何得言唯取前四時不取涅槃」。

「涅槃時不復制戒」。

得復食一切肉」 『涅槃』云,「夫食肉者, 「一切悉斷及自死者」。 斷大慈種」 如此制斷, 「我從今日制諸弟子, 是戒非戒」。 不

道恩不復奉答。

時解素。 素是何義。 「諸律師親自講 若不解是素 律」, 諸大法師盡講 解則非素。 素若使得不素: 『大涅槃經』。 云何有 戒旣是

> 「竊簡書法」 亦可得使淨爲不淨不。 諸講律師親違此敎。 外書所 풄 自踰短

宣武寺法寵奉答, 「閉穢門稱爲素, 開穢門稱不素」。

「若爾, 眾僧云何開穢門」。

「實自不應得開: 但貪欲情深, 所以如此」。

問 「云何懺悔」。

「懇惻至心是爲懺悔。 若能懺悔, 是大丈夫」。

懺悔者,于時諸法師懺悔以不」。 「諸學人卽時懺悔不。 故如弟子請諸法師動至千數

答 「那得不懺悔」。

「若懺竟出寺, 更食肉不」。

「居然不食。 但其中有無明多者,

問 「出寺更食, 何如發初作者輕重」。

「一種」。

問, 「云何一種。 初直爾而食, 後已經於諸佛前誓, 方復更噉,

云何

問 「若爾, 「初人無慚愧, 但先道慚愧, 後人有慚愧, 痛打前人, 乃得有勝初人義」。

汝我食汝」。 而道我慚愧汝我打汝, 我慚愧

「如大邪見人無慚愧, 「先道慚愧而猶噉食, 此是知而故犯, 其旣知慚愧, 故知差不慚者 非謂慚愧。若使先時不知,

慚愧, 或是過誤後方起愧, 「『經』有誠文, 不得重犯。 如其重犯, 耆婆云: 乃是慚愧。豈非知而故犯, 「汝有慚愧 復是違破初心。論此爲罪,所以彌大」。 故罪可滅」。慚愧卽是清白 其罪大於不知。又復

問避法。 法師是得 經經 言 不得其意。 此明若作罪後方知慚愧此爲白

不言發初慚愧而故作罪以爲白法」。

「『經』又道慚愧爲上服。 若爾, 便有非上服義」。

愧者, 乃是上服 「義亦如此。 若正作罪 雖云慚愧 終無所益。 若作罪後能生慚

法寵無復答。

法寵奉答事畢, 三律師並下。

叉敕始興寺景猷昇高座,] 文。今載如左。 讀 『楞伽』、 『央掘魔羅經』 所明斷 肉

法雲法師解說。今二十九日不復重唱〉——, 『大般涅槃經』四相品上第七〈此品今月二十三日會已唱此文, 【④c0】

爾時迦葉菩薩白佛言, 「世尊,食肉之人不應施肉。何以故。 我

見不食肉者有大功德」。

觀是食如子肉想」。 善男子, 從今日始, 佛讚迦葉,「善哉, 善哉。 不聽聲聞弟子食肉。若受檀越信施之時 汝今乃能善知我意。護法菩薩應當如 應

男子,

如是菩薩清淨之食猶尚不食,況當食肉。

迦葉菩薩復白佛言,「世尊,云何如來不聽食肉」。

善男子,夫食肉者, 斷大慈種」。

迦葉又言,「如來何故先聽比丘食三種淨肉」。

是三種淨肉隨事漸制」。

復不聽」。 迦 !葉菩薩復白佛言, 「世尊, 何因緣故十種不淨乃至九種淸淨而

亦是因事漸次而制。 當知卽是現斷肉義

迦葉菩薩復白佛言,「云何如來稱讚魚肉爲美食耶」。

所應畜者, 切穀麥及黑石蜜、 善男子, 要是壞色。 (石蜜、乳、酪、蘇、油以爲美我亦不說魚肉之屬爲美食也。 何況貪著是魚肉味」。 油以爲美食。 我說甘蔗、 雖說應畜種種衣服 粳米、

蘇(47 如是等物亦不應受」。 迦葉復言,「如來若制不食肉者, 胡麻油等, 及諸衣服、憍奢耶衣、珂貝、 彼五種味, 皮革、 酪、 金銀盂器 漿、

「食三種淨肉」。異想故,「斷十種肉」。異想故,「一「善男子,不應同彼尼揵所見。如來所制一切禁戒,「善男子,不應同彼尼揵所見。如來所制一切禁戒, 一切悉斷 各有異意故,

死者」。

迦葉, 其食肉者, 若行、若住、 迦葉,我從今日制諸弟子不得復食一切肉也。 若坐、 若臥,一切眾生聞其肉氣

善男子,如人噉蒜,臭穢所惡,餘人見之,聞臭捨去,設遠早悉生恐怖,譬如有人近師子已,眾人見之,聞師子臭,亦生恐怖。 是故菩薩不習食肉,爲度眾生,示現食肉。雖現食之,其實不食。善 恐怖,生畏死想。水陸空行有命之類,悉捨之走,咸言此人是我等怨 猶不欲視。況當近之,諸食肉者亦復如是。一切眾生聞其肉氣,悉皆 餘人見之,聞臭捨去,設遠見者

草,頭鬚髮爪悉皆長利,雖服袈裟,循如獵師,細視徐行,如猫伺鼠身。其所被服,麁陋醜惡,形容憔悴,無有威德,放畜牛羊,擔負薪於像法中當有比丘,似像持『律』少讀誦『經』,貪嗜飲食,長養其於傷法中當有比丘,似像持『律』少讀誦『經』,貪嗜飲食,長養其於傷法中,我涅槃後,無量百歲,四道聖人悉復涅槃。正法滅後, 深秘密之教, 如受瘂法婆羅門等,實非沙門現沙門像, 常唱是言,「我得羅漢」,多諸病苦, 破壞如來所制戒律、 各自隨意 反說 正行威儀, 經經 眠臥糞穢。 外現賢善, 律 說解脫果, 邪見熾盛, 而作是言, ,離不淨法。及 (^{®)(®)} 盛,誹謗正法。 「如來皆聽我 內懷貪嫉, 如猫伺鼠,

蠱道咒幻,和 ଞ 玉、珂貝、 若有比丘能離如是諸惡事者, 自生此論言「是佛說」, 寶蓋、 和合諸藥, 煙。金銀、 煙 (B) 革屣 復有諸沙門等貯聚生穀, 作倡伎樂,香花治身,經濟學諸伎藝。畫師泥作, 琉璃、 親近國王、 當說是人眞我弟子」。 互共諍訟; 碼瑙、頗梨、 大臣、長者, 各自稱 摴蒲圍碁, 受取肉魚,手自作食,各自稱「是沙門釋子」。 造書教學。種植根栽 眞珠、 占相星宿, 珊瑚、 學諸工巧。 懃修醫 琥珀

時到. 夷 不應食。食者得罪。我今唱是斷肉之制。若廣說者 佛言迦葉,「當以水洗」因他而活。若乞食時, ,是故略說。是則名爲能隨問答」。 聽用無罪。若見食中多有肉者,則不應受。一切現肉,悉 迦葉復白佛言, 「當以水洗令與肉別, 得雜肉食, 世尊, 諸比丘、比丘尼、優婆塞、 然後乃食。若其食器爲肉所汚, 云何得食, 應淸淨法」。 則不可盡。涅槃 優婆

『楞伽阿跋多羅寶經』 (④ c 1] 卷第四

惟願爲我說, 虎狼所甘嗜, 彼諸菩薩等, 志求佛道者. 願爲我說, 願無上尊, 大慧菩薩以偈問言: 食不食罪福 云何而可食。 哀愍爲演說。 愚夫所貪著, 食者生諸過, 酒肉及與葱, 不食爲福善 臭穢無名稱。 飲食爲云何。

別說法, 惡邪論法諸外道輩 大慧菩薩說偈問已, 復白佛言, 令彼眾生慈心相向。得慈心已, 各於住地淸淨明了, 我及諸菩薩, 聲聞緣覺自地止息已,亦得逮成無上菩提。 邪見斷常顚倒計著, 於現在、 [[]] 惟頭 願, 未來當爲種種悕望肉食眾生, 世尊, 尚有遮法: 爲我等說食不食 不聽食肉。 疾得究 分

> 況復如來世間救護, 而食肉耶

諦聽諦聽。善思念之, 當爲汝說」。

駱駝、 氣分, 空閑林中, 天所棄故, 不應食肉。 肉。凡愚所嗜臭穢不淨, 狗見憎惡, 驚怖群吠故, 不應食肉。又令脩行者慈心不生故, 眾生從本已來, 行者不生厭離故,不應食肉。 佛告大慧, 所生長故, 不應食肉。眾生聞氣悉生恐怖, 不應食肉。令口氣臭故, 虎狼聞香故, 不應食肉。令飲食無節故, 不應食肉。令脩 以殺生者見形起識,深味著故,不應食肉。彼食肉者, 牛、馬、人、獸等肉, 「有無量因緣不應食肉。然我今當爲汝略說。 展轉因緣 無善名稱故, 常爲六親。 不應食肉。多惡夢故,不應食肉 不應食肉。令諸呪術不成就故 屠者雜賣故, 以親想故 如栴陀羅及譚婆等 不應食肉。 不應食肉。不淨 切

食肉者, 無有是處。 我常說言,凡所飲食。作食子肉想,作服藥想, 故不應食肉。 聽

臣民不堪,卽便謀反,斷其俸祿。以食肉者有如是過故, 以錢爲網,而捕諸肉。彼殺生者, 復次, 大慧, 凡諸殺者, 爲財利故, 復次,大慧,過去有王。名師子蘇陀娑。食種種肉, 若以財物, 若以鈎網, 取彼空 殺生屠販。彼諸愚癡食肉眾 不應食肉。 遂至食人。

視 應 種。今於此『經』一切種、一切時開除方便,一切悉斷。大慧, 而有魚肉。以是義故,不應食肉。大慧,我有時說遮五種肉, 益供、等正覺,尚無所食。況食魚、肉, 水陸眾生。種種殺害屠販求利。大慧,亦無不殺、不求、不想 切眾生, 猶如一子。 是故不聽令食子肉。 亦不敎人。以大悲前行故

世尊欲重宣此義, 而說偈言

曾悉爲親屬 鄙穢不淨雜 不淨所生長, 聞氣悉恐怖 [央掘魔羅經] [中掘魔羅經]

第 卷

座迦葉捨種種甘膳之食,

捨肉味食,

受持修行不食肉法。

多生旃陀羅, 展轉更相食, 若無教想求, 爲利殺眾生, 彼諸修行者. 羅利猫狸等 由食生貪欲 飲食生放 亦常離麻 切肉與 及諸穿孔床, 獵師譚婆種: 死墮虎狼類 由是悉遠離 則無三淨肉 以財網諸肉 遍於是中生。 貪令心迷醉 放逸生諸覺 臭穢可厭惡, 『縛象』 或生陀夷尼: 迷醉長愛欲 從覺生貪欲 彼非無因有 二俱是惡業 以 種放逸 彼諸細蟲 與 酒 『大雲』,『央掘利魔羅』, 一切咸訶責。是故不應食。 及諸肉食性。 所生常愚癡。 死墮叫呼獄。 生死不解脫 是故不應食 於中極恐怖 修行常遠離

及此

『楞伽經』,

我悉制斷肉。

諸佛及菩薩, 聲聞所訶責

食已無慚愧

生生常癡冥

故生食肉處,

如彼貪欲過: 先說見聞疑

障閡聖解脫,已斷一切肉。

未來世眾生, 妄想不覺知, 食肉無慈慧, 紹園, 得生梵志種 安住慈心者, 食如服藥想 我說常厭離 亦如食子肉. 悉爲聖道障。 於肉愚癡說 及諸修行處 永背正解脫 眾生悉恐怖 言此 智慧富貴家 及違聖表相 是故修行者 虎狼諸惡獸 知足生厭離 7淨無罪. 斯由不食肉。 慈心不食肉。 修行行乞食。 佛聽我等食。 是故不應食。 恒可同遊止。

> 2 2 2

4 央掘魔羅經』 第四卷: 194

食肉。 是一肉。 姉妹, 文殊師利白佛言, 復次, 誉 是故諸佛悉不食肉」。 猶如伎兒變易無常。 「如是。 文殊師利, 一切眾生, 「世尊, 一切眾生界、 因如來藏故 無始生死, 自肉他肉, 我界, 則是一肉。 生生輪轉 諸佛不食肉耶 卽是一 界。 是故諸佛悉不 無非父母、 所宅之肉:

文殊師利白佛言,「世尊, 珂貝、 臘% 蜜、 皮革、 繒綿, 非自界肉

那。

卽

持付皮師, 言 展轉來, 可習近。若物所出處, |習近世間物者 佛告文殊師 文殊師利白佛言, 師作革展,故 利 無有是處。若習近者, 勿作是語。 施持戒人, 復次, 世尊, 「今此城中有一皮, 不可習近。若展轉來離殺者手, 此展轉來, 如 來遠離 若自死牛, 是方便法。 師能作革屣, 可習近不」。 切 牛主從栴陀羅取皮: 世 間。 若物展轉來者 則可習近」。 有人買施.

應受不。若不受者,是比丘法。若受者,非慈悲, 佛告文殊師利, 「若自死牛, 牛主持皮, 用作革屣, 然不破戒」。 然不破戒」。 人為

4 d

乃至自死不得食者, 斷肉語。 爲此 唱 時僧正慧超、 十三日 今日此 竟 經經 法雲法師講 制叉語諸僧道, 此則同尼揵斷皮革, 法寵法師難云, 言何所道。 『涅槃』 所以唱此革屣文者, 「諸小僧輩看 若 斷肉事。 不得着革屣。 經經 經經 究竟斷 未遍, 本意乃不在此 若開皮革得着 互言無 切 肉

法雲法師乃已有通釋. 亦應開食肉」。 圃 一法師難意未已

革

日日餐咀,數若恒沙,亦不可得用革屣以应斷肉。
凡着一革屣,經久不壞。若食噉眾生,就一食中,便害無量身命。況開皮革義論。有麻紵處,大慈者乃實應不着。但此事與食肉不得類同。開皮革義論。有麻紵處,大慈者乃實應不着。但此事與食肉不得類同。若無麻紵之鄉,亦有質問,數若恒沙,亦不可得用革屣以应斷肉。

不受革屣文,正欲釋一日所疑,非關前制。于時諸僧乃無復往復,恐諸小僧執以爲疑,方成巨蔽。所以唱此

令知此意」。 諸僧及領徒眾法師,諸尼及領徒眾者,各還本寺宣告諸小僧尼.

制說此語竟,僧尼行道,禮拜懺悔,設會事畢出

<u>(5)</u>

(5) a

即是『經』之羅刹」。 食眾生。此是『經』中所明羅刹婦女云「我念汝我食汝」。法寵此心,食眾生。此是『經』中所明羅刹婦女云「我念汝我食汝」。法寵此言慚愧而其晚,又敕員外散騎常侍太子左衞率周捨曰,「法寵所言慚愧而

(5) b

有一自死者。而覔死肉,其就屠殺家處不死,那不見有一自死者。麞、麻愿不死,那不見有一自死者。麞、麻。以,以救捨云,「僧辯所道自死肉, 爲諸僧尼作離苦因緣」。 豈有死肉。 [經] 言 其就屠殺家。 |買肉與自殺 若如此說, 雉、 覔死魚. 此罪一等」。 兔, 必就罾網處。 充滿野澤, 我本不自爲, 亦不甞見 若非殺 Œ.

(5) C

可應行」。

可應行」。

可應行」。

可應行」。

可應行」。

可應行」。

可應行」。

可應行」。

可應行」。

一次共見。減慈悲心,增長惡毒,其實非沙門釋子所關附蟲,皆無復命。利舌端少味,害無量眾生。其中小者,非肉眼能斷附蟲,皆無復命。利舌端少味,害無量眾生。其中小者,非肉眼能不可食者,前所附蟲雖已減謝,後所附蟲,其數復眾。若養若炙,此不可食者,前所附蟲雖已減謝,後所附蟲,其數復眾。若養若炙,此不可食者,以不可食生,凡一眾生具八萬戶蟲。『經』亦又敕捨云,「眾生所以不可殺生,凡一眾生具八萬戶蟲。『經』亦

⑤ d

墮地獄,疾於攛矛。善惡報應,正爲如說修行。 反復噉食魚肉, 止是一罪。至於眾僧食肉, 言行旣違,卽成詭妄。論學問人食肉,則罪有三重。所以貴於解義, 若是學問眾僧食肉者,此爲惡業,復倍於前, 經』敎,爲人講說, 又敕捨云,「眾僧食肉, 口稱慈悲,心懷毒害。 既犯性罪, 又傷戒律: 罪劇白衣。白衣食肉, 必也不亡。凡出家人, 侵酷生類。 作惡知識, 非是不知,知而故犯。 所以如此: 以此爲言有兩重罪 乃不免地獄 實宜深思」。 起眾怨對, 既親達

(5) e

肉者卽有殺分,於不殺戒卽成有缺。若謂於善律儀受殺生分:餘戒。所以爾者,旃陀羅人爲屠肉時,爲何等人殺,正爲食: 口業, 眠 戒無所缺者. 而於戒有損,非唯損不殺戒,亦兼汚餘戒。至於手夾、齒齧、 故不損不失,乃至常生。若起欲殺心, 悶等,律儀恒生,念念得未曾得律儀。 又敕捨云,「聲聞受律儀戒,本制身口七支。一受之後, 則失身口戒。爾時,律儀無作卽斷不續。旣失不殺戒, 是不善律儀人持八戒齋。 是惡律儀 爲何等人殺,正爲食者。 於聲聞法雖不失身口戒. 所以爾者, 睡眠等非起惡 亦損汚 乃至睡 於不殺 動身、 若食

不殺律儀卽時亦斷。 但起一念善心, 若惡律儀人持八戒齋. 是知一念時斷。 終不免地獄等苦。 卽時便缺. 惡律儀卽斷。 善律儀人, 菩薩人持心戒, 別解脫戒不復解脫。 惡律儀不復相續者, 其事亦爾, 若一念不斷: 故自無有食眾生理。 惡律儀人無論持八戒 多念亦應不斷。 是知善律儀人受諸殺

亦復別有所擬。

若別有所擬,

向食肉者豈無殺分

【二・二、校勘記】

- 1 「梁高祖」麗初・金・麗再:「梁高祖武皇帝」 毘・思・
- 2 「信因、 經」麗初:「信因、 信果、信經」金・麗再・ 毘・
- 「如是若言」麗初・金・麗再:「如是若」 毘 ・思・ 磧

3

- 甘酒 ★大正藏本文 麗初・金・麗再・毘・思・磧 (=麗再) 及び校勘 (宋本=思, 宮本=毘
- 酣酒」は誤り
- 5 是同」 麗初:「見同」金・麗再・毘・思 磧

|牛狗戒||金・麗再・毘・思・磧:「牛佝戒」 麗初

6

- 7 「所親」毘・思・磧:「親所」麗初・金・麗再
- 『涅槃經』云,……此是灼然違背『經』文」[倂行句] 令此人不以財網肉者, 墜噭呼獄 伽 道世『法苑珠林』卷九三「是故『涅槃經』云,「一切肉 經 網網肉。 及自死者」。自死循斷, .」。何謂以財網肉。 ,「爲利殺衆生。以 若於屠殺人閒 習惡律儀. 以財網諸肉, 以錢買肉, 陸設置罘 何況不自死者。 捕害衆生。 此是以財網肉。 二業俱不善, 水設網罟。 此人爲當專 叉『楞 唐 此是 若 死

- 是以利網肉。何死墮叫呼獄」。 眾生, 向食肉者豈無殺分。何得云「我不殺生」。此是灼然違背 此是以財網肉。若今此人不以財網肉者, 『經』文」(大正五四・一五五下)。 何得云「 「楞伽經」 一切肉者悉斷,及自死者」猶斷, 此人爲當專自供口 道世『諸經要集』卷一七「是故『涅槃經』 「我不殺 何謂以財網肉。 「爲利殺眾生: 何謂以利網肉。陸設置果, 生。 此是灼然違背『經』文」 亦復別有所擬。 以財網諸肉, 若於屠殺人閒, 何況不自死者。 習惡律儀 二業俱不善, 若別有所擬:
- 「罝罘」 [參考] [唐] 慧琳『一切經音義』 邪反。『郭注爾雅』云, 置, 卽網〉」(大正五四・九二一中)。 取獸罘也。『說文』,亦取兔罟也。『鄭注周禮』云, 也。『說文』,或作櫃羅置。 下扶留反。『鄭注禮記』云, **猶**遮也。 卷九九「罝罘 『考聲』, 罝 **免網**
- |是則||麗初・金・麗再・毘:||是||思
- 10 |戒||麗初・麗再・毘・思・磧:「誡」金・釋門自
- 裁欲」麗初・麗再・毘・思・磧:「讒欲」金・釋門自鏡錄
- $\widehat{13}$ $\widehat{12}$ $\widehat{11}$ 14 「止住」麗初・金・毘・思・磧:「止作」 「摩何」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「摩訶」 麗再:「止存 釋門自
- 施 麗初・金・麗再 ・毘・思

15

「入」麗再・思・磧:「出_ 人」麗初·金·麗再·毘:「鹿戒人受」思· ★大正藏校勘 (宋本=思) 麗初・ 施受」 は誤 磧

17

- 18 何 ・金・麗再:「是何」毘・思・
- 19 「別氣」 麗初・金・麗再・毘・思・磧: [別 味 釋門自鏡
- 20 麗初・金・麗再:| |耽] 毘・思・磧
- $\widehat{22}$ 21 當阿」 居家人」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「在家」 麗初・金・麗再・毘・思・磧:「當訶」 釋門自 釋門自鏡錄
- 24 23 居家人」麗初・金・麗再・毘・思・磧: |居家人||麗初・金・麗再・毘・思・磧:「在家_ 「在家」 釋門自鏡錄 釋門自鏡錄

40

(字の文)

- 25 譏嫌 金・麗再・毘・磧:「幾嫌」 麗初
- 26 居家人」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「在家」釋門自鏡 錄
- 27 28 居家人」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「在家人」釋門自鏡 門行」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「門戶」釋門自鏡錄
- 29 「居家人」麗初・金・麗再・ 毘・思・磧:「在家人」釋門自鏡
- 30 「居家人」麗初・金・麗再・ 毘 ・思・磧:「在家人」 釋門自鏡
- 31 罪業」麗初・金・麗再:「業」 毘・ 思・ 磧
- 32 居家人」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「在家人」釋門自鏡
- 33 居家人」麗初・金・ 麗再・ 毘 ·思·磧:「在家人」釋門自鏡
- 34 欲論」毘・思・磧:「論欲」麗初・金 麗再
- 35 36 曾聞, 「民」麗初・金・麗再・思・磧:「人」 此說, 麗初 爲當不聞。 (地の文)・ 若已曾聞不應違背。 金(夾注)・麗再 (夾注)・思 若未曾聞今宜

え)・毘

(行替え)・磧

(行替え)/(地の文)

同じ。

(行替

48

- 38 37 麗初・金・麗再 毘・思
- 麗初・金・麗再:「提」 毘・思・ 磧 磧

39

- 四空法。 注)・麗再 若食肉者是障戒 (地の文)・思 法。 (地の文)・毘 若 麗初 (地の文)・ (地の文)・金 (地の (灰
- 〈障四攝法。若食肉者是障四無量心〉 注)・麗再 (地の文) (夾注)・思 (地の文)・毘 (地の文)・磧 麗初 (地の文)・金
- 乃」麗初・金・麗再・思・ 磧:「迺」 毘
- 41 42 「以無菩薩法」 麗初・ 麗再:「以無菩薩」 金:「法無菩薩法」
- 43 |臭腥||麗初・金・麗再・毘・思・磧:||腥臭||釋門自鏡錄 毘・思・磧
- 44 「蝍蛆」[參考][唐] 慧琳『一切經音義』卷九九「蝍蛆〈上 甑力反。下子餘反。 『許叔重淮南子』云,螂蛆, 公也。『說文』,並從蟲, 刨、 且皆聲〉」(大正五四・九二一 一名吳
- 45 「甘螮」[參考] [唐] (大正五四・九二一中)。 太反。『考聲』,䗖,蛇也。 **慧琳**『一切經音義』卷九九「甘螮 『唐韻』, 亦蛇也。或作帶也〉_ 俎

中。

46 |嗒||麗初:「嗜着」金・麗再:「嗜著」毘 ・思・磧

- 「豺犬」[參考] [唐] 慧琳『一切經音義』卷九九「豺犬〈床 從豸才聲。豸音池爾反。『[廣弘明] 皆反。『郭注爾雅』 非也〉」(大正五四・九二一中)。 굿, 脚似狗也。『說文』, 從犬作驸: 狼屬也。
- 「野干」慧琳・釋門自鏡錄:「犴」麗初・金 唐 慧琳 切經晉義』 卷九九 野干 ・麗再・毘・思・ 〈葛寒反

璞 日 射干能緣木也。 從犬作 狂, [廣志] 非也〉」(大正五四・九二一 云, 採果於危巖高木也。

- 近 麗初・ 金・麗再・ 毘 思・磧:「 何 釋門自鏡
- 51 50 「臭腥」 誦 麗初:「講_ 金 ・麗再・毘・思・磧:「 金・麗再・毘・思・磧 「臭穢」 釋門自鏡錄
- 52 所說 釋門自鏡錄:「說」 麗初・金・麗再・毘・ 思・ 磧
- 53 當知」 麗初: 金・麗再・毘・思・磧:「若」釋門自 鏡
- 55 54 麗再・ 麗初・金・毘:「腹」 思・磧・釋門自鏡錄:「決」麗初・金 麗再・思・磧。[參考]
- 56 噉食眾生是瘖因噉食眾」 麗再夾注 毘

66

- 皮上病也。正從疒。『[廣弘明] 『一切經音義』 **慧琳:「瘍」麗初・金・麗再・毘・** 五四・九二一中)。 卷九九「是賜 〈盈隻反。 集』作瘍,俗字也〉」(大 思・ 磧。 『考聲』, 唐 歷賜, 慧琳
- 58 驑 」 : 「癅」 麗初・金・麗再 經音義 顧野王 習聲。 (『玉篇』) 云,腫結不潰散也。 『說文』, 卷九九「是癅 『(廣弘明) 〈柳周反。『廣雅』云, 作癅, 毘・思・磧。 俗字〉」(大正五四・九二一 [唐] 慧琳 糖, 腫也。 病也。 從 切
- 59 嬺 慧琳: 切經音義』 瘻」, 瘻 也。 麗初・金・麗再・毘・思・磧。 卷九九「是瘻 俗字〉」 『說文』, (大正五四・九二一下)。 頸腫 也。 〈樓豆反。 從 扩 婁聲。 郭璞 屲 [[廣 唐 [海經] 强弘明] 云 琳
- 60 61 噉食眾生是寒熱因噉食眾生」 麗初・ 金:「噉」 麗再 毘・思・磧 麗再夾注

- $\overrightarrow{64}$ $\overrightarrow{63}$ $\overrightarrow{62}$
- 苦因 麗初・金・ 毘 思・磧::「 因

65

- 噉 食眾生是想地獄因……大熱地獄因」[倂行句] 提心, 二〇二一:三九七~三九六頁 地獄、大叫喚地獄、爲十方盡虛空界,一 等無量無邊眷屬等獄, 卷九:今日道場同業大眾, 普代歸依世閒大慈悲父。 獄、熱地獄、
 一切地獄、 今日現受苦眾生 大熱地獄、飲銅地獄、 (大正四五・九五九上。 銅地獄、眾合地獄、叫,重復至心五體投地, 〈某甲〉 炭坑燒林 等 『慈悲道場 如是 以菩 喚、普
- 噉 食眾生是八寒八熱地獄因。 地獄因,造一切畜生因,造一切餓鬼因,毒,長養八苦,造八寒、八熱諸地獄因,毒,長養八苦,造八寒、八熱諸地獄因,日,以三不善根起四顛倒,造作五逆,行 種種苦因, [倂行句] 『慈悲道場懺法』 (大正四五・九二七中。船山二〇二一:三九七~三九六頁) 。 受於六道無量苦果, 乃至是八萬四千鬲子地獄因. 卷一「又復無始以來, 難可堪忍, 行於十惡, 熾然三行於十惡, 熾然三 造人天生老病死 不可聞見_ 至于今
- 68 67 「蹔」麗初・金・麗再:「暫」毘・思・磧 麗初・金・麗再:「暫」毘・思・磧
- 中 麗初・金・麗再:「但苦中」毘・思・磧

70 69

[倂行句] 世害狼兒 百世害其母」, 歷劫長夜 如上 唐 『論』說,「有一女人五百世害狼兒, 道世『法苑珠林』 狼兒亦五百世害其子。 無有窮已. (大正五三·九七〇下)。 叉「有女人, 『婆沙論』 五百世斷鬼命根, 卷九三 「歷劫長夜, 又有女人五百世 『諸經要集』 說, 有 一女人五百 狼兒亦五 鬼亦五百 卷一七 無有窮

鬼亦 五百世斷其命根

71 推 麗初 推例」 金 • 麗再 毘 準 例 釋 門

 $\widehat{73}$ $\widehat{72}$ 麗初・金・麗再 [二] 毘 思・磧

成怨讐, 相噉食: 可不思。暫爭舌端一時少味,永與怨親長爲怨對。 卽生瞋恨, 不能分別, 知經歷六道 說」(大正五三・九七〇下)。道世 舌端一時 或是兒孫 心,難以言說」(大正五四・一五五下)。 或是姉妹, 骨肉至親反變成怨。 不自覺知。 或經爲師長 少味, 還成怨讐。骨肉至親反變成怨。如是之事, 道世 或是朋友, 還相噉食, 備受怨報。或經爲師長, 或是兒孫, 永與慈親長爲怨對。 『法苑珠林』 噉食之時 今是凡身各無道眼 不自覺知。 噉食之時, 此物有靈, 或是父母, 或是朋友,今是凡身各無道眼 如是之事: 卷九三「故知經 此物有靈 『諸經要集』卷一七「故 或是兄弟, 可爲痛心, 或是父母, 豈可不思。 即生瞋恨 不能分別。 或是姉 歷六道, 或是兄 難以言 可爲痛 備

 $\widehat{74}$ 無有道眼」麗初・金・麗再・毘・思・磧:「無道眼力」 釋門

75 修行」麗初・金・麗再・ 思・ 磧:「値 毘

毒 麗初・金・麗再:「毒亦」毘・思・

深心」麗初・金・麗再:「深」毘・思・

磧

 $\widehat{77}$ 76

78

輙 麗初・金・麗再:「輒」毘・思・磧

(=麗再) 「輒 は誤り

79 上 ・金・麗再・ 金・麗再: 「殺生」毘・思・ 思・磧:「止」毘

> 輙 麗初・ 金・麗 輒

81

祝 は誤

憾 麗初・金・麗再 .: [悪] 毘・思

83 82

寺官 ★大正藏本文 (=麗再) 麗初・金・麗再・毘:「寺三官」思・ 悪

磧

麗初: 金・麗再:「伸」毘・思・

復 麗初・金・麗再: 「復有」 毘・思・

86 85 84 披 麗初・毘・思・金・磧:「 被

賊盗」麗初・ 金・麗再:「盗戒」毘・思・磧

「諸天亦應遍滿虛空,諸仙亦應遍滿虛空,護世四二取」麗初・金・麗再:「最」毘・思・磧

諸天、諸仙、聰明正直護法善神,十方無邊一切幽顯,不五:二八四頁)「弟子蕭衍今日於十方盡虛空界一切三寶前 龍王」[併行句]梁武帝「東都發願文」神足力、有大威德力、以如是一切善神, ……「一切持咒神王、六方大護都使安國。如是一切有大 如來心, 一心志意, 八:三六頁。船山二〇一〇:三九八頁)。『慈悲道場懺法』卷 心、度一切心、守護一切心、救護一切心、 安住心、 可說言廣大眾中, 「今日道場同業大眾, 王」 [倂行句] 梁武帝「東都發願文」 (黃徵‧吳偉一九九 主善罰惡 大心、勝心、大慈悲心、樂善心、 『罰惡,守護,持呪,五方龍王、龍師長、上中下座善惡知識、諸天、 慚愧懺悔, 功德清淨」(李秀花二〇〇 五體投地。 宜各慇重, ^怎知識、諸天、諸仙,護世、 奉爲國王、帝主、土地人 起勇猛心,不放逸心 遍滿虛空。五方 同菩薩心、等 歡喜心、報恩

93

世四王、主善罰惡、守護持呪、五方龍王、龍神八部、師長、歷劫親緣、一切眷屬、善惡知識、諸天、諸仙、 王、諸、尚、 天、 龍、 下、阿 師長、歷劫親緣、一切眷屬、善惡知識、諸天、諸仙、護慈悲父」(九二五上~中)。『同』卷二「國王、帝主、父母、 切靈祇、過去現在窮未來際一切怨親及非怨親、 五·九二四上~中。船山二〇一〇:三九八頁)。『同』 虚空界 一〇:三九八 ·奉爲有識神以來,至于今身, 切眾生,歸依世閒大慈悲父」(大正四五・九三一中)。 龍神八部, 諸、閣仙、、 切諸佛 歸依十方盡虛空界一切賢聖〈一拜〉。」 廣及十方無窮無盡一切眾生、 (頁)。 護世四王、主善罰惡、守護,持呪、五方龍、同壇尊證上中下座、信施檀越、善惡知識、 廣及十方無窮無盡 一、主善罰惡、守護持呪、五方龍善惡知識、諸天、諸仙、聰明正 (一 拜), 一九九八:二〇〇~二〇一頁。 主善罰惡、 歸依十方盡虛空界一 經生父母, 一切眾生, 重復歸依十方盡 歷劫親緣、 歸依世閒大 四生六道 切尊 (大正四 和卷 法

錯 籣 ……二九八上)が閒十一行を挾み逆轉 衍……僧尼各還本寺正佛法」十二行(大正五二·二九八上 金藏「應遍滿虛空護世四王……亦應遍滿在此天」 (大正五二・二九七下……二九八上)と

92

- 以 麗初・金・麗再:「如」毘・思・
- 金・麗再:「樓」毘・思・磧金・麗再:「乹」毘・思・磧
- 95 94 96 金・麗再・ 毘 磧 側

98 97 初・金

八十方

含靈抱識水陸、

空界

切眾生。

(大正四

- 麗初・金・ 磧 僧
- 中 經:「丐 毘 磧.:「 與 數 初

100

99

- 行句]『釋門自鏡錄』 切八部龍神, 如是幽顯莫不鑑觀。古人有言! 會此是大事因緣。 (大正五一・八一六下)。 弟子蕭衍於十方佛法僧前 護世四王, 有大神足 金剛密迹 非直 卷下 一切諸佛在此 有大威德, 摩醯首羅 弟子蕭 與諸僧尼共申約誓。 「非知之難 衍 皆應在此 散脂大將: 切法僧在此, 白諸大德僧尼 其在行之]_ 側塞虛空。 今日集
- 麗初・金・麗再:「持禁」 毘・ 思・

102 101

- ·弟子……」[倂行句][南宋]志磐 尼飲酒食肉,亦應如此加治」。 鬼神先當苦治弟子,將付地獄。 今已去,若飲酒放逸, 集諸沙門,製文立誓永斷酒食。其略云, 十八人,於華林殿請雲法師講 啖食眾生, 『涅槃經』 是時復集僧尼一千四百四 眾生成佛, [佛祖統紀] 乃至乳蜜酥酪, 中食肉斷大慈悲 「弟子蕭衍, 猶在阿鼻。 一切
- 106 105 104 103 麗初・金・麗再:「已」

種子之文。上親席地,

與眾同聽」(大正四九・三四九中)。

- 麗初・金・麗再:「酥」
- 匡正」麗初・ 麗再・毘・思・
- 麗初:「經法」金・麗再・毘・思・磧
- 麗再・ 金・麗再:「暫」 思・ 磧:「正」 毘・思・

- 子肉」 思・ 子
- 113
- 115 114
 - 令 思・ 金・麗再: 金・麗再:「其」 磧:「於」 厭

毘・思・磧 毘・思・磧

- 117 116 麗初・金・麗再:「生」毘・磧・思 毘・磧・思・麗再:「爽」金 麗初・金・麗再
- 魔共 用 麗初・ 麗初・金・麗再:「因」毘・磧・思 麗初・金・麗再・毘・思・磧 麗再:「纔」 金・毘・磧

思

苦 麗初・金・麗再・毘・思・磧

★大正藏本文 (=麗再)「共魔

は誤り

120

119 118

· 幷右牒僧尼合一千四百四十八人。二十三日旦, 節 麗初・金・麗再:「到」毘・磧・思 ★大正藏本文(=麗再,校勘なし)「若_ 光宅寺法雲

121

僧尼二眾, 爲都講。唱 於華林殿前登東向高座爲法師, 各以次列坐 「大涅槃經」 法雲解釋。 四相品四分之一,陳「食肉者斷 輿駕親御. 瓦官寺慧明 地鋪席位於高座之北 登西向高座

高座. 座北。 道「『律』 品」四分之一, 集華林殿前, [比較] 後又集義學僧尼二百人於華光殿, 『釋門自鏡錄』卷下「于時僧尼一千四百四十八人 地鋪而坐制旨。 中 無斷肉法。 令光宅寺雲法師昇座, 陳「食肉者斷大慈種」義。 又無懺悔食肉法」 問日, 集大眾求律中意。 令諸律學沙門昇 『涅槃經』 (大正五 御親席地在高 聞諸僧 「四相

- 126 125 124 123
 - 磧:「開示導」 麗初
- 麗再・毘・思・磧
- [參考] 『釋門自鏡錄』 根者, 理當是過。 便是意欲永斷」。 (大正五一・八一八上)。以上の下線部はの下線部は 所以律文,許噉三種淨肉。若涅槃究竟,不許食肉。若利 又問,「寶度律師如何」。答曰,「愚短所解, 十種不淨, 発』諸本にない。 「令人出離」。又問, 於三種淨肉, 律雖許三種淨肉, 答,「此非慈悲」。又問, 但教未極」。 次令食三種淨肉, 叉問僧辯答. 卷下 教卽得不食。若鈍根人, 方待後教 叉問, 「食肉得出離否」。 「律師法超奉答, 意欲永斷。 末令食九種淨肉。 「其食肉者, 「但教有淺深, 「律教欲使人出離不」。 何以知之。 「教是一 爲是慈悲心無 答, 只是漸敎。 階級引物。 「不得」。 先明斷 而
- 129 128 」麗初・金・麗再:「驅」 毘・思・ 麗初・金・麗再・思・磧:「夫」毘 磧
- 「常」麗初・金・麗再:「嘗」毘・思・

130

非疑」麗初・金・麗再:「不」 麗初・金・麗再:「昬」毘・思・磧 毘・思・磧

132 131

- 麗初・金・麗再:「不」毘・思・
- 具足」麗初・ 金・麗再・毘:「今答」思・磧 金・麗再:「具」毘・思・磧

134 133

毘・思・

毘・思・磧

- 138 以 麗初 ・金・麗再: [已] 毘・思・ 磧
- 139 懺 悔 金・麗再 (前後半角アキ):「懺」 麗初・ 毘 思
- 重 彌大」(大正五一・八一八中)。 門自鏡錄』卷下「又復慚愧 麗初・ 金・麗 再・毘・思・ 磧・釋門自 不得重犯。 [鏡錄。 如其重犯, 懷信 罪更 釋

140

- ★大正藏本文 (=麗再) 及び校勘 (宋本=思) 直 は
- 141 問 皆不能答」と記記する。 『釋門自鏡錄』該當部は右文を「帝與諸大德往返數翻. 法師是……法寵無復答。 法寵奉答事畢, 三律師 並下し
- 142 【④ c】「又敕始興寺景猷昇高座」……【④d】末尾 語竟,僧尼行道, 設會畢出」と略記 **촑掘摩羅』、『涅槃』等** 釋門自鏡錄 卷下は「叉敕景猷昇高座、 禮拜懺悔, 經經 設會事畢出」 明斷肉義。 唱 この箇所を 讀『楞伽』、 『經』文章: 「制說此
- 143 麗初・金・麗再:「摩」毘・思・磧

144

- 南 本『大般涅槃經』 六中~下)。[參考] 北本(曇無讖譯) 『大般涅槃經』 如來性品」第四之一 (大正一二・三八六中~下)。 卷四「四相品」第七之一(大正一二・六二 卷四
- 145 「此品……不復重唱」麗初・金・麗再・思・磧:「なし」毘
- 146 麗初・金・麗再:「酥」毘・思・磧
- 147 蘇 麗初・金・麗再:「酥」毘・思・磧麗初・金・麗再:「酥」毘・思・磧
- 149 148 月
- 150 金・麗再・毘・思・磧:「眞」麗初 麗初・金・麗再:「乾」毘・思・磧

151 「異意」 麗初・金・麗再・思・磧:「異意異意」

毘

- ★大正藏校勘記 (宮本=毘) 「異意」 は誤
- 152 「異想故斷十種肉異想故」 麗初・金・麗再・毘・思 磧.:「 異
- 麗初・毘・思・ 磧 ·· 可 金 • 麗再

153

154

- 似 麗初・金・麗再・ 毘・思・磧・北本諸本:「 貌 南 本諸
- 155 讀 麗初 金 • 麗再 思・ 磧 北 本諸 本 南 本諸 本… 讚
- 156 服 麗初 金 • 麗再・ 毘・ 磧 北本諸 本 南 本諸 本:「 復
- 157 鬚」麗初・金・麗再 磧 毘 思・北 本諸本・ 南 本 -麗再
- 158 髪爪」麗初・金・麗再 再:「爪髮」南本宋 鬢」南本宋 毘 思・ 磧 北 本 諸 本 南 本 麗
- 159 「嫉」麗初・金・麗再・毘・ 思・ 磧 北 本諸本・ 南 本 . 麗 再
- 160 離」麗初・金・麗再 疾」南本宋 毘 思 磧 北 本麗再 南 本 諸 本
- 161 不」麗初・金・麗再 雜」北本宋 毘・ 思 磧 北本諸 本 南 本 麗 再
- 162 麗初・金・麗再 毘・ 思・ 磧 北本諸 本・ 南 本 麗 再
- 163 肉魚 麗初・金・麗再 南本諸 本:「魚肉」 毘 思 磧 北
- 果 麗再・ 毘・ 思 北 本 諸 本・ 南 本宋:「 菓 麗 初 金

南本麗再

- 165 植 麗 初・ 金・麗再・北本諸本・ 南本諸本:「殖」 毘 思
- 166 麗 初・ 金 毘・磧・ 北本諸本・ 南本諸本:「蟲」 麗 再
- 167 幻 麗初・ 金・麗再・毘 思・ 磧 北 本麗本・ 北本宋 南
- 168 倡 本諸本:「唱」北本宮 麗初・金・麗再・毘・思・ 磧 北 本麗. 本・ 北本宋・ 南
- 169 麗初・金・麗再・北本諸本・南本諸本:「離」 毘・ 思
- 170 「佛言迦葉,「善男子,汝今不應作如是言。燈滅盡口佛言迦葉,」と句切った。[參考]南本『大般涅槃經』 方所。如來亦爾。 旣滅度已, 汝今不應作如是言。燈滅盡已無有 無有方所。……」(大正一 卷四
- 171 「洗」麗初・金・麗再・思・磧・北本諸本・南本諸本:「洒 毘
- 172 [南朝宋] 求那跋陀羅譯 中~下) 第四 (大正第一六卷第六七○號。大正一六·五一三 『楞伽阿跋多羅寶經』卷四「一切佛
- 173 「楞伽阿跋多羅寶經」麗初・金・麗再・思・磧・ なし):「楞伽經」 毘 楞伽經 (異本
- 174 麗初・金・麗再・楞伽經 (異本なし):「唯」 毘・思 . 磧
- 175 著 毘・楞伽 經 (異本なし):「着」麗初 ・金・麗再:「嗜
- ★大正藏本文(=麗再) 著 は誤り

- 177 176 ·楞伽經 (異本なし):「唯」毘
- 著 毘・思・磧・楞伽經(異本なし): 「着」 (異本なし):「唯」毘・思・磧 麗初

178

- 及 麗初・麗再・毘・思・磧:「反」金 ★大正藏本文 (=麗再) 「著」は誤り
- 敎 麗初・金・麗再:「殺 毘・思・磧

180 179

- 訶 麗初・金・麗再・毘:「呵」 思・磧・楞伽經麗初
- 穢

182 181

- 麗初・金・麗再・毘・思・磧 ★大正藏本文(=麗再,校勘無し)「穩」
- 旃 麗初・金・麗再・思・磧:「栴」毘・楞伽經麗初 ★大正藏本文(=麗再,校勘無し)「栴」

は誤り

は誤り

183

- 麗初・金・麗再・毘:「摩」 思・磧
- 184
- 186 185 訶 閡 麗初・金・麗再:「礙」毘・思・磧・楞伽經麗初 麗初・金・麗再・毘:「呵」思・磧・楞伽經麗初
- 麗初・金・麗再:「蒜」 思・磧:「等」毘

188

187

- 『廣弘明集』卷二六(大正五二・三〇二中~下)。 求那跋陀羅譯 陀羅譯『央掘魔羅經』卷一(大正二·五二一中)。 「央掘魔羅經』卷四(大正二·五四〇下~五四一上)。 『楞伽阿跋多羅寶經』卷四(大正一六・五一四中)。求那跋 同譯
- 諸 麗再・毘 麗初・金・思・磧・楞伽麗再・楞伽毘・楞伽思: [故_

189

- ★大正藏本文 (=麗再) 及び校勘記 (宋本=思) は誤り
- 190 毘・楞伽思 麗初・金・麗再・毘・思・磧:「悲! 楞伽麗再 楞伽
- 麗初・金・麗再・ 磧:「摩」 毘・思
- 192 191 捨 麗初・金・麗再・ 毘・思・磧:「棄捨」 央掘麗再

・思・磧

206

- 193 央掘魔羅經第」 麗初・金 麗再・磧:「第」毘
- 194 四 再・毘・思・磧 『央掘魔羅經』 卷 四に基づく訂正:「二」 麗初 金 • 麗
- 195 麗初・金・麗再:「卷云」毘・思・ 磧
- 臘 麗初・金:麗再・磧:「蠟」毘・思

196

城 麗初・金・麗再・央掘麗再・央掘毘・央掘思:「域」 ★大正藏本文 (=麗再, 校勘無し) | 獵 は誤り

197

毘・思・磧

- 198 師 央掘麗再・央掘毘・央掘思 麗初・金・麗再:「皮師」 毘:「皮師 師 思・磧:「使」
- 199 「受者, ……不受者」 毘・央掘思 再:「不受者, ……受者」毘·思·磧·央掘麗再·央掘 麗初:「不受者, ……若受者」 金・麗
- 200 「慧超、 法寵法師」麗初・麗再・ 思 磧 「慧 超)法師、 寵法
- 師」金:「慧招、法寵法師」毘
- 201 尼揵」麗初・金・麗再:「尼乹」毘・思・ 磧。 以下 同

「着」麗初・金・麗再:「著」毘・思・磧。

以下

同

麗初・金・麗再:「了」毘・思・磧

202

204 203

205

- 麗初・金・麗再:「皆是」毘・思・
- 類 麗初・金・麗再:「頓」毘・思・磧

★大正藏校勘(宮本=毘)「類」 一は誤り

一已不 金・麗再・毘・思・磧: 「不_

麗初・金・麗再:「鴉」毘・思・磧

208

觸處」 麗初・金・麗再・毘・思・磧:「處空」 釋門自鏡錄

★大正藏本文(=麗再, 校勘無し) |

は誤り

210 麈 麗初・金・麗再

★大正藏本文 (=麗再) 「獐」 は誤り

覔 麗初・金・麗再:「覓」毘・思・ 麗初・金・麗再 :「曾」毘・思 •

前所」 麗初・毘・思・磧:「前」

214 213 212 211

- 「煑」麗初・金・麗再・毘・思・磧

★大正藏本文(=麗再)「煮」 は誤り

- 麗初・金・毘・思・磧:「炳」
- $\widehat{216}$ $\widehat{215}$ 其 麗初・金・麗再:「此」毘・思・磧
- 217 「攛矛」毘·思·磧:「藪鉾」(=「笑鉾」) 麗初:「祥 矛
- 219 220 218 「肉者」麗初・毘・思・磧:「肉」 金 •

殺」麗初・金・麗再

一殺 甩・

思.

磧。

同

金

斷」麗初・金・麗再・毘・思・磧

★大正藏本文(=麗再,校勘無し)「 爾 は誤り

麗初・金・麗再:「無」毘・思・磧

221

【三・一、現代語譯】 現代語譯と語注]

梁の高祖

(武帝)「斷酒肉文」

つつしんで申し上げ 教義に通じ

【①a 今の出家者が異教徒よりも劣る九つの缺點】

更には外道にも及ばぬことになる。 更には外道にも及ばぬことになる。 でもそも出家者が外道と異なる理由は、原因・結果と『經』を信 を受け、十善を行う者は善き報いを受ける」とある。これぞ『經典』の教えの本旨である。もしこの言葉通りならば、出家者がなお 典』の教えの本旨である。もしこの言葉通りならば、出家者がなお の教えの本旨である。もしこの言葉通りならば、出家者がなお を受け、十善を行う者は善き報いを受ける」とある。これぞ『經 を受ける」とある。これぞ『經 が説かれて『經』に記された言葉に、「十悪を行う者は悪しき報い を受け、一世を行う者は悪しるでは、まさに佛 が説かれて『經』に記された言葉に、「十悪を行う者は悪しき報い を受け、一世を行う者は悪している。

これでは外道とまったく同じである。「外道と同じ」とは何か。外道は斷見や常見を固持しており、〔彼にとっては〕原因も結果もなく,布施も果報もない。いま,佛弟らにとっては〕原因も結果もなく,布施も果報もない。いま,佛弟らにとっては〕原因も結果もなく,布施も果報もない。いま,佛弟らにとっては〕原因も結果もなく,布施も果報もない。いま,佛弟らにとっては〕原因も結果もなく,布施も果報もない。いま,佛弟らにとっては〕原因も結果もなく,布施も果報もない。いま,佛弟らにとっては別様には、「外道と同じ」とは何か。外道は斷見や常見を固持しており,〔彼

れは閒違っていると言う。〔一方〕『〔大〕 涅槃經』に「カーシャそれは正しいと言い,師が閒違っているということなら,弟子もそ道はそれぞれ自分の師を信じ,師が正しいと言うことなら,弟子もでは,〔先述の〕 「外道にも及ばない」ところがあるとは何か。外

ある。 のは、私は今日、あらゆる肉を食してはならぬと弟子に命ずることのない。これは、師〔であるブッダ〕の教えに背いなる」と言うのに、それでもなお好き勝手に酒を飲み、〔仲閒から〕なる」と言うのに、いま出家者はそれでもなお好き勝手に肉を食にする」とあるのに、いま出家者はそれでもなお好き勝手に肉を食いよ、私は今日、あらゆる肉を食してはならぬと弟子に命ずることのより、私は今日、あらゆる肉を食してはならぬと弟子に命ずることのより、私は今日、あらゆる肉を食してはならぬと弟子に命ずることのより、私は今日、あらゆる肉を食してはならぬと弟子に命ずることのより、

の第三である。 これが、「出家者が」「外道にも及ばない」ところ魚や肉を食する。これが、「出家者が」「外道にも及ばない」ところり火に飛び込んだり、様々な苦行で自らを痛めつけるが、必ずしもり火に飛び込んだり、様々な苦行で自らを痛めつけるが、必ずしも更に、外道は五種の熱で身を燒かれたり、川の深みに身を投げた更に、外道は五種の熱で身を燒かれたり、川の深みに身を投げた

相手に對して憚ることがない。〔しかるに〕今,出家者は,年齢が道が真實であるのには及ばない」などと主張する。教えを異にするのの,それぞれ師から受け繼いだ教えを習っており,隱し立てする。ことはない。〔しかるに〕今,出家者は,魚や肉を食し,親しい相ことはない。〔しかるに〕今,出家者は,魚や肉を食し,親しい相ことはない。〔しかるに〕今,出家者は,魚や肉を食し,親しい相ことはない。〔しかるに〕今,出家者は,魚や肉を食し,親しい相のの,それぞれ師から受け繼いだ教えを習っており,隱し立てする。近ば真正のようないが、〔出家者が〕「外道にも及ばない」ところの第四である。我などはない。〔しかるに〕今,出家者は,年齢が道が真實であるのには及ばない」などと主張する。教えを異にする。などと主張する。教えを異にする。

ような行いが,〔出家者が〕「外道にも及ばない」ところの第五であ して惡事を隱す。こうしてはじめて何とか通り拔けて食する。 眼を避け、 自ら大變な目にあって、 長じていたり、 寺官の眼を避けて、 また日頃から皆に敬われながらも、 弟子の眼を避け、 邪悪な氣持ちを懷きながら危險を冒 仲閒の眼を避け、 魚や肉を食 在家の

い。〔しかるに〕今,出家者は魚や肉を食して,在家の弟子に見た悪を増長させるが,それ以外の集團の悪を増長させることはできなまた,外道は心に思ったままに行動し,自分たちの仲閒の様々な 第六である。 廣げてしまう。これが,〔出家者が〕「外道にも及ばない」ところの そのまま信じて服膺し、 なもので、こういう僧の說法を聞いて、眞實の言葉と思ってしまい たわけでないので、氣にすることはない」などと言う。在家は愚か 禁じたわけではない。金を拂って肉を買うなら,それは自分が殺しあった。〔だから〕ブッダの當時にあっては,まだすべて〔肉食を〕 「ブッダが法として教えを説かれた時, 聞かれたりすると、心に恥じることもなく、 自ら善くないことを行って、様々な惡事を もともと遠く前世の因が 邪説を言い繕って、

る。

ぬことではない」。このような說は正しくない。『〔大〕 魚や肉を食し,こう言う者もいる,「自分で殺した肉ではないので. けて

「

に

に<br / しく內と說くけれども, また,外道は,正しく 自分でその肉を食してもよい。 。自然死した動物の肉を食することすら止めるべきなら,「あらゆる肉類をすべて止めるべし。自然死した動物の肉 說に〕背くまいと努める。[正しくないことを正しいと說き、正しいことを正 各々 〔自派の〕 『經』を篤く信じ, 金錢を拂って肉を買うことも好から [しかるに]今、出家者は、『經』を篤く信じ、命をか 槃經

> よって肉を取ることである。もしこれらの金錢のために肉を取らな である。 や海に魚等を取る網を設けること、これは網によって肉を取ること ること, よう。これは明らかに『經』の教えに背いている。 うして殺生の分がないのか。私は殺していないなどとどうして言え のを捕えて殺して、自らの口を滿たすため、 いようにさせれば、 によって肉を網で取ると言うか。山野で兔や獸を取る網を設 不善なる〔惡しき〕 [アヴァターラ] 經』に言う, 、出家者が〕「外道にも及ばない」ところの第七である。 んや自然死したのでない動物の肉は言うまでもない。 もし別のことをしようとするならば、 もしも屠殺人のところで金錢によって肉を買えば 財によって諸の肉を網で取ること、この二種の行いは共に 悪しき規律〔とは何か〕 行いで, 死後, 「利益のため命ある生きものを屠 叫喚地獄に墮ちる」。 以前に肉食した者に、ど を習い、命ある生きも 別のことをしようとす 『ランカー が Ш

すれば, りたい放題である。これが、〔出家者が〕「外道にも及ばない」とこ 理由で寺に住まう者は ことなどできぬ。すぐに無關心を裝いそのままでいる。 火照り, を他人にはもう施せないようになってしまう。 る。〔しかるに〕今、出家者は、 る。〔我が〕身に過ちがあるからには、 自派の教えに背く者には嚴しく行いを改めさせ自分に必ず從わさせ 「寺官もそうだった」と非難される。すると心は〔恥ずかしさで〕 更にまた、外道は自派の教えに一致する者と合意して仲良くし、郷 の誠めを自ら緩めたり、 沈默低頭し,まっ赤な顔で大汗をかき〔何も〕 たちまち他者に、 魚肉を食することを〔許〕し、その教戒(S) 「師も以前はそう〔私と同じ〕 師となったり、 違反し、 命ある生きものを調伏する 修行を受ける者たちはや 何かを發言しようと 寺官となったり、 言えなくな このような

ろの第八である。

要にまた、外道は他人から布施を受ける時、自らと規則を同じく 要にまた、外道は他人から布施を受ける時、自らと規則を同じく 要にまた、外道は他人から布施を受ける。島戒〔を守る〕人は烏戒を〔守る人〕から布施を受ける。島戒〔を守る〕人が遂に〔自らの〕戒を隱したまま島戒〔を守る人〕から布施を受けることはない。〔しかるに〕今、出家者は、「我は精進生活ができる」「我は苦行生活ができる」と言いながら、一時的に〔本當はそれをできないという〕真實を隱して在家者たちを誑かす。〔きにまた、外道は他人から布施を受ける時の門を許容する。〔そにから〕出た途端に酒を飲み、あらゆる悪行の門を許容する。〔そして寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集して寺院に〕戻った途端に肉を食し、あらゆる苦の源を我が身に集める。これが、「出家者が」ところの第九でありる。これが、「出家者が、」ところの第九でありない。

外道の身であっても〕決してしないのである。 また,外道には逆轉した誤解こそあれ,このような事は〔たとい

①b 酒について

これらの何れの區分にこの文は現れるのか。ほかの僧眾ならば大めに見ることもあるが,殊に律を學ぶ者なら放蕩の門戶を開放し,諸に見ることもあるが,殊に律を學ぶ者なら放蕩の門戶を開放し,諸といさせ,「某甲よ,あなたはわたくしに就いて五戒を受けた,まとにこうするべきではない」と言うべきであるし,もし〔相手が〕受戒している〔佛教信徒〕でないならば,「檀越よ,酒は惡の根受戒している〔佛教信徒〕でないならば,「檀越よ,酒は惡の根受戒している〔佛教信徒〕でないならば,「檀越よ,酒は惡の根で、」。

【① c 今の出家者が在家者よりも劣る九つの缺點

食したりしてはならぬことは佛説の經典に明文があるから,酒や肉ない〔から禁止する手段がない。しかし出家者が酒を飲んだり肉を在家者が酒を飲み肉を食したところで,それを罪と規定する罪が

い」ところの第一である。 は禁止と定まっている〕。これ が、 〔出家者が が〕「在家者にも及ば な

に出家者が同じことをすれば、穢れた身を佛像の前に曝すことになるない。 在家者が酒を飲み肉を食したところで、それぞれ居住する家宅が(億) 〔穢れた身のまま〕佛像に向き合うことは遂にない。 [出家者が] 「在家者にも及ばない」ところの第二で 〔しかる

これが、「出家者が」「在家者にも及ばない」ところの第三である。を大食いすれば寺の中でへどを吐いたり排泄したりしてしまう」。 人は佛法を輕く見くびるようになるのだ。これが,〔出家者が〕「在ようなことではない。〔しかるに〕出家者が酒を飲み肉食すれば, 家者にも及ばない」ところの第四である。 いたり排泄したりすることはない〔。しかし出家者が大酒を飲み肉在家者が酒を飲み肉を食したところで,寺の舎屋にまでへどを吐 在家者は酒を飲み肉食したところで、 〔世人が殊更に〕嫌惡する

ない。 たり一面を覆い、あらゆる善神は遠く離れ、あらゆる魔物が皆、 れぞれ守り神が安住している〔から,家が惡鬼に攻められたりはし 喜雀躍する。これが,〔出家者が〕「在家者にも及ばない」ところの 在家者が酒を飲み肉食したところで、家の出入り口や家の中にそ しかるに〕出家者が酒を飲み肉食すれば,酒や肉の臭さがあるは、出家者が酒を飲み肉食すれば,酒や肉の臭さがあいり神が安住している「カル・ダブル・ブラー

たけであり〕,他人の財産は損失させない。〔しかるに〕出家者が在家者が酒を飲み肉を食したところで,自分の財産を損失する にも及ばない」ところの第六である。 を飲み肉食すれば、 徳を生じる素地) まで壊してしまう。これが、〔出家者が〕「在家ば,自らの善き法を壊しながら,他人の福田

> ・・・よっくこもしり布施のお陰である。これが、〔出家者が〕「在家食する〔だけである。しかるに〕出家者が酒を飲み肉を食すれば、在家者が酒を飲みりを食すれば、 者にも及ばない」ところの第七である。 自分の金錢を拂

酒を飲み肉を食すれば,ありとあらゆる魔物や外道がそれぞれ都合行いであり,まったく特別なことではない。〔しかるに〕出家者が行いであり,まったく特別なことではない。〔しかるに〕出家者が在家者が酒を飲み肉を食したところで,それは彼らの日頃の悪い の良い機會を得てしまう。これが、 13 」ところの第八である。 〔出家者が〕「在家者にも及ばな

してしまう。これが,〔出家者が〕「在家者にも及ばない」ところのれ少なかれ,皆,佛となるための種子(潛在的な力・可能性)を遮斷 いやしない。〔しかるに〕出家者が〔酒を飲み肉を食すれば〕多か ら代々傳わる事業を忘れることはない。そこまで駄目な在家人など(🛭 🖽) 第九である。 在家者がこのように酒を飲み肉を食したところで、 元來,

で論じたい氣持ちは山山だが、 い説明は繰り返さない。 ね九條ずつ事由を示した。様々な罪過について, 〔以上,出家者が〕外道にも在家にも及ばないところについて. 事例から推察できるので、その詳し 具體的なことま

の人を生意されて、今日の寺官〔の方々〕、、、、比丘・比丘尼、今日の寺官〔の方々〕、、、、とり、「とか」」とが、一、今日の大いなる徳をもつ比丘・比丘尼、今日の大いなる徳をもつ比丘・とが高い。 編む百姓の一人となってしまう。 が〕怠慢から佛の教えに從わないなら、 の人を注意させ嚴しく汚れを除去せしめるべきであり、 〔の方々〕よ、〔みなさんは〕自ら多く いま 弟子は力を盡くして國制を [みなさんも] 今日の教義に 梁國の戶を 通 じた

ここに居られる諸の僧官たちよ,佛の教えに依據されるがよい。治めているが,それでも佛の教えに〔完全には〕依據できていない。

近頃、都では『大涅槃經』(=『大般涅槃經』)を講じ、法輪は繼續して絶えることなく、聽講者の數は千をもって數える程である。「大涅槃經』の一節を前に聞いたことはある〉だろうか。もし前に聞いたことがあったら、〔食肉を禁ずる教えに〕背うか。もし前に聞いたことがあったら、〔食肉を禁ずる教えに〕背くことはなかったはずだ。一方、以前に聞いたことがなかったら、今こそしかと心に留め〔守〕るがよい〉。〔『大涅槃經』は〕『佛經』の一節を前に聞いたことはある〉だろうか、〈ないだろうか。もし前に聞いたことがあったら、〔食肉を禁ずる教えに〕背くことはなかったはずだ。一方、以前に聞いたことがなかったら、今こそしかと心に留め〔守〕るがよい〉。〔『大涅槃經』は〕『佛經』の一節を前に聞いたことはある〉だろうか、〈ないだろうか。もし前に聞いたことがあったら、「食肉を禁ずる。自然死した「動物の〕肉で、とはなかったはずる。自然死した「動物の」を食ったとさえ許されない。況んや自然死したのでない「動物の」肉については言うまでもない」と説いている。

れなくなる。 おいた。というには出家して佛弟子と名乘るのに、一體どうして今、 おいなる恋しみを育む種子を斷滅する」とはどのようなことか。 る生きものを等しく安樂の境地へと導く。もし肉を食すれば、すべる生きものを等しく安樂の境地へと導く。もし肉を食すれば、すべての命ある生きものが肉を食すむ種子を斷滅してしまう」と述べている。 の命ある生きものが肉を食する者を宿敵と見なし、安樂ではいられなくなる。

して行う大乗の修行者)の教えからも大きく外れる。肉を食すれば,者)の教えからも大きく外れる。肉を食すれば,菩薩(利他行を率先すれば,辟支佛乘(獨覺乘,一人悟りすまし他を救濟しようとしない覺肉を食すれば,聲聞乘(小乘)の教(ぶ)から大きく外れる。肉を食

涅槃からも大きく外れる。 るという悟りの成果からも大きく外れる。肉を食すれば、偉大なるという悟りの成果からも大きく外れる。肉を食すれば、自ら成佛すこれは菩薩の修行からも大きく外れる。肉を食すれば、自ら成佛す

れば の三昧(空三昧・無相三昧・無作三昧)を妨げる。肉を食すれば,八肉を食すれば,四つの自由自在の智を妨げる。肉を食すれば,三つ 能力を妨げる。肉を食すれば,四無所畏を妨げ三昧を妨げる。肉を食すれば,五眼を妨げる。 妨げる。肉を食すれば、 る。肉を食すれば,一切三昧を妨げる。肉を食すれば,海印三昧を食すれば,六つの神通力を妨げる。肉を食すれば,百八三昧を妨げ 種の解脱を妨げる。肉を食すれば、九つの修行段階を妨げる。肉を を食すれば、〈四攝法を妨げる。肉を食すれば、四無量心を妨げる〉。 **眞諦を妨げる。肉を食すれば、十二因緣を妨げる。肉を食すれば、** 十八不共法を妨げる。肉を食すれば 六波羅蜜を妨げる。肉を食すれば、四つの大きい誓願を妨げる。 つまり要點を述べると、三十七道品を妨げる。肉を食すれば、 この上ない菩提を妨げる。 首楞嚴三昧を妨げる。肉を食すれば、 四無所畏を妨げる。肉を食すれば、 一切種智を妨げる。肉を食す 肉を食すれば、 金剛 十の 肉 兀

なぜか。もし肉を食すれば、菩提心を妨げ、菩薩の教えが消えて

を甘いと美味しく食する。このことから推察してみると,何を好む修行することができないのか。鴟と鴉は鼠を好んで食べ、蝍蛆は螮 り優れているが,ほとんどこれら(動物)と同じく臭い肉を樂しみ, しむ。人は最も認識能力のある存在であり,他の命ある生きものよ のがよいか。豺・犬・野干まですべてを知っていながらその肉を樂 するのに、どうしてこの臭い物 境地の菩薩修行である。この上ないボーディ(菩提=目覺め)を成就 できないとしても、〔大いなる慈しみと大いなる同情心は〕 なる慈しみも大いなる同情心もない。この因縁によって佛の息子 菩薩の法がないので、 が生じて十地(十地の第十段階)を得ることができないまでに至る。 なくなる。 た方々よ,『〔大〕 涅 繋 經』を講じ,どうして憂え痛サミことなのであろうか。大いなる德をもつ僧團の方々よ, ててしまうのか。そもそも肉を食することはそれ程まで卑しむべき [としての修行が] また、愚かで道理を知らない人々の中には、(2) 理解できるようにさせてくれる。 體何故に,普段,殺心を抱いて大いなる慈しみの種子を敢えて捨 きないとしても、「大いなる慈しみと大いなる同情心は」最高の諸出家者は大いなる慈しみと大いなる同情心を行動で示すことが 「肉を食することは大慈の種を斷ってしまう」と說くのである。 (十地の第二段階)を得ることができず, を得ることができず、 この句は、 肉を食するから、 續かない。 それを聞き入れた方々が心の奥底から深く悟 四無量心も無く, それが妨げとなって初地 肉を食するから、 そのような理由で、 (肉)を忍び, 聲聞、 どうして憂え痛まないでおら 四無量心が無いので、 果ては それが妨げと 辟支佛の道を (更に) 教理に通じ (菩薩十 何を好む -地の 經

> りに修行しないで良かろうか。そもそも肉を食することについては 前に説いた通りである。ここの皆々はこれ である。 肉とを〕 聽講の方々よ,詳細に 區別せず, 水と陸の命ある生きものを共に肉と名付けるの [教えを] 受けて記憶し、 〔肉食とその果

ることは地獄へ生まれる原因である。命ある生きものを食生きものを食することは魔物の行いである。命ある生きよ大いなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々よ、こう知るベー大いなる徳をもつ比丘・北丘尼の方々よ、こう知るベー ある。 である。命ある生きものを食することは自らを燒く原因である。命は恐怖の原因である。命ある生きものを食することは命を斷つ原因 とは腸を刳く原因である。命ある生きものを食することは骨髓を碎 る原因である。命ある生きものを食することは手を斷ち切る原因で皮膚を剝ぐ原因である。命ある生きものを食することは頭を斷ち切 のを食することは耳を切る原因である。 命ある生きものを食することは鼻を割く原因である。 を食することは背中を破る原因である。 ある生きものを食することは腹を破る原因である。 ことは自らを炙る原因である。命ある生きものを食することは自ら のを食することは自らを炮る原因である。 ある生きものを食することは自らを煮る原因である。 體を切り割く原因である。命ある生きものを食することは自らの 命ある生きものを食することは足を斷ち切る原因である。命 命ある生きものを食することは目を抉る原因である 命ある生きものを食すること 命ある生きものを食するこ 命ある生きものを食する こう知るべし。 命ある生きものを食す 命ある生きもの 命ある生きも 命ある生きも

0)

ことは凍え餓える原因である。 0) を食することは身をやつす原因である。 命ある生きものを食することは貧困の原因である。 命ある生きものを食することは醜く 命ある生きものを食する 命ある生きも

肉は實際には食べない」とも言う人もいる。そこでまた再び

「私は魚を食するだ

陳せねばならぬ。

この

[佛敎の]

道理では

「水の肉と陸の

ある。 物の る。 なる原 ものを食することは痩せ哀える原因である。 ものを食することは怪物に遭遇してしまう原因である。(81) ものを食することは毒蟲に遭遇してしまう原因である。 ある生きものを食することは虻に刺される原因である。 がわく原因である。命ある生きものを食することは虱がわく原因で食することは癩病の原因である。命ある生きものを食することは蚤 きものを食することは首の出來物の原因である。命ある生きものを 炎症の原因である。命ある生きものを食することは ることは腫れ物の原因である。 することは することは 生きものを食することは皮膚病の原因である。命ある生きものを食 ものを食することは することは 生きものを食することは歩けない原因である。 命ある生きものを食することは片足が不自由な原因である。 因である。命ある生きものを食することは聲が出なくなる原因であ ることは寒さや暑さの原因である。 原因である。命ある生きものを食することは〔皮膚の〕腫れ物の 命ある生きものを食することは話ができなくなる原因 命ある生きものを食することは出來物の原因である。命ある生 膿 因である。 命ある生きものを食することはかゆみの原因である。 命ある生きものを食することは蚊に刺される原因である。 の原因である。 [皮膚のできものが] 〔體表部の〕腫れ物の原因である。命ある生きものを食 〔頸部の〕腫れ物の原因である。命ある生きものを食す 命ある生きものを食することは目が見えなくなる原 命ある生きものを食することは耳が聞こえなくな 〔皮膚のできものが化膿して〕ただれる原因で 命ある生きものを食することは痔の原因であ 命ある生きものを食することはあざ 化膿する原因である。命ある生き 命ある生きものを食することは蚤 命ある生きものを食することは 命ある生きものを食す 命ある生きものを食 〔皮膚の〕 命ある生き 命ある生き 命ある生き 命ある である。 命ある 腫れ 命

> である。命ある。 食することは六腑が整っていない原因である。命あを食することは五臟が整っていない原因である。命は〔地水火風の〕四大が整っていない原因である。命 る。⑧は を食することは飲み下せないことの原因である。命命ある生きものを食することは出血の原因である。 ものを食することは胸痛の原因である。 る。 することは顚倒の原因である。命ある生きものを食することは發狂 生きものを食することは髓痛の原因である。 である。 とは背痛の原因である。 の原因である。 ること
>] に基づく病氣の原因である。命ある生きものを食すること 食することは喉の痛みの原因である。 ることは腸痛の原因である。命ある生きものを食することは筋萎縮 頭 痛の原因である。 命ある生きものを食することは [四大のうち]風大〔が强すぎること〕に基づく病氣の原因であ 命ある生きものを食することは腹痛の原因である。 命ある生きものを食することは足痛の原因である。 命ある生きものを食することは脈が絶たれる原因である。 命ある生きものを食することは胃液が逆流する原因 命ある生きものを食することは、 命ある生きものを食することは憂い 命ある生きものを食することは手痛 [四大のうち] 水大 [が强すぎ 命ある生きものを食すること 命ある生きものを食するこ 命ある生きものを食す 命ある生きものを食 命ある生きものを 四百四病のありと 命ある生きものを 命ある生きもの 命ある生きもの 命ある生き の原因 因

ことは水難に遭う原因である。 に遭う原因である。 を食することは惱みの原因である。 命ある生きものを食することは發熱の原因である。 壓力を受ける原因である。 命ある生きものを食することは暴風に遭う原因 命ある生きものを食することは火事 命ある生きものを食すること 命ある生きものを食 命ある生きも する

は 0) あらゆる苦しみに至る原因である。

壞れてゆく苦しみの原因である。

命ある生きものを食すること 〔自分にとって好ましい

[無常に基づく不安感のなかで] 命ある生きものを食することは

生存している苦しみの原因で

1

對象

ある。 つの要素に基づく苦しみの原因である。命ある生きものを食するこ得られない苦しみの原因である。命ある生きものを食することは五 る苦しみの原因である。 原因である。命ある生きものを食することは老いる苦しみの原因で れる原因である。命ある生きものを食することは生まれる苦しみの 幽閉される原因である。 することは監禁される原因である。 を食することは牢屋につながれる原因である。命ある生きものを食る生きものを食することは辱められる原因である。命ある生きもの たれる原因である。 ることは ある生きも のを食することは盗賊に遭う原因である。 命ある生きものを食することは怨み憎んでいる者と出會う苦し 原因である。命ある生きものを食することは愛する者と別離す 命ある生きものを食することは死ぬという苦しみの原因であ 命ある生きものを食することは病をわずらう苦しみの原因で 命ある生きものを食することは罵られる原因である。 鞭打ちされる原因である。 命ある生きものを食することは泥棒に遭う原因である。 かれる原因である。 のを食することは强奪者に遭う原因である。 命ある生きものを食することは咎められる原因 命ある生きものを食することは求める物が 命ある生きものを食することは閉じ込めら 命ある生きものを食することは笞で打 命ある生きものを食することは 命ある生きものを食することは 命ある生きものを食す 命ある生き 命あ 命

は

ある生きものを食することは黑繩地獄 ある生きものを食することは想地獄 [感覺的な] 苦しみの原因である。 〔に生まれる〕 〔に生まれる〕 原因である。 (93) 原因である。

> ある。 まれる〕 である。 ゆる餓鬼〔に生まれる〕原因である。 [に生まれる] 原因である。 命ある生きものを食することは大叫喚地獄 ある生きものを食することは叫喚地獄 ある生きものを食することは眾合地獄 命ある生きものを食することは大熱地獄〔に生まれる〕 あらゆる畜生〔に生まれる〕原因である。 命ある生きものを食することは熱地獄 る。命ある生きものを食することは八寒地獄や八熱地獄(命ある生きものを食することは阿鼻地獄〔に生まれる〕 原因であり、 八萬四千鬲子地獄や不可說不可說鬲子地間 命ある生きものを食することは 命ある生きものを食すること 〔に生まれる〕 〔に生まれる〕 〔に生まれる〕 〔に生まれる〕 原因である。 原因であ 因 原因であ 原因で である。 原因 獄

る。 る。 命

命

現在の様々な苦しみという結果をもたらした理由は、すべて殺生の 果報を詳しく列擧しようとすれば、 業に依る以上, 同じ一つの苦しみを結果とする。その中に輕重の差はあるものの、 せない。大地すべてに〔並べても〕足りない程である。これまで說 縁となってそうした果報を受けるのである。殺生の 死にゆく時にも際限なき恐怖がある。これらはすべて殺生の業が因 生きものに危害を加えられる。生まれた時には際限なき恐怖があり 苦しみがあると知るべし。畜生は生まれた途端に死に往き、命ある の一面を示し、 てきた內容では、 餓鬼には際限のない苦しみがあると知るべし。 命ある生きものを惱ませることについて、 大まかにその一部を述べた。 [果報に至る] 道は多いが, 關連する

事柄が多くて述べ

盡く 畜生には際限 肝要を述べれば、 簡略にそ

比丘尼の方々、諸寺の三官の方々よ、更こったいなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々、大いなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々、 ねばならぬ。 もし命ある他の生きものの父の肉を食するなら、 更に一つの重要なことを考え 通 でにた比丘

命ある生きものも仕返しに汝の父親を食する。もし命ある生きもの命ある生きものも仕返しに汝の母を食するなら,その命ある生きものも仕返しに神手を食い返す。〔いつ明けるやも知らぬ〕永久の夜のような時を經巡り,盡き果てることがない。それはちょうど『經』に說くように,「ある女がたとい五百囘生まれ變わってその女の子供にたいえるなら,狼の子も五百囘生まれ變わってその女の子供にた害を加える。更にまた,女がたとい五百囘生まれ變わっても狼の子にた害を加える。更にまた,女がたとい五百囘生まれ變わっても鬼靈の命。損なう。このようなことはすべて『經』に説かれている通りで,損なう。このようなことはすべて『經』に説かれている通りで,損なう。このようなことはすべて『經』に説かれている通りで,損なう。このようなことはすべて『經』に説かれている通りで,損なう。このようなことはすべて『經』に説かれている通りで,損なう。このようなことはすべて『經』に説かれている通りで,

めねばならない。〔命ある生きものは〕始めも分からぬ〔太古〕か比丘尼の方々,諸寺の三官の方々よ,更に一つの要點を信じ受けと大いなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々,教義に通じた比丘・信じぬわけには行かぬ。それ以外の報いも推して知るべし。 しい縁者としてあちこちにいたのに、ただ、輪迴を繰り返す〔閒〕、きもの〕は〔數限りない輪迴轉生を繰り返す中で、必ず一度は〕親 つかず、次から次へと〔肉を〕食し、そのことが自らあったのに、しかし今は正しく見る目を失い、〔敵味古昔、兄弟であり、昔、姉妹であり、昔、子孫であり、 前にいる〕相手が 六種の行き場を經巡り實に樣々な果報を受ける。一切〔の命ある生 ら今生に至るまで,〔天・人・畜生・餓鬼・阿修羅・地獄という〕 本來の心に障害をきたし,これら〔曾ての〕仲閒たちは, [命ある生きものの肉を] 今の世の命ある生きものは、昔、 〔誰であったのか〕 分からなくなってしまってい 食する時 [その生きものに] そのことが自ら分からない。 「敵味方の」 區別が 父母であり、昔、 認知する力 先生であり 〔今眼の 友人で

> 薩の修行を實踐するのだから,深く思いを致すべきである。 をい。しかし出家し佛道を學ぶ者は,如來と同じ衣を身に纏い,菩舌に盡くし難い。俗服を着た在家者は修行の道に適う生き方ができ宿世の親者と怨敵となる〔結果を招く〕。何と痛ましいことか,筆ずにいられようか。暫し舌先のほんの僅かの味を欲しがり,永えにずにいられようか。暫し舌先のほんの僅かの味を欲しがり,永えにずにいられようか。暫し舌先の思敵となる。以上のようなことを考えがあれば,たちまち恨みつらみを起こし,怨敵を増やす。以前は一

道理に存する妨げである。 これが、道理に存する妨げである。 という。 では、「その言葉を」信じ受け止めることができない。そして信じても、「その言葉を」信じ受け止めることができない。そして信じらなくさせ、その對策を失わせる。たとい善き修行仲間に巡り會った。 (語) ができない。そして信じいから」抜け出る肝要を分か生じ、修行者を無癡蒙昧にさせ、「迷いから」抜け出る肝要を分か生じ、修行者を無癡蒙昧にさせ、「迷いから」抜け出る肝要を分か生じ、修行者を無癡蒙昧にさせ、「迷いから」

のうち、天界の〕神々の中にいることもある。このように、ここかこともあり、「佛法の敵である」魔物の中にいることもあり、「六道もあり、强力な守護神の中にいることもあり、强力な龍の中にいることもあり、毒をもつ猛獸の中にいること 實際の具體的事柄に存する妨げとは〔何か〕。これらの怨敵ども

て古い〔宿世の〕怨念が對立障害を生じるのである。これが,實際ず汚れから離れられず,いつも充足することがない。これらはすべ の具體的事柄に存する妨げである。 行爲の節制 込まれることも, 度も實踐し續けたところで、 (IB) (「慧」)を修め, 木 難を仕掛けてくる。 (「戒」) 心に深く信じ受け止 [修行者の心に残る] 諸の高徳の善行を修め ・精神の制御 たとい すぐに困 め、欲望を節制し、繰り返し何 (皆) 一般り返し何の。 (を) 一般り返し何い。 (を) 一般り返し何い。 (を) では、 (を) でも) では、 (を) では) では、 (を) では) では, (を) では) では, (を) では, (を) では) では, (を) では, (を 「難が生まれ、 煩惱が心を亂すこともある。 (「定」) を修め, 〔ようと努めても〕, 邪悪な道に引き 繰り返し何 正しい智 絶え

らぬ。各自誠意を盡くして蔬菜を獣供するだけことに。写写せたっらぬ。各自誠意を盡くして蔬菜の祭りに、生きものを供犧してはな及んでいるに違いないが、弟子は既に廟の神子や人民の大奥の祀事及んでいるに違いないが、弟子は既に廟の神子や人民の大奥の祀事はって祈願すれば、教えを想念できない。今日この大眾は既に聞きよって祈願すれば、教えを想念できない。 ら取りやめる。もし何も殺生せずに祈願すれば、その都度、素晴らで申し上げる――、北山(鍾山)の蔣帝への犧牲を獻供することす教義に通じた比丘・比丘尼の方々、諸寺の三官の方々に、つつしん弟子蕭衍は、更にまた、大いなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々、ともに深く思念し、うまく手立てを講ずべし。 生きものを食し、 菩薩道を行じておられる。 う毒物も同じ、 こうした様々な苦痛が生まれる。貪欲という毒物も同じ、 生きものを食した因緣によって,佛の正しい教えをすべて遠ざけ,このようなことも深く思念せねばならぬ。たった一度でも命ある (貪欲・忿怒・無癡) い教えを得られようが、もし殺生 無癡という毒物も同じである。これら三種の毒物 魔物の行いをしていてよいであろうか。他はられる。どうして出家者たちが,反對に, が皆, 活發に働くと、誰でも苦痛を受ける。皆 どうして出家者たちが、 〔して犠牲を供えること〕に 他日, 忿怒とい 命ある 北

> はこい。 はで蔣帝への齋會を行い、「その時」、菜食の僧を招く「つもりだが」 山で蔣帝への齋會を行い、「その時」、菜食の僧を招く「つもりだが」 山で蔣帝への齊會を行い、「その時」、菜食の僧を招く「つもりだが」 山で蔣帝への齊會を行い、「その時」、菜食の僧を招く「つもりだが」

る――,弟子蕭衍は,大いなる: 第5章 蕭衍は,大いなる: またい。 りの僧であって、 比丘尼と共にかさねて誓約する。今日 0) は、私は王の法に則って審問するだろう。 がそれぞれ誓ったことを點檢し佛の教えに從うようにさせよう。 の尊法の前に於いて、 〔それでも〕もし酒を飲み肉を食って,〔佛教の〕 衣を身に着けながら如來行を行わないのであれば、これは名ばか 大いなる徳をもつ比丘 盗賊と同じである。 十方の一切の聖僧の前に於いて、 十方の一切の諸佛前に於いて、 諸寺の三官の方々に、 ・比丘尼の方々, 僧眾が寺に歸った後、 比丘・比丘尼たちが如來 つつしんで申し上げ 法に違うような者 十方の一切 諸の比 丘

ものを取り上げ、この二種の人をまず審問すべし。なぜならば一人 (壁) 「完予蕭衍は」王の權力で審問することはできる。もし〔佛法の〕 「完予蕭衍は〕王の權力で審問することはできる。もし〔佛法の〕 「完」 「として得たものを觀察し,あるいはもし寺家として自ら罪 を敷え上げさせるのならば,年齡や弟子の敷に關わらずに行うべき であって,私は寺官に〔飲酒噉肉し佛法に違う〕僧たちを集めさせ, 「こっと」 「かり、 「こっと」 「こっと 「こっと 「こっと 「こっと 「こっと 「こっと 「こっと 「こっと 「こっと 「こっ

今日の集會は大いなる因緣によるものである。ただ一切の諸佛がないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧ないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧ないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧ないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧ないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧ないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧ないからであり、このような影響力の强い僧を處罰すれば、他の僧を成立して行を積んでいない僧を處罰しても人心を改めるには效果がの大して行を積んでいない僧を處罰しても人心を改めるには效果がの大して行を積んでいない僧を處罰しても人心を改めるには效果が

とい心臓を刳り抜いて地に擲ち、比丘・比丘尼に正に數片の肉と派なことを言えば、比丘・比丘尼には必ず不滿の樣子があろう。た者だけが人を清らかにすることができる。弟子が今日このような立穢れなき者だけが人を懲罰することができる。ただ自ら清らかな

や蜂蜜, の大いなる力を有する鬼神よ,先ず蕭衍の身を嚴しく處罰し,そのや蜂蜜,酥、酪(乳を發酵させたもの)を飲むならば,願わくは一切こし,人を欺いて虚言を吐き,あらゆる生き物を食らい,更には乳 せ, にいる者がいれば、弟子蕭衍は法に從って處罰し、强制し、いまだ幽冥世界の役人によって處罰し審問されず、 らを罪に問い處罰し,善良なる徒眾を増やし,佛道を淸めよう。もの大いなる力を有する鬼神たちも,私に對してするのと同樣に,彼 尼にもし飲酒して魚や肉を食したのに懺悔しない者があれば、一切 皆, 後, を獲得するまで、もし飲酒して心をなおざりにし、様々な淫欲をお(⑱) 明らかにする りである。 いないけれども, 弟子蕭衍は在家の身であり [出家者のように完全な] 戒を保 成佛しつくすまで、弟子蕭衍を阿鼻地獄に繋ぎ置さたまえ。僧 私を地獄に送り、閻羅王が様々な苦を與え、命ある生きものが ――弟子蕭衍は,今より以後,菩提(g) たたく 今日,まず自ら誓いを立て,それに なった。 强制的に還俗さ (悟り・目覺め) なおこの世

世、在家の衣服を與え、時宜に應じて勢役させよう。 世、在家の衣服を與え、時宜に應じて勢役させよう。 世、在家の衣服を與え、時宜に應じて勢役させよう。 世、在家の衣服を與え、時宜に應じて勢役させよ。大いなる たすべてに〔『經』に〕說かれるそのままに修行させよ。大いなる ちすべてに〔『經』に〕說かれるそのままに修行させよ。大いなる をしみを育む種子(潛在力)を斷ち、佛を〔繼承する〕子孫を斷經 でしてはならぬ。もし法を犯し戒を破る者があれば、皆、僧制に でして規定通りに罪に問い、處罰せよ。もし受け容れて許し、檢擧 し處罰しない者があれば、その者にもかえって罪を負わせる。また、 し處罰しない者があれば、その者にもかえって罪を負わせる。また、 した。」 した。」 にいる二部の比丘眾と比丘尼眾よ、各々寺に戻した。」 を随い、をいる者があれば、皆、僧制に をして勢役させよう。

の教義の論述は終わる。このように意を述べよ)。 寺官に咎が及び,先の罪と同様であるから,各別に意を述べよ〈こではならぬことであるからすぐに禁斷すべし。もし禁斷しなければ,の頭や羊の肉等を〔供物として〕設けているところがあれば,あっの頭や羊の肉等を〔供物として〕設けているところがあれば,あっ

く。一時,感覺器官を供えた〔身を得ても〕たちまち消滅する。®」と言われる。生まれては老い,死に,またたく閒に時は過ぎ行者などいない。『經』に,「一念の僅かな閒に六十クシャナが過ぎ うまでもない。 ないであろうと〕恐れる。況んや〔禁戒を〕破ったりするならば言 及ぶ。地獄〔の苦しみ〕を離れたくとも、それは極めて困難なこと。 かない。〔命ある生きものは〕變わり果て衰え,ずっと若いままの 百二十歳と言われるが,實際この世間でそのような人がいるとは聞 上げたい。〔この〕ジャンブドゥヴィーパでは壽命は〔せい うことをあらまし述べた。 戒律と德目が清らかであってさえ〔地獄から〕免れることは〔でき 「獄・餓鬼・畜生という」三つの行き先等の苦しみは、 既に先に,魚肉は煩惱の障害であり,苦という結果を招くとい丘・比丘尼の方々,諸寺の三官の方々に,つつしんで申し上げ 時,感覺器官を供えた〔身を得ても〕たちまち消滅する。言われる。生まれては老い,死に,またたく閒に時は過ぎ行 今ここでもう一度重ねて要點のみを申 教義に通じ 忽ち身に ・ぜい〕

も手立てなく、三つの行き先等の苦しみを遮斷することなどできぬ。 ことは可能であるけれども、後報 てそうであるのか。この なければ,苦という果報を免れたくとも,全く無理である。 (®) 長期に渡って身を清めて菜食したとしても、(四) んや酒を飲み、 行爲の力は强いので、 命ある生きもの [地に] 生まれて様々な罪を犯さずにいる 今は〔それらの果報を防ぐための〕 〔 の 肉〕 (來來世とそれ以後の果報) を食するなら猶更である。 なすべき方策に努め どうし (を生 何ら

> る時は、 である。それ故に『〔大〕 涅 繋 經』は「食事を〔布施で〕受け取らかでないなら,〔野菜や粗末な食物は〕臭くて穢れた不味い食物 じ一つの「食欲に基づく」煩いである。 や粗末なもの〔を食するのも〕肉や魚「@) 堅い確信をもてば、 (m) ののが薄弱である。 きれば, れ」と言う。もし〔菜食も肉食も〕どちらも煩いでないなら,どうる時は,あたかも子の肉を〔もらって食するような〕氣持ちにな してこのような教えが必要であろうか。 ら〕,自ら努めて精勵するがよい。もし菜食は困難と思うなら, 比丘眾と比丘 〔野菜や粗末な食物は〕甘露のような美味である。心が安い〔食欲に基づく〕煩いである。心を安らかにすることがで 尼眾は確かにブッダの言葉を信じている (®) もし信仰心があるなら、 菜食することがどうして困難であろうか。野菜 [を食するのも] どちらも同 自ら努力すべし。心に いだか

忌み嫌う。 よ。善なる煩いに卽して、更になすべき方策を行いなさい。野菜をいなら〕不善なる煩い(肉食)をやめて善なる煩い(菜食)に代え 轉したものの見方である。 きない者たちは、 現時點で既に菜食することができている者は、血なまぐさいものを 食し〔その時に更に〕子肉を食すが如くに想念する 萬事このようであるから,自ら努め勵むがよい。〔肉食も菜食も煩 人に滋養を補う」と言う。こんなことを言うのは、 菜食できない者の中で甚だしい者は、 堅い決意を得られる。 「野菜は體を冷やし、 およそ肉や魚を斷つことがで 人を虚弱にする。 野菜を忌み嫌う。 ――このよう 魚肉は體

ている。このような人々の場合は過剰な「熱」が生じることが多い。長い閒は菜食を續けて來た人に於いては血液と生氣が活發になっいま試みに大略を述べれば、これは事實ではない。

めの助けになる。
が冷え込み過ぎるというマイナス效果はない。バランスが取れるたが冷え込み過ぎるというマイナス效果はない。バランスが取れるた出來るようになる。消化出來ると體力が滿ちて來るので、菜食は體(實は)血液と生氣が活發になっている場合は、食したものは消化

苦行者たちは皆菜食するので、悉く過剰な「熱」を生じることがの論後報も招(密) にこのが常である。故に魚や肉を食する人は精神は様々な病氣を起こすのが常である。故に魚や肉を食する人は精神は様々な病氣を起こすのが常である。故に魚や肉を食する人は精神は様々な病氣を起こすのが常である。故に魚や肉を食する人は精神のでない、大體忍耐力が强く、精神は清らかで明るく、まれに疲れる。の論後報も招(密) に返過の苦しみ等がある。その時にすぐ體を構成の論後報も招(密) 三悪道の苦しみ等がある。その時にすぐ體を構成の論後報も招(密) 三悪道の苦しみ等がある。とれは迷妄している者の心の用い方に、それぞれに執着があるのに他ならぬ。魚や肉を食する人は、「魚や肉は」體を温め「榮養を」補給すると考えるが、信じるわけには行かぬ。

る」と思い込む。 を理解していない。野菜と魚や肉は、水と火のようなもの。野菜を理解していない。野菜と魚や肉は、水と火のようなもの。野菜を理解していない。野菜と魚や肉は、水と火のようなもの。野菜をを理解していない。野菜と魚や肉は、水と火のようなもの。野菜をまた他の人たちは、菜食は體を冷たくすると考え、菜食を止めてる」と思い込む。

ここにいる大いなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々よ,更に知るべり滅ぼすが,〔その代わりに〕利點は僅かに留まる。(も,魚や肉の良からぬ利益も得られない。「冷」〔の性質〕をかなでも,野菜の效果を得ることができないし,〔肉食の方向に〕戻っ茶食を止めて〔肉食に〕何度も戻る人は,〔茶食の方向に〕進ん

「修行しても」教えは次々に減退してしまう。 「修行しても」教えは次々に減退してしまう。 「修行しても」教えは次々に減退してしまう。 「修行しても」教えは次々に減退してしまう。 「修行しても」教えは次々に減退してしまう。 「修行しても」教えは次々に減退してしまう。 「修行しても」教えは次々に減退してしまう。

また別の人々は、外觀的に修行に成熟したかのように見えるが、域に落ち込み、多くの惱みをかかえる。よく腹を立て、欲望の强い傾向がある。このような人々も魔羅の領更に一部の人々は、菜食するとは言え、それによって傲慢となり

動するから,菜食しても惱みが多い。

動するから,菜食しても惱みが多い。

「窓」
いの内質は隱蔽したままである。このような人々は魔羅の領域で行心中はむらむらと怒りに燃え上がる。振る舞いはまったく善からず、心の中は粗悪である。他人より自分の方が勝れていると見て取ると,心の中は粗悪である。他人より自分の方が勝れていると見て取ると,心の中は粗悪である。他人より自分の方が勝れていると見えるが,

は、日本子の古とのこまにで見たでいれている。人になどである。 だそれを果たしていない者は今すぐ自らを改革して欲しい。まただきたい。すでに習得された者は堅く强い意志を得て欲しい。またができる方々は,今日から〔將來まで〕善き導きができるであろいができる方々は,今日から〔將來まで〕善き導きができるであろいができるでをした丘・比丘尼の方々よ,戒律の規定に從った行大いなる徳をもつ比丘・比丘尼の方々よ,戒律の規定に從った行

申し上げたことをけっして悪意に取らぬように。本日は皆の者たちと共に菩提を育む種子を作る。以上弟子蕭衍が

② 五月二十二日の五更 (型)

(大生の) 寺官三百六十八人,宿徳二十五人,義學五百七十四(譽) 寺官三百六十八人,宿徳二十五人,義學五百七十四・(譽)

以上合わせて比丘と比丘尼の都合一千四百四十八人が皆,五月登錄された比丘尼眾は都合四百四十二人。「女性の〕寺官三百六十九人,義學六十八人,導師五人,以上,

③ 二十三日の早朝

【③ a 『大 涅 槃 經』「四相品」四分の一を講ずる】

【③ b 講義の終了】

文」を讀み上げ,次に〔法雲が〕解說した言葉を復唱した。 講義が終わると,耆闍寺の道澄が西向きの高座に登り,「斷肉の

③ c 退出

けた。〔それらがすべて〕終わると〔皆〕退出した。唱え終わると,〔皆で〕禮拜懺悔し,〔參列者に〕普ねく中食を設

た者たちがいた〕。(このように〕二十三日に法會を開いたが、その後も、諸の比にしなが、はを懺悔する法も無い」と言い〔武帝のお考えに從おうとしなかっ丘・比丘尼にはなお「律中には肉〔食〕を禁斷することも,まの比

【④ 二十九日の問答】

【④ a 三律師との問答】

「武帝は」制旨して法超ら三律師に問う――「古人は、「沸いた湯を止めようと思えば、薪を取り去るのが一番である。過失を行うまいとすれば、何も言わないのが一番である」と言っている。弟子としては言わずに濟むならいとも容易いが、そうはいっても〔人の上に立つものとして〕人の善行を成すを喜び、佛種を繼續させ、諸の比丘・比丘尼と共に教えを弘めようと思うと、〔僧侶の肉食〕という事柄を默認したままにはできぬ。そこで今〔諸の比丘・比丘尼と、大眾の面前で『律』〔に説かれる釋尊〕の眞意を究明と〕集合し、大眾の面前で『律』〔に説かれる釋尊〕の眞意を究明と〕集合し、大眾の面前で『律』の教えと思うと、「僧侶の肉食〕という決まりはなく、食肉を懺悔(告白改正)せよという決まりもないう決まりはなく、食肉を懺悔(告白改正)せよという決まりもないう決まりはなく、食肉を懺悔(告白改正)せよという決まりもないう決まりはなく、食肉を懺悔(告白改正)せよという決まりもないうと思うさが。さて諸の律師は、かねてよりどのような教導を行い、人々をこのような疑いを抱くに到らせたのか」。

講義でいつもこのように説明しております」。 れば『律』の〕意圖は〔肉食を〕永遠に禁斷するもの。法超は常の (®) 食べさせ,最後に〔『大涅槃經』の中で〕九種の淨肉を許されまし すと、先に十種の不淨肉の禁斷を說き明かし、次いで三種の淨肉を 遠に禁斷したいのであると。どうしてこのように分かるかと言いま ることを許しておりますが、 ありません。法超の理解としましては、 た。このように〔肉食の是非は〕段階的に定められました。〔とす 人々の, 『律』文に秘められた意味に對する解釋は、 しかしその本意としては 『律』は三種の淨肉を食す [食肉を] 永

れているのか」。 陛下は更に僧辯に問う――「法師よ,あなたはどのように教導さ

ある生きものを導くのみ。三種の淨肉を食べ〔て良いか〕を論じる法超と異なりません。しかし教えには深淺があり,段階をもって命 め〔『律』では三種淨肉を食することを〕比丘・比丘尼にお許しに は釋尊の〕教えは〔常住教という〕極地に到達しておらず、そのた のであれば、理としてこれは過失ですが、しかし〔『律』の段階で 僧辯がお答え申し上げる――「僧辯のかねてよりの理解の大意は

陛下は更に寶度に問う― ――「法師よ,あなたはどのように教導さ

けないという解釋に至るでしょう。鈍根の人は,後教(すなわち 種淨肉について教えを受けると,すぐにすべて〔肉は〕食べてはい 正しい教えを明らかにし、 を食することを許しても、『涅槃』という最上の教えにおいては、 ただこれは漸教というだけのこと。そのため『律』文では三種淨肉(※) 寶度はお答え申し上げる — 肉食を許さないのです。利根の人は,三 ― 「愚短〔な拙僧の〕の理解としては

> とを理解するのです〕」。 の説く教え)を待ってはじめて〔肉食してはならないこ

裏に〕込められた意味であった。もし『律』の明文に依據して〔肉 ので、〔此度のご下問にも〕先の解釋を繰り返すだけでございます」。 食を禁止すべきかどうかを論じるなら〕,どのような判を下すのか」。 陛下は僧辯に問う――「法師の意見はいかがか。超法師と同じ 答える――「〔私は〕常に日々〔先のように〕解釋しております 陛下は再び法超に問う―― 「法師の先の返答は 『律』文に

す。 〔僧辯は〕お答え申し上げる――「法超の解釋と同じでございま

肉を食さないのだろうか」。 してきたのであれば、諸の律師も並びに皆肉を食するか、それとも 陛下は法超に問う―― 「法師がかねてよりこのように

るのか〕は分かりませんが、法超はかねてより自ら食肉したことは法超はお答え申し上げる――「餘人がどのような〔解釋をしてい ありません」。

陛下は僧辯に問う――「法師も肉を食するのか」。

中年に病氣になり,しばし解禁して〔肉を食〕しました」。(※)(※)僧辯はお答え申し上げる ――「昔は全く肉を食しませんでしたが、※)

せん。もし他の寺にいたなら、病氣になった時は 寺に移りましたが、二寺では肉を 陛下は寶度に問うー 〔寶度は〕お答え申し上げる ――「元は定林寺に住み,後に光宅 - 「法師はどうか」。 〔食膳に〕進めることはございま

〔武帝は〕問う — 「『律』を講じる際, 肉を食するのか」。

〔肉食を〕解禁せ

ざるを得なかったでしょう」。

子たちがいますから,彼らの前で進んではしません」。 〔寶度は〕お答え申し上げる ——「〔『律』を〕講じる時は必ず弟

い〕」。
いことをしないという〔意味〕か。〔曖昧な返答をしてはいけないことをしないという〔意味〕か,それとも進んでは食しなは〕進んでは食さないという〔意味〕か,それとも進んでは食しな問う ――「「進んではしません」には意味が二つがあるが,〔汝

ればどう説明するのか」。
また、と、肉を食べた者を〔教團から〕追放すべきか。もし許さないと弟子たちが肉を食するのを許すか、許さないのか。もし許さないとまた、陛下は僧辯法師に問う――「常日頃、『律』を講じる際に、

合,〔私は〕これまで許したことなどありません」。 その〔『律』についてブッダが最終的に〕意圖したことを論じる場は,〔食肉の〕不許可を例外なしに言うわけではありません。もし問わず,段階的に導く『律』の〕教えに焦點を當てて解釋する場合[僧辯は]お答え申し上げる――「もし〔『律』の最終的な意圖を

の〕教えに焦點を當てた時は,許すのか,許さないのか」。 問う ――「今度は〔あれこれ問わずに〕ずばり訊ねよう,〔『律』

とする出家者を〕 遮りはしません」。 答える ――「〔『律』の〕教えに焦點を當てれば,〔肉を食べようの〕教えに焦點を當てれば,〔肉を食べようの〕 教えに焦點を當てた時は「許すのか」許さないのか」。

いうことか,〔制止しないけれども〕許さないということか」。問う――「遮りはしないとは,〔食肉を制止せず,かつ〕許すと

肉を食すことを許します」。 う〕道理に向かって〔命ある生きものを〕導く際は,彼が三種の淨谷える ――「〔『律』は最終的に肉食の禁止を意圖しているとい

かったことにすることができようか。〔自分のために〕殺したとい問う――「〔自分のために〕殺すところを見たら、いったい見な

免れることができようか」。 うか。〔自分のために殺したのではないかとの〕疑いは,どうしてうことを聞いたら,いったい聞かなかったことにすることができよ

の肉は自分のために殺されたものではないかと〕疑うのです」。だ〔そうした因緣が不明なまま〕偶然に〔肉を〕得た者だけが〔そではないという〕因緣を聽いた場合も,疑う必要はありません。た見れば,疑う必要はありません。〔肉が自分のために殺されたもの答える——「もし〔肉が如何に自然死したものかという〕因緣を

に殺されたのではないかと〕疑うのか,疑わないのか」。 問う ―― 「 金錢で魚や肉を買う場合, 〔その魚・肉は自分のため

とになります」。 得ないという〕道理の次元においてなら,道理として自ずと疑うこ答える ―― 「もし〔一般に因縁が不明なまま得た肉は疑わざるを

問う ――「道理の次元で見解〔を立てて〕答えてはならぬ。もし道理の次元で論じれば,〔疑わざるを得ないのだから〕僧たちは魚を買うという具體的な場面,そういう〕現實の次元で〔市場の魚や肉を買うべきではない。〔だが〕いま問うているのは,〔市場で肉を買うこと自體は禁じられていないので〕疑うことはありません。⑥を買うこと自體は禁じられていないので〕疑うことはありません。⑥。

問う――「市場の者は誰のために殺すのか」。

問う ——「肉を買う者は,この者が理性を失っているわけではな

な思いを起こさないということがあり得ようか」。 いならば、どうして買う者のために殺したことを知らず、このよう

は〕今死んでいる肉だとの思いを起こします」。 答える――「〔市場で肉を買おうとする〕この時には、〔この肉

というのか、屠殺を死というのか」。 問う ――「〔「今死んでいる」とい ――「〔「今死んでいる」というその「死」とは〕自然死を死

題を扱わないので〕ただこのようでしかあり得ません(自然死か屠 すが、〔『律』の〕教えに焦點を當てて辨解しても、〔『律』は、 と)は,〔一般にそうなるはずだという〕 道理の次元で言ったので で肉を買う時,自然死した肉と思うか,殺された肉と思うか等の問 答える ―― 「この趣旨(今死んでいる肉だとの思いを起こすというこ 市場

とを追究せず次の問いのみを敢えて〕問うことにしよう,意圖を起 手となり,人のために法の城となるにもかかわらず,どうしてただ このようでしかあり得ないと言うのか。專ら〔今はこれ以上そのこ こして人に買わせる時は,どんな意圖を起こすのか」。 問う ―― 「法師は,人のために講義し,人のために明らかな導き®

問う | 答える ――「自然死した肉を買おうという意圖です」。 ― 「自然死した肉であれば,あらゆるところにあろう。

ろに行って買う必要があるのか」。 の中にも自然死した肉はあるはず。ならばどうして屠殺業者のとこ ―「道理の次元では,〔そこらにある肉は自然死したも

のではない〕疑いが明らかにあるからです」。 疑いが明らかにあるならば、 「もし道理の次元で〔そこらの肉に,自然死したもので 〔市場の肉は〕なぜ疑わいも

> せずに食することができるのか」。 僧辯から返答はなかった。

味がするのか、それとも野菜の味がするのか」。 更に詔を下して問う――「この肉(自然死した動物の肉) は 肉

問う――「慈しみの心あるが故に肉を食するのか、慈しみの心な 僧辯はお答え申し上げる――「やはり肉の味がします」。

きが故に肉を食するのか」。

答える――「慈しみの心ではありません」。

はないのか、それならばそもそもどんな肉も食するべきではない〕」。 もの(自然死した肉)を得ようとするのか〔慈しみの心があるからで 問う――「もし慈しみの心でないなら,どうして殺されていない 答える ――「道理の次元では、〔殺されたものであれ自然死した

す。が,〔『律』が自分のために殺されていないものは食べてよいと ものであれ〕どんな場合でも〔肉を〕得ないようにすべきでありま 定めているという〕現實に焦點を當てるが故にそのようにします」。 問う――「『律』の教えは人を煩惱や輪迴の苦しみから離脱させ

問う――「食肉で煩惱や輪迴の苦しみから離脱できるのか」。 答える ――「人を煩惱や輪迴の苦しみから離脱させます」。 るか」。

答える ――「できません」。

寺

を〕說いて, 答える — 問う | - 「もしそのようであれば,なぜ食肉させるのか」。 ― 「まだ高い境地に至っていない修行者のために 彼を導き深めさせようとするからです」。

とも具足戒を受けていない者のために說くのか」。 問うー 「具足戒を受けた者のために〔食肉を〕說くのか,

答えるー 「具足戒を受けた者のために說きます」。

たちのためには説かないのなら、どうして食肉させることが彼を導 いて深めさせることになるのか」。 問う――「具足戒を受けた者のために說き,童子や道理に疎い者

究極の教えではありません」。 ―「まさに初心者のための教えがこのようでありまして.

教えるのか」。 問う――「どうして初心者のための教えを、具足戒を受けた者に

答える ――「僧辯が理解する所(の『律』)では,まさに自ずとこ 〔初心者のための教え〕と等しくなるからです」。

こったのは何時か」。 〔武帝は〕 また問う――「〔ブッダが定めた〕 『律』 の教えが起

〔武帝は〕問う――「もしそうならば,『〔大〕 涅槃經』 に斷肉 [の際] に至るまでです」。

『大雲經』と『縛象經』にも斷肉〔のこと〕がある。それなのに、と〕があり、『アングリマーリーヤ經』にも斷肉〔のこと〕があり、『『のこと〕があり、「『別の事〕があり、『ランカー〔アヴァターラ〕經』にも斷肉〔のこ 『律』から涅槃に至るまでなぜ『律』には全く斷肉の規定がないの

で至ったと言うからには、 〔僧辯は〕答える ――「『律』は最初の説法と繋がるからそうなの 〔武帝は〕 問う | ―「『律』が旣に最初の說法と繋がり 涅 涅槃に至ったからには斷肉せねばなるま 黎 にま

〔僧辯は〕答える これは最初の說法に繋がるし、 ―「もし〔ブッダの教え〕の範圍を規定する 五時 〔の教え〕にも通じま

> 上の通りです」。 ^が,すべて〔の教え〕が皆同じとは言えません。 だは以

す

法師よ,〔あなたの見解は〕以上の通りとは言えない。〔あなたの答きものを導き悟らせている。今日,大眾〔の前に〕判釋を取ると, 時にウパーリが誦えて弟子たち全員に示した『律』――)であるのか: パーリの『律』(――ブッダが般涅槃した後に弟子たちが第一結集をした えが〕以上の通りとしても、最終的歸結とならないし、以上の通り ではないとしても、最終的歸結とはならない。今はただ、これはウ 〔武帝は言う〕——「法師は大律師であるから、 あらゆる命ある生

そうでないのかを尋ねたい」。

れていないのか」。 には、どうして〔ウパーリが誦えた〕『律』の文中に肉食が禁止さ 問う ―― 「佛が 般涅槃した時,ウパーリがその場にいたから〔僧辯は〕答える ―― 「そうです」。

〔僧辯は〕答える —— 「これ (ウパーリの『律』) は、〔涅槃より〕

以前の、近接する時期の教えと〔『律』は〕繋がるからです」。

という教えを已に受けている〔のは確かである〕。『律』がもしそれ と言うなら、その近接する教えにも肉食〔してもよいとは〕明記し もしそうなら〕一體どうしてそれ にする者(外道等)の『律』である〔ということになってしまう。 と異なるならば,〔『律』は〕ウパーリの『律』ではなく,所屬を異 ていない。ひとまず涅槃の前、カーシャパは肉食しないで修行する て講説し僧たちを教化するのか 〔武帝は更に〕問う――「もし〔『律』と〕近接する教えと繋がる (筋が通らない)」。 (所屬を異にする者の『律』)を使っ

僧辯はまたもお答え申し上げなかった。

武帝は〕寶度法師に問う 既に徳が同じ行も同じであると

說いている。どのように此の語を理解するのか」。

ンダの結集です」。 てウパーリによる結集であり、 寶度はお答え申し上げる――「例えば『律』に關する事柄はすべ 『經』に關する事柄はすべてアーナ

範圍〕から出ることがないのか」。 問う――「もしそうなら,『律』に關する事柄はすべて『經』〔の

一律』中の事は『經』に引かれます」。 〔寶度は〕答える――「例えば『經』 中の事は 『律』に關わり.

それが集まって『律』となるのだが、〔『經』は〕どの程度まで きりさせる箇所もあると言うのは, 『經』を說いたのは『律』より後であったことになるのではないか」。 『律』と關わるのか。もし『經』がすべて『律』を關わるならば. 問う――「佛は『經』を說く時、〔行爲規範を〕定める所があり、 りさせる箇所もあると言うのは、愚はまさに〔『經』と『律』のさせる箇所もあると言うのは、愚ない(『律』の教え)をはって寶度は〕答える――「專ら『經』中に戒(=『律』の教え)をはっ

とは〕互いに關わり合うに違いないという意味と思います」。

がいま講じている『律』はウパーリの『律』であり、 この義がないとは言わないのである。但し、法師よ、訊ねたい、汝 マ』の中にも『スートラ』と『ヴィナヤ』〔に繋がる教え〕がある。 ダルマ(論)』〔に繋がる教え〕がある。『ヴィナヤ』の中にも に違いない。『スートラ(經)』の中にも『ヴィナヤ(律)』と『アビ 『スートラ』と『アビダルマ』〔に繋がる教え〕がある。『アビダル 〔『經』・『律』・『論』という〕三藏〔の〕教義のすべてが關わり合う 〔武帝が更に〕問いかける――「もし關わり合いを論ずるならば, その教義は

〔寶度は〕答える-『經』に背くものではありません」。 「いま講じているのはウパーリの 『律』で

> らば, 一律』文では〔鰤肉の文は〕明確でありませんが、ウパーリの意圖 〔寶度は〕「答える,『〔大〕涅槃經』では斷肉の文は明確であり、 問う――「もしウパーリの『律』であり、『經』と違いがないな **斷肉の義がまさに『〔大〕涅槃經』と異なるはずがなかろう」。**

か。法師の解釋は行爲の規律となり寺の沙彌・式叉摩尼に說くだけていないからには,いったどうして『律』に〔斷肉の〕文がないの ならよかろうが、弟子(武帝)の質問には答えていない」。 問う――「『律』が具體的な教えであってウパーリが肉食を許し

としては常に肉〔食〕を許しているわけではありません」。

の通りです」。 〔寶度は〕答える ――「寶度の愚見しますところ,まことに仰せ

【④ b 下座の諸律師との問答】

よ、汝等は〕どう解するか」。 陛下はまた下に座っている諸律師に問いかける――- 〔法師たち

る ――「『律』文に〔肉食を〕禁斷するのではなく,〔佛は最後に〕 [下座の律師を代表して、まず] 龍光寺の道恩がお答え申し上げ

『〔大〕涅槃經』で初めて〔肉食を〕禁止しました」。

は誰の『律』か」。 〔武帝は〕問う――「〔道恩〕法師よ、今〔汝の〕言う〔『律』〕と

〔道恩は〕答える — ―「これはブッダの『律』です」。

『律』がウパーリの 問う――「〔『律』が〕引かれるのはきわめて幅廣いが、 『律』かどうかが分からない」。 ただこの

〔道恩は〕答える――「ウパーリはブッダを尊敬しながら、ブッ

ダの〔制した〕 『律』 を述べました」。

(武帝は) 訳ねる – 「ウパーリは佛の說いた〔『律』 の敎え〕を

すべて結集したのか」。

[の教え] は結集しましたが, 〔道恩は〕答える — 結集しませんでした」。 ―「〔釋尊が說法した五期のうち〕 涅槃の時期〔の教え〕は 先の四 ウパーリ 期

の四期のみを取り、涅槃の時期は取らなかったのか」。 なって毘尼藏を結集した〔のか〕」と語ったのか。どうしてただ先 どうして〕ウパーリに, 至って修多羅藏を結集した〔のか〕」と語ったのか。そして〔一體 カーシャパはアーナンダに「佛はどこで說法したのか。涅槃の時に 〔武帝は更に〕問う――「もしそうならば、いったいどうして 「佛はどこで說法したのか。涅槃の時に

からです」。 〔道恩は〕答える — ―- 「涅槃の時にはまた戒を制していなかった

とは大いなる慈しみを育む種子(潛在力)を斷絶すると說かれ,〔武帝は〕問う――「『〔大〕涅槃經』に,そもそも肉を食するこ このように禁制すること,これは戒か,戒ではないのか」。〔の肉〕を禁止することは自然死した肉まで及ぶと說かれているが. に戒を制定することとすると說かれ,〔そして〕あらゆるすべて 〔カーシャパよ〕私は今日よりあらゆる肉を食してはならぬと弟子

道恩はもう返答〔でき〕 なかった。

や律師の方々はご自分でこの教えに背いている。 またその淨を不淨なものにすることができるということか。 でなくなる。「素」がもし「不素」になるなら,完全に淨なる戒も とについてどのようにお考えか。「素」とはどんな意味か。素食(大法師は皆『大涅槃經』を講義した。時に素食(菜食)をやめるこ 菜食)をやめないことが「素」であるなら、やめてしまえば「素」 〔武帝は〕 また問うー ―「諸律師は直接自ら『律』を講義し, 佛典ではない書物 諸講師 諸

> 0 は、まさにこのことでであろう」。 「低い垣根を自ら越える」「竹簡を盗み法律を書寫する」という

とを 宣武寺の法籠はお答え申し上げる―― 「素」と稱します。穢の門を開らくことを「不素」と稱しま 「穢れの門を消滅させるこ

のか。 問う | 「もしそうならば,多くの僧はどうして穢れの門を開く す。

い所爲でそうなります」。答える――「實に自ら 「實に自ら開いてはなりません。 しかし貪欲の情

し懺悔することができるならば,その人は立派な人です」。 問う |-答える ――「痛切に悔やみ誠心に至ることを懺悔といい — 「懺悔についてはどうお考えか」。 ます。

b

を唱えて導き懺悔させたようなわけであるが,その時に諸法師は懺で弟子が招いた諸法師は千を數える程までに及び,導師は『經』文書が記り――「諸學人は直ぐ立ちどころに懺悔したではないか。それ 悔されたか」(以下暫定譯)。

答える ―― 「どうして懺悔しないことなどあるでしょうか」。

れたら〕やはり肉を食すのか」。 問う――「もし懺悔を終えてから寺を出て,〔在家者から布施さ

もいるので,彼らは食〔肉〕し續けることを兒れますまい」。 答える ―― 「〔拙僧は〕 斷じて食しません。 しかし無明の多い

者

と比べて〔罪の〕輕さ重さの度合いはどうか」。 問うー ― 「寺を出て食〔肉〕し續けるなら, 初めて肉を食した時

答える ―「同じです」。

が, 問うし 後の人はすでに諸佛前で誓ってからまた〔肉を〕食する〔とい 「どうして同じなのか。 初めての人はただ食しただけだ

ます」。

う違いがある。それなのに〕どうして同じなのか」。 答える ― 後の人は、 ― 「初めての人は〔食肉を〕恥じ入ることがありません 恥じ入る氣持ちになる點で初めての人より優れてい

答える――「大閒違いの考えを持つ人は〔悪い行いを〕恥じ入るから〕私はあなたを食する」と言うこと〔と同じ〕である」。あなたを叩きます」と言い,「私はあなたに懺悔した〔ので,これ いる以上、懺悔しない人との違いが分かります」。 氣持ちになりません。〔しかし懺悔する人は〕慚愧を知り盡くして 人を激しく叩くと言うことは,我はあなたに懺悔して〔から〕私は 問う | ー 「もしそうなら, 先に〔食肉を〕恥じ入ってから眼前の

罪を犯すことの理由はますます大きい」。 と〕初心に誓った心に背き破ることになる。これについて論ずれば きぬ。もし〔同じ罪を〕重ねるなら、〔二度と同じ過ちはするまい 更にまた,恥じ入る氣持ちになったら二度と同じ罪を重ねるなどで 恥じ入るということだ。どうして知りつつも故意に犯すことの罪が. 過ちを犯した後で初めて恥じ入る氣持ちが起こるなら,それこそが それでは恥じ入るとは言えない。もしも最初は何も分からずにいて、 食すること、これは知りつつも故意に〔過ちを〕犯すことであり、 〔最初は〕何も分からずにいた〔罪〕よりも大きくないであろうか。 問う――「先に「恥じ入る」と言いながらそれでもなお〔肉を〕

清い善法そのものです」。 (88) じる心があるので,罪は消滅しうる」と言っています。恥じる心は (88) 答える — ―「『經』に確かな文があります。 著婆が「あなたは**恥**

ではないようだ。これはもし罪を犯した後になったばかりの時に恥(- 「法師は 『經』の言葉はご存じでも、その眞意をご存じ

> すことを明らかにしたとは言っておらぬ」。 最初に恥じ入る心があったのに故意に罪を起こすことを白法と見な じ入る心を知ることが善法であることを明らかにしたものであり.

とも言います。そうであるなら,〔恥じ入る氣持ちを持った後で罪 を起こすことは〕最高の禮服の作法ではありません」。 答える――「『經』は「恥じ入る氣持ちこそ最高の禮服である」

恥じ入ると言ってみたところで、最後まで何も益はない。もし罪を 起こした後に恥じ入る心を起こせれば、 氣持ちは〕最上の禮服なのである」。 問う――「その作法も同様である。もしいつも罪を起こしながら その時はじめて〔恥じ入る

法寵はもう返答〔でき〕なかった。

下りた。 法寵の〔無言の〕返答が終わると,三人の律師は皆 (高座から)

經』の讀誦 【④ c 『ランカー〔アヴァターラ〕經』と『アングリマーリーヤ

ヴァターラ〕經』と『央掘魔羅經』が明らかにする肉食禁止の 『經』文を讀誦させた。いま掲載すると左の通りである。 更に始興寺の景猷に敕を下して高座に昇らせ、『ランカー

(4) c 0

日に再度唱えることはしない〉。 の法會にてすでにこの文を唱え、 『大般涅槃經』四相品上第七〈この品については,今月二十三日 法雲法師が解説した。今,二十九

肉者に肉を施してはならないと考えます。なぜでしょうか。私は肉 その時カーシャパ菩薩は佛に申し上げた。「世に尊き御方よ,食

もし檀越から ならぬ。 て私の考えをよく理解した。 カーシャパを讃えた。「よろしい,よろしい。そなたは今はじめ ない者には大きな功徳があることを見ているからです」。 善男子よ、今日から聲聞弟子が肉を食することを禁ずる。 [肉の] 布施を受けた時は, 佛法を護持する菩薩はそうであらねば わが子の肉であると觀想 佛

種の淨肉を食することを許されたのですか」。「カーシャパよ,このらだ」。カーシャパは更に申し上げた。「如來はなぜ以前に比丘が三 でなくてはならない。 上げた。「どうして如來は魚と肉を美食と稱贊されたのですか」。を禁ずるという意味と知るべし」。カーシャパ菩薩はまた佛に申し なかったのですか」。佛はカーシャパに言った。「これらもまた個別 る因緣で十種の不淨, カーシャパ菩薩はまた佛に申し上げた。「世に尊き御方よ, 肉者は、 して如來は肉を食することを許されないのですか」。 衣服を所有すべきだとは言ったが,所有すべき衣は必ず濁っ(石蜜 (黑冰砂糖)、乳、酪、蘇、油を美食と言ったのである。 事情に應じて漸次制定したものである。すなわちこれは現在肉食 |種の淨肉はその時々の事情に隨って漸次に制定したものである」。|の淨肉を食することを許されたのですか」。「カーシャパよ,この カーシャパ菩薩は再び佛に申し上げた。「世に尊き御方よ, 大いなる慈しみを育む種子(潛在力)を斷つことになるか 更には九種の清淨を〔制定して〕また許され 況んやこの魚や肉の味に强く執着するなど言 所有すべき衣は必ず濁った色 美食と言ったのである。種々 「善男子よ, いかな どう 食

でしたら, したら,かの五種の味,すなわち,乳、酪、酪漿、生酥、熟酥やカーシャパはまた申し上げた。「如來がもし肉食を禁じられたの

ょ

ゃ

「善男子よ,かの裸形ジャイナ教徒たちの見解と同様であ器など、これらのものも受けるべきではないでしょう」。ゴマ油,ならひに種々々オ界・データにないでしょう」。 絹の衣服, ほ ら 夏³⁸

の考えがある。これがない。如來 恐れ怖がるようなものである。 まっても坐っても横になっても、 禁止するのである。カーシャパよ、 別の想いがあるので、自然死したものの肉も含めてすべての肉食を から肉の臭氣をかいで、皆恐れ怖がる。 の肉を食することを禁止する。カーシャパよ、 したのである。 いたとして、皆はその人に會うと、 如來が制定したすべての禁戒には、いずれもそれぞれ別 別の想いがあるので、十種の肉を禁止したのである。 別の考えがあるので、 すべての命ある生きものがその者 私は今日より弟子たちがすべて 獅子のにおいがするので、また 三種の淨肉を食することを許 例えば人が獅子に近づいて 食肉者は歩いても止 って

ず, する姿を現すとはいっても、 あると皆が言う。このために、菩薩は肉を食することを習慣 ある生き物は、 れる。水中に住むもの、 する肉の臭氣ををかいで、皆恐れ怖がり、 れと同じようなものである。あらゆる命ある生きものはその者が有 んや近づこうとはしないのは猶更であるように, に見えただけですら,なおその者に目を向けようとはしないし,況 人がその人を見ると,臭いをかいで離れ去ってしまい,たとい遠く ・ 善男子よ,ある人が大蒜を食べ,嫌惡すべき臭いをはなち, [命ある生きものを殺す] このように菩薩は清淨な食物すらなお食べないのであり、 命ある生きものを救うために肉を食する姿を現すのである。食 皆彼から離れて逃げ去り、 陸上に住むもの、 肉食については言うまでもない」。 實際は食べていないのである。 この人はわれらの怨敵で 空を飛ぶもの等およそ命 死をおそれる想いが生ま およそ食肉者もこ にとはせ

戒律 には貪欲と嫉妬を抱く様は,まるで無言の行を行う婆羅門等のようみ,糞便の汚所で眠る。外見は善き賢者のように見えるが,心の內いつも「我は阿羅漢果を得たり」と言い觸らすが,多くの病に苦しい いつも「戈よ可量をきたようなは、まるで鼠を狙う猫のようであり、深く見囘しながら徐に歩く様は、まるで鼠を狙う猫のようであり、注意 「以下に述べるような悪い」比丘たちが現れるであろう。〔彼らは〕正しい教えの時代(正法)が亡んだ後,似た教えの時代(像法)に歳が〔經つと〕,四段階の悟った聖人たちは皆,涅槃するであろう。 それぞれ自ら「沙門の私は釋迦の弟子である」と言う。 い,自ら「それがブッダの教説である」と論じ,互いに論爭しあい そうして「如來は皆, れぞれが好き勝手に振る舞い,『經』や『律』と反對のことを述べ,る〕。そしてまた,〔如來の〕深遠なる祕密の教說をぶちこわし,そ 方では〕解脱の成果を說き示し,穢れた物事から離れた〔ふりをす であり, ようである。鬚や髮や爪は長く伸びたままである。袈裟を着ている(®) しく,正しい教えを誹謗する。このような人は,破壞如來が定めた [まるで] 牛や羊を放し飼いする牧畜人や, 着ている服は、粗末で醜く、 」はほんの僅かに過ぎず, 1男子(良家の息子)よ,私が涅槃した後, [に則った] 正しい行いと立ち居振る舞いをぶちこわし,〔一 (出家者の生活規則)』を守っているようでありながら、 全く沙門とかけ離れていながら、沙門の姿をし、 我々が肉を食することを許可している」と言 容姿はやつれ、 飲食を貪り肉體を養育する。 薪や草を背負う木樵の 威嚴も品德もない様は、 内體を養育する。彼らの 量り知れない數 邪見は激 讀誦する 0 百

> だり、奴婢を從えたり、金や銀、琉璃(ラピスラズリ仲良くなり、手相や人相を占ったり占星術をしたり、 碁を打ったり, (38) 貝のシャコ),碼瑙,頗梨(スパティカ=水晶),だり,奴婢を從えたり,金や銀,琉璃(ラピス 蓋や革製の屣(サンダル) (¾) 言うべし。 ことができる比丘のことを、「この人は本當の我が弟子である」と 壁玉、珂貝、様々な果實〔を持ち〕, 諸の工巧を學んだりする。これらの惡事から離れる 金や銀,琉璃(ラピスラズリ), [を身に付け], 諸の伎藝を修得する。 國王や大臣, 真珠、 資産家と 畫師と (二枚

優婆夷が乞食するなら、肉の混じった食物を得るであろう。いった常き御方よ、他者に依存して生活する比丘や比丘尼、優婆塞や尊き御方よ、他者に依存して生活する比丘や比丘尼、優婆塞やその時、カーシャパ〔菩薩〕は更にブッダに申し上げた、「世に か。 いどのようにして食を受ければ、清淨な作法に適應するでしょう

問に應じて答える教えと名付ける」。 ので, を詳しく説明すればきりがない。我が 涅槃の時刻が直に唱しているのは食肉をすべて止めるという決まりである。 ことが許され、罪とはならない。もし食物の中に肉がたくさん入っ であるものは何ら食するべきでない。食らえば罪となる。 ていたら、〔その施しを〕受け取るべきではない。 ならば、單に を〕肉と分け、そうしてから食するべし。もし食器が肉で汚された ブッダはカーシャパに言った、「水で洗滌して〔攝取すべきもの それ故, 〔肉の〕味がしないようにすれば, 〔施食を〕 受ける 〔以上は〕 あらましを述べたに過ぎない。これを質がない。我が、涅槃の時刻が直に到來する 一切の實際に肉 私は今提

を作り、油の瓶を持ち、〔『律』で禁じられている〕寶玉で飾ったらは〕穀物を貯め込み、肉や魚〔の布施〕を受け取り、手て自ら善男子よ、その時更に〔別の〕沙門たちが〔現れるであろう。

〔の布施〕を受け取り、手て自ら食

彼

寶玉で飾った天

によって真逆に誤解します

ゕ゙゙

彼らさえブッダの〕教えを妨げる

う非佛教徒たちは、

邪見と斷見・常見と

4 c 1

「かの諸菩薩のうちでブッダの悟りを追求する者が,酒や肉や葱その時大、慧菩薩は偈頌の形で〔ブッダに〕問い訊ねた,『ランカーへの入〔山〕という寶の經典』卷四 ――,

虎や狼が美未っこをこっ、」「 「肉」には讚えるべき譽れはありません。 この上なく尊き御方よ,願わくは哀愍をかけて私に説いてくださこの上なく尊き御方よ,願わくは哀愍をかけて私に説いてくださを攝取することはどうでしょうか〔認められますか〕。

ある善を生みます。 よいでしょうか。食すれば諸の過誤を生じます,食べなければ福徳 虎や狼が美味いと食する〔動物の肉〕を,どのように食するのが

更に再びブッダに〔散文で〕申し上げた,大慧菩薩は〔このように〕偈頌(韻文の詩)で問い訊ねてから,大慧菩薩は〔このように〕偈頌(韻文の詩)で問い訊ねてから,願はくは,食する罪過と食しない福業とを私に説いてください」。

(製) に関うでは、現在とる功徳と罪過をお説きください。私や〔他の〕菩薩たちは、現在とる功徳と罪過をお説きください。私や〔他の〕菩薩たちは、現在とれぞれが〔自ら〕住まう地で清らかでありかつ明瞭であれば、直にれぞれが〔自ら〕住まう地で清らかでありかつ明瞭であれば、直にれぞれが〔自ら〕住まう地で清らかでありかつ明瞭であれば、直にれぞれが〔自ら〕住まう地で清らかでありかつ明瞭であれば、直にての上なきボーディ(悟り)を極め盡くすことができるでしょう。「そして命ある生きものは?」聲聞や縁覺たちの自らの地に留まった。「世に貴き御方よ、願はくは、私たちに〔酒や肉や蔥を〕攝取すてから、同様にまた、この上なきボーディを完成することに近づくてから、同様にまた、この上なきボーディを完成することに近づくでから、同様にまた、この上なきボーディを完成することに近づくでいる。

するなどあり得ません」。う世間の救護者の正しい教えが成就してから,〔その御方が〕食肉う世間の救護者の正しい教えが成就してから,〔その御方が〕食肉ことすらしても,食肉など決して許さないのです。況んや如來とい

て聽け。しかと考えよ,汝のために說こう」。 佛は 大 慧 に告げた,「よろしい,よろしい,心して聽け,:

す」。大慧は佛に申し上げた,「かしこまりました,教えをお受けしま、大慧は佛に申し上げた,「かしこまりました,教えをお受けしま

他は大慧に告げた,「〔我々には〕數限りない因と緣があり〔それればならぬから,それ故,肉を食してはならぬ。 の關係を保っている。〔命ある生きものは皆〕親族であることに思用で〔六道に〕轉生を繰り返し,つねに六種の親族となって,相互用で〔六道に〕轉生を繰り返し,つねに六種の親族となって,相互用で〔六道に〕轉生を繰り返し。つねに大略を述べねばならぬ。 (聖) を介し肉體をもつ生きものと結ばれており〕、肉を食してはならぬ。 (型) を介し肉體をもつ生きものと結ばれており」、肉を食してはならぬ。 の関係を保っている。〔命ある生きものは皆〕親族であることに思い。すなわち,あらゆる生きものは世界の始まり以來,因と緣の作。 日本はならぬから,それ故,肉を食してはならぬ。

の關係を保っている。〔命ある生きものは皆〕親族であることに思の關係を保っている。〔命ある生きものは皆〕、親族であることに思いな気が生じはびこるから、それ故、肉を食してはならぬ。命ある生きものは肉の氣配を嗅ぎ取ると皆、恐怖心を抱く。チャンダーラ族善をであるがら、それ故、肉を食してはならぬ。命ある生まのは肉の氣配を嗅ぎ取ると皆、恐怖心を抱く。チャンダーラ族養を行う賤民階級)やドンバ(domba。ある種の貧民が)の如き者に「屠殺を行う賤民階級)やドンバ(domba。ある種の貧民が)の如き者に「屠殺を行う賤民階級」やドンバ(domba。ある種の貧民が)の如き者に「屠殺を行う賤民階級」やドンバ(domba。ある種の貧民が)の如き者に「となから、それ故、肉を食してはならぬ。不淨食してはならぬ。各種の祈禱「やまじない」の效果を無にするから、臭く穢れ清淨ではなく、よい評判は得られないから、それ故、肉を食してはならぬ。不浄食してはならぬ。各種の祈禱「やまじない」の效果を無にするから、それ故、肉を食してはならぬ。れ故、肉を食してはならぬ。

行者に起こさせなくするから,それ故,肉を食してはならぬ。 で見れば [殺して食することに向かわせる] 意識を喚起させ,深くを見れば [殺して食する者について,節度を失わせてしまうから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なみることが多いから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なみることが多いから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なみることが多いから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なみることが多いから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なみることが多いから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なった林の中で,虎や狼が匂いを嗅ぎつけてしまうから,それ故,肉を食してはならぬ。悪夢なれば [殺して食するから,それ故,肉を食してはならぬ。

い。それ故,肉を食してはならぬ。肉を食するのを認めるなどあり得なそれ故,肉を食してはならぬ。肉を食することに思いを致すから,を食することに思いを致し,藥を服用することに思いを致すから,わたくし釋迦はいつも説いている。飲食するたび,わが一子の肉

大慧よ、過去に王がいた。名を師子蘇陀娑といった。 を食する者にはこのような罪過がある。故に肉を食してはならぬ。 更にまた、大慧よ、殺生をなす者は總じて財産や利益のために命ある生きものを殺して賣る。諸の愚かな、食肉する命ある生きものは、金錢をかけて網を作り、諸の肉をとらえる。殺生する者はあるいは財物、あるいは釣り針や網を用いて、空を飛ぶ〔もしくは〕水中や陸上の生き物をとらえ、種々のやり方で殺して賣り利益を求める。大慧よ、また殺さず、求めず、思わずして魚肉があるなどない。る。大慧よ、また殺さず、求めず、思わずして魚肉があるなどない。五種〔の肉〕を斷つように說き、またある時は「ての肉」を斷つように說き、またある時は「ていた。名を師子蘇陀娑といった。との道理あるが故に、肉を食してはならぬ。大慧よ、また殺さず、求めず、思わずして魚肉があるなどない。 五種〔の肉〕を斷つように說き、またある時は「食してはならぬ」 土種〔の肉〕を亡めた。今この經典においては、いかなる種類、い

> 子の肉を食わせること〔になる肉食〕など許さないのである。 がなる憐れみと前世における行いをもってすれば、あらゆる命生きもなる憐れみと前世における行いをもってすれば、あらゆる命生きもなる憐れみと前世における行いをもってすれば、あらゆる命生きもなる憐れみと前世における行いをもってすれば、あらゆる命生きもかなる狀況についても〔肉食を認めず〕、一切の可否にまつわる方かなる狀況についても〔肉食を認めず〕、一切の可否にまつわる方

よって說かれた。 その時,世に尊き御方は再びこの意味を述べようと思い,偈に

抱く。
「そのうえ肉の〕臭いを嗅ぐとあらゆる命ある生き物は恐怖をろ。〔そのうえ肉の〕臭いを嗅ぐとあらゆる命ある生き物は恐怖をは汚物と混ざりあっている。〔そもそも肉は〕汚物を生成するとこ過去にはあらゆる命ある生き物は親族であった。卑しく穢れた肉

またのである。このでは、これでは、これでは、これでは、これでは、更にいかなる時も〔祭りに使う〕麻油と〔病人が排泄するためにの酒を,修行者たる者は,いかなる時でも遠ざけなさい。すべての肉と葱と,諸の韭や大蒜等と,〔人を〕墮落させる種々

「質を)欠み「対を」またらしていっま情が生だら。ま情は酱り〔穴の〕中でこの上なく恐怖を抱くのだから。 〔病人がその穴から排泄することで沸く〕様々の小さな蟲がいて,設けられた〕いくつもの穴の開いた床を遠ざけなさい。そこには

「肉を〕食すると貪欲が生ずる。貪欲な心は麻痺する。〔心が〕麻らない。 (圏) 思念を生み,思念は貪欲を生む。それ故,肉を食してはな「惡い〕思念を生み,思念は貪欲を生む。それ故,肉を食してはな「酒を」飲み〔肉を〕食することから怠惰が生ずる。怠惰は諸の

利益のために命ある生き物を殺し、金銭で肉を一網打盡にする。脱することがない。「そうした人は」生死を繰り返し、解痺すると愛欲がわき起こる。〔そうした人は〕生死を繰り返し、解〔肉を〕食すると貪欲が生ずる。貪欲な心は麻痺する。〔心が〕麻

した者が墮ちる〕叫喚地獄に墮ちる。 兩者はいずれも惡業 〔であるから, 違反者は〕 死後 〔殺生を犯

れば、三種類の淨肉は〔そもそも〕存在しない。 もし〔殺すことを〕教唆すること・想うこと・求めることがなけ

たちは皆、〔肉食を〕非難する。 めることを〕原因として存在する。それ故,肉を食してはならない。 それら〔すべての肉製品〕は〔我々が、唆すこと・想うこと・求 修行者たちは、それ故に、あらゆる肉を遠ざける。十方の佛世尊

る。臭く穢れた肉は忌避すべし。〔もし肉食すれば〕必ず愚か者に 次々と食い合う〔命ある生きものは〕,死して虎狼の類いに落ち

羅刹や猫や狸の類いはすべてこの〔肉食の罪を犯した者が囚われ生する。あるいはダーキニーや,様々の肉食性のものに轉生する。〔肉食した者は〕多くの場合,旃陀羅や獵師やドンバの種族に轉 る輪迴の〕中に生まれる。

じた。〔肉食のことは〕諸の佛・菩薩・聲聞が非難する。 『ランカー〔アヴァターラ〕經』〔において〕,私は肉食をすべて禁 『縛象』と『大雲』,〔そして〕『央掘利魔羅』, 及びここ〔に說く〕

害となろう。に轉生する。 のこと ―― 三種の不淨肉のことを〕說いた。〔だが〕これからはど 用意された肉だと〕見たり聞いたり〔用意させたと〕 轉生する先は必ず愚者である。以前〔私は方便として自分のために肉食してしまったのに恥じ入る氣持ちが無ければ,輪迴に囚われ んな肉でも例外なく一切の肉食を斷ちなさい。 轉生する。このような貪欲という過ちは、 妄想ばかり浮かんで何も悟ることがない。それ故に食肉する環境 聖人の解脱を妨げる障 疑われる〔肉

酒・肉・葱・韭・大蒜はすべて聖人道の妨げである。

を行う。 るが如くに思い,また子供の肉を食する如くに〔思う〕。(貪欲を離ことを許可した」と無癡蒙昧を語るだろう。食する時は藥を服用す れて〕充分な量と知り厭離の念を生じ、修行〔者〕は乞食することれて〕充分な量と知り厭離の念を生じ、修行〔者〕は乞食すること 未來の命ある生きものたちは、 〔食しても〕罪にならない。 ブッダは我々が〔淨肉を〕食する 肉について、「これは淨肉であ

きるがよい。 から〕厭離せよと說く。虎や狼らの惡獸たちと恒に同じところで生 慈しみの心に安らかに住まう者〔に對して〕 は 我は常に

ブラフマンの種族や、諸の佛教修行の境遇、智慧ある者、富裕の聖者の特徴的御姿と違う。それ故、食〔肉〕すべきではない。食肉には何らの慈しみも智慧もなく、永えに正しき解脱に背き、食肉には何らの慈しみも智慧もなく、永えに正しき解脱に背き、 それ故、 冢に生まれることができるのは, 血のしたたる肉を食すれば、 佛道修行者は、慈しみの心から肉を食さないのである。 命ある生きものは皆恐れおののく。 肉を食さないからである。

(4) c 2.

『アングリマーリーヤ經』第一卷一

べ物を捨て,食肉しない教えを受け守った。 長老のカーシャパは様々な美味の食べ物を捨て, 肉の味がする食

(4) c 2.

來藏の教えの故に, (All) 『アングリマーリーヤ經』第四卷 マンジュシュリー ブッダたちは肉を食さないのでしょうか」。 はブッダに申し上げた、「世に尊き御方よ、

ブッダは言った,「そうである。

一切の命ある生きものは、

始

8

如

にブッダたちは皆、肉を食さない」。 にガッダたちは皆、肉を食さない」。 にガッダたちは皆、肉を食さない。更にまた、マンジュシュリーよ、一切の命ある生きものの領域と我が領域は同じ一つの領域である。それ故に、ブッダたちは皆、肉を食さない。更にまた、マンジュシュリーよ、一切の命ある生きものの領域と我が領域は同じ一つの領域である。宿る肉體は皆同じ一つの肉地である。宿る肉體は皆同じ一つの肉地である。宿る肉體は皆同じ一つの肉地である。宿る肉體は皆同じ一つの肉にずある。宿る肉體は皆同じ一つの肉に変ある。それ故に、ブッダたちは皆、肉を食さない」。

か」。 貝・蠟蜜・皮革・繒綿は自らの領域內の肉ではないのではないです貝・蠟蜜・皮革・繒綿は自らの領域內の肉ではないのではないです。マンジュシュリーはブッダに申し上げた,「世に尊き御方よ,珂

が「動物の死體を扱う」チャンダーラ族から「牛」革を受け取り、で、世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者を革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを革があります。職人は革の履き物を作れます。ある人がそれを下である〕をである。対してはならない。もし次から次へと傳わって來て、「大本である」殺しを本人の手を離れているならば、接近してもよい」。 「世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしも自然死した中がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしも自然死した牛がいて、その牛の所有者に、世に尊き御方よ、もしもというない。

それを革職人のところに持ってゆき、その職人が革の履き物を作り、それを華職人のところに持ってゆき、それが次々と人の手を介してで、戒律を守っている人に與えたとしたら、さて、それを受け取るで、戒律を守っている人に與えたとしたら、さて、それを受け取るべきか。もし受け取らないとしたら、それは比丘のあるべき姿であべきか。もし受け取らないとしたら、それは比丘のあるべき姿である。もし受け取るなら〔牛に對する〕慈悲がないことにはなるが、るのもし受け取るなら〔中に對する〕慈悲がないことにはなるが、しかし戒律を犯したことにはならない〕。

【④d 二十九日『經』文讀誦後の問答】

『「大」涅槃經』の「肉を斷じる」ということを解說したのだ。 「下々の普通の僧たちは『經』を隅々まで讀むことをせずに,互いに〔律中に〕肉食を禁じる言葉がないなどと言う。今日,此の經典に〔律中に〕肉食を禁じる言葉がないなどと言う。今日,此の經典に〔律中に〕肉食を禁じる言葉がないなどと言う。今日,此の經典經過の資語が終了し,〔武帝は〕詔を下し,更に諸僧に告げた,經典の讀誦が終了し,〔武帝は〕詔を下し,更に諸僧に告げた,

同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです。 同様に、食肉も解禁すべきです。 同様に、食肉も解禁すべきです。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。 同様に、食肉も解禁すべきです」。

法雲法師に筋の通った講釋がもう既にあったにもかかわらず,

〔このように〕二法師の非難の氣持ちは終わらなかった。

達する。それもまた革の履物と肉を斷じることとを同列に論ずるこ每日食するなら〔殺される〕數はガンジス川の砂の數ほどの多さに ことはできぬ。およそ革製の履き物を一足着用すれば、長時閒經っ となどできぬ ても壊れたりしない。〔ところが〕もし命ある生きものを食したな べきではない。しかしこの〔革製の履き物〕と食肉とを同類に扱う ならば、大いなる慈しみをもつ者は確かに〔革製の履き物を〕 議論もあり得る。〔植物製の履き物の材料となる〕麻を産する場所 ない〔から革の履き物を認める〕のであれば,皮革使用を禁じない うことである〕。それ故,裸形ジャイナ教徒たちとは同じでなく,物〕を履く者は,皆,行いが低級である者〔だけ〕である」〔とい 物を履かず,〔そして〕もし行いが中級である者もまたこの てこう言った ――「〔法雲法師の釋義を敷衍すると〕 「もしある者がそこで〔武帝〕は,自ら〔法雲法師の〕筋の通った解釋に依據し 言葉に〔その者の行いの程度に應じた〕含意がある。もし麻を産し 〔行いが上級である〕聖人であるからこそ自らこの〔革製の履き〕 「履き物」を履かないならば, 一度の食事だけで量り知れない敷の生命體を殺害する。 ^(図) [結局のところ] この 〔革製の履き 〔革製 履く

を恐れたのだ。此の革製の履き物を受け取らない文について述べた 理由は弱小比丘たちが疑念を抱くことで更に大きな弊害を招くの その時、比丘たちはこれ以上の應酬を避けて答えなかったが、 直接關係しない(以下暫定譯)。 一日の疑念を解き晴らそうとしたからであり、 以前の法制 そ

「昔から命ある生きものとすでに父母親屬の關係となってきた」と言 肉を食することは大いなる罪障である。 『經』にも.

> く法師、諸の比丘尼並びに命ある生きものを導く方々よ、各々所屬部分を食するであろうか。諸の比丘たち並びに命ある生きものを導 ることやご自身の肉を割いてり、もはや〔ブッダが王子だる 知らせるように」。 する寺に戻って諸の若い比丘・比丘尼に教導し、このような意味を ような捨身〕を考えず、どうしてかえって更に他の〔生命の〕身の もはや〔ブッダが王子だった時に〕飢える虎のために身を投げ 眾僧はどうしてこれが残酷に命ある生きものを食することであ 〔鳩の代わりに〕鷹に與える 〔という

の行事が終了すると、全員退出した。 行 ご道し、〔佛像を〕豊耳 ヾ、 〔部〕 〔武帝が〕自ら直々にこう説き終えると、 〔佛像を〕禮拜し〔自分の罪を〕懺悔した。こうして法會 比丘・比丘尼たちは

二十九日晚, 周捨への敕

【⑤a 周捨への敕 ―― 法寵説について】 <u>(5)</u>

である」。 たくしは汝を念い、わたくしは汝を食する」ということだ。法寵 肉〕を食するということは,これ『經』に說く羅 刹 の婦女が「わ [の言った] この心は、卽ち『經』に說く羅刹 捨に直々に告げた ―― 「法寵の言った慚愧して命ある生きもの!ai 、その夕方の頃、 〔武帝は〕 更に, 員外散騎常侍・太子左衞率の周 〔婦女のような心〕

⑤ b 周捨への敕 - 僧辯説について】

るなら、 死んだ姿など見かけ〕ない。どうして一羽の自然に死亡した鳥類さ 死した〔命ある生きものの〕肉」のことだが、 また, 〔武帝は周〕捨に直々に告げた― の類はあちこち〔の何處を見囘しても 「僧辯の言った もしその說通りであ

に諸の比丘や比丘尼のため苦に離れる因緣を作る」。 しはもともと自分のために 生きものを〕殺すことの罪は同一である」と説かれている。わたくがあろうか。『經』に、「肉を購入することと、自ら〔の手で命ある するのでないなら、どうして〔われわれの食欲を滿足させる〕死肉 魚を求めてはきっと四つ手網を持つ魚師のところに行く。 らに澤山見えるが、 えも見かけないのであろうか。麞 そしてそのような死肉を求めては屠殺した肉屋に行き, かつて自然に死亡したものなど一匹も見かけな 〔斷酒肉を遂行〕するのではなく, ・鹿・雉・兔は野原のあちらこち もし殺牛 死んだ まさ

(5) C 周捨への敕 八萬四千蟲說

蟲がいる」と說いている。若し一つの命ある生きものの生命を斷つる生きものは八萬の蟲を持っている。『經』にも「八十億萬の數の生してはいけない理由は〔次の通りである〕。だいたい一つの命あ 佛弟子のすべき行いではない」。 悲の心を失い, のは肉眼で見られない程だが、大きなものは見ることができる。 な〕目的で、無量の命ある生きものを殺すのだ。そのうち小さなも もはや生き返らない。舌端の細かい味を味わう〔だけの身勝手な れを煮たり燒いたりすれば、これに付着した蟲〔の命〕を絕滅させ、 ていた蟲がいなくなっても、 る生きもの〔の肉〕さえも食してはならぬ理由は、もともと付着し と、〔その體內の〕八萬蟲の命も斷つことになる。自然死した命あ また、〔武帝は周〕 惡毒を增長させること、 捨に直々に告げた――「命ある生きものが殺 後から付着して來る蟲の數も多い。そ それは眞實の出家者である 慈

> ⑤ d 周捨への 食肉する出家者の罪過は在家者より重

するのがすぐれる理由は、まさに〔經典が〕說く通りに修行するた 則ち罪は〔性罪と戒律違反と詭妄という〕三重となる。教義を理解 以上あざむきいつわることになる。學問の人が肉食をたずねれば、 ことならば、既に性罪を犯し、ならびに戒律をやぶること、これをを免れない。けれどもこれはただ一つの罪にすぎない。眾僧の肉食 速い。善惡の報應も必ずなくならない。そもそも出家者はこれを眞 の恨みを抱いている敵が増える。地獄に墜墮するのは投げた矛より の〕生き物を侵害しあわれな心がないまま、惡知識となり、 めである。〔それなのに〕逆に繰り返してまた魚と肉を食い, いのではなく、知っていてわざと犯し、 には毒害〔の意〕を懷いている。これ 達し、人のために〔經典を〕講說し、 由はこのようである。〔學問の僧は〕 この悪業は普通の僧より更に増える。 以て二種の罪があるという。若し學問をする眾僧が肉を食すれば、 に深く思慮すべし」。 在家より罪深い。 また、〔武帝は周〕 在家は肉を食べたら、乃ち地獄 捨に直々に告げた — 既に親しく『經』の教えに通 口では慈悲を稱えながら、 〔肉を食べてはいけない〕理 〔出家者の肉禁止を〕知らな 言葉と行動は既に相違する ―「僧が肉を食する罪は 〔に墮ちること〕 (ほか

(5) e 周捨への敕 小乘の食肉と大乘の食肉

旦受けた後は、 瞬一瞬以前には得られなかった律儀を手に入れる。 また, |眠等は惡心を起すものではないからである。 そうであるので もとより身業や口業の七支のためにつくられたものである。一 〔武帝は周〕 やっと昏睡や悶絕等の律儀がいつも生じるに至って 捨に直々に告げた――「聲聞が受ける律儀。 その理由は、

は不善律儀人が八戒齋を持つことになり,これは悪律儀がやはりたは不善律儀人が八戒齋を持つことになり,これは悪律儀がやはりたばを受け,不殺戒において缺けるところがないというならば,これがを受け,不殺戒において缺けるところがないというならば,これ いう物質〕としてすぐに斷絕して續かず,業をはたらかせると,身戒と口戒を失う。 だちにしだいに續く。 戒においてすぐに缺陷あるものに變わる。もし善律儀において殺生 のためである。肉を食すれば忽ち殺生の分を持つことになり、 屠肉をさばく時,どんな人のために殺生するか。ただ肉を食する人 またほかの戒をも損い汚染させる。その理由は、 を失わなくとも、 至るのである。もし殺生しようとする心を起すならば、 戒も汚すことになる。 を損なうこともなく失くこともなく, (身體的行爲に關する法規)と口戒 戒に缺損が生じ、 手ではさむ, ただ不殺戒を損うのみならず 齒で嚙むなどして身業や口 その時に律儀は無作 まもなく不殺戒を失い (言語的行為に關する法規 やっといつも生じるに チャンダーラ族が 聲聞法にお E

る場合は改めて論ずるまでもなく、 られる。善律儀の人についても事情は同じである。 ても〔悪律儀は〕 こせば、その人の惡律儀は斷滅するのである。もし一瞬の〔善心で ることはなくなることが知られる。悪律儀の人が八戒齋を守ること らば,そのことから,善律儀の人が諸の殺分(殺しの要素)を受け [惡律儀を] については改めて論ずるまでもなく, ればその人の不殺戒は卽刻消えてしまい, ・儀は卽刻斷滅する。 もし惡律儀の人が八戒齋を守り、 斷滅しないなら、 斷滅するならば、 斷滅するはずがない。もし多瞬間の長い 菩薩である人は心 多瞬間の長い時間〔に善心を起こ〕し 一瞬でも斷滅することはできると知 僅少の殺分でも、その人の不殺 悪律儀がもはや續かなくなるな たとい僅か一瞬でも善心を起 〔のあり方に基づく〕 別解脱戒によって解脱す 諸の殺分を受け ・時間で

> してない。 し聲聞乘の戒が缺けていれば,地獄等の苦しみから兒れることは決守るので,その人が命ある生きものを食することはあり得ない。も

・二語注

1

- 「諸寺三官」「斷酒肉文」の後述箇所で「諸 若不收失,必起惡心。寺之三官,何以堪命。尙不能收失,爲申徒嘉所譏。況今末法比丘, 明深恕,此理弗就。凡夫求聖人之道, とは言い難い。更に次の資料を見よ。「天保寺釋道盛啓 那」のことであると言われるが,充分な根據がある推測 なる三種を指すかは未詳。顔尚文 (一九九九:二四七頁) を統括する職ではない。しかし「三官」が具體的にいか 之三官」があったことが分かる。 上)。ここから南齊武帝期(在位四八二~四九三年)に 木。敢以陳聞。伏紙流汗。謹啓」(大正五二・八五下~八六 願敕在所, 齊武皇帝論檢試僧事」(『弘明集』卷一二)「伏願陛下, 同義であり,寺に所屬する僧の職名。一地方や都の全域 官」と言い換えられている。「諸寺三官」と「寺官」は 「三官」は「三綱」と同義であり「上座」 「寺主」 「維 依罪治戮。幸可不亂聖聽。盛雖老病, 昔鄭子產稱曰大賢 寺三官」は 寧能收失。 國有典刑:
- 尚不能收失,爲申徒嘉所譏。況今末法比丘,寧能收失。深恕,此理弗就。凡夫求聖人之道,昔鄭子產稱曰,大賢武皇帝論檢試僧事」(『弘明集』卷一二)「伏願陛下,聖明「諸大德僧尼、諸義學僧尼、諸寺三官」 天保寺釋道盛「啓齊

還俗, 九人,義學六十八人,導師五人。右牒,合尼僧, 十二日五更,一唱到鳳莊門」(大正五二・二九八下)。 十二人。 幷右牒僧尼, 導師三十九人。右牒,眾僧,合一千六人。寺官三百六十 同「寺官三百六十八人,宿德二十五人,學五百七十四人 最多門徒者。此二種人,最宜先問」(大正五二・二九七下)。 二·二九五下)。同「弟子當令寺官集僧眾 眾。若其懈怠, 不遵佛教, 日大德僧尼 願敕在所依罪治戮」(大正五二・八六上)。「斷酒肉文」「今 若不收失,必起惡心。寺之三官, 著在家服。依『涅槃經』還俗策使。唯取老舊者 今日義學僧尼, 今日寺官 合一千四百四十八人。並以五月二 猶是梁國編戶一民」(大正五 何以堪命。 宜自警戒嚴淨徒 鳴鍵槌, 國有典 四百四 捨戒

6

(3) 「經教」 [西晉] 竺法護譯『諸佛要集經』卷下「文殊師利白、(3) 「經教」 [西晉] 竺法護譯『諸佛要集經』卷下「文殊師利白、(3) 「經教」 [西晉] 竺法護譯『諸佛要集經』卷下「文殊師利白

4 「佛法寄囑人王」 [南朝宋]求那跋陀羅譯 爲記說, 廣爲人說。所以者何。如來、應供、等正覺知人見人,常 愍眾生, 三「爾時, 雄人中尊, 我之正法, 寄在國王, 及我比丘僧等。 三寶難遇, 尊者優波崛白王言, 正勝妙大法, 寄付於大王, 及我比丘僧. 於三寶中, 常以供養恭敬. 大王, 當以正法治化,哀 『雜阿含經』卷二 而說偈曰 修念讚歎

9

(大正二・一六六上)。

子猶且羞之。況在人君,二三其德。其失三也」。陽謬啓,復請通和。臣頻陳執,疑閉不聽。飜覆若此,童(5)『疑閉』『梁書』侯景傳『陛下喪其精魄,無復守氣,便信貞

「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,「正以信因果經所明信是佛說,『經』言」云々となり,「まさに正以信因信果信經所明信是佛說經言」と作る本もある。「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,「正以信因果經所明信是佛說經言」 この部分,校勘の通り,

「行十惡者,受於惡報。行十善者,受於善報」 [後漢] 康孟「行十惡者,受於惡報。行十善者,受於善報」 [後漢] 康孟「行十惡者,受於惡報。行善得善報,行惡得惡報」(大正四·一作,各自見其行,行善得善報,行惡得惡報」(大正四·一点治行,還自觀察本,善者受善報,惡者受其殃。世人所為詳譯『興起行經』卷上「於是,世尊卽說頌曰,世人所為詳譯『興起行經』卷上「於是,世尊卽說頌曰,世人所為詳譯『興起行經』卷上「於是,世尊卽說頌曰,世人所為詳譯『興起行經』卷上「於是,世為於善報」 [後漢] 康孟

7

投與狗骨」。

按與狗骨」。

如烹魚肉,燀之以薪。宰夫和之,齊之以味,濟其不及,以烹魚肉,燀之以薪。宰夫和之,齊之以味,濟其不及,以烹魚肉,燀之以薪。宰夫和之,齊之以味,濟其不及,以烹魚肉,燭之以薪。

8

斷見, 五四上)。 眾生故,說有一切法,所謂有爲、無爲法」(大正二五·二 後世受罪福果報。二者,一切法皆空無,著是邪見。爲是 正二五・七九八中)。 『大智度論』卷二六「復次, 經說「若菩薩起眾生相人相則非菩薩」,此遣常見也」(大 我爲菩薩及諸波羅蜜」 槃空。眾生不解,起於斷見, 「菩薩不住於事行於布施」等, 便謂一切法有。 如是等。 者 眾生聞如來說有菩薩行六波羅蜜,眾生計著起於常 有菩薩摩訶薩, 無後世受罪福苦樂者,爲說有我, 經 此障對治, 如是等。 中對治者, 行檀波羅蜜, 謂一切法無。 此遺斷見也。二者, 謂第三分, 『經』 此經中對治者, 佛告須菩提,「菩薩不見 乃至般若 此障對治 從今世至 謂修行分. 有二種

『涅槃經』言「迦葉,我今日制諸弟子不得食一切肉」 從今日制諸弟子不得復食一切肉也。故。斷十種肉,異想故,一切悉斷, 見者猶不欲視, 譬如有人近師子已, 眾人見之, 所制 一切禁戒, 『大般涅槃經』卷四「善男子,不應同彼尼乾所見。 若住、若坐、若臥, 如人噉蒜, 悉捨之走,咸言. 悉皆恐怖, 各有異意, 異意故, 況當近之。 臭穢可惡,餘人見之,聞臭捨去。設遠 一切眾生, 生畏死想, 諸食肉者, 此人是我等怨。 聞師子臭, 亦生恐怖。 迦葉, 其食肉者, 聞其肉氣, 亦復如是。一切眾 是故, 悉生恐怖 菩薩不 南本 来、 異想 如來 善

13

菩提流支譯

『金剛仙

論

卷一「障者,

『般若』中說,

「有爲無爲一切諸法,

乃至涅

11

「波 夜 提」 Skt. pātayantika/pāyantika/pāyattika/pācattika ほか、Pāli pācittiya 波逸提とも。「墮」と漢譯される。漢譯と原語ならびに各意味については平川(一九九三b:四七~五六頁)と(一九九四:五~三四頁)の詳細な解說を參照。

丘者,波夜提」(大正二三·四七六上)。語,波夜提。若比丘毀訾語,波夜提。若比丘因訾語,波夜提。若比丘兩舌劚他比是九十波夜提法,半月半月波羅提木叉中說。若比丘故妄是於一,以摩羅什譯『十誦比丘波羅提木叉戒本』「諸大德

12

「持牛狗戒」 南本『大般涅槃經』 牛鹿畜生戒 切梵志諸苦行, 能爲彼人作師長。 如是等法能爲無上解脫因者. 或作外道出家人, [中)。 以灰塗身、長髮爲相。 七日服風。百千億花供養諸天,諸所欲願因此成就 [參考] 佛馱跋陀羅譯 被服草衣奉事火, 能於其中而化度。 見有邪命種種行, 或復示現事火法, 卷一五「受持牛戒、 以羊祠時, 無有是處」(大正一二・七〇 『大方廣佛華嚴經』 爲化是等作導師」 五熱炙身隨日轉 習行非法以爲勝,一 或現裸形無衣服: 先呪後殺。 四月

14 「五熱炙身」 有涎唾。 炙」(大正四·二六六上)。 餅在鋤。此婆羅門常著縷褐,五熱炙身,時人因名號縷褐 日盛熱 比丘尼至賒伽羅國, 牛戒、鹿戒、狗戒,羅刹鬼戒, 智所不讚, 至賒伽羅國,於彼國中,有婆羅門,五熱炙身,鳩摩羅什譯『大莊嚴論經』卷二「我昔曾聞, 以炙其上, 四面置火 胸腋懷中, 唐苦無善報」(大正二五・二二六上)。 展轉反側 循如融金: 悉皆流汗 亦如黃髮, 咽喉乾燥, 無可避處, 啞戒、聾戒, 身體燋爛 脣舌燋然: 紅赤熾然 如 夏 無 額

18

九‧四三六上)。鳩摩羅什譯『大智度論』卷二一「外道戒

- 15 火、自墜高巖、常翹一脚、五熱炙身。常臥灰土、投淵赴火」 南本『大般涅槃經』卷一五「知自餓法、 脱因者,無有是處」(大正一二・七〇四中)。 億花供養諸天,諸所欲願因此成就。如是等法能爲無上解 爲相。以羊祠時,先呪後殺。四月事火,七日服風。百千 糠汁、沸湯。受持牛戒、狗、雞、雉戒, 去,設復還喚終不迴顧。不食鹽肉、五種牛味, 油滓、牛糞、根果。若行乞食限從一家,主若言無卽便捨 熊褐、欽婆羅衣、麞鹿皮革、芻草衣裳。 茹菜、噉食藕根 椽、樹葉、惡草、牛糞之上。衣麁麻衣、塚閒所棄、 以灰塗身、長髪 常所飲服 投淵赴 棘刺編
- 「眾生」 佛教語「眾生」の意義及び用例の變遷については船 四六)に詳しい。 (二〇一九) と (二〇二二: 3.1 「眾生」「有情」一三四~一 鬼之盛也。 此之謂鬼」。 『禮記』祭義篇「子曰, 合鬼與神, 教之至也。 氣也者, 神之盛也。 眾生必死, 死必歸

16

- 17和光 可得而貴. 不可得而親,不可得而踈。不可得而利 其門, 挫其銳, 解其分, 存乎」。同第五六章「知者不言, 不勞,和光而不汙其體 不知誰之子,象帝之先」。王弼注 『老子』 不可得而賤。 第四章「道沖而用之或不盈。 解其紛 和其光, 故爲天下貴」。 同塵而不渝其眞, 同其塵。湛兮似或存。吾 言者不知。 同其塵, 不可得而害。不 不亦湛兮似或 是謂玄同。 兮似萬物之 紛解而 238
- 「不如我道真」 支謙譯『太子瑞應本起經』卷下「迦葉行白佛 雖神,不如我道眞也」」(大正三・四八一下)。亦香且美」。便取食之。佛飯已去,迦葉續念, 也」。明日食時,迦葉復請佛。佛言,「便去。今隨後到」。 之」。佛飯已去,迦葉續念,「是大沙門雖神,不如我道眞適去,我東到弗于逮地,取閻逼果。香美可食,便取食 到」。佛言,「卿適去: 盛滿鉢還。迦葉未歸, 迦葉適去。佛便南行,極閻浮提界數千萬里, 坐其床上。迦葉後到,問「大道人從何道來」。佛言,「卿 上數千億里,取樹果名閻逼,盛滿鉢還。迦葉未至, 今隨後到」。迦葉適去。佛如人屈伸臂頃,東適弗于逮界 言,「願大道人留此,不須復遠行。我自給飯食」。卽還敕 明日作好飯。施床座已,食時自行請佛,佛言「便去。 我卽南行極此地界,取呵梨勒果。 佛已坐其床。迦葉至問,「何緣先 取呵梨勒果 「是大沙門
- 物宗 『老子』第四章「道沖而用之或不盈。 淵兮似萬物之

19

20

「崎嶇」『史記』 甘棠且思之: 燕召公世家「太史公日 況其人乎。 燕外迫蠻貉 內措齊、 召公奭可謂仁矣。

彊國之閒,最爲弱小,幾滅者數矣」。

21 覆 藏,如彼食牛不罪過,不肯發露爾偷牛食不」。 無村及以無樹 如彼食牛不得欺拒」(大正四·五五〇中) 不肯發露, 對言, 求那毘 何有天下無東無時。 死入地獄,諸天善神以天眼觀 「實食」。破戒之人亦復如是, 地譯 『百喩經』 知爾妄語都不可信: 卷三「叉問 覆、藏、

24

然」。 然」。 然」。有直情而徑行者,戎狄之道也。禮道則不(25)「**直情逕行」**『禮記』檀弓下篇「子游曰,禮,有微情者,有

25

23

佛教爲法, 迦葉, 生恐怖」(大正一二・六二六上~中)。 悉生恐怖。 及自死者。 故聽食三種淨肉。 不應同彼尼乾所見。如來所制一切禁戒各有異意。異意 麥及黑石蜜、乳、酪、 不說魚肉之屬爲美食也。我說甘蔗、粳米、石蜜、一切穀 白佛言,「云何如來稱讚魚肉爲美食耶」。「善男子, 「亦是因事,漸次而制。當知卽是現斷肉義」。迦葉菩薩復 何因緣故,十種不淨乃至九種淸淨而復不聽」。佛告迦葉, 葉,是三種淨肉,隨事漸制」。迦葉菩薩復白佛言,「世尊 慈種」。迦葉又言,「如來何故先聽比丘食三種淨肉」。「迦 檀越信施之時, 槃經』卷四「善男子,從今日始不聽聲聞弟子食肉。 云何如來不聽食肉」。「善男子, 夫食肉者, 本存遠因。 食肉者 迦葉, 譬如有人近師子已, 眾人見之, 聞師子臭, 亦 應觀是食如子肉想」。 異想,故斷十種肉。異想,故一切悉斷 若行若住若坐若臥, 一切眾生聞其肉氣 我從今日制諸弟子不得復食一切肉也。 在於卽日, 油以爲美食」。……「善男子, 未皆悉斷」 求那跋陀羅譯 迦葉菩薩復白佛言. 南本『大般涅 我亦 斷大

- 一、 14-17-17。種,今於此經一切種一切時,開除方便,一切悉斷」(大正種,今於此經一切種一切時,開除方便,一切悉斷」(大正) 一切悉斷」(大正) 一次 14-17-17-17-17-17-17-17
- 「能長己徒眾惡」 [參考] 識等,若能長人惡法,下明惡漏。若從治道, 善男子復有離漏」至 生死無我, 卽得遠離」 「思惟其義是名爲離」。 『大般涅槃經集解』 (大正三七・五二四下) 名爲離漏。 教令避也。 就今經爲論 如昔教明惡生惡馬惡知 卷四七 寶亮日,此 直觀之爲 「復次,
- 「真實語」 鳩摩羅什譯『十住毘婆沙論』卷八「我今一日 此,大師眞實語,一切諸惡毒,無毒蛇,能害眾生命,如此眞諦言, 聖人,常遠離酒。酒是放逸處。 遠離妄語。眞實語、正如諸聖人,常離妄語。 以如是法, 除斷婬泆, 中 『雜阿含經』卷九「常住蛇頭巖, 隨學聖人」(大正二六·六〇上)。 求那跋陀羅 遠離世樂, 正直語。 。眞實語、正直語。,淨修梵行。以如是 以如是法, 無能害我身」(大正二・六 我今一日一夜,遠離於酒 無上大師說,我今誦習 以如是法, 眾惡不來集, 凶害惡 隨學聖人。如諸 我今一日一夜, 隨學聖人。
- 「非法說法,法說非法」 方等,非法說法,宿死尸。死尸者,同 九中), 果故,二者殺發菩提心眾生故, 是涅槃經離如是等,是故名爲不宿死尸」(大正一二‧五五 僧物隨意而用, 「復有五事沒三惡道。何等爲五。 或於比丘, 非法說法故, 法說非法, 受畜八種不爲之物, 謂一闡提, 犯四重禁, 五無閒罪 南本『大般涅槃經』卷三〇「七者不 比丘尼所作非法事,是名死尸 五者爲求法過而聽受故 三者憙說法師過失故, 一者常說無善惡 五無閒罪, 佛物,

(大正一二・八〇〇中)。

及自死者」(大正二二・六二六上)。 聽食三種爲肉。異想故,斷十種肉。異想故,一切悉斷,不應同彼尼乾所見。如來所制一切禁戒各有異意,異意故,(27)「一切悉斷,及自死者」 南本『大般涅槃經』卷四「善男子,

31

可餓死不欲殺他自濟」(大正三二・二三二中)。 不相食噉。飢食嫩草,渴飲淸泉。有自死者方食其肉,寧不相食噉。飢食嫩草,渴飲淸泉。有自死者方食其肉,寧(28) 「自死者」 [參考]眞諦譯『立世阿毘曇論』卷一○「復有陸

32

叫呼獄」(大正一六·五一四上)。 經』卷四「爲利殺眾生 以財網諸肉 二俱是惡業 死墮墮叫呼獄」」[南朝宋]求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶(2))「『楞伽經』云,「爲利殺眾生,以財網諸肉,二業俱不善,死

33

[參考][北魏]菩提流支譯『入楞伽經』卷八(大正一六:

分,何得云我不殺生。此是灼然違背『經』文」(大正五寿)自供口,亦復別有所擬。若別有所擬,向食肉者豈無殺若令此人不以財網肉者,習惡律儀,捕害眾生。此人爲當此是以網網肉。若於屠殺人閒以錢買肉,此是以財網肉。此是以財網肉。若於屠殺人閒以錢買肉,此是以財網肉。二業俱不及『楞伽經』云,「爲利殺眾生。以財網諸肉。二業俱不及『楞伽經』云,「爲利殺眾生。以財網諸肉。二業俱不及「一切肉者悉斷,及自死者」。自死猶斷,何況不自死者。五六四中)。道世『法苑珠林』卷九三「是故『涅槃經』云,五六四中)。道世『法苑珠林』卷九三「是故『涅槃經』云,五六四中)。道世『法苑珠林』卷九三「是故『經』文」(大正五

35

或有不同者,亦以戒律自防。或行禪定,或以無想爲盡妙. 眾有若干種。外道九十五種,亦各各有眾,或有和合者,(30) 「和合」 失譯 『分別功德論』卷二「念眾者,謂賢聖眾也。凡

三·九七〇下)。

耳」(大正二五・三八上)。 各信所事自以爲眞。但不得實聖八品道。是以不能至涅槃

- 五下)。
 五下)。
- 「教成」 曇無鐵譯『大方等大集經』卷四「世尊,菩薩擊訶薩為成」 曇無鐵譯『大方等大集經』卷四「世尊,菩薩擊訶薩帝內强。唯氣息微轉。始欲溺徙。便自開眼語笑尋常。於是愚者駭服。不知所終也」(大正五〇·九四〇上)。 是果身日,維那故觸,謂言已死。驚告寺官,寺官共視,見果身子。 [梁] 寶唱『比丘尼傳』卷二、僧果尼傳「時宴坐經
- 遊戲神通,莊嚴慈悲。(大正一三‧四一上)。智、大意,慚愧勇健,修施敎戒,被忍辱鎧,建精進幢,修何三昧。速得成就阿耨多羅三藐三菩提,得大念心、大「敎戒」 曇無讖譯『大方等大集經』卷四「世尊,菩薩摩訶薩
- 伏物。有行無解,外闕化他」」(大正四六·二七九上)。 決』卷五之一「故大師與吉藏書云,「若有解無行,不能 身旣有瑕,不能伏物」 [參考] [唐] 湛然『止觀輔行傳弘

34

世尊默然,亦不制止」(大正九・六九下)。 清信女五千人等,……,收屛蓋藏衣服臥具,摩何而去。「摩何」 竺法護譯『正法華經』卷一「比丘、比丘尼、淸信士、

36

舉聲似烏。或持禿梟戒,隨時跪拜,效禿梟鳴。或持鹿戒,經』卷二四「觀諸持戒者,或有梵志奉持禁戒。或持烏戒,ぞ狗などの動物が戒の對象とされた。竺佛念譯『出曜や狗などの動物が戒の對象とされた。竺佛念譯『出曜 と し 長戒人受鳥戒施,鹿戒人受鹿戒施 烏戒とは烏の眞似をし

戒、諸等,師, 善法。 那諦 と地獄に墮ちるとされる。 戒を守り續けて逝去すると牛に轉生し,牛戒を守れない 不成則入地獄」(大正三二・三二〇下)。これによると,牛 造、鳩摩羅什譯『成實論』卷一〇「如持牛戒, 深淨法。是事後當廣說」(大正三〇・一六八中)。訶梨跋摩 耶」。內曰,是皆邪見(*mithyādṛṣṭi), hasūtra?) • 衞世師經 (*tattvāni) (Sāṃkhyakārikā) 能說 (guṇa-padārtha) 中日三洗再供養, 行自餓法、 是名善法。 勒 淨法。 「百論」 (Vaiśeṣikasūtra) 言五熱炙身、 沙婆 (Rṣabha) 弟子誦尼乾子經 (*Ningrant-(大正 淨覺分是名善法。 四・七三七下)。提婆造、 如迦毘羅 投淵赴火、 如是等皆是深淨法, 諸 善 「外日, 拔髮等受苦法, 1法總 言於六諦(ṣad padārtha) (Skt. Kapila) 自墜高巖、 相、 諸餘導師亦能明了諸法相 優樓迦 別相 覆正見故. 火等和合生神分 何以言獨佛能說 是名善法。 婆藪 寂默常立、 (Ulūka) 於二十 開 誦僧 成則爲牛. 士釋、 不能說 · 五 諦

38

開眾惡門」 法愛, 於我所, 宿。 \circ 逸因緣」 優婆娑。優婆娑, 經 問日, 四四中)。 卷四 應當捨離之。 (大正三二・三〇三下)。 切惡。 [後秦] 鳩摩羅什譯『成實論』卷八「八戒齋名 不應說此言, ·惡。是中四是實惡。飲酒是眾惡門。餘三是放何故正說離八事耶。答曰,此八是門。由此八 「鳩那羅聞其言, 秦言善宿。是人善心離破戒宿, 何故爲此事, 汝今爲我母, 以手掩耳而說偈言, [梁] 開諸惡道門」 我則爲汝子。 僧伽婆羅譯 故名善 阿育 「汝今

40

五戒 謂 謂 被 五、 茂, 思 越, 故。 與惡人無別 Ħ, 見不謂直捉而已, 捉女人, 捉女人戒。一、 [參考]失譯 佛陀耶舍、竺佛念共譯『長阿含經』 欲是眾禍之先。若摩捉女人,則開眾惡門,是謂直捉而已,謂作大惡,是故止之。四、爲 比丘出家迹絕欲穢, 爲護正念故。 令有所依怙。二、 則生諍亂。三、 不殺、不盜、不婬、不欺、不飲酒」(大正一・ 殺、盜、婬逸、 五法向善趣, 五法向涅槃。 則喪世人宗敬之心」(大正二三・五二〇上)。 『薩婆多毘尼毘婆沙』卷三「佛所以 以出家之人飄然無所依止, 若親近女人,則失正念。 栖心事外爲世揩軌。 息嫌疑故。 欲止鬭諍故。 妄語、 飲酒。 若比丘設捉女人, 人 此是諍競根本, 云何五法向惡趣。 云何五法向善趣 卷一〇 若摩捉女人 爲斷大惡之 爲增上法 禁微防著 「復有五

「七眾戒」『大智度論』 , (nš manera)、沙彌尼 夷 (upāsikā)。優婆塞、 (大正二五・一三〇中)。 比丘尼(bhikṣuṇī)、學戒尼(śikṣamāṇā)、 (śrāmaṇerī) 卷一〇「佛弟子七衆。 優婆夷是居家。 優婆塞 (upāsaka) ' 餘五衆是出家 比丘 沙彌 (Skt. bhik-優婆 (śrā-

39

五九下)。

「八戒齋」 八齋戒とも一日戒とも。 頃守る五戒を八戒に强化し, 日·十五日·二十三日·二十九日·三十日) 加える。 (正月・五月・九月の朔日から十五日まで) 香油塗身戒・ すなわち五戒中の不邪婬戒を不婬戒に改 _ 吳 支謙譯 歌舞觀聽戒、 『菩薩本緣經』 阿羅漢と同じように一日を 高廣大床戒、 六齋日 卷下 (各月の八日・十四 および三長齋月 一諸龍各言 在家が常日 非時食戒を め、

者不盗, 五二・八六中)。 皆當因此至誠, 務存柔順。齋者普爲先亡見在知識、 馬、帶持兵仗。婦人則兼去香花、脂粉之飾。端心正意: 四等心。遠離房室, 甘香美味一不得嘗。 日、三十日。凡齋日皆當魚肉不御, 月六齋者. 卷一三)「已行五戒 法」(大正三・六九中)。[東晉] **伎樂不往觀聽**。 臥高廣床上, 云何名爲八戒齋法。 一日至十五日、 三者不婬, 月八日、 七者不著香華, 瓔珞以香塗身. 各相發心。心旣感發, 五月一日至十五日、九月一日至十五日。 如是八事莊嚴不過中食,是則名爲八戒齋 便修歲三、月六齋。歲三齋者, 四者不妄語,五者不飲酒 不著六欲。不得鞭撻、 洗心念道. 十四日、十五日、二十三日、二十九 龍王答言。八戒齋者, 一者不殺, 歸命三尊。悔過自責,行 都超「奉法要」(『弘明集』 迎中而食。 則終冤罪苦」(大正 親屬幷及一切衆生。 、罵詈、 八者不作倡 旣中之後 六者不坐 乘駕牛 正月

42

「五篇七聚」 の律で, 七聚は、 四條), 惡作) 佛教徒が守るべき五篇(戒)と七聚 例えば二百五十戒と通稱される比丘の具足戒 を加え、五 篇のほか, (5) 突吉羅 と悪說 篇中の(5)突吉羅を、 (口に行う輕罪) との二種に分けて 更に偸蘭遮 (duṣkṛta=悪作) (波羅夷と僧殘との二つ の五種である。 (戒)。小乘

43

41

九九三a:一一五~一一九頁)參照。七種とする。五篇戒と七聚罪についての詳細は平川(一

舍尼〈比丘四,尼八〉。五、 說」(大正五四・二七二中)。 -七〉。三、波逸提〈比丘一百二十,尼二百八〉。 不定。七滅諍。七聚, 〈比丘四, 一道誠 尼八〉。二、僧伽婆尸沙 『釋氏要覽』 加上五篇第六偸蘭遮、第七惡 突吉羅 卷上 〈比丘幷尼各一百〉。 五. ○ 比 丘 篇名。一、 十三 四、 尼 波 提

續けるべき大乘の律儀戒を指すと考えられる。 (ででできた薬の律儀戒を指すと考えられる。 (でできた薬のは、 (でできるできい薬の律とは八關齋(=一日戒)や現世のみで守るべき小乘の律とは八關齋(=一日戒)や現世のみで守るべき小乘の律とは八關齋(=一日戒)や現世のみで守るべき小乘の律儀戒を指し、大乗律儀通防三業、目位防身口、不遮心過、名之為狹。大乘義章』卷一〇「小乘律儀」できる。

[故復可可] 偽經『淨度三昧經』「佛告恐畏長者,汝乃能自「故復可可」 偽經『淨度三昧經』,供盡功德無以爲喩」《大廣錯主編『藏外佛教文獻』第七輯,宗教文化出版社,二○(方廣錯主編『藏外佛教文獻』第七輯,宗教文化出版社,二○○○○三二四~三一五頁)。

44 尼 羅浮陀地 肉斷絕, 頭摩 道」(大正五三・九七六中。≒『諸經要集』卷一七。 陀地獄經』云, る根據は不明。 無出入處」(一七七中)。 陀地獄中, 八」(大正二五・一七六下~一七七上)。 一六一中)。これによれば『尼羅浮陀地獄經』なる經典が 如是。 出家僧尼豈不深信經教心生重愧, 〈紅蓮花罪人生中受苦也〉。八名摩訶波頭摩, 《少多有孔》。二名尼羅浮陀〈紅獄」『大智度論』卷一六「八 骨破髓出。 頞浮陀少多有孔, 六名漚波羅 其處積冰, 四名阿婆婆 身如段肉,無有識知,此是何人。道世撰『法苑珠林』卷九三「又 即復完堅, 毒風來吹, 〈此地獄外壁似青蓮花也〉。 飲酒と尼羅浮陀地獄を關連付け 時得出入。尼羅波絕無孔罅, 受罪如初。……尼羅浮陀、,令諸罪人皮毛裂落,筋 同卷 寒冰 此是何人。皆由飲 罪人皮毛裂落, 自棄正法同於外 五名睺睺 地 「若人墮頞浮 大正五四 『尼羅浮

48

- 47 46 45 「丘窟」 身 如段肉,無有識知」 Ŧī. 各有屋宅丘窟。終不以此仰觸尊像。 爾 爾時,如段肉未具諸根,不能有所別知。五根成就,『大智度論』卷二三「如人初入胎中得二根,身根 一・八一六下)。 [參考] 『釋門自鏡錄』 (大正二五・二三四下)。 直前注 卷二「在家人雖復飲酒 此二不及在家」 身根命根。 (大正 噉 能知 肉
- 「門行井竈」 存在した。 王 『釋門自鏡錄』 爲 群 姓 原文「門行井竈」 立 七祀。 卷下併行句作 日司 命 を「門戶井竈 「門戶井竈」)。 一身,如, \Box 中 溜 段、 肉、 \Box 國門, 『禮記』 の意に解する 無、 有、 曰國行, 識、 知,

- 謂門、戸、紅温は鑑 五祀。 中霤也。『月令』曰「其祀戶」。又曰,「其祀灶、其祀中 \Box 門 其祀門、其祀井」。 大夫立三祀。 故爲神而祭之。何以知五祀謂門、戶、井、灶、仁、井、灶、中霤也。所以祭何。人之所處出入, 日中溜, 日 行。庶士; 井、旺、盂 戶 日 日 灶。 『白虎通德論』卷二「五祀者, 國門, 庶人立 日 王 [族厲] 自 爲立 國行, 曰門, 七 祀。 日公萬。 日行。 或立戶, 院為 適士立二祀。 諸侯自 或 <u>7</u> 立 何謂也 Ŧī.
- 等三十五。一者,現世財物虛竭,自破財產」 [參考] 『大智度論』卷一 四者, 伏匿之事,盡向人說。九者, 無節限 醉爲愁本。……」(大正二五・一五八中)。 沒智慧。七者,應所得物而不得, 裸露無恥。五者, 用費無度故。 二者, 醜名惡聲,人所不敬。六者, 眾病之門。三者,鬭諍之本。 種種事業, 卷一三「 已所得物而散失。八者: 何以故。 酒有三十五失。 廢不成辦。十者 人飲酒醉, 心
- 眾僧之中有五爲德,名曰福田。供之得福,進可成佛。何破他福田」[西晉]法立法炬共譯『諸福田經』「佛告天帝, 復有七法廣施,名福田。爲良爲美,日 應法服故。三者, 謂爲五。一者,發心離俗,懷佩道故。二者, 濟度人民。 樹木淸涼。 遵眾善故。 五者, 三者, 五者 興立 名曰福田。行者得福,卽生梵天。何謂爲天,爲無早喪。供之得福,難爲喩矣。…… 一佛圖、 常施醫藥, 志求大乘, 欲度人故。以此五德, 名曰 安設橋梁 永割親愛, 僧房、 過度羸弱。 無適莫故。四者, 療救眾病。 堂閣。二 四者, 毁其形好, 委棄軀命 近道作井 作牢堅船

畐 (大臣 | ト、・ ドドドトトート)。 渇乏得飲。七者,造作圊廁,施便利處。是爲七事得梵天

福」(大正一六・七七七上~中)。

邪見生死之所壞敗。菩薩摩訶薩若欲疾成無上菩提,應當(5) 「眾魔外道」 偽經(傳曇摩伽陀耶舍譯)[無量義經』。文理眞正尊無是故我說 『微妙甚深無上大乘無量義經』。文理眞正尊無過上,三世諸佛所共守護,無有眾魔外道得入,不爲一切過上,三世諸佛所共守護,無看義經』。文理眞正尊無過上,過禮記』 曲禮下篇「輟朝而顧,不有異事,必有異慮」。

(5) 「世業」『漢書』敘傳上「方今雄桀帶州城者,皆無七國世業(多)「世業」『漢書』敘傳上「方今雄桀帶州城者,皆無七國世業(2)、「大正九・三八六下)。

54

53

斷佛種」

此經,

則斷一切,世閒佛種」(大正九・一五中)。 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷二「若人不信,

毁謗

58

「京師頃年講『大涅槃經』,法輪相續便是不斷,至於聽受動有 千計。今日重令法雲法師爲諸僧尼講「四相品」四中少分. 之北。僧尼二眾各以次列坐。講畢。耆闍寺道澄。 肉者斷大慈種義。 高座爲都講。唱 五月二十二日五更。一唱到鳳莊門二十三日旦。光宅寺法 僧四百四十二人。幷右牒僧尼合一千四百四十八人。並以 寺官三百六十九人,義學六十八人,導師五人,右牒合尼 義學五百七十四人,導師三十九人,右牒眾僧合一千六人。 已曾聞,不應違背。若未曾聞,今宜憶持〉」「斷酒肉文」 諸僧尼常聽『涅槃經』 「弟子蕭衍向來所白,寺官三百六十八人,宿德二十五人, 於華林殿前登東向高座爲法師。瓦官寺慧明, 『大涅槃經』「四相品」四分之一。陳食 法雲解釋, 爲當〈曾聞。此說,爲當不聞。若 輿駕親御。 地鋪席位於高座 登西向

61

斷肉事」(大正五二・二九八下~三〇二下)。 普設中食竟出。……正爲此二十三日法雲法師講『涅槃』

- 空」(大正一五〇九・五五九中)。 空」(大正一五〇九・五五九中)。
- 繋經』云,一切肉悉斷,及自死者,自死者猶斷」(大正五「『佛經』中究竟說,斷一切肉迺至自死者」「斷酒肉文」「『涅

56

55

葉菩薩復白佛言,「世尊,云何如來不聽食肉」。「善男子,「『**經』言,食肉者斷大慈種」** 南本『大般涅槃經』卷四「迦二·二九五上)。

57

- 「鞏引去」「辛を弗去」「害養去」、鳥愛羅十睪『愛可受苛皮羅夫食肉者斷大慈種。……」(大正二二・六二六上)。葉菩薩復白佛言,「世尊,云何如來不聽食肉」。「善男子,
- 「聲聞法」「辟支佛法、若菩薩法、若佛法,是一切法,皆攝入法、若辟支佛法、若菩薩法、若佛法,是一切法,皆攝入法、若辟支佛法、若菩薩法、若佛法,是一切法,皆攝入。若聲聞、
- 上持戒又行四禪、四空定」(大正二五・一五三中)。 戒者墮三惡道中。若下持戒生人中,中持戒生六欲天中,(6) 「生六欲天」「四禪法」「四空法」『大智度論』卷一三「破此
- 力・力を表す。 (大正二五・四〇六中)。「根(インドリヤ Skt. indriya)」は能「所謂五根,何等五。信根、精進根、念根、定根、慧根」「盾根」「進根」「念根」「定根」「慧根」『大智度論』卷四八
-)「四無量心」「四無疑智」「三三未」「八解兌」「六神通」「á署八聖道分」(大正一・一九三上)。 所謂四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、「三十七道品」 法顯譯『大般涅槃經』卷上「三十七道品法.

62

63

唱此斷肉之文。次唱所傳之語。唱竟又禮拜懺悔

生法忍、 三昧、不退三昧、 三菩提佛行, 無生智, 若有比丘欲得四 無相法忍、 亦當修習如是二法。善男子, 亦當修習如是二法」(大正一二・八四六中)。 頂智、 首楞嚴三昧、 智印三昧、 不可思議法忍、 禪、 畢竟智、 四無量心、六神通、 金剛三昧、 空、 四無礙智、 無相、 聖行、梵行、天行、 若欲得十住地、 阿耨多羅三藐 金剛三昧盡智、 無作三昧、 八背捨、

69

70

切智等,種種諸慧」(大正二五・七六上)。卷三「諸佛無量三昧、十力、四無所畏、十八不共法、一(66) 「十力」「四無所畏」「十八不共法」「一切種智」『大智度論』

 $\widehat{71}$

- 地者」(大正九·五四二下~五四三上)。 明前。七曰遠行。八曰不動。九曰善慧。十曰法雲。是十四、一曰歡喜。二曰離垢。三曰明。四曰焰。五曰難勝。六曰一曰歡喜。二曰離垢。三曰明。四曰焰。五曰難勝。六曰諸佛已說、今說、當說。爲是地故,我如是說。何等爲十。 語,之曰,此出「十地」,佛馱跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷
- 子知物之所同是乎。曰,吾惡乎知之。子知子之所不知邪。(8) 「鴟鴉嗜鼠,蝍蛆甘螮」『莊子』齊物論篇「齧缺問乎王倪曰,

然殺亂,吾惡能知其辯。 孰知天下之正色哉。自我觀之,仁義之端,是非之塗, 所美也。魚見之深入,鳥見之高飛,麋鹿見之決驟。 乎哉。木處則惴慄恂懼 猿猵狙以爲雌, 食芻豢, 知之非知邪。 嘗試言之。庸詎知吾所謂知之非不知邪。 吾惡乎知之。 麋鹿食薦 且吾嘗試問乎女。 麋與鹿交, 然則物無知邪。 螂蛆甘帶, 猿猴然乎哉, 三者孰知正處。 鰍與魚游。 鴟鴉耆鼠, 民濕寢則腰疾偏死, 毛嬙、 吾惡乎知之。 庸詎知吾所謂不 四者孰知正味 麗姬, 四者

- 冀有驗也」。 然終不肯安坐待絕,猶卜筮求祟,召毉和藥者,惻痛慇懃、然終不肯安坐待絕,猶卜筮求祟,召毉和藥者,惻痛慇懃、『論衡』明雩「夫災變大抵有二。有政治之災,有無
- [**愚癡**] (大正九·一三上)。 一个得阿耨多羅三藐三菩提。見諸眾生爲生老病死憂悲苦惱一一「爲度眾生生老病死憂悲苦惱愚癡闇蔽三毒之火。敎化二「爲度眾生生老病死憂悲苦惱愚癡闇蔽三毒之火。敎化二「爲度眾生生老病死憂悲苦惱愚癡闇蔽三毒之火。敎化之所燒煮」 王充『論衡』論死「五藏不傷則人智慧,五藏有病則
- 「不殊水陸」 法顯譯『大般泥洹經』卷三「佛告迦葉, 善哉。 佛言 知則現不食肉也」。 我說甘蔗、 歎魚肉以爲美食」。 菩薩白佛言,「云何,世尊, 此三種肉, 「有九種受離十種肉」。 善男子, ……諸佛所說其食肉者斷大慈種」。 粳米、 隨事漸制, 石蜜及諸甘果以爲美食」(大正一二・八 迦葉菩薩又白佛言,「云何, 佛告迦葉,「我不說魚肉以爲美食」。迦葉菩薩又白佛言,「云何,世尊,稱 故作是說」。 迦葉復問, 聽食三種淨肉」。佛告迦葉 佛告迦葉, 「此亦漸制。當 「何因」。 「善哉 迦葉

 $\widehat{73}$

六八下~八六九上)。

 $\widehat{72}$ 「近切」『論語』子張篇「子夏日, 似罪有常性入於過去。故爲說不入過去去其常想也 今日之病. 處疾不亂。 不說入於過去』。〔鳩摩羅〕什曰 仁在其中矣」。僧肇撰 必由先罪故, 自此已下便爲鈍根者也。說近切之言論其心也。 『註維摩詰經』 教令悔先罪也。既言有先罪 博學而篤志。切問而近思。 利根者聞上四句 卷五 「『說悔先罪而

魔行 魔故, 有行或說無行。有無雖殊其致不異也。魔行四魔行也。久雖有而無。然則言有不乖無。言無不乖有。是以此章或說 是吾養。彼諸轉者亦吾養也。所以者何。魔行者受生死。謙譯『維摩詰經』卷上「又仁所問何無供養。一切眾魔皆 煩惱魔、死魔、 摩羅什譯『大智度論』卷六三「復次,魔有四種。五眾魔、已超度而現降魔者示有所過耳」(大正三八・三八〇上)。鳩 欲言其無萬德斯行。萬德斯行故雖無而有。無相無名故。 不可得而無者, 過魔行而現降伏眾魔是菩薩行』。〔僧〕肇曰,不可得而有。 生死者則菩薩養。彼轉者受諸見。菩薩於諸見不傾動. 皆悉降伏 能破般若波羅蜜」 (大正一四·五一五下)。僧肇撰『註維摩詰經』卷五「『雖 向於四維行七步者, 令不信般若。 當成應供等正覺道」(大正一二・八七一上)。支 自在天子魔。四魔中多煩惱魔、 其唯大乘行乎。何則欲言其有無相無名。 (大正二五・五〇三下)。 自貪著法, 現斷眾邪煩惱魔行。自在天子 憎嫉他法, 愚癡顚倒, 自在天子 故

法顯譯『大般泥洹經』卷三「東行七步現爲一切眾生 $\widehat{77}$ $\widehat{76}$

> 切畜生 一切欲界色界無色界」(大正二五・六五二上)。 一切餓鬼種, 斷一切諸難, 斷 切 が貧窮 道

75

斷命因」 恐怖眾生。然後勸令安住善法及三乘中。是餘業故 是」(大正三・二二四下)。 如是弊惡世界。 充滿世界。 **曇無讖譯** 如恒河沙等無佛國土五濁之世,以麤惡言斷命因緣曇無讖譯『悲華經』卷九「善男子,我於恒河沙等 說三乘法如我本願取佛世界調伏眾生。其事如 以不善音唱滿世界。是故,今得不善眾生

「自燒、自煑、自炙、自剝」 切。所謂燒煮火炙、斫刺刺剝。遇斯光已,如是眾苦,悉地獄、大焦熱地獄。是八地獄其中眾生,常爲諸苦之所逼 滅無餘, 安隱淸涼, 爲臺。形大團圓, 微妙,各具千葉,純眞金色, 時,世尊心無疑慮如師子王。以三十二大人之相八十種好 獄、黑繩地獄、眾合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱 青黃赤白紫頗梨色。是諸光明, 莊嚴其身,於其身上一切毛孔,一一毛孔出一蓮花。其花 猶如車輪。 快樂無極」(大正一二・六七一上~中)。 南本 是諸蓮花各出種種雜色光明 琉璃爲莖, 金剛爲鬚. 『大般涅槃經』卷一〇 皆悉遍至阿鼻地獄、 想地 玫瑰

「自炙」 南本『大般涅槃經』卷一七「此師真是世之良醫,若 城住。 已北殺害眾生 行若立若坐若臥, 常在三昧, 若自妄語若敎他妄語, 若自害若教他害, 「若自作若敎他作, 願王速往。 若以刀輪殺一切眾生, 悉無罪福, 王若見者, 若自飲酒若敎他飲酒,若殺一村一 若自偷若教他偷, 若自斫若敎他斫, 無施戒定」。 心無分散, 告諸弟子作如是 眾罪除滅。 若恒河已南布施眾生恒河 今者, 近在王舍 若自淫若教他婬 若自炙若敎他 王 一大臣

 $\widehat{74}$

「地獄種」

鳩摩羅什譯『大智度論』

卷八五 「世尊

。斷一切地獄種, 五「世尊,當知,

是

菩薩爲如佛。

何以故。

是菩薩因緣故。

- 「刑門」『庄と』を占「たく崔三忠む,目別にな,人なて審能如是除滅我罪,我當歸依」(大正一二・七一八下)。
- (7)「自剝」 失譯『菩薩本行經』卷下「梵天王時,爲一偈故,自(7)「自割」『莊子』盜跖「介子推至忠也,自割其股,以食文公。

而用寫經」(大正三・一一九中)。

三四中)。 三四中

83

- 81 貧窮」 「下賤」 「醜陋」 丐·孤獨人。有聾、盲、瘖、瘂、愚癡、弊惡。神明記識,犯之不貰,轉相承續。故有貧窮、不知爲善。惡逆不道,受其殃罰。道之自然, 下)。南本『大般涅槃經』卷六「若有不信是經典者, 四「佛言, 麁澁弊惡, 身當爲無量病苦之所惱害,多爲眾人所見罵辱。命終之後 世宿命,爲善慈孝,布恩施德,……」(大正一二・二九五 不及逮之屬。其有尊貴豪富。高才明達智慧勇猛。皆其前 欲爲眾惡。强者伏弱, 逼」 (大正一二・六三九下)。 人所輕賤。顏貌醜陋, 其一惡者, 生生常處 或值荒亂刀兵競起帝王暴虐怨家讎隙之所侵 [後漢] 支婁迦讖譯 諸天人民下至禽獸蜎飛蠕動之類 轉相剋賊, 常不供足。 自相殺傷: 誹謗正法, 『平等覺經』 雖復少得 當往趣向 邪見之家。 更相食噉 下有尫狂 下
- 瘻。本自所作,自然得之。父母所憎違失法義。所以者何。癡。身生瘢瘡,生無眼目,口不能言。諸門隔閉,跛蹇禿如其本宿所種諸惡,自然得之。或復爲盲聾、瘖、瘂、患、聾」「盲」「瘖」「瘂」「跛」 竺法護譯『胞胎經』「佛告阿難,

- 九〇上)。 中)。同卷二二「復次, 拘躄癃跛。於二十五有受諸果報」(大正一二·六四九上~ 法」(大正一二・七五一下)。 唐、 啞、 癃 水牛、 蚤、 墮於地獄。從地獄出, 南本『大般涅槃經』 宿命所種非法之行」(大正一一・八八九下~ 虱 善男子, 蚊、 卷八「雖受人身,聾盲瘖瘂、之行」(大正一一・八八九下~八 虻、 受畜生身。所謂, 若有修習愚癡之人,是 蟻子等形。若得人身, 諸根不具, 不能
- `蚤」「虱」「蚊」「虻」「四百四病」「鞭」「杖」「笞」 風寒熱聚。四百四病同時俱起。熱多則生百病。寒多則生百病。 **盲聾**,瘖瘂癡惷,疣癃厥,百 諸患。風寒諸熱,疥癩虛痔, 樂不如意。既所得當復守護。 曠野。蚊虻虱蚤,蜂螫之難。虎狼師子,蛇虺之懼。如是掠加刑,或畏於人,或畏非人地獄・餓鬼畜生之難。勤苦 如是阿難。地水火風,一增則生百病。風適多則百病生。 如是眾患,怱怱未曾得安。眾緣所縛。 譯『胞胎經』「如是, 手或截脚耳鼻,或斬頭, 口舌齒痛, 苦不可言。有多所求種勤苦根,不得則憂。 塵勞之惱, 臏脚咽喉: 多所妨礙」 阿難,勤苦厄惱, 短氣腰脊, 或鎖繫鞭杖搒笞,閉在牢獄,拷时俱起。何况其餘不可計患。或截 百節煩疼,臚脹廗下身體浮腫 惡瘡癰疽, 黄疸咳逆, (大正一一・八九〇上)。 生業勤苦, 食多則增百病。三事合會 臂肘捲腕。諸百節病痛 或眼痛病: 誰當樂處母胚胎。 有所獲得。 竺法護 或耳鼻 有所志 顚狂
- 狸鼷鼠,無事不有其餘境界」(大正一五・六五七中)。 葉,遍覆三界,其諸葉閒,復有龍象虎狼師子毒蟲惡獸猫、 佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧(海)經』卷三「一一樹

- 85 頭 受如是等現世輕報, 是業能得現報。 横羅死殃, 不墮地獄, 「背痛」「鞭杖」 懺悔發露所有諸惡。 呵責・罵辱・鞭杖・閉繋・飢餓・困苦。 現世受報。 是名爲知」(大正一二・七〇四下~ 南本 所謂, 常自呵責故。是人以是善業因 『大般涅槃經』 頭痛・目痛・腹痛・背 既悔之後,更不敢作。 卷一五「云何 七0
- 86 胃反」『金匱要略』嘔吐噦下利病脈證治 食暮吐, 生平澤,治吐逆胃反,久服成仙。生蜀都」。甘微寒,生山谷,養精神,益氣明目。潛預 [參考] 『太平御覽』 暮食朝吐, 養精神,益氣明目。潛預 宿穀不化, 藥部二、 丹『本草』曰, 名曰胃反」。 「脾傷則 味辛, 丹砂, 不磨, 微寒 朝 味

- 飲之,病自當去。卽如佗言,立吐虵一枚」。 車往視,語之曰,向來道邊有賣餅家蒜韲大酢,從取三升者。嗜食而不得下,家人車載欲往就醫。佗聞其呻吟,駐(87) 「咽塞」『後漢書』方術傳下、華佗「佗嘗行道,見有病咽塞
- 8) 「風病」「水病」 [參考] [隋] 智顗說 『摩訶止觀』卷八上。 扇病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七處地病。此四旣動眾惱競生」(大正四六・一〇六下~一〇七

91

- 異名也」(大正五四·二二四上)。 異名也」(大正五四·二二四上)。
- 五藏不調」「四百四病」 鳩摩羅什譯『大智度論』卷八「病有二種。先世行業報故,得種種病。今世冷熱風發故,亦有二種。先世行業報故,得種種病。今世冷熱風發故,亦病。問曰,「以何因緣得病」。答曰,「先世好行鞭杖拷掠病。問曰,「以何因緣得病」。答曰,「先世好行鞭杖拷掠病。出世病不知將身。飲食不節,以應難作譯『大智度論』卷八「病以佛神力故,令病者得愈」(大正二五・一一九下)。
- [五藏六腑] 『後漢書』卷六○、馬融列傳李賢等注「『韓詩外『五藏六腑」『後漢書』卷六○、馬融列傳李賢等注「『韓詩外也。旁光者,湊液之府也。門諸五藏。精藏于腎,神藏于也。旁光者,湊液之府也。馬融列傳李賢等注「『韓詩外也。旁光者,湊液之府也」。
- 謂八苦。一生苦,二老苦,三病苦,四死苦,五所求不得「五受陰苦」 法顯譯『大般涅槃經』卷上「比丘,苦諦者,所

四大不調

曇無 讖譯

『悲華經』

卷八「如一

佛刹微塵數等諸

八

寒地獄や八

(熱地獄)

原文「八寒、

熱地獄」。

、鳩摩羅什

96

冰地獄」(大正二六・四五中)。

同

譯

[大智度論]

名炭坑,

二名沸屎.

三名燒林,

『十住毘婆沙論』

卷五

「地獄者,

八種熱地

地獄、

十種寒

五上)。求那跋 所欲不得苦。 Ŧī. 老苦、 六怨憎會苦, 略說五受陰苦。 病苦、 如是略說五受陰苦。 陀羅譯 陀羅譯 七愛別離苦 是名爲苦」(大正二・一二六下)。 『雜阿含經』 『雜阿含經』 恩愛別離苦、 是名爲苦」(大正二・九 恩愛別苦、 五受陰苦」 卷一 怨憎會苦、 兀 大正

93

想地獄、 八種寒冰地獄。所眾生,皆有佛性。 地獄、 熱地獄。是八地獄其中眾生,常爲諸苦之所逼切。所謂,獄、眾合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦頗梨色。是諸光明,皆悉遍至阿鼻地獄、想地獄、黑繩地燦經』卷一○「是諸蓮花各出種種雜色光明。靑黃赤白紫 隱淸涼, 地獄、 卽 裂身體碎壞, 燒煮火炙斫 (大正一二・六七一上~中)。 诗得調 分陀利地獄。 黑繩地獄、 和, 阿娑娑地獄、 大熱地獄 快樂無極。 刺劍剝。 溫暖適身。 互相殘害。 所謂, 眾合地獄 是中眾生常爲寒苦之所逼惱。 眾生聞已, 阿鼻地獄、 是光明中, 遇斯光已, 便鉢羅地獄、 阿波波地獄、 是光明中. 遇斯光已, 叫喚地獄、 即便命終,生人天中。乃至 八寒地獄」 如是眾苦,悉滅無餘, 宣說如來秘密之藏 波頭摩地獄、 亦說如來秘密之藏 阿吒吒地獄、 如是等苦, 大叫喚地獄、 南本『大般涅 所謂, 亦滅無餘 拘物頭地 阿羅羅 安

八萬四千鬲子地獄」 八苦。 善根, 熱一切諸地獄,一一獄中復有八萬四千隔子地獄,以爲眷禺四千鬲子地獄」[參考]『佛名經』卷二六「如是八寒八 五·九七七中)。 八萬四千鬲子地獄以爲眷屬。此中罪苦炮煮楚痛,剁『慈悲水懺法』卷下「如是八寒八熱一切諸地獄中, 下~一七七上)。 中受苦也〉, 八名摩訶波頭摩, 肉削骨打, 無邊。今日懺悔願乞除滅」(大正四五・九二七中)。 受於六道無量苦果。難可堪忍。 無量諸苦, いては船山(二〇二二:7.3「懺悔」二七五~二九一頁)參照 (亦患寒聲), 慈悲道場懺法』 切畜生因, 造一切餓鬼因 獄外壁, 此中罪苦炮煮楚痛, 造八寒八熱諸地獄因, 起四顚倒, 八寒冰地獄者,一紅名刀道,六名鐵刺 不可聞不可說」(大正一四・二八八上)。 髓抽腸拔肺無量諸苦。 似青蓮花也〉, 五名睺睺 「懺悔」 三名阿 造作五逆, 卷一「又復無始以來至于今日。 六名鐵刺林, の語義・問題・ 剝皮咼肉, 〈亦是患寒聲〉, 名頞浮陀 七名波頭摩 造八萬四千鬲子地獄因,造行於十惡,熾然三毒,長養 造人天生老病死種種苦因, 是爲八」(大正二五・一七六 《寒戰聲 不可聞見。 不可聞不可說」 〈少多有孔〉,二名尼 削骨打髓, 〈紅蓮花, 異説の詳細につ 六名漚波羅 如是罪 四名阿 八名銅 抽腸拔肺 以三不 (大正四 剝皮刷

95

中,寧得不然。答言不也。無不燒盡。佛子,彼所投草,剛圍山,皆悉熾然燒盡無餘。設有一人,若以乾草投彼火佛子,譬如火劫起時,三千大千世界一切所有大地草木金「大地草木」 佛馱跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷三五「復次,

一切諸法,無不悉知」(大正九・六二三下)。 猶可不盡。如來智慧,於一切眾生,一切佛刹,一切劫數

「若噉食衆生母,衆生亦報, 武帝との先後關係も不明 る經錄は存在しない。引用もこの一種のみ。僞經か。梁 さと無關係。『尼羅浮陀地獄經』の存在や譯出を記錄す 大正二五・一七六下~一七七上)。しかし上記の引用は, 羅浮陀地獄は「八寒冰地獄」の一つ(『大智度論』卷一六。 噉衆生母肉,衆生亦噉母肉。如是姉兄弟妹男女六親, 自棄正法, 是何人,皆由飲酒。出家僧尼,豈不深信經教, 七「又『尼羅浮陀地獄經』云,身如段肉,無有識知, 未可得脫」(大正五三・九七六中)=道世『諸經要集』 亦噉母肉。 法,同於外道。若噉衆生父肉,亦噉父肉。若噉衆生母肉 皆由飲酒。出家僧尼,豈不深信經教,心生重愧。 有相對,怨怨相讐,未可得脫」(大正五四・一六一中~下)。 ⁻尼羅浮陀」はニルアルブダ nirarbuda の漢字音寫。 尼 噉食其子」 同於外道。若噉衆生父肉,衆生亦噉父肉。 如是姉兄弟妹男女六親, 並有相對, [唐] 道世 身如段肉, 噉食其母。若噉食衆生子, 『法苑珠林 無有識知, 此是何人: 卷九三「又 心生重愧 怨怨相酬 自棄正 卷一 寒 並 此 若

妙因,流轉生死,無有窮已」(大正一二·六六〇中)。 無窮已。有客從外來,聞之常歡喜」。南本『大般涅槃經』 無窮已。有客從外來,聞之常歡喜」。南本『大般涅槃經』 經過程(Skt. icchantika)雖有佛性,而爲無量罪 是一樣漢書』卷八,董祀妻傳「感時念父母,哀歎

98

99

如

「有一女人,五百世害狼兒,

狼兒亦五百世害其

102

101

作是言,「此兒母常食我子,我今還食其子。若彼能捨怨 四五中)。同卷五〇「曾聞, 常食我兒。我亦五百世中,常殺其子。若彼能捨舊怨之心問言,「有何怨耶」。狼卽答言,「此小兒母,五百世中, でなく『論』の一節か。 れば、武帝は『經』の言葉として引くけれども、『經 行。時有一狼取其兒去。時人語言,「何故取他兒耶」。狼 今已捨」。時狼觀兒母心, 我亦能捨」。時人語其兒母,「可捨怨心」。兒母答言,「我 其兒,捨之而去」(大正二八・三七六上~中)。これらによ 心,我亦捨之」。時人語是女人,「可捨怨心」。女人答言, 其兒命而去。如此者,能知他心,亦識宿命」(大正二八: 故檐他兒去」。狼答之言,「此小兒母是我等怨家」。時人 不在。時有一狼檐其兒去。 | 曾聞 子。又有女人,五百世斷鬼命根, ·我今已捨」。時狼觀女人心,不捨其怨,而口言捨,卽殺 有一女人置其嬰兒,在浮陀跋摩共道泰等譯 雖口言捨, 而心不放, 卽便害 有一女人以兒置一處, 有緣餘 時人捕搊而語之言,「汝今何 在於一處。 「阿毘曇毘婆沙論」 鬼亦五百世斷其命根 有因緣故

[**信受**] 『孟子』梁惠王下「寡人非能好先王之樂也,直好世俗讀經論,明佛理,至是蔬食持戒,信受甚篤」。南本『大法。如是之人,甚爲希有,如優曇花」(大正一二·六三八法。如是之人,甚爲希有,如優曇花」(大正一二·六三八十)。

100

「經生歷死」[參考]『大般涅槃經集解』卷二二「寶亮 (四四之樂耳」。

四・一〇〇六中)。

我父母。而殺而食者,

即殺我父母,亦殺我故身」(大正二

109

105

(大臣三七・四六六下)。四〜五○九) 曰,若經生歷死,發心之者,名發心菩薩四〜五○九) 曰,若經生歷死,發心之者,名發心菩薩

(大正三七・四六六下)。

(III) 「神明隔障」『荀子』解蔽「心者,形之君也,而神明之主也」。 (III) 「神明隔障」『荀子』解蔽「心者,形之君也,而神明之主也」。 (III) 「神明隔障」『荀子』解蔽「心者,形之君也,而神明之主也」。

106

遍一切處」[後秦]鳩摩羅什譯『大智度論』卷一四「衆(⑭)「從無始以來,至于此生,經歷六道,備諸果報,一切親緣,也。从自「鬲螱。古覈切」。

十經戒) 「若佛子, 肉」(大正二·五四〇上~下)。僞經『梵網經』卷下(第二 **使兒變易無常。自肉他肉,** 藏。一切男子皆爲兄弟。一切女人皆爲姉妹。……一切衆 推之,不應惡心而懷瞋害」(大正二五・一六七上)。 母、兄弟。衆生亦皆曾爲我父母、 生無始世界無際, 切女人是我母。 無始生死, 生生輪轉, 求那跋陀羅譯『央掘魔羅經』卷四「一切衆生有如來 往來五道, 我生生無不從之受生, 以慈心故,行放生業。一切男子是我父 無非父母、兄弟、姉妹, 則是一肉。是故諸佛悉不食 輪轉無量。我亦曾爲衆生父 兄弟。當來亦爾 故六道衆生皆是

羅經』卷四「文殊師利白佛言,世尊,因如來藏故,諸佛是兒孫,或經是朋友」[南朝宋]求那跋陀羅譯『央掘魔「或經是父母,或經是師長,或經是兄弟,或經是姉妹,或經

如是。

一切衆生

無始生死,

生生輪轉

踊り手のこと。 「伎兒 *nartaka」は,演目に合わせ次々と役柄を變える則是一肉。是故諸佛悉不食肉」(大正二・五四〇下)。無非父母、兄弟、姉妹,猶如伎兒,變易無常。自肉他肉,無非父母、兄弟、姉妹,猶如伎兒,變易無常。自肉他肉,

永絕」(大正一・一七七中)。 是生,後不復有。已見眞諦,得道眼者,無復生死,長塗「道眼」 失譯『般泥洹經』卷上「受道之諦,得眼見證。爲盡

「不自覺知」 南本『大般涅槃經』卷二「世尊,譬如醉人不自、遂相糾結,與之離隔。叡大興衆役,還相攻伐。……」」。八),詔琬曰,「寇難未弭,曹叡驕凶,遼東三郡苦其暴虐.「還相」『三國志』卷四四、蜀書、蔣琬 傳「延熙元年(二三

108

107

「不自覺知」 南本『大般涅槃經』 五欲, 中。時有良師與藥令服, 何如來,便欲放捨,入於 涅槃」(大正一二・六一六下)。 當施我法藥,令我還吐煩惱惡酒, 想。是故輪轉,受生死苦, 深自剋責。酒爲不善諸惡根本。若能除斷,則遠衆罪。世 我亦如是,往昔已來,輪轉生死,情色所醉, 非母母想, 非姉姉想, 不識親踈母女姉妹 服已卽吐,還自憶識,心懷慚愧 迷荒婬亂, 言語放逸, 如彼醉人臥 不淨中。如來今 非女女想,於非衆生生衆生 卷二「世尊,譬如醉人不自 而我未得醒寤之心。云 臥不淨 貪嗜

「至親」……「至怨」 抱爲其子. **†流轉國土,如土梟等** 萬四千食父母想。 (大正三九・九二四下)。 卷七「由因世界怨害輪迴,殺 子成父母, 託至親之父子,發至怨之殺害, 如是故有非無想、 [參考] [北宋] 子璿 『首楞嚴義疏注 同卷七 皆遭其食。其類充塞, 附塊爲兒, 「羯南」云硬肉」 及破鏡鳥, 顛倒故, 和合怪成八 相無想羯南 冤對相讐, 豈不怪哉 (*ghana) (大正三

一一六○中)。 雖有身意,缺眼四根,六處未全,但號名色」(大正五四· 或羯南,此云 凝厚,漸堅硬故。亦云硬肉。胎四七日, 或羯南,此云 凝厚,漸堅硬故。亦云硬肉。胎四七日,

「邁道」 慧皎『高僧傳』卷七、慧嚴傳「慧遠法師嘗云,釋氏「邁道」 慧皎『高僧傳』卷七、慧嚴傳「慧遠法師嘗云,釋氏

蘆山嗉遠「少門下汝臣皆侖」豊亟下亷態第四(『仏明集』武帝以前の主な用例を以下に掲げる。(⑴)「一理中障難。二事中障難」「理」「事」を對比的に用いる梁

羅〕什曰、「或以事「伏心」。或以理「伏心」。今「正觀」、 卷五)「夫幽宗曠邈,神道精微,可以理尋,難以事詰」 大正五二・三一上)。廬山慧遠「沙門不敬王者論」形盡神 不滅第五(『弘明集』卷五)「固知冥緣之搆著於在昔,明闇 之分定於形初。雖靈鈞善運,猶不能變性之自然。況降茲 已還乎。驗之以理,則微言而有徵。效之以事,可無惑於 大通」(大正五二・三二上)。 「注維摩詰經』卷四「『伏心是道場,正觀諸法故』。〔鳩摩 『注維摩詰經』卷四「『伏心是道場,正觀諸法故』。〔鳩摩

> 八上)。 惡之學也。理之可貴者道。事之可賤者俗」(大正五二:三集』卷六)「又曰,全形守祀,繼善之敎也。毀貌易姓,絕 之乖。德苞無際,而事與之隔。子執迷自畢,沒道恒「釋駁論」(『弘明集』卷六)「是以道濟彌淪, 蓋有以也」(大正五二・三七上)。明僧紹「正二敎」(『弘明 畏而避之,愈致著也」(大正三八·三八七上)。 大士集聞所說法。 常與淨名共弘大乘不思議道。 密欲因事暢理. 「現女神散華者, 故「現」「身」「散華」, 以明不畏生死故, 故現爲宅神 示卑而重法, 雖入而不染也。若 欲以生論 同處一 以敦仰法之 沒齒不悟: 室 而理、與、 也。

後注 遠理也」」(大正三七・四六一上)。同卷三「『爾時,生蘇』至『因熟蘇得醍醐』。案,道生曰,「擧近」 先無酪」(大正三七・五五五下)。 「斷酒肉文」中の用例は 如汝所言乳有酪者』至『未食之時食應是命』。案,僧亮 天速集也」(大正三七・三八八上~中)。 同卷五六「『善男子 也」。僧宗曰,「向三種瑞,人中悉集。今現此相. 也。五色之中,白是眞實自然之色,不可染成, 「貪生愛壽者, 中比丘比丘尼』至『其林變白猶如白鵠』。 [參考] 『大般涅槃經集解』卷二〇「『如因乳生酪因酪得 「廣學證也」。寶亮曰,「擧近事, 及び注 ,白是真實自然之色,不可染成,借事表理以佛滅爲苦。今明滅非作法,乃息僞反眞 298 | 參照。 以況遠理, 「擧近事 案, 僧亮日 閻浮提 以摧諸 驗乳中

常自計念,我行如此,當得供養,恭敬禮事,是卽垢穢。耶舍共竺佛念譯『長阿含經』卷八「佛告梵志,彼苦行者,「不知出要,無有方便」「出要」は出離の要點。[後秦] 佛陀

三八·三六四中~下)。同卷六「『見諸大人聞所說法,

即以天華散諸菩薩大弟子上』。

[鳩摩羅]

什 曰,

112

諸菩薩上嫌其室空,

今所以供養。

而

致供也」。

(僧)

肇日,

「天女卽法身大士也。 將以宅主處疾故, 其 之性也,强梁則「觀」邪,

調

「伏」則

「觀」正也

,便現 「「心」

則以無常等「觀」制「伏」其「心」也」。肇曰,

|大力神] 「大力龍」

[參考]

[後秦] 鳩摩羅什譯『十住

諸佛子, 說聲聞果,

菩薩摩訶薩亦如是,

現前地中, 如尼民陀羅山

集深因

集諸

一切大力龍神,

不可窮盡」(大正

一 〇 五

不可窮盡。

諸佛子,

過,不知出要,是爲垢穢。不知出要,是爲垢穢。不知出要,是爲垢穢。 於生死。出要者出生死也,亦出三有,更不受生。生死貪欲遠離。復求思惟惡露之觀。雖處生死心, 象出華室」。「善求出要」者,疾求方便,善求伴侶,譯「出曜經』卷七「「善求出要,順從佛法,當滅: 臨事難究, 不求覆蓋。 所謂出家學道, 譯『出曜經』卷七「「善求出要, 人,是爲垢穢。……」(大正一·四八上)。[後秦] 讀高僧傳』 『出要律儀』」(大正五〇・六〇七上)。 是故說曰「善求出要」也」(大正四:六四八下)。学道,修無上道,離於家業。出要者,露精自暴, 卷二一、法超傳「〔梁〕武帝又以律部繁廣: ……若有淨食, 樂著堅 固 愛染不捨, 。出要者,露 貪著自食, 自稱己善, 撰爲一十四 不 -曉遠 一竺佛念 出、不染著 死衆,

信受」「習行」 說如上無非有法, 食飲便利如是法, 淨住子淨行法門」出家順善門第九(『廣弘明集』卷二七) 深知諸法因緣,是名辟支佛乘」(大正九‧一三中)。 「統略 從佛世尊 又行住坐臥如是法, 家功德經』 聞法信受,慇懃精進,求自然慧,幾蜀虧沒,鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷二「若有衆生, 說」(大正五二・一〇下)。 受供行施如是法,修道習行如是法。略 數則三千 禮拜圍繞如是法, -威儀, 廣則說不可盡: 讀誦講說如是法 『出家功徳

113

在魔中」 (二〇二二: 2.2「魔」一〇三~一〇九頁) 參照 る。 梁武帝以前から「魔」を用いる寫本の存在が確かめられ [七一一~七八二] 魔」字は佛典漢譯により作られた新しい漢字。 詳細は船山(二〇一三:一八五~一八七)及び船山 (羅)」に變更したという傳承がある (初出は唐の湛然 ては梁武帝がそれまで用いていた「磨(羅)」を 0 略。「魔」 魔 は か)。しかしそれは正しくない。 の用例については後注 「魔羅」(マーラ Skt. māra)という漢字 それに

115

來作留難」[北涼]曇無讖譯『大方等大集經』 汝亦應見菩提樹,瞿曇(Skt. Gautama, Pāli Gotama)勝我 修羅,能動彼人一毛端」」(大正一三・三〇四中)。 及軍衆。如是我等數惱亂, 魔王說偈答言,「我從昔來於彼人,曾作無量惡留難, 瞿曇常勝於我等,不見天龍阿 卷四七 爾

116

「適欲習行」『呂氏春秋』重己「凡生之長也, 不順者欲也,故聖人必先適欲」。高誘注「適,猶節也」。 習行」,上注(113)參照。 順之也。 使生

117

118

「引入邪道」『注維摩詰經』卷三「〔鳩摩羅〕什曰,……,三 八・三五 九下)。 寶中作功德, 亦復如是。 然然方便引入佛道, 初作功德時, 究竟涅槃, 其福乃盡」 其事雖微, 大正三

[參考] 即集諸比丘。 佛若不說法, 失譯『鼻尼母經』卷六「外道自言 (大正二四・八三三上)。 比丘集已, 世人不識正法,皆入邪道。 默然而坐。 諸檀越皆來集已, 來以是因緣 「我法眞正

惱令心亂」 快問如來滅亂心賊,世時,佛告迦絺羅難陀, 亂」」(大正一五・二四三中)。 菩薩摩訶薩行禪那波羅蜜時檀那波羅蜜(dānapāramitā)」 (大正八・二四五下~二四六上)。『禪秘要法經』 一切諸放逸門,普爲人、天開八正道。汝好諦觀, 應薩婆若 菩薩摩訶薩行禪那波羅蜜 鳩摩羅什譯 (sarvajña) 心定心布施, 甘露正法, 『摩訶般若波羅蜜經』 「諦聽諦聽,善思念之。汝於今日 三世諸佛治煩惱藥 (Skt. dhyānapāramitā) 不令心亂。 卷四 次

123

三八上)。 三八上)。 三八上)。 三八上)。 三八上)。 三八上)。 三八上,善男子,我等於無所念法中住,得是金色身,丈卷九八「善男子,我等於無所念法中住,得是金色身,丈

124

121

「舊怨」「(諸) 對障」 [後秦] 竺佛念譯『出曜經』卷一○「舊怨」「(諸) 對障」 [後秦] 竺佛念譯『出曜經』卷一○「舊怨」((諸) 對障」 [後秦] 竺佛念譯。時產那祇宿繞,而爲說法。時有栴摩那祇,在舍衞城裏。時摩那祇宿之。一乘」者,諂爲隨時障。只是隨時得便,而能爲障也」一乘」者,諂爲隨時障。只是隨時得便,而能爲障也」一乘」者,諂爲隨時障。只是隨時得便,而能爲障也」一乘」者,諂爲隨時障。只是隨時得便,而能爲障也」(大正三三・六○五上)。

125

いは「但以一噉食衆生,因緣能遠離一切佛法」と句切る(22) 「但以一噉食衆生因緣,能遠離一切佛法」と句切った。ある

- いう現代語譯になるか。
 いう現代語譯になるか。
 なら,現代語譯は「たった一度でも衆生を食らうことになら,現代語譯は「たった一度でも衆生を食らうことに
- 「過患」 鳩摩羅什譯『成實論』 二・六一四下)。 以不 善業因緣故, 涅槃經』卷二「此身多有無量過患,猶如水泡」(大正一 壽命不盡。……」(大正三二·三〇六中~下)。南本『大般 故墮地獄。若生人中, 以不善業故 久受苦惱, 受地獄等苦, 則受短命, 卷九「問曰,不善業有何過患。 如阿鼻地獄, 如 『經』中說: 如是乃至邪見。又 過無量歲 殺生因
- [三毒等分] 曇無讖譯『悲華經』卷五「若有衆生三毒等分, 不能專心住於善法」(大正三:一九九下)。[唐] 道宣「統 略淨住子淨行法門」(原本 [南齊] 蕭子良「淨住子」二十卷) 緣意地貪、瞋、癡也。自害害他,勿過於此。故『經』 緣意地貪、瞋、癡也。自害害他,勿過於此。故『經』 緣意根本三毒,能煩能惱,勞擾身心」(大正五二:三二一 號爲根本三毒,能煩能惱,勞擾身心」(大正五二:三二一 上)。
- 「相與」 比丘・比丘尼や出家者・在家者の區別なく、大乘佛「相與」 比丘・比丘尼や出家者・在家者の區別なく、大乘佛」。 道端(一九七九:二九二~三〇九)。
- 覺知有賊,賊無能爲。菩薩摩訶薩能覺一切無量煩惱。旣佛。佛者名覺。旣自覺悟,復能覺他。善男子,譬如有人「自覺察」「善思方便」 南本『大般涅槃經』卷一六「云何爲

惱事故。 〇〇四下)。 朝宋」求那跋摩譯 不病不死 觀於對治。 修集悲心: 令諸煩惱無所能爲, 至心念佛所有功德 是故名佛_ 『菩薩善戒經』 善思方便。 得對治故。觀善三昧」(大正三〇・一 是故名佛。 (大正一二·七一二中)。 爲令衆生 卷八「觀佛功德及以智 得大信心。爲破衆生苦 以是覺故 得解脫故

句切った。「諸大徳僧尼、諸義學僧尼、諸寺三官」は弟子蕭衍又復敬白諸大徳僧尼、諸義學僧尼、諸寺三官。」と(大正四四・八六四下)。 [參考] [梁] 未詳撰者『大般涅槃經集解』卷九(大正三

127

128

敬白」に掛かると解した。

北山蔣帝, 入耳, 巫 我立祠。不爾, 頗有竊祠之者矣。 文又下巫祝, 祠。不爾, 乘白馬. 解綬縛之,有頃遂死。及吳先主之初,其故吏見文于道, 爲神」。漢末,爲秣陵尉,逐賊至鍾山下,賊擊傷額, 人也。嗜酒, [參考1][東晉]干寶『搜神記』卷五「蔣子文者,廣『蔣帝,猶且去殺」 蔣帝と不殺生供物との關係は未詳。 ·我當爲此土地神,以福爾下民。爾可宣告百姓, 日數十處。 「吾不祀我, 執白羽, 侍從如平生。見者驚走。文追之, 將有大咎」。是歲夏, 好色, 挑撻無度。常自謂, 「己骨清. 醫不能治。百姓愈恐。孫主未之信也。 火及公宮。 將使蟲入人耳爲災」。 將又以大火爲災」。 議者以爲鬼有所歸 「吾將大啓祐孫氏, 大疫, 俄而 百姓竊相恐動 小蟲如 乃不爲厲 火災大發 謂日

東北蔣山是也。自是災厲止息,百姓遂大事之」。水校尉,皆加印綬。爲立廟堂。轉號鍾山爲蔣山,今建康宜有以撫之。於是使使者封子文爲中都侯,次弟子緒爲長

武孝建 兵爲固守之計。召王侯朝貴分置尚書都座及殿省。 右直長閹竪王寶孫督戰, 茹法珍曰,「須來至白門前,當一決」。義師至近郊 (五〇一)「及義師起, [參考3][梁]蕭子顯『南齊書』東昏侯紀, 王。蘇侯驃騎大將軍。 稍加爵, 位至相國、 [參考2][南齊] 迎神像及諸廟雜神皆入後堂,一、大將軍、錄尚書、揚州牧、 崔慧景事時,拜蔣子文神爲假黃鉞、 直閤將軍席豪發憤突陣死, 以冠軍將軍王珍國領三萬人據大桁, 復。 城內軍事委王珍國。 (四五四~四五六)初 軍人從朱雀觀上自投及赴淮死者無數。 曹禁淫祀。由是蔣子文祠以下,曹皆毀絕。 明帝立九州廟於雞籠山,大聚羣神。 大都督、 江 四方諸神, 呼爲 郢二鎭已降, 兖州刺史張稷入衞京師, 中外諸軍事, 更修起蔣山祠, 「王長子」。寶孫切罵諸將 禮志「宋武帝永初二年 使所親巫朱光尚禱祀祈鍾山王。至是又尊爲皇 咸加爵秩」。 帝遊騁如舊 莫有鬭志 使持節、 加殊禮, 所在山川 永元三年 於是閉城 蔣侯宋代 眾軍於 叉信鬼

漢末爲秣陵尉 廣陵人。 嗜酒, [參考4] [唐] 及吳先生之初: 好色, 道世 逐賊至鍾山 『法苑珠林』卷六二「漢蔣子文者 跳踉, 其故吏見文於道頭 常自謂 賊擊傷額, 一青骨 日解綬縛之 死當爲神」。 乘白馬

實甲獨七萬人。

七五六上)。 息,百姓遂大事之〈右此一驗出『搜神記』〉」(大正五三: 轉號鍾山 爲中都侯 爲,鬼有所歸,乃不爲沴。宜有以禁之。於是使者封子文 歲火災大發,一日數十處。火及公宮, 未之信也。又下巫呪, 俄有小蟲如麁虻入耳, 文又啓孫氏,「官宜爲吾立祠。有大咎」。是歲夏大疫,百姓酮 此土神。 以福爾下民耳。 侍從如平生。 是歲夏大疫,百姓輒恐動。 以表其靈。今建康東北蔣山是也。 次弟子緒爲長水校尉, 皆加印綬, 「若不祀我,將又以火吏爲災」。是 皆死。醫不能治,百姓逾恐。 見者驚走, 宣告百姓 不爾 文追之謂 爲我立祠。 將使蟲入耳爲災」。 縣主患之。 頗有竊伺之者矣。 自是災沴止 爲立廟堂。

(四)「不得教想」[南朝宋]求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』 (四)「不得教想」[南朝宋]求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』 (四)「不得教想」[南朝宋]求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』

130 廟祝 三・七九八中)。 夢放恕。會稽魏邊多才藝善事神, 侯召爲主簿日促, 廟、日, [唐] 道世『法苑珠林』卷六七「魏劉赤斧者, 尋而赤斧死 特願相屈。魏邊何人而擬斯擧。赤斧因請終 乃往廟陳請。母老子弱,情事果切, 〈右此一驗, 出 請與邊自代, 『志怪傳』〉」(大正五 因叩頭流 夢蔣 乞

銜求也。謂祈福祥、求永貞也,謂若穫禾報社」。(涩) 『祈報』『禮記』郊特牲「祭有祈焉,有報焉」。鄭玄注「祈

「薦生類」『南史』梁武帝本紀上「〔天監十六年=五一七〕三月丙子,敕太醫不得以生類爲藥。公家織官紋錦飾,並斷月丙子,敕太醫不得以生類爲藥。公家織官紋錦飾,並斷用,以去殺之理,欲被之含識。郊廟牲牷,皆代以麪,宗廟,以去殺之理,欲被之含識。郊廟牲牷,皆代以麪,宗廟,以去殺之理,欲被之含識。郊廟牲牷,皆代以麪,果」。『梁書』武帝本紀上「〔天監十六年=五一七〕三

「蔬供」 直前注「蔬果」參照。

「魔行」「魔」字については前注(115)參照。

135 134

136

雖形同俗人,而栖心禪戒,未嘗虧節」(大正五〇・四一七)與其操。帝大怒,敕罷道,作廣武將軍,直華林佛殿。願到其操。帝大怒,敕罷道,作廣武將軍,直華林佛殿。原即敕願還都。帝問願,「何詐荣食」。願答,「菜食已來,即敕願還都。帝問願,「何詐荣食」。願答,「菜食已來,即救願還配,謂願濫匡其士,頗有不平之色。遂致聞孝武,以養食僧」「梁」慧皎『高僧傳』卷一三、法願傳「時沙門僧

上。

138

「**懷賤佛法**」「斷酒肉文」「在家人雖復飲酒噉肉,無有譏嫌。 「<mark>懷賤佛法</mark>」「斷酒肉文」「在家人雖復飲酒噉肉,無有譏嫌。 等好住正法,惡賤邪法。敬重大乘深樂大乘。憐愍衆生,等好住正法,惡賤邪法。敬重大乘深樂大乘。憐愍衆生,等好也不及居家人」

明集』卷一〇)「大象元年(五七九)二月二十七日,王明「怪望弟子」「周天元立有上事者對衞元嵩前僧王明廣」(『廣弘

139

廣答衞 五二・一五七上 曹天私論, 偽道人衞元嵩. 孫弟子王明廣. 此乃偏辭惑上, 元嵩上 兆庶怪望, 『破佛法事』。 旣峯辯天逸: 誠惶誠恐死罪, 誠哉,不便莫過斯甚。 先至難明, 鄴城故趙 抑是飾非. 上書廣言。爲益州野安寺 大國信之, 武帝白馬寺佛圖澄 請廢佛圖 ……」(大正 諫言不納。

143

140

假名僧」 拜」(大正一二・六四二下)。 禮拜供養。若於僧中有破戒者, 應給施禮拜供養。若知是人受畜八法。亦復不應給施所須 山甘藥。誰是持戒,誰是破戒。誰是眞僧, 拜。是優婆塞以肉眼故不能分別。譬如彼人,不能分別雪 和合僧,若持戒,若破戒,於是眾中等應供養, Ш 肉眼故, 不能善別。卽買持歸, 以 言,「汝有雪山藥不」。其賣藥人卽答言,「有」。是人欺詐 味甘相似。時有諸人咸皆欲買, 城市有賣藥人,有妙甘藥出於雪山。亦復多賣其餘雜藥. 天眼者乃能分別。 甘藥」。迦葉, 若聲聞僧中, 餘雜藥, 南本『大般涅槃經卷』第六「復次,善男子, 語買者言,「此是雪山甘好妙藥」。時買藥者以 迦葉, 若優婆塞知是比丘是破戒人, 有假名僧, 便作是念,「我今已得雪 不應以被袈裟因緣恭敬禮 而不識別。 誰是假僧。 有眞實僧 至賣藥所問 恭敬, 不 禮 有

144

145

- 家五眾同犯大小乘俱制」(大正四〇·五七九下)。 十八破法戒。內眾有過,依內法治問,乃向白衣外人說罪,一八破法戒。內眾有過,依內法治問,乃向白衣外人說罪,如問門。 一一一一一一一一一一一一一一一一一一
- した。求那跋陀羅譯『過去現在因果經』卷二「諸臣答言,「外司」「爲寺家自相糺舉」との對句から,世俗の役人と解

142

也」(大正三・六三〇中)。檢覆,無敢懈怠。不知何緣忽有病人。非是我等之罪咎檢覆,無敢懈怠。不知何緣忽有病人。非是我等之罪咎近受王敕,嚴命外司,勿使有諸臭穢老病在於道側。互相

- 聽察所得」『長阿含經』 勿復爲賊」。餘人轉聞有作賊者,王給財寶。 之,而告之曰,「汝以此物供養父母幷恤親族, 王治之」。王卽問言, 窮飢餓不能自存故爲賊耳」」 (大正一・四○中)。 王治之」。王復問言。「汝實爲賊耶」。答曰,「實爾。 盜他物,復爲伺察所得,將詣王所白言,「此人爲賊 窮飢餓. 奪盜賊滋甚,伺察所得, 不能自存。故爲賊耳」。時王, 「汝實爲賊耶」。 卷六「時國人民轉至貧困 將詣王所白言, 答曰, 即出庫物以供給 「此人爲賊 「實爾。 於是復行劫 自今已後 遂相侵 我貧
- 悔者,然後乃可糺擧我罪」」(大正二‧四三〇上)。是罪,時有罪人」。復語彼言,「汝今自犯如是之罪。若懺紀》」『別譯雜阿含經』卷八「有罪人言,「汝於今者,犯如
- 依 『涅槃經』」 南本『大般涅槃經』卷一「善修戒行威儀具 禁戒者,我當罷令還俗策使。有能深樂護持正法,我當敬、、,語勝佛正法者,當斷其舌」。復作是願,「若有出家毀 字羖羝德及波斯匿王, 在舍衞祇陀精舍那梨樓鬼所住之處。 淨德離車子」(大正一二・六〇七上)。同卷七「若有說 常欲樂聞大乘經典, 重如事父母。若有眾僧能修正法,我當隨喜令得勢力」。 爲令甘露無盡正法深奧之藏久住於世。願令我等常得修學 足,摧伏異學壞正法者。常相謂言,「我等當以金銀倉庫 其名曰淨無垢藏離車子, 聞已亦能爲人廣說。皆悉成就如是功 說言 淨不放逸離車子, 「比丘不應受畜金 爾時, 如來因婆羅門 恒水無垢 銀 言佛

奴 璃

眞珠,

瑙

珊瑚

珀

珂貝,

壁玉

僕使,

童 葉

女

猫

偽 協 曲

貪利無厭,

愛樂慣開, 戲笑談說。貪嗜魚肉,

種畫像。

積聚穀,

米,

大小麥,

豆及諸菓蓏。親近國王,

治壓香油,

捉持寶蓋及以革屣

造扇,

箱篋.

種 和 姦

十四能:

復有十八惑人呪術,

種種工巧。或說世閒無量俗

149

鬼神品に名が見える。

散香,

塗香, 薰香,

種種花鬘

治髮方術。

推步盈虚,床敷队具。

自磨,

自春。

治身呪術.

資生所須,

所謂屋宅,

,調鷹方法耕田種植,

販賣市易

仰觀星宿

鍑,

大小銅盤

種種雜色

148 147

占相男女, 解夢吉凶。是男是女非男非女,

146

策使」

「百喩經」

卷四

在我國內,

制抑,

洗淨不洗淨者」。驅令策使種種苦役。

詐言,「洗淨人,爲其著水,

卽便

「昔有國王設於教法,「諸有婆羅門等

有婆羅門,

空捉澡灌,

四中)。 丘中, 淨之處, 生疑惑, 魔眷屬。 等經律所制: 如是種種不淨之物,於施主前躬自讚歎。出入遊行不 應當休道還俗役使,譬如莠稗悉滅無餘」。當知是 多語妄說長, 所謂沾酒,婬女,博奕。如是之人我今不聽在比 若有隨順佛所說者, 悉是如來之所說也。若有隨順魔所說者, 短,好,醜,或善,不善。 卽是菩薩」(大正一二・六四 。 好著好 是

王子,大臣及諸女人,高聲大笑,或復默然。於諸法中多

まり 日本 ファン

「其餘小僧故自妄言」 未詳。

- 龍王・伊那滿龍王を除けば,他は曇無讖譯『金光明經』雀王・封頭王・一切持咒神王・六方大護都使安國・五方「金剛密迹…如是一切菩薩龍王」 列記される諸善神のうち孔
- 孔雀王」 尼孔雀王,迦毘羅聞獨覺四果羅漢, 法神王, 道場, 醯首羅王, 如意王二十八部 受弟子香煙供養請」(大正一九・二八下)。 『藥師如來觀行儀軌法』 須彌峰頂大將軍, 天布單那王, 二十八部鬼神大將, 迦毘羅, 雅,金毘羅王,持呪安國王,道心王,四天大王,三十六國持呪大師子王, 密跡金剛藏王, 管領五嶽神將飛輪走釼。 「大慈菩薩五部明王, 不捨慈悲證明弟子, 阿吒婆俱護 降此

「封頭王」 未詳。

150

<u>151</u>

- 「**五方龍王**」 『慈悲道場懺法』卷八「今日道場同業大眾, 足力,有大威德力, 妙化龍王,頭化提龍王, 復至誠五體投地,奉爲十方盡虛空界一切不可思議龍王, 歸命敬禮一切世閒大慈悲父」(大正四五・九五四下)。 龍王, 海龍王, 青海龍王, 若近若遠, 東西南北四維上下, 遍空法界, 護形命龍王, 日宮龍王, 如是一切龍王一切龍神, 五方龍王,天龍王,地龍王,山 月宮龍王, 星宮龍王, 歲時龍 護眾生龍王, 乃至十方若內 各及眷屬 有大神 重
- タ Erāpatha という龍王のことか。)「伊那滿龍王」 未詳。伊那滿は伊那鉢那と同じくエーラーパ
- 比丘,比丘尼,優婆塞,優婆夷。天,龍,夜叉,乾闥婆,八部神王」 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷二「爾時,四部眾。

外似沙門

內實虛欺。

如捉空瓶

但有外相」出家凡夫

(大正四·五 復避王役,

153

詐現持戒.

用避王役」。

妄言洗淨.

實不洗之。

頭

染衣

瀉

棄」。便作是言,

一我,

不洗淨, 王自洗之。

爲王意故:

(大正九・一二上)。 佛前,受阿耨多羅三藐三菩提記,心大歡喜踊躍無量」阿修羅,迦樓羅,緊那羅,摩睺羅伽等大眾。見舍利弗於

155

刳心擲地, 以示僧尼, 正數片肉」 ے ک 略されているものと解し、 自らの本心を明かすことだと思われるので,「與」は省 が係る先もなくなるものと解した。ここでの文意は「以 では「使人刳心著地、正與數斤肉相似」であり、 藏は缺字。梁武帝が素材にしたと思われる『杜氏新書』 再雕本は「與」に作り、 て僧尼に正に數片の肉〔となった狀態〕を示す」ことで 「與」の兩字がある。 「人をして心を刳り地に著せしめる 斷酒肉文」では「相似」が記されないことで「與」 正に數斤の肉と相ひ似る」と讀むか。 江南諸版本は「丐」に作り、 諸版にない 「正」字を高麗初彫本と 「正」字を採用し 字

喜欲恕折節謝己, 況示委曲。 「魏志』卷一六、 夫法天下事 無不致嫌隙也。 諷司馬宋權示之以微意。 杜畿傳、 以 裴松之注 善意相待 而議者言 「【杜氏新書』 凡人天性皆不善 無不致快也。 恕答權書曰 日

> 南面, 數斤肉相似,何足有所明,故終不自解說。程征北功名、、,遭明達君子亮其本心。若不見亮,使人刳心著地,正、 必至。 信向。 之宜。 達。君子,亮其本心。誰知我不貪天下。唯當行人所 下本非宿志。杜恕有云,「刳心擲地,數片肉耳」。所賴明 不噉魚肉。雖自內行,不使外知。至於禮宴群臣, 不得以及溫淸,朝夕供養。何心獨,甘此膳。因爾, 在僕言也」。喜於是遂深文劾恕」。梁武帝「淨業賦 程征北明之亦善,不明之亦善, 謂之是邪, 菜食未習體過黃羸。朝中斑斑始有知者。謝朏 在僕前甚多, (『廣弘明集』卷二九)「朕布衣之時, 令天下有以知我心」(大正五二・三三六上)。 方丈滿前, 故推一心, 任一意, 富有天下。遠方珍羞, 烹宰眾生,以接賓客。 屢勸解素。乃是忠至, 不能自諧在其閒也。 則非上司彈繩之意。 是僕諧也。呼爲非邪, 更墮其調中。 有人出征北乎。若令下官事無大小, 百味盈俎。乃方食輟, 直而行之耳。殺胡之事, 故終不自解說。程征北功名宿 然以年五十二, 未達朕心。 朕又自念, 若咨而不從, 貢獻相繼。 隨物肉食, 不識菜味。 僕得此輩, 諸君子自共爲其心耳, 僕自受之, 唯知禮義, 海內異食, 筯對案流泣。恨 又非上下相順 無所怨咎。 不知 孔彦 及至 弁 不

情說不言有厥咎」」。 首曰「非知之艱,行之惟艱。王忱不艱,允協于先王成德, 旨哉說。乃言惟服。乃不良于言,豫罔聞于行」。說拜稽 「古人有言,「非知之難,其在行之」」『尚書』說命中「王曰

抱朴子

極言篇

「抱朴子曰

「俗民既不能生生

而

務所

也。非聞道難也,行之難也。非行之難也,終之群之無益,故捐丸散而罷吐納矣。故曰非長生難也, 沃,水澤雖美, 使人必爲也。夫修道猶如播穀也,成之猶收積也。 匠能與人規矩, 抵之據未極 不信道之民也。患乎升与之利未堅,而鍾石之費相尋 服食終日 其知道者補而救之, 重言之耳。 夫有盡之物, 則肉飛骨, 而受氣各有多少, 而冰霜之毒交攻。不知過之在己: 不能使人必巧也。 而爲之失天時, 凡人利入少而費用多者 導引改朔, 不能給無已之耗。 人無少長 多者其盡遲,少者其 然後方求量表之益。 耕鋤又不至,登稼被壟 明師能授人方書 則羽翮參差. 莫不有疾 猶不供也 江河之流 終之難也。 而反云道 厥田雖 聞道難 不能 良 根

「本心」 阮瑀 張銑注 相扇揚 所以至億也。若能愛之於微,成之於著,則幾乎知道矣」」。 不修,不可以小損爲無傷而不防。凡聚小所以就大,積一 而忽茂矣。故治身養性, 莫之見也,而忽盡矣。 人尚不悟其易, 也,又不知損之爲損也, 不穫不刈, 事結舋連, 「爲曹公作書與孫權」(『文選』卷四二) 頃畝雖多, 通也。 安能識其難哉。夫損之者如燈火之消脂 言我想通孫權本心不願此事 推而行之,想暢本心, 猶無獲也。 凡夫不徒不知益之 爲益 益之者如苗禾之播殖, 莫之覺也 務謹其細,不可以小益爲不平而 夫損易知而速焉,益難知而遲焉 不願於此也」, 「加劉備 劉備扇

162

157

進,從初發意,至于道場,於其中閒身口意行,無有須臾(运) 「道場」 無羅叉 (無叉羅) 譯『放光般若經』卷一五「菩薩精

而成」。

得不成」(大正八・一〇七中)。 食息懈廢。持是不懈之意,我當成阿耨多羅三耶三菩,不

159

於酒放逸」 曇摩耶舍、曇摩崛多共譯『舍利弗阿毘曇論』卷 於逸人。云何不飲酒不放逸是優婆塞戒。若於彼業不樂、 放逸人。云何不飲酒不放逸是優婆塞戒。若於彼業不樂、 放逸人。云何不飲酒不放逸是優婆塞戒。若於彼業不樂、 放逸人。云何不飲酒不放逸是優婆塞戒。若於彼業不樂、 在文章葉一渧,彼業是飲酒放逸處。若行彼業者,是名飲酒 至草葉一渧,彼業是飲酒放逸處。若行彼業者,是名飲酒 至草葉一渧,彼業是飲酒放逸處。若行彼業者,是名飲酒 至草葉一渧,彼業是飲酒放逸處。若行彼業者,是名飲酒 不飲酒不放逸處是優婆塞戒」(大正二八・五七四下)。

頌,姪欲之辭欲亂道意」(大正三·四七〇下)。 「於是三女,嚴莊天服,從五百玉女,到菩薩所,彈琴歌「於是三女,嚴莊天服,從五百玉女,到菩薩所,彈琴歌「姪欲」 偽經(傳竺大力、康孟詳共譯)『修行本起經』卷下

160

161

「欺誑妄語」『抱朴子』勤求「每見此曹欺誑天下以規世利者,「欺誑妄語」」「担會集當知,惡欲憎嫉恚,不語結恨慳,嫉妬諂欺誑。在眾詐言息,屛處稱沙門,陰作諸惡行,惡見不守護。欺在眾詐言息,屛處稱沙門,陰作諸惡行,惡見不守護。欺在眾詐言息,屛處稱沙門,陰作諸惡行,惡見不守護。欺不以為此曹欺誑天下以規世利者,

「乳蜜」 乳・蜜・蘇・酪等は美食とされ、律では、 [參考] 諸比丘入舍衞城乞食, 美食爲身索, 乳、酪、生酥、熟酥、 ないのに自ら求めて食すると波逸提になる。鳩摩羅什譯 『十誦比丘波羅提木叉戒本』「若比丘、 鳩摩羅什等譯 蜜、 波夜提」(大正二三・四七五上)。 肉脯 油、 時檀越施種種好食, 『十誦律』 諸比丘不取 肉脯, 卷三八「佛在舍衞國。 若比丘無病: 諸家中如是美食, 將無是乞美食耶 酪 病氣では 如是

乃至夢中不飮乳、蜜,無論現前。若覆若興,畢竟淸淨_ Pelliot chiois 二一八九號,黃・吳一九九五:二八三~二八八頁) 二八八頁頭註)。梁武帝『東都發願文』(敦煌出土文獻 祥·磯田熙文『大般涅槃經 「五種の牛味」とは乳、 作是說者, 除是之外, 說經律」(大正一二・八八二中)。南本『大般涅槃經』 作壽命想, 言うのは魔說とされる。法顯譯『大般泥洹經』 大乘の涅槃經では、 「又願從今以去,至乎道場,生生世世,不復瞰食眾生, ·佛先聽食五種牛味及以油、 草木之屬皆有壽命。 若有說言, 慈悲心故, 當知卽是魔之所說」(大正一二:六四七上)。 佛言,「不乞而得應受」」(大正二三・二七六中)。 乳・蜜等を一切食べてはいけないと 「聽著摩訶楞伽: 泥洹長滅 (南本) I』, 大藏出版、二〇〇八、 佛說是已便入涅槃」。 諸穀米等悉不服食, 生酥、熟酥、醍醐 如是相貌: 憍奢耶衣、 一切種子悉聽貯 當知是爲魔 革屣等物。 若有經律 於諸草木 卷四「乳、 (塚本啓

164

縣十一, 譬如牛乳, 氣。自梁水、興古、西平三郡少穀。有桄榔木, 以牛酥酪食之。人民資以爲糧, 醍醐爲第一。象首。 酥酪。『華陽國志』卷四「興古郡。建興三年置。 佛陀耶舍、竺佛念共譯『長阿含經』卷一七 戶四萬, 酥」(大正一・一一二中)。 乳變爲酷, 如是展轉, 去洛五千八百九十里。多鳩獠濮 酪爲生酥, 至醍醐時. 當有乳時, 生酥爲熟酥, 南本『大般涅槃經』 唯名醍醐: 唯名爲乳, 欲取其木, 不名爲乳, 不名爲酪 熟酥爲醍 「象首。 先當祠 可以作 屬

> 至醍醐亦復如是。善男子, 故言乳中而有酪性」(大正一二・七七五中)。 正因者, 眾生亦謂是酪非乳, 如人二能: 是故, 乳時無酪 如乳生酪。 我言乳中無酪。 言金鐵師。 亦無生酥、 緣因者, 因有二種。一者, 如其有者, 熟酥及以醍醐。 醍醐, 生酥、 正因,二者 何故不得 一切眾

(16) 「悔過」『孟子』萬章上篇「太甲悔過,自怨自艾」。『長阿含者苦治,令行禁止,莫不率從」(大正五二・二九五上)。(15) 【15) (15) 【15) (15) 【15)

善眾 瓶沙王以法治化, 無有偏枉, 經』卷一七「爾時,阿闍世王卽從坐起, 唯願世尊加哀慈愍, 求那跋陀羅譯 唯願世尊受我悔過, 優婆塞淨信, 『雜阿含經』 受我悔過」(大正一・一〇九中)。 優婆夷亦然 我爲狂愚癡冥無識, 而我迷惑五欲, 是名爲善眾 「比丘持淨戒,比 頭面禮佛足,白 (大正

「清淨佛道」 鳩摩羅什譯『大智度論』卷一一「復次,略說法

168

- 疑焉」(大正五二・三三中)。 佛經以殺生罪重,地獄斯罰。冥科幽司,應若影響。餘有(饴)「幽司」 慧遠「明報應論,答桓南郡」(『弘明集』卷五)「問曰,
- 時止則止」。

 時止則止」。

 時止則止」。

 時止則止」。

 「隨時」 『易」隨「大亨貞,無咎,而天下隨時,隨時之義大(10) 「隨時」 『易」隨「大亨貞,無咎,而天下隨時,隨時之義大

- 義學僧尼諸寺三官。夫匡正佛法是黑衣人事,迺非弟子白(四)「**匡正佛法」**「斷酒肉文」旣出「弟子蕭衍敬白諸大德僧尼諸

衣所急」(大正五二・二九四中)。

174

(15) 「佛子不續」 直前注。

176

- 職,奏議可述」。「容受」『漢書』成帝紀,贊「博覽古今,容受直辭,公卿稱
- 解舍戶數,付度後人」。 身,須遞相檢示,有失不推,當局任罪。令長代換,具條)「任罪」『陳書』宣帝紀、太建二年八月甲申詔「在職治事之

177

178

- 「四天王」 東方提帝賴吒(Skt. Dhṛtarāṣṭra 持國天)南方毘樓 賴吒, 目天)、北方毘沙門天(Vaiśravaṇa 多聞天)。『長阿含經』 勒天(Virūḍhaka增長天)、西方毘樓博叉天(Virūpākṣa 廣 三:10中)。 留博叉,此云雜語主。北方毘沙門, 其方面,各當位坐,提帝賴吒天王在東方坐, 卷五「一時, 忉利諸天集法講堂, [參考]吉藏『仁王般若經疏』卷一「四天王。東方提頭 王在北方坐, 其面南向, 毘樓博叉天王在西方坐, 帝釋在前。毘樓勒天王在南方坐, 此云持國主。南方毘留勒叉, 帝釋在前」(大正一・三〇中)。 其面東向, 有所講論。 其面北向, 帝釋在前。 此云多聞主」(大正三 此云增長主。西方毘 時四天王隨 帝釋在前。 其面西向 毘沙門天
- 龜茲,於中路欲反。乃現形告辭禪師曰,「汝神力通變自多傳「初禪師之發罽賓也,有迦毘羅神王衞送禪師,遂至「迦毘羅神」 Skt. Kapila か。『出三藏記集』卷一四、曇摩蜜

「今重復欲通白

言

『春秋穀梁傳』

僖公二十八年

曹伯

182

親近、 潔誠祈 〇九上~中)。 南方天王毘樓博叉、 誦摩訶摩耶所可演說及此神呪, 审 |摩耶 都 略) 散脂修摩羅神, 處, 擁護、 經 故 北方天王第一 仍於上寺圖像著壁。 卷上 不相 莫不享願」 隨侍, 隨 「持此呪者亦應稱喚東方天王提頭賴 共往南方」。 一輔臣迦毘羅夜叉、全西方天王毘樓勒叉、 有如是等諸大鬼神統四天下。 一切諸患皆悉除滅」(大正一二・一〇 (大正五五・一〇五中)。 迄至于今, 語畢卽 是諸善神又聞喚名, 金髮大神、 收影不見。 北方天王毘沙門。 猶有聲影之驗。 若有讀

184

- (图) 「寺官」「斷酒肉文」既出「今日大德僧尼、今日義學僧尼、
- 下)。

 下)。

 「障纍」 [參考]『大般涅槃經集解』卷一,寶亮說「今涅槃之(題) 「障纍」 [參考]『大般涅槃經集解』卷一,寶亮說「今涅槃之」。
- 招致苦果」 惡心所作所說, 三五一上)。 秦]竺佛念譯『出曜經』 雜阿含經』 舌蚩言, 爲自惡知識。 『後漢書』陳龜傳 喪滅門族」(大正四・七一五中)。 求那跋陀羅譯 (善因)→樂果, 鳩摩羅什譯 卷四八 「愚癡人所行, 皆受苦果。 所造眾惡行, 『成實論』 卷二〇「舌爲劍戟, 惡業 「呼嗟之聲, 善心亦爾」 (惡因)→苦果 卷六「如 終獲苦果報」(大正二・ 不合於黠慧。 (大正三二・二八六 招致災害」。 『法句』 招致殃禍。 中說 後

- 僖公二十八年「楚一言而定三國。 (大正四、三九七下)。『書』立政「時則勿有閒之, 通王 我則末惟成德之彦, 到比丘所, 覺慧等譯 復中 國也。 而語之言, 以乂我受民」。『春秋左氏傳』 『賢愚經』 天子冤之, 我一言而亡之」。 我欲見佛, 卷六「 因與之會。 時王 爲通白_ 自一話
- 閻浮提壽云百二十」 閻浮提はジャンブ (ー) ドゥヴィー 至1、; 中天者多。東弗于東人, 百二十歲,中夭者多。東弗于東人, 無量,或至八萬四千。依『長阿含經』,閻浮提人, 無量,或至八萬四千。依『長阿含經』,閻浮提人, 賢劫中,人壽百二十歲,應文なし)。[北涼] 曇無 單越人, 上壽一百二十五歲。中壽一百歲。 卷二「如『毘曇』 過此以往, 千年也》」(大正五三・二八一中~下。『長阿含經』 Jambu (/bū) dvīpa の漢字音寫。 八中)。 人壽千歲 人壽三百歲〉。西俱耶尼人,人壽三百歲。 嵇康『養生論』「或云,上壽百二十, 莫非妖妄者」。 說, **曇無讖譯『悲華經』卷八「娑婆世界** 〈餘三方人並有中夭者,唯北洲人定壽 閻浮提人, 爲老病死之所纏縛」 唐 下壽六十歲。其閒中夭 壽命不定, 人壽二百歲〈『樓炭 道世『法苑珠林 (大正三・二 有其三品。 現存本に對 古今所同 <u>ن</u>ر

歲, 百, 歲, 一 一 一 歲, 一 聚, 一 聚, 、 須 臾 頃, 如生一日, [參考1] 邪偽無有智, 遠正不持戒, 事戒者福稱」 ,精進受正法。若人壽百歲,素『法句經』卷上「若人壽百歲, 不如生 不如生 不如生一日, (大正四·五五九下)。 日, 二月 勉力行精進。 一心學正智。 守戒正意禪。 奉火修異術, 邪學志不善,不 不如

見甘露道 [參考2]『莊子』 盜跖篇 不如生一日,學推佛法要」(大正四:五六四下)。 不如生一日, 不如生一日, 服行甘露味。若人壽百歲,不見微知所忌。若人壽百歲,不 「人上壽百歲,中壽八十, 不知 不

185 '至於世閒,罕聞其人」

186

『經』言, 遷變零落, 卷下「成實師實法三相,一念六十刹那。前二十爲生,な定義するかについては諸說ある。[隋唐] 吉藏『百論疏』 落,皆墮也。草曰零,木曰落」。[後秦] 竺佛念譯『出曜、離縣「惟草木之零落兮,恐美人之遲暮」。王逸注「零、面皺。死者,身壞命終」(大正一二‧六三二中)。『楚辭』 眾但聞猛獨言。所以咸知驗實者。 零陵太守羊闡亦預法集。自〔道〕猛與〔僧〕妙講論往反 少」(大正五一・八〇六下)。同卷上「時一堂道俗百餘人。 然薄閑醫診, 不好明法, 穎川人也。容貌最陋, 經』卷二三「世多有人宿少疹患, (大正四・七三二上)。『釋門自鏡錄』卷上 識, 南本『大般涅槃經』卷五「老者,名爲遷變。 「以一念頃,有六十刹那」」 (瞬間・一瞬) 說其形色擧動, 亦無宿少」(『釋門自鏡錄』作「遷變零落,無閒宿 の漢字音寫。その時間的長さをどう 年臘宿少。莫不符同」(八一一中)。 言情鄙僻。雖造淨居, 爲淺識所知由斯, 〔道〕猛與〔僧〕妙不 刹那はクシャナ Skt 皆由前世報應之果 「道契姓陳氏 **矜誕輕陵宿**

187

十念,念念生滅」(大正二五・六四有六十念」(大正二五・二八三下)。 鳩摩羅什譯『大智度論』卷三○「如『經』說,一彈指頃 哉」(大正三八・三五六中)。 不實則爲空,空則常淨。然則物物斯淨, 諸法乃無一念頃住。 法如電新新不停。一起一滅不相待也。彈指頃有六十念過 「注維摩詰經」卷三「〔僧〕肇日, 卷下「彈指之頃,有六十念」(大正一五・二九五下)。 念念生滅」(大正二五·六四三中)。 中二十 況欲久停。 相」(大正六五・三四下)。[比較] 無住則如幻, 成前無相常淨義也。諸 同卷八三「彈指頃, 何有罪纍於我 同譯 如幻則不實 『禪法要

此云「念頃」。於一彈指頃,有六十刹那。一百二十刹那[參考1][唐]法藏『華嚴經探玄記』卷一八「刹那者, 此云「須臾」。三十摩睺妒路名一日一夜」(大正三五・四五 那名一羅婆(lava)。三十羅婆名一摩睺妒路 名一呾刹那(Skt. tatkṣaṇa), 同此閒『瞬息頃』。六十呾刹 八「刹那者, (muhūrta),

那」。 又說,「如壯夫以極利刀斷迦尸細縷! [參考2][南朝宋]僧伽跋 刹那量者, 刹那。如是一切」。 (大正二八・八八六下)。 有說,「如壯夫疾迴歷觀眾星, 又說,「如壯夫彈指頃, 摩譯『雜阿毘曇心論』卷二 頃,經六十四刹 隨其所歷一星, 斷一縷,一刹

悉皆空故。以甚深般若波羅蜜多。 卷上「一念中有九十刹那。一刹那經九百生滅。諸有爲法[參考3]僞經(傳鳩麞羅什譯)『仁王護國般若波羅蜜經』 (大正八・八三五下)。 照見諸法 諸有爲法 切皆空

玄奘譯『阿毘達磨俱舍論』 卷一二「「對法」

十刹那爲生相:

是本無今有。

後二十刹那爲滅相

『中論疏記』卷二本「一念實有六十刹那。

(大正四二・二九〇上)。[日本平

量」(大正二九・六二上)。師說,如壯士一疾彈指頃,六十五刹那。如是名爲一刹那

188

生老無常, 飲食不消, 曾經嬰兒、 拄杖羸步。太子卽便問從者言,「此爲何人」。從者答曰: 太子與諸官屬 求那跋陀羅譯『過去現在因果經』卷二 (四門出遊) 酬於往因。 卷九) 「無常者 (大正三・六二九下)。 "此老人也」。太子又問, 那是天竺國音 『淨名』 男女盈路: 童子、少年, 氣力虛微。坐起苦極,餘命無幾。故謂爲老」」 歎曰,「比丘卽時生老滅矣」〉。……生滅遷變 善惡交謝, 觀者如雲。 前後導從, 前滅後生, 迅速之極名也。 梁武帝 生乎現境」(大正五二・五四中~下)。 遷謝不住,遂至根熟,形變色衰'「何謂爲老」。答曰,「此人昔日 時淨居天化作老人, 出城東門。國中人民, 刹那不住者也 「立神明成佛義記 生而卽 寧有住乎。 形變色衰。 頭白背傴 聞太子 爾時

蹔有諸根, 中。 身體消減, 夢爲蝴蝶, 身」(大正二五・二〇二上)。『莊子』齊物論篇「昔者莊周 身及眼等諸根是爲內身, 次,眼等五情爲內身, 大造色爲外身。覺苦樂處爲內身,不覺苦樂處爲外身。 ?有衰滅,富貴人希樂,衰滅世]」。鳩摩羅什譯『大莊嚴論經』 何故名死。 俄然衰滅」 鳩摩羅什譯『大智度論 柱杖羸步, 栩栩然胡蝶也。.....。 僧伽婆羅譯 更覓受生處: 諸根衰耗, 色等五塵爲外身。四大爲內身 妻子財寶田宅所用之物。是爲外 衰滅世憎惡」(大正四・二八三 『文殊師利問經』 彼行業熟 卷五「富貴雖熾盛,會 此謂老。 俄然覺, 此謂爲死。 死者, 卷上 』卷一九「復 則蘧蘧然周 「老者 兀

190

「三途等苦」「三途」は 則墮餓鬼。 六・三四〇下)。 怨賊。是『經』能除穀貴饑饉。是『經』 『經』能與眾生快樂。是『經』能令地獄、餓鬼、畜生諸生歡喜,亦爲護世之所讚歎。此『經』能照諸天宮殿。是 念; 是 二·八六下)。[北涼]曇無讖譯『金光明經』 雖受微福, 法要」(僧祐 『弘明集』 卷一三) 「反十善者, 之,是『經』能滅一切眾生無量無邊百千苦惱」(大正一 是『經』能滅惡星變異。是 河焦乾枯竭。是『經』能除一切怖畏。是『經』能却他方 『金光明微妙經典』, 莊嚴菩薩深妙功德, Skt. gati (行き先, 則入地獄。抵揬强梁, 不免苦痛。 其罪若轉. 則或墮畜生, 「三塗」「三悪道」とも。 少而多陰。私情不公亮, 此謂三塗, 眾『經』之王,諸佛世尊之所護 常爲諸天之所恭敬,能令天王心 到着地)の譯。 或生蛇虺。 慳貪專利, 『經』能除一切憂惱。 不受忠諫。 亦謂三惡道」(大正五 [東晉] 郗超 能愈一切疫病。 謂之十惡。 卷二「世尊, 及毒心內盛 常苦不足 皆墮鬼神

九二三下)。 九二三下)。 九二三下)。

酸鹹,倏忽之閒,墜於公子之手」。『淮南子』脩務訓「且條忽便及」『戰國策』楚策四「〔黃雀〕晝游乎茂樹,夕調乎

不脱患。若瞋不加報,能伏於大怨」」(大正二‧四六九中)。來自坌身。欲以瞋加彼,彼受必還報。是二竝名惡,兩俱淸淨無結使,若欲惡加彼,惡便及己身。如逆風揚土,塵阿含經』卷一四「爾時,世尊以偈答曰,「可瞋而不瞋,夫精神滑淖纖微,倏忽變化,與物推移」。失譯『別譯雜

196

悪,不生起未起善,不勤方便名懈怠」(大正二八·八八一(四)「**不勤方便」**僧伽跋摩譯『雜阿毘曇心論』卷二「不斷起未起(四)「雖復」 嵇康『家誡』「雖復守辱不已,猶當絕之」。

197

(別)「亦無是處」「岩ノ」處有ル無シ」(あり得ない・不可能である) は Skt. na... avasthānam(〔そのことが可能となるような〕 は Skt. na... avasthānam(〔そのことが可能となるような〕 無有是處」(大正九・四四下)。南本『大般涅槃經』卷二九 無有是處」(大正九・四四下)。南本『大般涅槃經』卷二九 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫, 「若人遠離修習聖道,得解脫者,無有是處。不得解脫,

198

後報業强」 廬山慧遠「三報論」(『弘明集』卷五)「『經』 二生、三生、百生、千生,然後乃受。受之無主,此始於此身,卽此身受。生報者,來生便受。後報者,有三報。一曰現報。二曰生報。三曰後報。現報者, 其門」(大正五二・三四中)。 然之賞罰,三報之大略也。 心,心無定司,感事而應。應有遲速,故報有先後。 得涅槃者, 咸隨所遇而爲對。對有强弱,故輕重不同。 名曰無記。 何故名無記。答曰, 又善不善業皆能得報, 非夫通才達識入要之明, 鳩摩羅什譯 此是業名字。若業非善非不 『成實論 此業不能生報 斯乃自 必由於

195

敗種不能生牙」(大正三二・二九五中)。 故名無記。所以者何。善不善業堅强,是業力劣弱。譬如

- 信佛語」僧伽跋摩譯『雜阿毘曇心論』卷二「於三寶、四諦信佛語」僧伽跋摩譯『雜阿毘曇心論』卷二「於三寶、四諦 然們 僧伽跋摩譯『雜阿毘曇心論』卷二「於三寶、四諦 法,敬禮事我」(大正二八・八八一中)。『中阿含經』卷 恭,敬禮事我」(大正一、四八四中)。
- (大正二五·一七二中)。 必望得水。又如鑚火,已得見煙,倍復力勵,必望得火」 必望得水。又如鑚火,已得見煙,倍復力勵,必望得火」 更得妙勝禪定、智慧。譬如穿井,已見濕泥,轉加增進, 東得妙勝禪定、智慧。譬如穿井,已見濕泥,轉加增進,
- 情心薄少」 竺佛念譯『四分律』卷一三「大臣語比丘僧言、「信心薄少」 竺佛念譯『四分律』卷一萬少。慧心薄故,善心羸劣,不善熾盛。善心羸故,慧心薄少。慧心薄故,善心羸劣,不善熾盛。善心羸故,世食我有信心耳」(大正二二·六五六上)。南本『大般涅槃經』卷二○「凡夫之人,二二·六五六上)。
- 惡覺觀。如是則不久,疾得無上道,如人行善者,必當得同卷一三「若人決定心,住八大人覺,爲求佛道故,除諸獨受諸勤苦,獲安隱果,而與一切共」(大正二六‧二〇下)。「自强」『楚辭』九章,懷沙「懲連改忿兮,抑心而自强」。

200 199

「菜蔬、魚肉,俱是一惑」 未詳。

妙果」(大正二六・九二下)。

202 201

女人受持是經,若讀若誦,若解說若書寫,得千二百舌功「甘露上味」 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷六「若善男子、善

出深妙聲能入其心,皆令歡喜快樂」(大正九·四九中)。成上味,如天甘露無不美者。若以舌根於大眾中有所演說,德。若好若醜,若美不美,及諸苦澁物,在其舌根,皆變

(203) 「臭穢下食」 未詳

205

『楞伽阿跋多羅寶經』卷四「我常說言,「凡所飲食,作食、肉者斷大慈種」」(大正一二・六二六上)。求那跋陀羅譯 常當應作食子肉想。云何弟子而聽食肉。諸佛所說,其食卷三「善男子,我從今日,制諸弟子不聽食肉。設得餘食, 子肉想, 復白佛言,「世尊,云何如來不聽食肉」。「善男子,夫食 肉。若受檀越信施之時,應觀是食如子肉想」。 護法菩薩應當如是。善男子, 從今日始, 經』卷四「佛讚迦葉,「善哉善哉,汝今乃能善知我意。 肉者斷大慈種」(大正一二・八六八下)。 (大正一六・五一三下)。 、、、『楞伽阿跋多羅寶經』卷四「我常說言,「凡所飮食, 令作子肉想」 作服藥想。故不應食肉。聽食肉者,無有是處」」 法顯譯『大般泥洹經 南本『大般涅槃 不聽聲聞弟子食 (六卷泥洹) 迦葉菩薩

206

者當觀,因於飲食,身得增長。我今出家,受戒修道,爲書、亦隨遠離,是沙門法。若於夢中與共同處,雖不知戒,如香華等令人寬縱,心起放逸。皆由晝見心隨生故,則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云則有夢想。彼夢覺已,亦增亂念。以食子想而行乞食。云即眾生,爲飲食故,身心受苦。若從眾苦而得食者,我當觀,因於飲食,身得增長。我今出家,受戒修道,爲當觀,因於飲食,身得增長。我今出家,受戒修道,爲如眾生,以與其之。

二·八三六下)。 受食,猶如曠野食其子肉,其心厭惡,都不甘樂」(大正受食,猶如曠野食其子肉,其心厭惡,都不甘樂」(大正欲捨身。今貪此食,云何當得捨此身耶。如是觀已,雖

- [**且置遠事,止借近喩**] [參考]僧肇『肇論』九折十演,辯「**且置遠事,止借近喩**] [參考]僧肇『肇論』九折十演,辯
- 「**菜茹**」『漢書』食貨志上「還廬樹桑,菜茹有畦」。顏師古注明集』卷二六)「夫神道茫昧,求諸不一,或尙血腥之祀,頭飢蘊藻之誠。設敎隨時,貴其爲善。其誠無忒,何往不通」(大正五二·二九四上)。
- 荣茹」。 「茹,所食之菜也」。『後漢書』孔奮傳「躬率妻子,同甘 「**菜茹」**『漢書』食貨志上「還廬樹桑,菜茹有畦」。顏師古注

207

208

「不善惑」「暫定案として「善惑」を善ナル惑イ、 「不善惑」を不善ナル惑イと解し、善惑は衆食を、不善 「不善惑」を不善ナル惑イと解し、善惑は衆食を指すと考えてみた。菜食も「惑」と見なす理 恵は、食欲という欲望であるから。「食欲」は次を參照。 西本『大般涅槃經』卷二五「復次、善男子、出家之人有 四種病。是故不得四沙門果。何等四病。謂四惡欲。一爲 と出家病。有四良藥能療是病。謂①糞掃衣能治比丘爲衣 惡欲。②乞食能破爲食惡欲。③樹下能破臥具惡欲。4身 心寂靜能破比丘爲有惡欲。以是四藥除是四病,是名聖 心寂靜能破比丘爲有惡欲。以是四藥除是四病,是名聖 行」(大正一二・七七一下)。

- 209 就善惑中重爲方便」
- 210 菜蔬冷, 使人虛乏疲頓。虚弱,而風冷客 使人虛乏疲頓。致羸損不平復,謂之風冷虛勞」。 虛弱,而風冷客之。風冷摶血氣,血氣則不能自溫於肌膚。 病源候論』卷四三「產後風冷虛勞。產則血氣勞傷,腑臟 (『廣弘明集』卷二九) 「因爾蔬食, 體過黃羸」。(大正五二・三三六上)。[隋] 巢元方『諸 令人虚乏。魚肉溫,於人補益」 不噉魚肉。……菜食未
- 211 謂樂,不淨謂淨,無我謂我,生想顚倒、見顚倒、心顚、倒見」,鳩摩羅什譯『小品般若波羅蜜經』卷「無常謂常,苦 三二・二六〇上)。 若聖人見實無我,而隨俗故,說有我者,則是倒見」(大正倒」(大正八・五四八上)。鳩摩羅什譯『成實論』卷三「又 謂樂,不淨謂淨,
- 212 粗言」 葛洪『抱朴子』內篇序「今爲此書, 梁武帝「注解大品序」(僧祐 其至妙者,不得宣之於翰墨,蓋麤言較略, **意、粗言所懷」**(大正五五·五三下)。 『出三藏記集』卷八)「較略四 粗舉長生之理 以示一隅」。
- 213 榮衞流通」『黃帝內經』熱論篇第三十一「帝曰,五藏已傷 六府不通,榮衞不行, 如是之後, 三日乃死, 何也」。
- 214 - 患熱」『梁書』滕曇恭傳「滕曇恭, 母楊氏患熱, 思食寒瓜」 豫章南昌人也。年五歲
- 215 能飲食」 塞而煩,其脈大,自能飲食, 故鼻塞,內藥鼻中則愈」。 『傷寒論』辨痓濕暍脈證「發熱面黃而喘, 腹中和無病, 病在頭中寒濕 頭 編鼻
- 216 補益。 [參考] 既出「菜蔬冷, (大正五二·二九八中)。 令人虚乏。 魚肉溫 於人補、
- 217 「類皆」 『潛夫論』 浮侈 「天下 百郡千縣. 市 邑萬數 類皆如

- 218 神明 神明出焉」。 『黄帝內經素問』 王冰注「清靜棲靈,故曰神明出焉」。 靈蘭祕典論「心者, 君主之官也
- 「爲法」『國語』 微者則是行」。 越語「天道皇皇, 日月以爲常, 明者以爲法,
- 「百疾」 『呂氏春秋』 季夏紀 「夫亂世之民, 民多疾癘, 道多褓繦, 盲禿傴尪,萬怪皆生」 長短 語 百**、** 疾,
- ·**昬濁**」『太淸經天師口訣興十』「若一朝違 科傳非其人違負 老仙君 使精神昏濁所學無成太一司錄不上生錄」 漏泄天帝擅仙永謝玄路 泰玄仙都使心迷意亂萬向傾敗九

220

219

222 四體」『荀子』勸學篇「君子之學也, 乎四體,形乎動靜」。 入乎耳, 箸乎心, 布

223

- 身受。生報者,來生便受。後報者,或經二生三生百報。二曰生報。三曰後報。現報者,善惡始於此身,後報」 慧遠「三報論」(『弘明集』卷五)「業有三報。一 二九八中) 生,然後乃受。(大正五二・三四中)。 ·後報業强,現無方便,三途等苦,不能遮止」(大正五二· 或經二生三生百生千 「斷酒肉文」旣出 卽此 日現
- 224 「卽時」 『漢書』 龔遂傳「渤海又多劫略相隨, 時解散,棄其兵弩而持鉤鉏」。 聞遂教令, 刨、

225

·四大」「遠法師明報應論答桓南郡」(『弘明集』卷五)「問曰, 焉。何者,夫四大之體,卽地水火風耳。結而成身佛經以殺生罪重,地獄斯罰。冥科幽司應若影響。 唯精麁之閒, 天地閒水火耳」(大正五二・三三下)。 寄生栖照, 固亦無受傷之地。 津暢明識。雖託之以存. 滅之既無害於神 結而成身以爲神 而其理天絕。豈 餘有疑 亦由滅

- 下)。 問法,自然得成阿耨多羅三藐三菩提」(大正一二‧四三一問法,自然得成阿耨多羅三藐三菩提」(大正一二‧四三一菩薩、不值菩薩,或值如來、不值如來,或得聞法、或不哲應、不值馨聞、不值馨聞,或值緣覺、不值緣覺,或值以有一種人」 曇無讖譯『大般涅槃經』卷一一「有一種人亦復
- 之」(大正四·四八下)。 見之已便復瞋恚,語汝速滅莫復更生,何以故來使我見(zū) 「**便復**」 求那毘地譯『百喩經』卷二「然此五欲相續不斷,旣
- 六上)。 彦穎等屢勸解素,乃是忠至,未達朕心」(大正五二·三三 《28)「解素」 梁武帝「净業賦」序(『廣弘明集』卷二九)「謝朏、孔
- 之曰燧人民」。 有聖人作,鑽燧取火以化腥臊,而民說之,使王天下,號(22) 「腥臊」『韓非子』五蠹「腥臊惡臭而傷害腹胃,民多疾病。
- (大正四・六四九中)(30)「堪能」『出曜經』卷七「受人信施不唐其功,堪能爲人福田」

"魔境界」『大智度論』卷十二「菩薩法中亦如是,若施有三

231

- 讚,是名檀波羅蜜」(大正二五‧一四五中)。如菩薩布施,三種淸淨,無此三礙,得到彼岸,爲諸佛所礙。我與、彼受、所施者財,是爲墮魔境界,未離眾難。
- 書成持學受者亦當竟之,若至一歲亦當竟之。所以者何。善女人欲書是般若波羅蜜者當疾疾書之,若欲受持、若欲善,若不是一人質能有留難。善男子、善女人若能一月書成者,若二若之質能有留難。善男子、善女人若能一月書成者,若二若之質能有留難。善男子、善故等行者亦當疾疾爲之。所以者何。或未受書行。就予後書是數若波羅蜜者當疾疾書之,若欲受持、若欲善,有是有留難。善男子、

- 多於珍寶中起諸因緣有留難故」(大正八・七一中)。
- 者,常稱道而道不足」(大正五二・五三下)彭聃居道之未。得道宗者,不待言道而道自顯。居道之末彭聃居道之未。得道宗者,不待言道而道自顯。居道之宗,

233

可干,避其毒氣,天牝從來,復得其往,氣出於腦,卽不「**正氣**」『黃帝內經』刺法論篇「不相染者,正氣存內,邪不

234

235

- (似熟) 『大智度論』卷二二「又有四種人如菴羅果。生而似(似熟) 『大智度論』卷二二「又有四種人如菴羅果。生而似人,而聖功德成就,而威儀、語言不似善人。有威儀、語言似善聖功德成就,而威儀、語言不似善人。有威儀、語言似善聖功德成就,而威儀、語言不似善人。有威儀、語言似善聖功德成就。有威儀、語言似善生而以
- 達愛敬之文,而滋成行義之美者也。故文飾、麤惡,聲樂、《33)「麁惡」『荀子』禮論篇「禮者、斷長續短,損有餘,益不足,
- 發而不中,不怨勝己者,反求諸己而已矣」。(迩)「勝己」『孟子』公孫丑上篇「仁者如射。射者正己而後發。哭泣,恬愉、憂戚,是反也」。
- 常,以仁政爲常」。 常,以仁政爲常」。 (懷于有仁』。孔傳「民所歸無
- 「**忿嫉**」『陳書』華皎傳「逆天反地,人神忿嫉」。

239

- 行、一時覆相、誑諸白衣」(大正五二・二九五上)。

 行、一時覆相、誑諸白衣」(大正五二・二九五上)。

 、我能精進、我能苦
- (涩)「決正」 支謙譯『阿彌陀經』卷下「今我於苦世作佛,所出經為之,後必有災」。 爲之,後必有災」。 爲之,後必有災」。 八二二五子』梁惠王上篇「以若所爲求若所欲,盡心力而

上)は「決正」を「決定」に作る。「後考」「釋門自鏡錄」卷下の對應箇所(大正五一・八一八明,開視五道,決正生死泥洹之道」(大正一二・三二二下)。本。遊步無拘,典總智慧。眾道表裏,攬持維綱。照然分本。遊步無拘,典總智慧。眾道表裏,攬持維綱。照然分本。遊步無拘,典總智慧。眾道表裏,攬持維綱。照然分本。遊步無拘,典總智慧。

見」。
見」。
一、本直」『孟子』滕文公上篇「吾今則可以見矣。不直則道不

(四)「決定心」 南本『大般涅槃經』卷二二「云何於身作決定想。 (四) 「決定心」 南本『大般涅槃經』卷二二「云何於身作決定想。 「決定心」 南本『大般涅槃經』卷二二「云何於身作決定想。 「決定心」 南本『大般涅槃經』卷二二「云何於身作決定想。 「实际的」 南本『大般涅槃經』卷二二「云何於身作決定想。

(邲)「善相」『春秋左氏傳』襄公傳三十年「虎帥以聽,誰敢犯子。(邲)「行業」『顏氏家訓』歸心篇「以僧尼行業多不精純爲姦慝也」

子善相之,國無小,小能事大,國乃寬」。「善相」『春秋左氏傳』襄公傳三十年「虎帥以聽,

247

「五月二十二日」 これより以下に,五月二十三日早朝の直 遠藤 ると推定する。 年 が問題となる (「斷酒肉文」中には年次が明記されていない)。 答が展開されたことを記す。ここでそれが何年の五月か 日に「斷酒肉文」の基となる武帝の講説と出家者との問 (二十二日五更の頃) に列席者が待機し、二三日と二十九 衞率に在職していた普通三年 (五二〇)、下限は普通四年 (二〇二一:一七~一八頁) は, 一方, 陳思遠 (五二三)で、 (二〇一三・九五頁) 五三三 年次の上限は普通元 頃の成立であ 周捨が太子 は 前

難いので、假に普通元年以降としておきたい」と述べる 捨の職位を「左衞率」と記すことが決め手となろう。上 り前に,宗廟改革と民閒祭祀改革を旣にしていることを 若以殺祈願 晉征西府參軍、 をどうすべきであろうか。 (五二二)」であると推測する。 騎常侍、 柏俊才(二〇〇八・一八一頁)も同樣に,周捨の「員外散 尉を經て員外散騎常侍・太子左衞率に任官したとは考え 親の服喪をし、明威將軍、 ついては、天監十八年のうちに太子右衞率を退任して母 記遠藤氏は「周捨が太子左衞率に在職した期閒の上限に の説に從うべきかについては,「斷酒肉文」後揭⑤に周 意味する。以上は陳思遠 (二○一三) 説である。いずれ 各盡誠心, 諸廟祀及以百姓凡諸群祀。若有祈報者, に武帝は「北山蔣帝猶且去殺。 戒を受けるより以前であると考える。「斷酒肉文」の中 詔を出してより以後, 周興嗣字思纂, 斷酒肉文」 左衞率周捨奉敕注高祖所製歷代賦,除臨川郡丞。十七年(五一八),復 より具體的に言えば、 太子左衞率」という職位は「大約在普通三年 止修蔬供」と述べる。これは武帝が、これよ は天監十七年 輒不得敎想。 に宗廟の祭祀で犠牲を供えるのを止める 宜都太守。 陳郡項人, 天監十八年 右驍騎將軍、 今日大眾已應聞知。 「斷酒肉文」は武帝が天監十 $\widehat{\Xi}$ 漢太子太傅堪後也。 ……。〔天監〕 すなわち『梁書』周興嗣傳 しかし次の記事との關係 若以不殺祈願: (五一九) 五月に菩薩 の文であると推定す 復爲給事中 侍中·領步兵校 **啓興嗣助焉**。 皆不得薦生類 十四年 弟子已勒 輒得上教 高祖

この點は陳思遠(二〇一三) 天監十七年 がって今は、 柏俊才(上記)の言うように普通三年に限る理由はない。 たのは普通三年か更にそれ以前であったとすべきであり 周捨は「左率」(左衞率)であったことは、この職位を得 であったことを示す。 れ以降と, (五二一) 普通二年(五二一)との閒に周捨が「左衞率」 (五一八) であろうと假定したい。 陳氏に從って、 卒」。これは天監十七年 そうであるとすれば、 「斷酒肉文」の成立年次は の說と矛盾しない。 <u>£</u>. 普通三年に 八

- (郊) 『寺官』『比丘尼傳』卷二、僧果尼傳「驚告寺官寺官共視」
- 之師,此卽表白也」(大正五四・二四四下)。 『法華經』中,商人白導師言,此卽引路指述也。若唱導(2)「導師」[參考]『大宋僧史略』卷中「導師之名而含二義。若
- 年(五○七)頃完成。[清]劉世珩『南朝寺考』光宅寺條。年(五○七)頃完成。[清]劉世珩『南朝寺考』光宅寺の寺主に監七年(五○七)頃完成とど下らない頃に光宅寺の寺主に迎えられた(『續高僧傳』卷五、法雲傳)。
- (ឱ) 「華林園」『景定建康志』卷二二「古華林園,在臺城內本吳

九?), 其山川制置,多是宋將作大匠張永所作。其宮殿數多舊來 築蔬圃, 陳思遠(二〇二〇:一六八頁)等參照。更に次も見よ。 者でもある南朝梁陳の顧野王(五一九~五八一)。 は『輿地志』の誤寫。『輿地志』の撰者は,『玉篇』 武又造重閣, 殿、醴泉堂、 連玉堂。 池名天淵, 二十二年 "地輿志]☆, 建康實錄 を置いた寶雲殿 登之而階道,遶樓九轉。自吳晉宋齊梁陳六代, (また無礙殿とも) などがあった。Chen JH (2007). 盡古今之妙。陳永初中(→陳永定中=五五七~五五 因改爲景雲樓。又造琴堂,東有雙樹連理, 乃取華林園以爲號, 陳亡悉廢矣」。☆ 『地輿志 更造聽訟殿。天嘉三年(五六二), 叉作臨政殿。 又築景陽東嶺, 又造靈曜前後殿, 又芳香堂、 (四四五) 造景陽樓以通天觀, 卷一二太祖文皇帝元嘉二十三年夾注 梁代の華林園には華光殿や, 吳時舊宮苑也。 上名重雲殿, 花萼池, 重脩廣之。 (また華林佛殿とも言う), 重雲殿, 又造一柱臺、層城觀、興光殿。梁 又造光華殿, 下名興光殿,及朝日、夕月之 晉孝武更築立宮室 又築景陽、 至孝武大明中, 設射棚。 日觀臺。 武壯諸 紫雲出景 又立鳳光 (佛教圖書 宋元嘉 叉改為 Ш の撰

255

257

- ○六〉参照。 もの。基本的に經の誦讀と質問を擔當した。古勝(二○儒學の都講を基礎に,東晉以降佛教にも取り入れられた「法師」「都講」 南北朝義疎學における都講の制とは,漢代
- 瓦官寺の慧明」 公墓, 九六號 已」。大正五〇・三五四下)。 慧明は 名が見えるので、五一九年以前から武帝と近い立場に 監十八年(五一九年)五月敕寫ペリオ將來敦煌寫本二一 神情俊邁,祖習師風, けられた(『高僧傳』卷五、竺法汰傳 にここで陶器を燒成していたため、 哀帝時, 瓦官寺は、 あったことが分かる。 (『高僧傳』卷一三、道照傳「〔道〕 照弟子慧明,姓焦, (『高僧傳』 (佛法を宣唱し人々を導く僧) として建康で名を馳せた 爲陶處。晉興寧中, 沙門慧力所立」。大正五〇・三二四上)。本寺建立前 『出家人受菩薩戒法卷第一』に「瓦官寺慧明」 卷一、安清傳「曇宗 東晉哀帝の時に慧力が丹陽に建立された 宝 亦有名當世」。大正五○・四一五下)。 天 靈味寺の曇宗撰 沙門慧力, 『塔寺記』 啓乞爲寺, 止有堂塔而 「瓦官寺, 道照と同じく, 瓦官寺という名が付 『塔寺記』によれば、 云 丹陽瓦官寺 本是河內山玩 魏郡人。 唱導 0
- 大食肉者斷大慈種」 南本 聽聲聞弟子食肉。若受檀越信施之時, 善知我意。 見不食肉者有大功德」。佛讚迦葉, 菩薩白佛言,「世尊, 善男子, 7子,夫食肉者斷大慈種」。 迦葉菩薩復白佛言,「世尊, 護法菩薩, 食肉之人,不應施肉。何以故。 應當如是。 『大般涅槃經』卷四 迦葉又言 善男子,從今日始, 「善哉善哉。 云何如來不聽食肉」。 應觀是食如子肉 「如來何故先 「爾時, 汝今乃能 不 我 葉

- 聽比丘 當知卽是現斷肉義」」 · 葉菩薩復白佛言, 食三種 而復不聽」。 淨肉」。「迦葉, 「世尊, (大正一二・六二六上)。 佛告迦葉, 何因緣故, 「亦是因事, 淨 十種不淨, 肉, 隨事漸 漸次而制 乃至
- 耆闍寺道澄」 爲師。 年六十四。其後瓦官道親、彭城寶興、耆闍道登,並皆祖 研習唱導, 法鏡傳 「釋法鏡, 法鏡傳に見える「道登」と同人か。『高僧傳』 述宣唱」(大正五〇・四一七中~下)。 值慧益燒身, 既得入道, 時代と寺院から推測すれば、「道澄」は次の 有邁終古。……。齊永元二年(五〇〇)卒, 姓張, 履操冰霜, 啓帝度二十人, 鏡卽預其一也。 吳興烏程人。幼而樂道: 仁施爲懷, 曠拔成務。 卷一三、 事未獲 於是
- るのに好ましい日を選擇したためである。 これは偶然でなく,在家者の武帝が出家者と同じ場に居(路) 法會が開かれた二三日と二九日は在家者の六齊日に當たる。

259

「莊嚴寺の法超」 法超 通六年(五二五),儀』。以少許之詞, 乞匃自資。心性柔軟, 普通六年(五二五)に宮城の平等殿で武帝に律を講じた。 『十誦』。……。武帝又, 修習經論。 ·續高僧傳』卷二「釋法超,姓孟氏,晉陵無錫人也。十 出家,住靈根寺。幼而聰穎, 帝親臨座 而雅有深思, 附世結文,撰爲一十四卷,號曰武帝又,以律部繁廣,臨事難究, 聽受成規, 遍集知事及於名解, 網羅眾部。通下梁境, (四五六~五二六) は律に造詣が深く、 勞苦非慮。 幽求討擊,學論歸仰,貧無衣食 : 篤學無倦, 晚從安樂寺智稱,專攻 至七年 臨事難究, 於平等殿敕超講 並依詳用。普 從同寺僧護: (五二六) 冬, 『出要律、

いては, 傳に言及する『出要律儀』 莊嚴寺だったと考えられる。 とから判斷すれば、 加した『出要律儀』 大正五三・七七二中~下)。 した寺は大莊嚴寺と呼ばれ([清] 陳作霖 あった。宋孝武帝の大明三年 **屬寺を莊嚴寺とするが** 葬鍾山開善寺墓」(大正五〇・六〇七上)。本文で法超の所 卒於天竺住 建立した寺は小莊嚴寺と呼ばれた(『法苑珠林』 [清] 劉世珩『南朝寺考』),天監六年(五〇七) 船山(二〇二〇:特に撰者問題は五二〇~五一九頁) 寺, 春秋七十有一。天子下敕流慰, 法會時に法超が居住していたのは大 撰述が大莊嚴寺寶唱に主導されたこ 大小二莊嚴寺のうち 金陵には大小の二つのが莊嚴寺 (散佚)と關連する諸資料につ 右揭『續高僧傳』卷二法超 (四五九)に路太后が建立 『南朝佛寺志』 法超の參 幷令有司 に道度

263

262

奉誠寺の僧辯」 行純備, 令許桑, 傳は殘らないが、弟子の釋僧詢の傳によれば 道俗敬異, 竺人也。少而棄俗, 重塔を造營するなどして伽藍を整えたのが奉誠寺である。 た平陸寺を、 『高僧傳』 (宋元嘉十年 (四三三),出自流沙至于京邑。器宇宏肅. しかった。 今之奉誠是也。大正五○・三四二中)。 請住此寺, 捨宅建刹, 卷三、僧伽跋摩傳 咸宗事之,號曰三藏法師。初景平元年, **慧觀に招かれた僧伽跋摩が,慧觀と共に三** 奉誠寺は、 『續高僧傳』卷六、 崇其供養,以表厥德。跋摩共觀, 因名平陸寺。 清峻有戒德。 景平元年(四二三)に建立され 「僧伽跋摩,此云眾鎧, 後道場慧觀, 善解三藏, 僧詢傳 一年十二敕令 尤精雜心。 以跋摩道 『十誦律 僧辯の 平陸 天

> 價値は高い。 「寶度」 律師として後にも名が見えるが,『廣弘明集』以外「寶度」 律師として後にも名が見えるが,『廣弘明集』以外「寶度」 律師として後にも名が見えるが,『廣弘明集』以外出家。爲奉誠寺僧辯律師弟子。辯性廉直,戒品冰嚴,好出家。爲奉誠寺僧辯律師弟子。辯性廉直,戒品冰嚴,好

261

因推演懋議,稱制旨以答,請者由是遂停」。「制旨」 皇帝の敕命。『梁書』卷四〇、許懋傳「高祖嘉納之.

沸 いた湯を止めようと思えば, 莫若去薪,息過莫若無語」(大正四八・九八四下)。 歸集』「書云,「古人當言而懼。發言而憂」。又云 穢」。 る。 呼卓將兵入朝,以脅太后。卓得召, 文とほぼ同一の句が引用される([趙宋] 延壽『萬善同 を見出せない。趙宋延壽『萬善同歸集』に「又云」と本 逐君側之惡人。今臣輒鳴鍾鼓如洛陽, 莫若去薪。潰癕雖痛, 將軍何進、 ある」 中常侍張讓等, 『後漢書』に用例がある。『後漢書』董卓傳「及帝崩 過失を行うまいとすれば、 しかし後半については、先行する時代に類似表現 原語「止沸莫若去薪, 司隸校尉袁紹, 竊倖承寵, 勝於內食。昔趙鞅興晉陽之甲,以 謀誅閹官, 濁亂海內。臣聞, 薪を取り去るのが一番であ 息過莫若無語」。前半は 發言而憂」。 又云, 何も言わないのが一番で 即時就道。並上書日 請收讓等,以清姦 而太后不許, 乃私

260

(26) 「令佛種相續」 佛種とは成佛の原因となる種子(潛在力)。武之惡,小人反是」。 之惡,小人反是」。 之惡,小人反是」。 資淵篇「子曰,君子成人之美,不成人

がある(大正五五・五四下)。 帝の「注解大品序」(僧祐『出三藏記集』卷八)に同様の句「合佛種相續」 佛種とは成佛の原因となる種子(潛在力)。武

267

一默已 朝聖德治天下, 弟弘識遠鑒, 『藝文類聚』 虧失多矣, 九親維睦, 卷二五「梁邵陵王蕭編與元帝書曰,「先 無俟傍說, 四表無怨, 事重情切, 切,不能默已,勞兵,誠爲國政,實亦家

聞諸僧道」 で示されていた。①と④とでは同じ意味を示す原語に傾 う・述べる」を「道」字で示す例が散見される。因みに う」を表す原語「道」を口語的表現と言ってよいかどう 向の異なりがあるのである。例えば次表の通り。 上掲①の文中で「言う・述べる」は「云」字か「言」字 かは定かでないけれども、これより以下④の文中に「言 譯「諸僧が~と言っていると聞いている」。「言

269

					波夜提」。	①a『戒律』言,「飲酒	一切肉」。	今日制諸弟子,	① a 『涅槃經』言,「迦葉我	法寄囑人王」。	① a 但『經』敎亦云,	五月二十三日
						犯		不得食			佛	
日此『經』言何所道。 輩看『經』未遍。互言無斷肉語」。今	④d1唱『經』竟,制又語諸僧道,「諸小僧	慚愧爲上服。若爾,便有非上服義」。	故犯。問,…。答,「『經』又道,	過誤,後方起愧,乃是慚愧。豈非知而	故犯,非謂慚愧。若使先時不知,或是	④ b 問,「先 道 「慚愧而猶噉食」,此是知而	食汝」」。	而道「我慚愧汝我打汝。我慚愧汝我	④ b 問,「若爾,但先 道 「慚愧痛打前人」,	懺悔食肉法」。	④ a 聞諸僧道,「『律』中無有斷肉法。又無	五月二十九日

以上と關連する注として後注 272 及び後注 316 も併

せて参照。

268

「若爲」 ここでは「どのような」の意に解した。 ・種」「九種」 食肉が禁斷された十種は人・蛇・象・馬・ 此人至家,果爲延火所及, 津路值一人,忽以杖打之。 史』卷五〇、 天子若來, 居士若爲相對」」。『高僧傳』卷一〇「又於江 明僧紹傳「高帝欲出寺見之,僧遠問僧紹曰 舍物蕩盡」(大正五〇・九四上)。 語云,「可駛歸去看汝家若爲」。 [語例] [南

驢・狗・師子・猪・狐・獼猴。

鳥殘, 他殺, 淸淨, 不聽。 に入れた肉、 したと聞いていない肉、③自分のために殺したという疑 來已聽比丘食三淨肉,何緣於中十種不淨、九種淸淨而復[參考]淨影寺慧遠『大般涅槃經義記』卷二「二問,如 種とする。 (6)自死したものの肉、 いのない肉(三種淨肉)、(4)殺したのではない肉、(5)乾肉 遠は,①殺すところを見ていない肉、②自分のために殺 經典中に定義されていないことが問題となっていた。慧 慧遠が「未だ文を見ず」というように,六世紀當時から 爲己殺,是故攝入三種淨中, 師子、猪、狐、獼猴。是其十也。於此十中,不見聞疑他 (大正三七・六六五上)。 亦無聞疑, 及不爲已, 自未見文, 人傳釋之, 十種不淨,下文自數,人、蛇、象、 通前爲七。不期偶得, (9)他者が自殺し食するよう請われた肉の九 (7鳥が食べ殘した肉、(8)偶然に手 前十種外, 九種清淨肉は、右で淨影寺 及他自殺, 即以爲四。先乾自死, 生世機嫌, 餘眾生中, 故名不淨。 請已而食, 馬、 及與 不見 九種

① d

唯取老舊者,

八、 最 室 門徒

寶度奉答,

「愚短所解,

只是漸敎。

此二種人,

(4) (4) a a

奉答,「常日解義只作向者所說」。

4) a

此」。 答,「此旨是理中言。約教辯,只得如答,「此旨是理中言。約教辯,只得如

1

d

唯、唯、問。

可以淨人。

(4) a

問

「法師旣爲人講說,

爲人明導,

爲

卽是現斷肉義」(大正一二・六二五下~六二六上)。 清淨而復不聽』。佛告迦葉,『亦是因事漸次而制。 菩薩復白佛言: 丘食三種淨肉」。 迦葉菩薩復白佛言, 聞弟子食肉。若受檀越信施之時, 見不食肉者有大功德」。 葉菩薩白佛言, されたことを指す。 夫食肉者斷大慈種」。 護法菩薩應當如是。善男子,從今日始不聽聲 「世尊, 『世尊, 「迦葉, 「世尊, 南本『大般涅槃經』 佛讚迦葉, 食肉之人不應施肉, 何因緣故, 十種不淨, 是三種淨肉, 迦葉又言, 云何如來不聽食肉」。 「善哉善哉。 應觀是食如子肉想」。 「如來何故, 隨事漸制」。 卷四 何以故。 「爾時, 乃至九種 汝今乃能 當知 迦葉 我

> (4) a

答,「只言『經』中有明戒處。愚謂應

此是『優波離律』

丕。

4

人買時作若爲意」。

但問作意使

4

a 問,

「『律』旣是具教

何得無文。

法師此解殊爲進

相關涉」。

不得以此答弟子」。退。只可爲寺中沙彌、

式叉摩尼說,

| 「引物」 命ある生きもの(物=眾生 Skt. sattva)を導く。『大 | 別物」 命ある生きもの(物=眾生 Skt. sattva)を導く。『大 | が此耶』」(大正三七・四五七上~中)。

273

271

表の通り。
まの通り。
まの通り。
まの通り。
まの通り。
まの通り。
まの通り。

272

漸 教 抑挫聲聞,謂抑揚教。四者,法華會彼三乘同歸一極,謂般若通化三機,謂三乘通教。三者,淨名思益,讚揚菩薩 同歸敎。五者,涅槃名常住敎」(大正四五‧五中)。 教の二種に分けたという。漸教は五時に分けられ、最後 人,明於六度。行因各別,得果不同。謂三乘別敎。二者! 爲聲聞人,說於四諦,爲辟支佛,演說十二因緣,爲大乘 至深,謂之漸敎。於漸敎內, 但爲菩薩, 仍製經序。略判佛教,凡有二科。一者頓教, に説かれた最も深い教えが涅槃經となる。吉藏『三論玄 道場寺慧觀が經序を書き、そこで釋尊の教えを頓教と漸 「言五時者, 吉藏によれば、 具足顯理。 二者, 昔涅槃初度江左, 涅槃經が初めて江南に傳わっ 開爲五時。一者,三乘別教。始從鹿苑,終竟鵠林,自淺 宋道場寺沙門慧觀 卽華嚴之流

心通,知須陀洹初心,次第至十六心者。聲聞人欲知初心[參考]『大般涅槃經集解』卷四九「寶亮曰,下去次明他ては以下を擧げておく。

274

第十六心方知。菩薩不爾。十六心一一次第差別盡知也」規法不能得。若利根者,要至第七心方知。若鈍根者,至

279

(大正三七・五二八上)。

275 進 肉」『世說新語』任誕篇 之耳。 然已醉矣」。 斛, 五斗解酲。 婦捐酒 請伶祝誓。伶跪而祝曰,「天生劉伶, 斷之」。伶曰,「甚善。 便可具酒肉」。婦曰,「敬聞命」。 三段器, 涕泣諫曰, 婦人之言,愼不可聽」。便引酒進肉,隗 我不能自禁, 「君飲太過: 「劉伶病酒: 唯當祝鬼神. 以酒爲名, 非攝生之道: 渴甚, 供酒肉於神前 飲一 求 必宜

在室則忘坐,今不識先,後不識今」。 子,中年病忘,朝取而夕忘,夕與而朝忘。在塗則忘行,子,中年病忘,朝取而夕忘,夕與而朝忘。在塗則忘行,

(27) 疾病時は出家者の食肉を認める。

[參考]『十誦律』二六「佛從波婆國隨所住竟,持衣鉢遊「參考」『十誦律』二六「佛從波婆國隨所住竟,持衣鉢遊「一級」」(大正二三:一九三下~一九四上)。

281

弟子」(大正二二・一○○四上)。不應復營勞我,莫復至我所,不共語。是爲和尚五法驅遣不應復營勞我,莫復至我所,不共語。是爲和尚五法驅遣(郛) 『駈遣』 [參考] 佛陀耶舍、竺佛念共譯『四分律』「有五法驅

282

上。 無常 凡聖二位,彼凡旣下,此聖宜言上也」(大正三七・五四六 所明也。今不取習義爲緣因, 正取無漏善爲緣因。上者, 已盡, 唯餘習氣。約敎而言, 二乘猶有八倒之習, 果常故。於生死無常,不可爲謬也。了非爲是,謂之計生 死爲常也。僧宗曰 者,生死爲無上,是以義稱爲上矣。僧亮曰,二乘不見佛 阿耨多羅三藐三菩提故。案。道生曰,與眞反也。苟是實 六八上)。『大般涅槃經集解』卷五四「上者生死無常,至 修之道,不上不下,以是義故。名爲中道」(大正一二・七 夫所不得故。不名爲上。何以故。卽是下故。諸佛菩薩所 無常,常見於常。第 最上阿耨多羅三藐三菩提故。中者,名第一義空。 謂下上中。下者, 南本『大般涅槃經』 謬見是常,三寶是常, 此釋二乘人也。謬見常者,其傾正使 一義空, 梵天無常. | 卷二五「復次, 不名爲下。何以故。一切凡 横計無常。何故名上。能得 謬見是常。上者, 善男子,道有三 如三脩 無常見 生死

地理潛閟,變通無方,復不可全言闞氏之非也」。(20) 「不全言」『水經注』卷二〇、漾水「然川流隱伏,卒難詳照:

「見」「聞」 「疑」 聞是生故爲汝殺, 何見。自見是生爲我奪命. 「三種不淨肉, [參考] 鳩摩羅什等譯 不應噉。 如是聞。 何等三。若見、 云何疑。 如是見。云何聞。 有因緣故生疑, 『十誦律』卷二六 若聞、 可信人邊 若疑。云 是處

有屠兒家、 三種不淨肉, 如是不見。云何不聞。可信優婆塞人邊: 耳不聞、 是三種淨肉聽噉_ 無自死,是主人惡, 有自死者, 如是不聞。 不應噉。三種淨肉: 云何不見。 (大正二三・一九〇中)。 是主人善, 云何不疑。 心中無有緣生疑 自眼不見是生故爲我奪 不故爲我奪命 聽噉。 何等三。 不聞是生故 如是不

287

283 不假 『宋書』殷琰傳「囘等欲乘勝擊之,安國曰, 不假復擊」。 彼將自

288

- 285 284 [理中] 「道理の次元で」「現實の次元で」 上揭注 (11) 參照
- 戒應如是說, 「理」「事」を對比的に用いる早期の用例については上掲 "佛種種呵責已告諸比丘以十利故爲諸比丘結戒, (113) 參照。 佛陀什譯 竺道生譯 『彌沙塞部和醯五分律』 若比丘自捉金銀及錢,若使人捉若發受, 原文「理中」「事中」。 從今是 卷五

289

286

僧祇律』 若比丘使沙彌最初捉金銀錢者,得越毘尼罪。若見沙彌先 提」(大正二二・六一九中)。佛陀跋陀羅、法顯共譯 丘自手捉錢若金銀,若敎人捉若置地受者, 二·八三上)。佛陀耶舍譯 竺佛念譯『四分律』卷八「若比 金銀及錢,若使人捉若發心受,尼薩耆波逸提」(大正二 薩耆波逸提_ 『大比丘三千威儀』卷下「買肉有五事。 後使捉者無罪」(大正二二·四六一上)。傳安世高譯 不應便買。二者, 一卷二九「佛言,](大正二二・三七中)。同卷一二「若比丘自捉 從今日後,不聽沙彌持金銀錢, 人已斷, 餘乃應買。三者, 尼薩耆波逸

- 設肉已盡, 不得盡買。 不得言當多買」(大正二四・九二二下)。 几 者 若肉少, 不得妄增錢取。 Ŧi.
- 惛亂 [參考] 異文「昬亂」, 惑惛亂, 義。智惠出,有大僞, 『史記』 不能繼嗣奉宗廟祭祀, 卷九「呂太后本紀」「今皇帝病久不已,迺失 六親不和, 『老子』第一八章「大道廢,有仁 不可屬天下, 有孝慈, 國家昬亂, 有 其代之」。
- ・路作」 參考「路爲」, 長一匹許, 皎『高僧傳』卷三、求那跋摩傳「咸見一物狀若龍蛇. 故髡其頭名爲浮屠」(大正五二·五〇下)。參考「詺」,慧 所以詺爲浮屠, 胡人凶惡故, 論云, 佛舊經本云: 起於屍側直上衝天,莫能詺者」(大正五〇·三 劉勰「滅惑論」(『弘明集』卷八)「三 浮屠, 羅什改爲佛徒, 老子云,化其始不欲傷其形 知其源惡故也
- 『大般涅槃經集解』では、「見」「聞」「疑」を詳說するが、そ 八上中)。 こでは市場で賣っている肉を見た場合に疑いが生じるか 生疑,悉不得噉。 情中生疑, 否かは問題にされていない。『大般涅槃經集解』卷一一 前後方便亦疑也。又釋疑者, 亦不離見、聞也。疑此, 時。聞中三者,聞殺時、聞牽去時、聞屠割時。疑三者, 成九也。見中三者,謂見斷命時、見牽去時、見殺後屠割 ·向者三事 (見、聞、疑),各有前後方便,一事有三,合 爲是向肉,爲非向肉, 聞中生疑, 爲是爲我殺耶,爲他殺耶, 如向在彼家, 類如前也」(大正三七・四二 亦不得噉。 如前後方便
- 「明導」 佛陀耶舍譯 竺佛念譯 『長阿含經』 「佛爲如來至眞等

正覺故能開示,爲世明導」(大正一・七二下)。

拔正法樹」(大正二・一七八中)。 壞正法鼓,毀正法輪,消正法海。壞正法山。破正法城。壞正法山, 求那跋陀羅『雜阿含經』卷二五「然煩惱火,

- 中,畏汚壞塔寺驅出者,無罪」(大正二二・三四三中)若作是言,此是無益之物驅出,無罪。若駱駝牛馬在塔寺『摩訶僧祇律』卷一四「若比丘瞋恚蛇鼠驅出,越毘尼罪。「今中亦應有自死者」 寺の中に動物が迷い込んできて自然死

297

- 何假逐之」。(四)「何假」『魏書』傅永傳「叔業進退失圖,於是奔走。左右欲(四)「何假」『魏書』傅永傳「叔業進退失圖,於是奔走。左右欲(四)
- 一‧八一八上)。

 一‧八一八上)。

 一‧八一八上)。

 一‧八一八上)。

 一‧八一八上)。

 一‧八一八上)。
- 種、或四種差別。釋曰,今就事明差別,唯一本識,其性問本識,爲性有差別,爲事有差別。論曰,若略說,或三言說章第一」「論曰,此阿梨耶識,差別云何。釋曰,此)」「約事」 天親造、眞諦譯『攝大乘論釋』卷四「釋差別品第四

此知。是本識第一差別」(大正三一・一七八中)。「理」 習爲眼根因。 由三種熏習異故。 報眼根應生,從此本識中,言說愛熏習生。是故立言說重 有三種。 言說以名爲體, 故今不釋。由言說熏習差別者。 論本所以不釋此三者,後解應知勝相。 「事」を對比的に用いる早期の用例については上揭注 參照。 約事或三種 於中起愛: 以音聲爲本。 如眼根於耳等根, 謂言說、 熏習本識。此熏習是眼根生因。若果 或四種、 約能見色根, 名有二種。 我見、 或七種差別。 一切言說熏習生 唯一本識 有分熏習差別。 謂言說名, 有聲說謂眼 初自分別此三義. 由熏習差別故 論日,

「出離」 求那跋陀羅譯『央掘魔羅經』卷二「譬如日月, 嗜味. 受集受滅,受集道跡受滅道跡,受味受患受離,不如實知 月」(大正二・五二六下)。曇無讖譯『大般涅槃經』卷一一 煩惱所覆性不明顯 所覆光明不現,雲翳既除光明顯照, 得阿耨多羅三藐三菩提」(大正二・一二二上)。 同卷二二 天世間魔梵沙門婆羅門天人眾中, 滅,受集道跡受滅道跡,受味受患受離,如實知故,於諸 諸顚倒, 我於諸天世閒魔梵沙門婆羅門天人眾中,不得解脫出離脫 那跋陀羅『雜阿含經』卷一七 或復有說出離生死無量因緣」(大正一二·四三〇中)。求 時彼天子說偈問佛 禪思樂山林. 亦非阿耨多羅三藐三菩提。以我於諸受,受集受 出離煩惱大明普照,佛性明淨循如日 我今敬稽首. 伊尼耶鹿蹲: 「若我於諸受,不如實知 爲脫爲出爲脫諸顚倒 而問於瞿曇: 仙人中之尊, 如來之藏亦復如是: 云何出離

[楞伽經]

有斷肉」

求那跋陀羅譯

『楞伽阿跋多羅寶經』

304

卷八「『大方等無相經』五卷

〈或四卷。亦名『大雲經』〉_

(大正四九・七七上)。

「大慧。我有時說遮五種肉。

無所食。

況食魚肉。

亦不敎人。

以大悲前 大慧。 或制十種。

行故。視

一切眾

猶如一子。

是故不聽令食子肉。

爾時,

世尊欲重宣此

切時。

開除方便一切悉斷。

如來應供等正覺尚

今於此經

一切 卷 滅盡」(大正二・一六一上)。 說偈答言 切苦 云何苦解脱, 如是於苦出, 世閒五欲德, 我今問 如是苦解脱, 回解脫, 心法說第六, 於何而 汝所問解脫, 於彼欲無欲 爾時, 於彼而 解脫

302

(大正一六・五一四上~中)。

我悉制斷肉:

諸佛及菩薩, 「大雲」、

聲聞所呵責_ 魔

而說偈 『楞伽經』,

『縛象』

與

『央掘利

「淺行」 八・四〇二中)。 淺行者,處不淨國, 僧肇撰 『注維摩詰經』 恐其行淺功微. 卷八「深行菩薩非所疑也。 未能自拔」(大正三 今

299 極教」[比較]「斷酒肉文」「 理當是過,但教旣未極,所亦不異法超。但教有深淺, 九上中)。 所以許其如此」(大正五二・二九 僧辯奉答, 階級引物。 僧辯從來所解大意 若論噉三種淨肉

八年已後」 者,白四羯磨戒。若佛在世若佛滅後一切時得。佛法始終。「三語得戒三歸得戒,佛成道已八年中得。八年後更無得而推,八年者是正義也」(大正二三‧五一〇中)。同卷二而뫨磨受具足戒。有言。四年後。有言,八年後。以義 三・五一二中)。 四羯磨戒。是故於七種戒中。最勝最妙最爲尊重」(大正二 幾年便聽白四羯磨受戒。答曰,有言。佛初得道一年後聽 [參考]失譯『薩婆多毘尼毘婆沙』卷二「問曰, 白四羯磨戒爲宗本。 佛初得道の後、八年の時に具足戒を受ける。 能繼續三寶作無邊利益。莫上於白 佛在世

303

ングリマーリー 二〇:四一三~四〇九頁【6.1 音素還元主義】)を見よ。 トラ』に變換した漢字表記。このように文法的觀點から Skt. sūtraに相當)を付した語。單純化して言えば,『アン ラ」に還元し、それを漢字音寫し、更に「經」(スートラ る・アングリマーラについての」の意。漢字音寫「央掘 前の六朝文獻に夥しい。その詳細については船山 語の原形に意圖的に戻す漢字音寫語は多く,特に隋唐以 摩羅經」は,アングリマーリーヤを原形「アングリマー マーラ Angulimāra の形容詞「アングリマーラに關す ´リマーリーヤ・スートラ』を『アングリマーラ・スー ヤ」 Skt. Angulimārīya 人名アングリ (=)

[大雲經] 「『央掘魔羅經』亦斷肉」 不食肉。復次,文殊師利,一切眾生界我界卽是一界。所妹。猶如伎兒變易無常。自肉他肉則是一肉。是故諸佛悉 佛言如是。一切眾生無始生死生生輪轉。無非父母兄弟姉 宅之肉卽是一肉。是故諸佛悉不食肉」(大正二·五四〇下)。 文殊師利白佛言。世尊, Skt. Mahamegha[sūtra] 費長房『歷代三寶紀』 求那跋陀羅譯『央掘魔羅經』 因如來藏故。諸佛不食肉耶。 卷四

[參考] 眾生常生愛心, 不退不失, **曇無讖譯**『大方等無想經』 不貪飲食, 常修知足, 卷一 終不食肉。 「云何能得不壞 一切大施之主

常爲世閒之所恭敬。 得名

下。 無喜見者常作惱害」(大正一六・二三二中~下)。 何以故。不遠塚閒有諸非人及惡鬼神。以食肉故心皆厭賤 生利益想 得名大力, 世間, 曼陀羅仙譯 憐愍眾生, 爲安世閒 得名健行, 『寶雲經』 大慈大悲, 爲樂世閒」(大正一二・一〇八一 卷五「塚閒坐者常修慈心 威儀不闕: 大捨大喜, 終不食肉

(36) 「『大雲經』、『縛象經』『大雲經』『指鬘經』『楞伽經』等諸經、肉者、『象龜經』『大雲經』『指鬘經』『楞伽經』等諸經、利問經』卷上「爾時,文殊師利復白佛言。世尊、若得食(36) 「『大雲經』、『縛象經』並斷內」 [比較]僧伽婆羅譯『文殊師

306

- 制 **教**」[參考] 失譯『薩婆多毘尼毘婆沙』卷五 居,靜默自守」(大正二三・五三二中)。 所繫戀。若有眾生但因靜默,而增善根,是故如來讚歎閑 因動亂遊行而生善根。是故如來讚歎遊行,隨時一移,無 五 「眾生根性, 利益者,是故應共語相敎也」(大正二三・五二五上)。同卷 人心有愛憎, 違耶。答曰, 『經』中說但自觀身行。諦視善不善,而云展轉相敎不相 發言有損。是以云但自觀身行。若爲慈心有 佛因時制敎,言乖趣合不相違背也。 好樂不同。是故大聖因而制教。或有眾生 問 佛以前 日
- 不可得。云何貪結能繫於心。世尊、譬如壓沙,油不可得。「一世尊,如鑽濕木、火不可得。心亦如是、雖復鑽求、貪也」(大正二六‧四九八中)。南本『大般涅槃經』卷二三也」(大正二六‧四九八中)。南本『大般涅槃經』卷二三也」(大正二六‧四九八中)。南本『大般涅槃經』卷二三也」(大正二六‧四九八中)。南本『大般涅槃經』卷二三中,若無此反。於不語彼,此是我爲能「不得住」『中阿含經』「我知彼如是,然不語彼,此是我爲能「不可得。云何貪結能繫於心。世尊、譬如壓沙,油不可得。不可得。」

311

307

心」(大正一二・七五九下)。不得住。安貪於心、亦復如是。種種因緣不能令貪繫縛於不得住。安貪於心、亦復如是。種種因緣不能令貪繫縛於空、終異,設復有之,何能污心。世尊、譬如有人安橛於空、終心,立理各心亦如是,雖復壓之,貪不可得。當知,貪、心,二理各

308

リ」は「完全な」「究極の」。 共義訓。自復多方」(大正三七・三七七中)。接頭辭「パ其義訓。自復多方」(大正三七・三七七中)。接頭辭「パ正義] 者,正名云滅、取[參考]未詳撰者『大般涅槃經集解』卷一「案,道生日,

309

- 終常一,苦樂無變」(大正二·五二一中)。 尼等八萬寶庫及餘寶藏,其數無量。并餘種種甘饍之食故不習無價之衣爲放逸耶。上座迦葉,棄捨種種甘饍之食故不習無價之衣爲放逸耶。上座迦葉,棄捨種種甘饍之食。何寒之如唾。出家學道,行沙門法,受行十二頭陀苦行。何寒之如唾。出家學道,行沙門法,受行十二頭陀苦行。何寒之如唾。出家學道,行政不長子上座迦葉,有摩求那跋陀羅譯『央掘魔羅經』卷一「如來長子上座迦葉,有摩
- 答」。これは上掲問答中の「問,「若理中居然是疑者,云「僧辯はまたもお答え申し上げなかった」 原文「僧辯不復奉

何得不疑肉食」。僧辯無復對」を承ける。

310

[式叉摩尼]

式叉摩那ともいう。

Skt. śikṣamāṇā の音寫。

七

六法戒を

317

僧伽婆羅譯

『阿育王經』

卷六「時阿闍世王禮迦葉足合掌說

學法女,

正學女とも。

授けられ、これを學ぶ。

ふつう一八歳から二〇歳まで。

眾の一つ。比丘尼になる前の二年間の沙彌尼。

有用, 以言「 不爲人用, 依文可知 也, 「湧泉」 不爲人用, 繩墨 得「結鬘」義也」(大正三七・三七八上~中)。 故如 「綖_ 明若不以文辨理 故知「繩墨」 譬文表理, 以綖貫穿以成人首飾。 也。 繩本辨木曲直: 雖有此義, 也。 不可窮盡, 於人無用, 所以言「結鬘」者, 明此 今言「經」, 故如 經經 若不以「綖貫」, 以文辨理, 「泉」 辨耶正之理 五義之中 華散在

312 進退 陀羅譯 熟業者令熟。已熟業者, 門婆羅門作如是說, 二・四四四下)。 生死定量, 進と退の兩方、 『雜阿含經』 譬如縷丸擲著空中,漸漸來下至地自住」(大正 我常持戒, 卷七「往來經歷, 定めることができない狀態。 棄捨進退不可知。此苦樂常住, 受諸苦行,修諸梵行。 究竟苦邊。 求那跋 不

313

「沙彌」 Skt. śrāmaṇera の音寫。俗情をやすめて慈悲の心を 地こす意で息慈と譯し、また、正式の比丘になろうと努 める者の意で勤策男と譯する。七眾の一つ。男子が七歳 の見習僧。具足戒を受ければ一人前の比丘となる。年齡 によって三種に分けられ、七歳から十三歳までを驅烏沙 彌、十四歳から十九歳までを應法沙彌、二十歳を越えて 異足戒を受けないものを名字沙彌と呼び、これを三沙彌 具足戒を受けないものを名字沙彌と呼び、これを三沙彌 という。

(315) 「龍光寺の道恩」 未詳

「一體どうして・なぜ」を「那」字で表す例が三つ現れ(36)「いったいどうして」 原文「那」。これより以下の④には

次表の通り。

1 1 b 何得云 云何出家僧尼猶生 「我不殺生」。 耽 4 b ④ d 4 『經』文道,昔與眾生經爲父母親屬。 問 羅藏』,語優波離道,佛從何處說法。 至 何處說法。至『涅槃』時,集 言「唯取前四時, 眾僧那不思,此猶忍食噉眾生。 []涅槃] 「若爾, 「那得不懺悔」。 時, 迦葉那得語阿難道. 集 不取『涅槃』」。 『毘尼藏』。云何得 『修多

とは, 測を重ねてよいならば, 字及び注 解釋可能ではないだろうか。待考。 で問答が行われ、そこには會話的語法も一部混在すると のに對して、他方、五月二十九日には武帝と出家者の閒 説(法雲と慧明による)であり,この日は問答がなかった ある可能性が高いと言えるのではないだろうか。更に推 した人物 本注に示した④における「那」字を上掲注 ①に示す武帝による講説と③『大般涅槃經』の解 (筆記者・記錄者) は①を書寫した人物と別人で (272) 「只」字と併せて檢討すると, 五月二十三日午前に行われたこ ④を書寫 267

來看我」。迦葉答言,「如是」。復語大王,「我等欲於此城「大德,世尊涅槃,我遂不見。若大德作意欲入涅槃,當

切法, 眾僧復言,我今欲集毘尼藏,應當問誰。大德迦葉答言,修多羅,如是修多羅,乃至廣說四種修多羅。結集已竟, 當共結集。……。是時迦葉語諸比丘,阿難所說是何修多 修多羅。是時迦葉語阿難言,汝今當說修多羅。我等大眾 聞中第一。一切修多羅,皆是阿難受持。我等當問阿難集 眾僧心念, 當失正心。 石窟。至已 當於彼處結集法藏」。乃至迦葉共五百羅漢: 如是可說 迦 業思惟 乃至五百阿羅漢入三摩提,從三摩提起而說言, 諸眾僧復言, 爲須提那迦蘭陀子。 乃至五百阿羅漢次第坐, 醫藥、 於三藏中先集何藏。大德迦葉言: 我等未中之前. 如是不可說。有石窟處名畢波羅延樹名。 「此寺廣大。 時王答言,「我從今去, 莊嚴住處語, 臥具供養眾僧。 誰能誦修多羅。迦葉答言, 諸比丘等妨亂我事」,當作是言, 如是廣說, 當共集優陀那伽陀。中後集一 「諸比丘, 願諸眾僧在竹林中」。 於其坐處鋪尼師檀。一切 至未終滅, 乃至第二法藏已竟 於未來世諸比丘等 長老阿難多 當先集修多 往畢波羅延 當以衣服 如是

319

「『涅槃』云,「夫食肉者斷大慈種」」 食如子肉想。 從今日始不聽聲聞弟子食肉。 是。佛於何處說波羅夷。優波離答言,於毘時國。爲何人 迦葉語優波離,長老,汝當說毘尼,我欲結集。答言, 長老優波離持一切律最爲第一。我當問其欲結毘尼。 (大正五〇・一五二上)。 善男子, 汝今乃能善知我意。護法菩薩應當如是。 迦葉菩薩復白佛言, 夫食肉者斷大慈種」 若受檀越信施之時! 南本『大般涅槃經 世尊, (大正一二・六二六上)。 云何如來不聽食 應觀是 善男子,

320

318

食肉者斷大慈種」。 者斷大慈種義, 向高座爲都講, 葉菩薩復白佛言, 佛子不續」(大正五二・二九八上)。同「二十三日旦, 斷酒肉文」「願今日二部僧尼, 於華林殿前登東向高座爲法師, 皆令聽經法者如說修行, 唱『大涅槃經』四相品四分之一,陳食肉 法雲解釋」(大正五二・二九九上)。同 世尊, 云何如來不聽食肉。善男子, 各還本寺, 不可復令斷大慈種 瓦官寺慧明登西 匡正 光宅 一迦 使 和

我從今日制諸弟子不得復食一切肉, 我從今日制諸弟子不得復食一切肉也。迦葉,其食肉者、故,斷十種肉。異想故,一切悉斷,及自死者。迦葉, 九四下)。 恐怖」(大正一二・六二六上~中)。「斷酒肉文」「『涅槃經 如來所制一切禁戒各有異意, 南本『大般涅槃經』卷四「善男子,不應同彼尼乾所見。 言,迦葉, 悉生恐怖, — 若行, 我今日制諸弟子不得食一切肉」(大正五二・二 譬如有人近師子已, 眾人見之, 聞師子臭亦生 若住,若坐,若臥——,一切眾生聞其肉氣, 異意故, 一切悉斷, , 及自死者。迦葉, 聽食三種淨肉。異 及自死者_

|外書所云「自踰短垣」、 ·**解素**」「斷酒肉文」「食菜以爲冷便復解素。此是行者未得菜 梁武帝「净業賦」序 腥臊能滅菜力。所以惑者云,菜爲性冷。 董褐復命曰, 等屢勸解素,乃是忠至, 不得菜蔬之力。退不得魚肉邪益」(大正五二・二九八下)。 菜與魚肉如水與火。食菜裁欲得力。 …今君掩王東海, 「竊簡書法」」 (『廣弘明集』卷二九) 未達朕心」(大正五二・三三六上)。 以淫名聞于天子, 國語 · 凡數解素人。進 復噉魚肉。魚肉 「謝朏, 吳語 孔彥穎 君有短

「穢門」 宣武寺の法寵」 始半年, 吳伯, 梁楊都宣武寺沙門釋法寵傳「釋法寵,姓馮氏,南昭武寺の法寵」 生卒年四五一~五二六。『續高僧傳』 因立名爲宣武寺也。門徒敦厚常百許人。……。以普通五寺本陝小,帝爲宣武王修福,下敕王人繕改張飾以待寵焉。 座法師, 每義集以禮致之,略其年臘敕常居坐首,不呼其名號爲上 慈仁愷悌, 及東昏在位, 開宇臨磵敞軒映水,解帙尋 矣」。又從長樂寺僧周學。……。又鼓棹西歸住道林寺 放故留兒女, 日夜辛勤不以寒暑動意。 都住興皇寺。 執志固請。 非義爲義 (五〇八) 齊隆寺法鏡徂歿, 法寵法師造次舉動, (五二四) 三月十六日卒, 竊簡而寫法律,蹲踞茲爲義,以非禮爲禮, 而自踰, 後遭世難寓居海鹽。 不曰吳王。 請爲家僧,敕施車牛人力衣服飲食, 捨家服道住光興寺, 乃曰, 雅有君子之風。匡政寺廟, 多請遊於北山 又從道猛曇濟學『成實論』。二公雅相歎賞。 法寵法師絕塵如棄唾, 須待爲汝婚竟隨意所欲。十八納妻。 諸侯是以敢辭」。 蹲踞而誦 荊則何有 不逾律儀, 譬猶倮走而追狂人, 吳郡張融與周顒書曰,「古人遺 少有絕俗之志, 二親愛而弗許. 春秋七十四」 僧正惠超啟寵鎭之,敕曰,因而移寓天保寺。天監七年 成辦法式習學威儀。 『經』,每自惆悵而不能已。 于周室。 不俠性欲, 不事形勢. 『淮南子』 若斯之志, 夫命圭有命 信得其人矣」。上 (大正五〇・四六 盗財! 說山訓 四時不絕。 南陽冠軍 大矣遠 而豫乞

324

竺法護譯 以布施杖害諸慳貪 『度世品經』 修禁戒業壞除 卷四 「菩薩杖有十事。 切犯眾惡事, 何謂爲 等 326

323

以法杖消化眾生一 能爲消去諸反逆戶,是爲菩薩所執十杖」(大正一〇・六四 爲穢行而開化之, 遠離一切不曉活業, 消去妄想 講 切愛欲眾瑕穢門, 則以智慧斷截眾生塵勞愛欲, 以善權杖普自現身婬怒癡亂, 一法杖破壞一切諸所 其在生死則以 依倚, 以 一切智門 (慧力) 江業杖

 \Box

322

身觀。 三・七九六上)。 若違性瞋故亦損人身。備在『經』文。不可具述」(大正五 善色蟲。十名穢門創蟲。 [參考] 名散汁蟲。六名三焦蟲。七名破腸蟲。八名閉塞蟲。九名 一名生蟲。二名鍼口蟲。 彼以聞慧, 道世 『法苑珠林』 或以天眼 出其色可惡住糞穢中。此 卷六七「復次, 三名節蟲。 見十種蟲行於溺中。 四名無足蟲 修行者內身循 十種蟲 五.

懺悔」 南本『大般涅槃經』卷一七「王若懺悔懷慚愧者, 弘明集』卷二七)「滅苦之要, 懷慚愧, 潔其心, 卽除滅, 住子淨行法門」(原本[南齊] て參照。 靜其慮, 鄙恥外發」(大正五二・三〇七中)。直後注も併せ 清淨如本」(大正一二·七二〇下)。道宣 端其形, 整其貌, 莫過懺悔。懺悔之法,先當 蕭子良「淨住子」二十卷, 恭其身, 肅其容,內 「統略淨 一廣 罪

問 教懺悔, 多譯『五 三〇上)。 心目自觀己身。 云何懺悔。答, 悔,淨身口意,至心懇惻,發弘!『五門禪經要用法』「以敎行者, 直前注も併せて參照 若言我見自身 懇惻至心是爲懺悔」 發弘誓願, 便觀他身」 初教慈心觀法。 [南朝宋]曇摩蜜 然後教坐, (大正一五・三 先 便

325

「大丈夫」 孟子 滕文公下篇「富貴不能淫 貧賤不能

丈夫」(大正二・一七二上)。 大丈夫也。所以者何。心解脱故。是名比丘大丈夫及非大 法觀念住已, 夫也。所以者何。 我不說彼爲大丈夫。所以者何。心不解脫故。若比丘身身 若比丘受心法法觀念住,心不離欲,不得解脫, 脫盡諸有漏 若比丘身身觀念住, 善哉善哉 如所說大丈夫,云何名大丈夫,非大丈夫。 心得離欲, 比丘能問如來大丈夫義。諦聽善思 心離貪欲,心得解脫, 我說彼非爲大丈夫。所以者何。心不解脫故 此之謂大丈夫」。 心解脫故。若受心法法觀念住, 心得解脱, 彼身身觀念住已,心不離欲 盡諸有漏, 『雜阿含經』 盡諸有漏, 我說彼爲大丈 我說彼爲 當爲汝說 佛告比丘 受心法

332

327 ·導師」『妙法蓮華經』卷一「最後天中天, 仙之導師, 度脫無量眾」(大正九・五中)。 號曰燃燈佛, 諸

333

- 328 唱導」 慧皎 宣唱法理, 『高僧傳』卷一三「唱導篇」論「唱導者, 開導眾心也」(大正五〇・四一七下)。 蓋以
- 329 「出寺」『續高僧傳』卷二二・慧旻傳「結徒厲業一十七 不出寺門, 六一九下)。 無窮別請。 元始要終, 布衣蔬食」(大正五〇 年

334

居然」確かに・確實にの意。『三國志』魏志、 忠直之賞, 萬里之勢」。 下諸人送瀨鄉將別, 世說新語 明公實之報, 言語「袁彥伯 旣自悽惘 則賢不肖之分,居然別矣」。 (宏 歎曰, 爲謝安南 江山遼落, 居然有 (奉) 司馬, 何變傳 顯

335

330

331 無慚愧 大般涅槃經 國語 卷 一八·梵行品之五 「是故大國慙愧 大王。 小國附協」。 譬如涅槃 本

> 以錢買肉,非己自殺。 出家人噉食魚肉, 七二七中~下)。 飾邪說云,「佛敎爲法, 障蔽形體」(大正一二・八三四中)。 品之四「善男子,是經能爲無慚愧者而作衣服 慚愧之人則爲非有. 而亦是有。 南本『大般涅槃經』 或爲白衣弟子之所聞見, 此亦非嫌」(大正五二・二九四下)。 本存遠因。 殺亦如是, 無慚愧者則爲非無」 「斷酒肉文」旣出 在於卽日, 非有, 內無慚愧 迦葉菩薩 如世衣裳 而 亦是

- ·邪見」 鳩摩羅什譯『成實論』卷一〇「若實有法而生無心: 我慚愧汝我食汝」「斷酒肉文」「法寵所言慚愧而食眾生。此 是名邪見。言無四諦、三寶等。『經』中說,邪見謂無施、 之羅刹」(大正五二・三〇三上)。『釋門自鏡錄』卷下「法 無祠、無燒、無善、無惡、 我食汝。法寵此心卽是經之羅刹」(大正五一・八一八中)。 寵所言慚愧而食眾生。此是經中所明羅刹女婦云,我念汝 是經中所明羅刹婦女云,我念汝我食汝。法寵此心卽是經 無善惡業報、無今世、無後世
- 二·三一七中~下)。 無父母、無眾生受生世閒、 無阿羅漢正行正至」(大正三
- 『釋門自鏡錄』卷下「又問, 慚愧。又復慚愧不得重犯 一・八一八上~中)。 非謂慚愧。若使先時不知或是過誤,後方起愧 先道懺悔而猶噉食。此是知而故 如其重犯 罪更彌大」 (大正五 乃是
- 耆婆云, 眾生。一慚,二愧。慚者,自不作罪。愧悔,而懷慚愧。大王,諸佛世尊常說是言, 卷一七「耆婆答言, 汝有慚愧,故罪可滅。 「善哉善哉, ::清白法] 王雖作罪, 愧者, 南本『大般涅槃 有二白法能救 不敎他作。 心生重

(33)「法師是得經言,不得其意」『易』繋辭上傳「子曰,「書不盡

慚愧, 大王, 慚愧。順淸白法, 恭敬父母師長。懷慚愧故, 作。慚者, 能救眾生。一慚, 二愧。慚者, 十種慚愧門 二・七二〇中~下)。道宣 心亦爾。一一善心能破大惡。 若懷慚愧 能恭敬 是故不漏。 罪則消滅。是故諸佛說有智者不覆藏罪」(大正一 王若懺悔 如佛所說, 內自羞恥。 父母 內自羞恥。愧者,發露向人。有慚愧故, 罪則消滅。 (『廣弘明集』卷二七)「『涅槃』云,「有二白法 無愧者. 師長。 若作眾罪不覆不藏, 事乃無量」(大正五二・三一四上~中)。 覆藏者漏, 有慚愧故, 大王, (蕭子良)「統略淨住子淨行法門 發露向人。 罪則除滅」。顯相如此, 如水渧雖微. 罪卽除滅 若覆罪者, 不覆藏者則無有漏。 自不作惡。愧者, 名爲畜生。 說有父母兄弟姉 以不覆故 慚者羞人。愧者羞天。 清淨如本。 罪則增長。 漸盈大器 有慚愧故, 罪則微薄。 不敎他 則能

清白法能得觀世閒。何等二。一者媿,二者慚。設是世閒佛在舍衞國,行在祇樹給孤獨園。是時,佛告比丘,「二慚愧卽是淸白法」 安世高譯『七處三觀經』「聞如是,一時, 但觀是法清白故,爲得分別。佛設有是世閒不正,譬如牛、馬、 爲父爲母, 鷄猪狗亦畜生,但觀是清白二法故,媿亦慚故,若從學若師,若君若大人。設有是世閒不正,蘖 無有是二法, 中。 爲兄爲弟, 爲不得分別若父若母, 若兄若弟, 爲男女,爲從學爲師, 佛說如是」(大正二・九八八 象、 鷄、 譬如牛馬象 爲君爲大人。 狗亦畜生, 爲得分明 若男女

336

之以盡利,鼓之舞之以盡神」」。 人立象以盡意,設卦以盡情僞,繫辭焉以盡其言,變而通言,言不盡意」。然則聖人之意,其不可見乎。子曰,「聖

罪,不預人流,愧我此罪,不蒙天罸,是爲白法」。「白法」『法苑珠林』卷八六「悔罪要方,慚愧爲本。我慚此

339

338

- 上服,深心爲華鬘」(大正一四·五四九下~五四九下)。 「摩詰以偈答曰,……相具以嚴容,眾好飾其姿,慚愧之上服」 鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』卷中
- 寺法超・奉誠寺僧辯・光宅寺寶度を指す。 「三律師」 既出(大正五二・二九九頁上一二行~一三行)。

341

340

- 始興寺景猷」 懇至, 二人推嚴隨行。恢懷道素篤, 恢心敬其奇, 良久不覺, 至嚴精舍 文獻公王導の廟を寺としたものであるとする。 所謂住始興寺,蓋卽文獻公廟也。文獻爲始興公, 住始興寺」(大正五〇・三三九中)とある。 [清] 法師也』。 恢卽啓宋武帝, 『高僧傳』 南朝寺考』に引く陳作霖の考證によれば、「『高僧傳』 六朝往往有之」とあり、 卷三・智嚴傳に「時始興公王恢從駕遊觀山川 景猷は僧傳に見えない。始興寺に關しては 於是彈指, 三人開眼, 見其同止三僧,各坐繩床, 訪諸耆老,皆云,『此三僧隱居求志, 延請還都, 始興寺は東晉建國の功勞者 俄而還閉, 禮事甚殷,還都 莫肯行者。旣屢請 禪思湛然; 問不與言。 劉世珩 謂廟爲 恢至, 高潔 刨
- 義。法雲解釋,輿駕親御,地鋪席位於高座之北。僧、尼『大涅槃經』「四相品」四分之一,陳「食肉者斷大慈種」登東向高座爲法師,瓦官寺慧明,登西向高座爲都講,唱[參考]「斷酒肉文」「二十三日旦,光宅寺法雲,於華林殿前,

二眾各以次列坐」(大正五二・二九九上)。

346

- 三種淨肉」 既出(大正五二・二九九上)。「三種不淨肉」に屬す定多數の人々に向けて販賣する肉は「三種淨肉」に属すご殺した場面を見た肉、同樣のことを聞いた肉、これらざ殺した場面を見た肉、同樣のことを聞いた肉、これら、三種不淨肉」 既出(大正五二・二九九上)。「三種不淨肉」の對
- [參考] 鳩摩羅什等譯『十誦律』卷二六「三種淨肉聽噉。[參考] 鳩摩羅什等譯『十誦律』卷二六「三種淨肉聽噉。 是生故爲我奪命,如是不聞。云何不見。自眼不有緣生疑,是中有屠兒家有自死者,是主人善,不故爲我奪命,如是不聞。云何不疑。心中無方結婬戒不得與女人行婬,未制畜生。佛必因事漸制,是先結婬戒不得與女人行婬,未制畜生。佛必因事漸制,是先結婬戒不得與女人行婬,未制畜生。佛必因事漸制,是先結婬戒不得與女人行婬,未制畜生。佛必因事漸制,是大結婬戒不得與女人行婬,未制畜生。佛必因事漸制,是大結婬戒不得與女人行婬,未制畜生。佛必因事漸制,是

349

344

如來稱讚魚肉爲美食」[參考]『十誦律』卷一三「若比丘不 七九九下)。 肉 ·善見律毘婆沙』卷一八「有九波夜提者,乞九種美食。 乳,二酪, 脯, 白衣家中有如是美食,乳、酪、生酥、熟酥、 自爲索如是食者, 是名九種。 四熟酥, 其類非一, 波逸提」(大正二三·九七上)。 五油, 六蜜, 種各異也」(大正二四 七石蜜,八 油、

350

345

(大正二三・五一四上)。

- 其大學其大學其大學其一其一其一其一其一其二<l
- 與粳古今字。然秔糯甚相類,黏不黏爲異耳」。也」,「秔,稻不黏者」。『本草』以粳米、稻米爲二物。秔「粳米」『爾雅』釋草「稌,稻」邢昺疏「『字林』「糯,黏稻

348

- 「石蜜」 [參考] 瞿曇般若流支譯 『正法念處經』卷三「彼比「石蜜」 [參考] 瞿曇般若流支譯 『正法念處經』卷三「天竺中)。『太平御覽』卷九五八所引司馬彪『續漢書』「天竺中と前,彼初離垢,名頗尼多。次第二煎則漸微重,名曰中火煎,彼初離垢,名頗尼多。次第二煎則漸微重,名曰中火煎,彼初離垢,名頗尼多。次第二煎則漸微重,名曰中火煎,彼初離垢,名頗尼多。次第二煎則漸微重,名曰中火煎,彼初離垢,名頗尼多。次第二前則漸微重,名曰
- 「穀麥」『三國志』辛毗傳「帝方脩殿舍,百姓勞役,毗上疏田,「竊聞諸葛亮講武治兵,而孫權市馬遼東,量其意指,如是諸田多獲穀麥,復能利益無量眾生,所謂飛鳥走獸、如是諸田多獲穀麥,復能利益無量眾生,所謂飛鳥走獸、如是諸田多獲穀麥,復能利益無量眾生,所謂飛鳥走獸、如是諸田多獲穀麥,復能利益無量眾生,所謂飛鳥走獸、如是諸田多獲穀麥,復能利益無量眾生,所謂飛鳥走獸、如是諸田多獲穀麥,復能利益無量以,而今者宮室大興,加以欲相左右。備豫不虞,古之善政,而今者宮室大興,加以欲相左右。
- 「黑石蜜者,是甘蔗糖,堅强如石,是名石蜜」(大正二四・六四上)。[參考]僧伽跋陀羅譯『善見律毘婆沙』卷一七黑石蜜爲苦。嘗呵梨勒味,以黑石蜜爲甘」(大正三二:二黑石蜜」,鳩摩羅什譯『成實論』卷三「又如嘗白石蜜味,以

354

- 蜜者,『古記』云,「用蔗糖和糯米煎成。 正四〇・三一八下)。 七九五中)。 元照 『四分律行事鈔資持記』 卷二「三、黑石 其堅如石」(大
- 351 酪 若以一渧頗求樹汁投之於中, 應復假眾緣力也。善男子, "大般涅槃經』卷二四「善男子, 『釋名』 「酪, 澤也。乳汁所作, 如水乳雜臥至一月, 即便成酪」(大正一二・七六 如其乳中有酪性者, 使人肥澤也」。 終不成酪 南 不 本

352

抨止」。 浮出故也。酥既徧覆酪上,更下冷水,多少如前。酥凝, 亦與湯等。更急抨之。於此時,杷子不須復達甕底, 令常半酪。乃抨之。良久,酥出,復下冷水。冷水多少, 酪著甕中炙, ……。酪多用大甕,酪少用小甕,置甕於日中。旦起, 二·六九〇下~六九一上)。『齊民要術』卷六「抨酥法。 酪,從酪出生酥,從生酥出熟酥,從熟酥出醍醐」(大正一る。南本『大般涅槃經』卷一三「譬如從牛出乳,從乳出 (=酥)。蘇には,生蘇 (navanīta) と熟蘇 (ghṛta) があ 食頃,作熱湯, 直至日西南角, 起手抨之, 令杷子常至甕底 水解,令得下手,瀉著甕中。湯多少,

358

- 「應畜種種衣服」 [參考] 『十誦律』 卷五六「衣法者, 三・四一六上)。 覆瘡衣、尼師壇, 不須作淨得自畜。僧伽梨、 及餘如法所用衣物, 欝多羅僧、 是名衣法」 安陀會、 雨浴衣、 七種衣 (大正二
- 「壞色」 著新衣者, 名新衣。三種壞色者,若青、 [參考]『十誦律』 波逸提。新衣者, 卷一五 若比丘得他故衣, 「若比丘不以三種壞衣色 若泥、 若茜」 (大正二三 初得故,

- 〇九中)。
- 355 「五種味」 一般には乳・酪・生酥・熟酥 ここでは醍醐のかわりに酪漿である。 醍醐の五を指すが

356

- 「酪漿」 粥。 弘『齊民要術― 中, 五六頁)。『十誦律』卷一三「若索酪汁、 民要術』卷六「大盆盛冷水著甕邊,以手接酥,沈手盆水 突吉羅。不得者亦突吉羅」(大正二三・九七上)。『齊 酥自浮出。更掠如初,酥盡乃止。抨酥酪漿,中和飧 脱脂した乳の残りもの 律』卷一三「若索酪汁、酪漿、酪滓,得-現存する最古の料理書』雄山閣、一九九七年 (田中靜一・小島麗逸・太田
- 「憍奢耶衣」 kauśeya。 [參考] 失譯『薩婆多毘尼毘婆沙』 得綿,名憍奢耶」(大正二·五三三上)。 五「僑奢耶者,是綿名也。此國養蠶, 如秦地人法,蠶熟 卷

357

- |<mark>珂貝</mark>| śankha 『一切經音義』卷二五「『廣雅』「美石次玉 四 · 四六七下)。 也」。『埤蒼』「瑪瑙也」。『玉篇』云,「貝螺屬也」。出海 五印度見今行用, 中色白如雪,所以纓馬膺。『說文』「海介蟲也」。(中略) 者無錢,唯傳貝齒,且如資財貨賄之字,皆從於貝。中天 『玉篇』云,「古者貨貝而寶龜」。 『傳』曰「貝錦文」。古 此方殷周廢貝行錢,于今不絕」(大正五
- 「盂器」 『漢書』卷六五,東方朔傳「置守宮盂下」, 食器也。若盋而大,今之所謂盋盂也」。 顏師古注

359

360

「尼揵」

nirgrantha。『長阿含經』卷一一「時有尼乾子,

字

壽不著衣裳。二盡形壽不飮酒食肉, 養備具。 伽羅樓, (中略) 彼有七苦行, 在彼處止, 人所宗敬, 長夜執持。 名稱遠聞, 多有知識 而不食飯及與麨麵。 何謂七。 一盡形 利 287

四塔,爲四苦行」(大正一‧六六下)。 憂園塔、南名象塔、西名多子塔、北名七聚塔。盡形不離三盡形壽不犯梵行。四盡形壽毗舍離有四石塔——— 東名

(别)「**噉蒜臭穢可惡」** [參考]『十誦律』卷三八「有比丘噉蒜遠大此丘不得噉蒜。若噉者,突吉羅」」(大正二三:二七丘,「比丘哑蒜,恐佛及王聞臭,不敢近佛」。……佛告諸比丘,「此丘哑蒜,恐佛及王聞臭,不敢近佛」。神遙見是比丘,

38)「四道聖人」 支謙譯『佛開解梵志阿颰經』「若能至心淸淨, 即得沙門四道。一曰溝港。二曰頻來。三曰不還。四曰應 前得沙門四道。一曰溝港。二曰頻來。三曰不還。四曰應 流」=「須陀洹 Skt. srotaāpanna」。②「頻來」=「一來」= 「斯陀含 Skt. sakṛdāgāmin」。③「不還」=「阿那含 Skt. anāgāmin」。④「應真」=「阿羅漢 Skt. arhat/arhan」。

363

正法] 『大般涅槃經集解』卷一五「僧宗曰, 釋迦牟尼佛 法住世千歲像, 久久在世利益眾生如上所說」(大正三·二一八下)。 世滿一千歲。正法滅已, 滿五百歲」(大正三・二一一中),同卷八「般涅槃後正法件 有五百年, 『大乘悲分陀利經』 『悲華經』 慧思 像法亦五百年」(大正三七‧四三八下)。 曇無讖 卷「般涅槃後所有正法住世千歲, 『悲門三昧觀眾生品本起經 <u>£</u> 法住世復五百」(大正三・二七〇上)。 影卷五 五~五七七) 汝諸舍利。如汝所願作於佛事 「然後當入涅槃, 『立誓願文』「我聞如是 中說, 佛滅度後正法 像法住世 「佛從癸

> 州汝陽郡武津縣生。至年十五(五二九),年,太歲在乙未(五一五)十一月十一日,像法滅已,末法住世逕一萬年。我慧思,即 四六·七八六中~下)。慧思『立誓願文』「釋迦牟尼說法住 正四六・七八七上)。 後, 正法住世逕五百歲。正法滅已, 事緣非一。略記本源, 過五十六億萬歲,必願具足佛道功德,見彌勒佛。 十六億萬歲, 我從末法初, 始立大誓願, 至癸丑年,足滿一萬歲止住。入末法, 得成道。至癸酉年, 說入道之由,莫不行願。早修禪業,少習弘經。中閒障難 從癸酉年,入涅槃後, 惡世。我今誓願,持令不滅, 槃後。『首楞嚴經』、 月光菩薩出眞丹國 十九,二月八日出家。至癸未年年三十, 丑年七月七日入胎。 「法華經 『無量壽經』 八十餘年, 導利眾生, 從甲戌年, 至癸酉年, 眾生多死, 及諸大乘, 在後得百年住, 至癸巳年, 說法, 『般舟三昧』先滅不現。 至甲寅年四月八日生。 足滿一千歲止住。末法, 年八十, 二月十五日, 輒自思惟 至未來賢劫初,彌勒成佛時 精進苦行, 兼發誓願及造金字二部經典」(大正 化緣既訖, 便取滅度。滅度之 大度眾生,滿五十二年, 教化眾生, 至彌勒佛出 大度眾生, 足滿五百歲止住。 『此身無常、 至年二十 像法住世逕一千歲。 日,於大魏國南豫、即是末法八十二 然後滅去,至大 過九千八百年後 修習苦行。 是臘月月八日 出家修道, 至壬申 (五三四) , 如願中 车, 有五 一。佛

(1)。 原文は單數・複數の別を明記しないが,ここは複數の意と解

- (36) 「似像持律」 北本『大般涅槃經』「似像持律」, 南本『大般涅槃經』「似像持律」, 心學羅什譯『小品般若波羅蜜經』卷之「輕餘菩薩淸淨行者,須菩提,當知,是人是菩薩旃陀七「輕餘菩薩淸淨行者,須菩提,當知,是人是菩薩旃陀程「輕餘菩薩清淨行者,須菩提,當知,是人是菩薩旃陀之。鳩摩羅什譯『小品般若波羅蜜經』卷
- 366 [參考] 失譯『別譯雜阿含經』 九・五三六中)。 玄保曰,『朕少讀經不多,比日彌復無暇。……』」(大正四 念常『佛祖歷代通載』卷八「帝以問侍中何尚之、 身壞命終, 持戒, 3) 少讀誦 人,極爲窮困, 生忉利天勝妙善處」(大正二・三九〇中)。 甚可憐愍。 『經』,4)亦能小施。 於佛法中(1)生淸淨信, 卷三「爾時, 有此四事因緣果報: 王舍城中有一貧 吏部羊 (2)能淨 园

371

- 所長養身」(大正一二・六二三上)。 非諸聲聞緣覺所知。迦葉,如是功德成如來身,非是雜食(谿)「長養其身」 南本『大般涅槃經』卷三「唯有如來,乃知是相,
- 出號令」。

 出號令」。

 出號令」。

 出號令」。

 與品」第四「爾時,長者將欲誘引其子,而設方便,密遣解品」第四「爾時,長者將欲誘引其子,而設方便,密遣解品」第四「爾時,長者將欲誘引其子,而設方便,密遣

372

相謂言,「此沙門今日以取無常」。是時牧牛人及取薪人集「時諸牧牛人、牧羊人、取薪草人見此比丘坐禪,各各自と「擔負薪草」を別人と解した。『增壹阿含經』卷四五「放畜牛羊,擔負薪草」 法顯譯「形狀憔悴,如放牧者」に基

- **夏髮爪悉皆長利** 安兼睪『養足巠』卷上「有一七五長墳日著衣持鉢,入村乞食。時諸取薪草人見此比丘村中乞食,日著衣持鉢,入村乞食。時諸取薪草人見此比丘村中乞食,各各自相謂言,「此比丘,昨日以取命終。我等以火焚燒。今日復還活。今當立字,字曰還活」」(大正二·七九三中~下)。

 下)。
- ○·一四三下)。 ○·一四三下)。 ○·一四三下)。 ○·一四三下)。 ○・一四三下)。 ○・一四三下)。

- 如 猫伺鼠 犯偸蘭遮」 身口放逸, (伺思吏反。 『字林』 云候也,察也) 」 (大正五 欲求利養如猫伺鼠, 鳩摩羅什譯 [唐] 慧琳 (大正一五・二六八上)。 行放逸行. 『禪秘要法經』卷下 『一切經音義』卷二 貪利養故. 貪求無厭, 自言坐禪 實不坐禪, 「若比丘尼妖冶邪 Ŧi. 如如 如此比丘尼 一 四 四 猫 伺鼠 二六七

- 373 眠臥糞穢」 復次, 生法 身念處」(大正二八・六二九上) 離是法。我身亦有病, 力,動止須人,如是思惟, 是思惟,『我亦如是法, <u></u>五. 「復次, 比丘若見男子女人, 身患苦有, 有生過患], 曇摩耶舍·曇摩崛多共譯『舍利弗阿毘曇論 比丘若見嬰兒,心愚癡無識 如實人念憶念,是名身念處。……。 有病過患』, 如是相 『我身亦如是法, 未離是法。我身亦是有 如實人念憶念, 眠臥穢處, , 眠臥穢處: 如是相: 羸劣無 如
- (沼) 「外……,內……」 [參考] [南朝宋] 求那跋陀羅譯『雜阿含(沼) 「外……,內……」 [參考] [南朝宋] 求那跋陀羅譯『雜阿含
- れている」。 (32) 「瘂法」 [參考] 中村元『廣說佛教語大辭典』「あほう【啞

- 「正行威儀」 この語を「正行」と「威儀」の二に分けて解し「正行威儀」 この語を「正行」と「威儀」の二に分けて解して。[西晉] 竺法護譯『度世品經』「菩薩建立有十事。何た。[西晉] 竺法護譯『度世品經』「菩薩建立有十事。何太。[西晉] 竺法護譯『度世品經』「菩薩建立有十事。何以 (大正一○・六二三下~六二四上)。
- (31) 原文「各」は,ここに述べる悪沙門は一人でなく,複數であ
- 見有功德智慧者,不讚其美。見無德者,反說其善。若聞(谿)『反說』 佛馱跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷四二「起計我心:

基づき,「釋子」を釋迦の息子でなく,釋迦の弟子の意「各自稱「是沙門釋子」」 法顯譯「皆稱「沙門釋迦弟子」」に讚他,於彼人所起妒嫉心。是爲慢業」(大正九・六六四上)。

379

『經』中制諸比丘,不得受畜八不淨物」(大正一二・八〇五「貯聚生穀」 南本『大般涅槃經』卷三〇「潮不過限。如是

に解す。「沙門」は自らを指す主語

380

- [參考1][隋]淨影寺慧遠『大般涅槃經義記』卷三「明[參考1][隋]淨影寺慧遠『大般涅槃經義記』卷三「明正、高知碑人民。五、畜養群畜。六、畜金銀錢寶。七、畜象牙、金銀刻鏤、諸寶大床、綿褥氍氀。八、畜一七、畜象牙、金銀刻鏤、諸寶大床、綿褥氍氀。八、畜一七、高外不淨物。何等爲八。如彼『善生優婆塞』經具列其得畜八不淨物。何等爲八。如彼『善生優婆塞』經具列其得畜八不淨物。何等爲八。如彼『善生優婆塞』經具列其
- 宿食,手自作食,自得取菓」(大正二四・八一五上)。(ᢃ3)「**手自作食」** 失譯『毘尼母經』卷三「願世尊,聽諸比丘食殘

382

販賣畜生以此爲業。若自有畜生直賣者聽,但不得賣與屠婆塞得販賣不。答曰,得聽販賣。但不得作五業。一、不不。一緒に潰し殺すことになる。それ故,油は殺生と繋がる。壓搾して作る。その場合,植物に蟲が付いていたら蟲を壓搾して作る。その場合,種物に蟲が付いていたら蟲を「執持油瓶」 法顯譯該當部「習押油業」。油は植物の種子を「執持油瓶」 法顯譯該當部「習押油業」。油は植物の種子を「執持油瓶」

384

能廣宣說大乘經典。

終不捉持王者寶蓋、

油瓶、

389

聽販賣 多殺蟲, ṣā)等外國染法,多殺諸蟲,是故不聽。謂秦地染青法亦 五者,不得作五大色染業, 故。天竺法爾。罽賓以來,麻中一切若無蟲處, 酒爲業。若自有者, 亦聽直賣。四者, 不得壓油, 自有畜生, 卷六「優波離復白佛言, 染數」(大正二三・五〇八下)。=僞經『大方便佛報恩經 刀杖以此爲業。 墮五大染數」。(大正三・一五九下) 但不得作五業。一、不得販賣畜生以此爲業。 直賣者聽, 不得販賣弓箭、 不得沽酒爲業。若自有者: 以油多殺蟲故。 若自有者,直賣者聽。三者, 但莫賣與屠兒。二者,不得販賣弓 謂秦地染青法, 五戒優婆塞得販賣不。 以多殺蟲故。洛沙(Skt. *lāk 天竺法爾, (Skt. *lākṣā) 等外國染法 此爲業。若自有者, 亦多殺蟲 亦聽直賣。 自罽賓已來, 壓油無過 多殺蟲 不得沽

寶蓋革屣」 失譯『毘尼母經』卷三「迦葉,夫護法者,謂著革屣,隨路而行。佛因而制曰,「從今已去,不聽捉傘蓋,著革屣,隨路而行。佛因而制曰,「從今已去,不聽捉傘蓋,著革屣,隨路而行。若在寺中,聽著革屣。木皮或草,作蓋整之。入聚落,除老病,餘者一皆不聽」」(大正二四·八二七下~八二八上)。
「菩薩摩訶薩不親近國王、王子、大臣、官長」(大正九・三七下~八二八上)。

388

一二:六二四中)。 穀米、種種果蓏。不爲利養親近國王、大臣、長者」(大正

「佐冬香」「花冬」「おささごを、で見て墨『ぎ丁舎もと『古相星宿』 下掲『梵網經』卷下第二十九輕戒「占相男女」。

386 385

「蠱道咒幻」 [唐] 慧琳『一切經音義』卷二「蠱道〈姑五反。「蠱道咒幻」 [唐] 慧琳『一切經音義』卷二「蠱道〈姑五反。「蠱道《姑五反。」 [] 八八百四十三十一上)。同卷七五「蠱道〈上音古。『鄭注周禮』,蠱毒也。亦蠱毒也。『字書』云,蠧神也。『說文』云,腹中蟲也。亦蠱毒也。『字書』云,蠧神也。『說文』云,腹中蟲也。一上)。同卷七五「蠱道〈上音古。『鄭注周禮』,強五反。「蠱道咒幻」 [唐] 慧琳『一切經音義』卷二「蠱道〈姑五反。

387

『雪庸、劉書』「参考」爲 巠『��桐 巠』下卷(第三三 巠戌)『雪庸、劉書』「給考」爲 巠『��桐 巠』下卷(第三三 巠戌)。 心故,爲利養,販賣男女色,自手作食,自磨自春,占相男女,解夢吉凶,是男是女,呪術、工巧、調鷹方法,和男女,解夢吉凶,是男是女,呪術、工巧、調鷹方法,和男女,解夢吉凶,是男是女,呪術、工巧、調鷹方法,和明本語藥』 [參考]『梵網經』下卷二九輕戒「若佛子,以惡和合諸藥』 [參考]『梵網經』下卷二九輕戒「若佛子,以惡

博、擲石、投壺、八道行成、抓鏡、芝草、楊枝、鉢盂、「若佛子,……,不得摴蒲、圍碁、波羅賽戲、彈碁、六「摴蒲、圍碁」 [參考] 僞經 『梵網 經』下卷(第三三輕戒)

食肉戒。斷大慈心。大士懷慈爲本,一切悉斷。聲聞漸敘,現內」『大般涅槃經』で「現肉」《苦薩戒義疏》卷下「第三老子作之用卜。今人擲之爲戲〉」(大正五四・四六七下)。老子作之用卜。今人擲之爲戲〉」(大正五四・四六七下)。。「一切經音義」卷二五「摴蒲〈上敕於反。『博物志』云,後考了。「大般涅槃經』で「現肉」はここに一囘現れるのみ。「一切經音義」卷二五「摴蒲〈上敕於反。『博物志』云,後考了。「一一不得作」(船山二體製,而作卜筮,不得作盜賊使命,一一不得作」(船山二體製,而作卜筮,不得作盜賊使命,一一不得作」(船山二體製,而作卜筮,不得作盜賊使命,一一不得作」(船山二

393

| 五月| | 一五月| | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 | 1.50 |

391 「涅槃時到,是故略說」 南本『大般涅槃經』卷一「序品」 遍滿, 歸依,爲世閒舍。大覺世尊將欲涅槃。一切眾生若有所疑 正遍知, 後圍遶。二月十五日臨涅槃時,以佛神力出大音聲。 邊娑羅雙樹閒。爾時, 今悉可問, 「如是我聞,一時,佛在拘尸城力士生地阿夷羅跋提河 乃至有頂。隨其類音, 憐愍眾生, 爲最後問」(大正一二・六〇五上)。 覆護眾生,等視眾生如羅睺羅! 世尊與大比丘八十億百千人俱, 曹告眾生, 『今日如來應供 爲作 第

云何不捨錢財,而得名爲大施檀越。佛言,若有沙門、婆……。迦葉,云何能隨問答者。若有人來問佛世尊,我當一者自正。二者正他。三者能隨問答。四者善解因緣義。子,菩薩摩訶薩分別開示大般涅槃,有四相義。何等爲四。

392

(大正一二·六二五中,六二五下~六二六上)。布聲聞天下,未曾損已一毫之費,是則名爲能隨問答」食,施過中食。不著花香,施以花香。如是施者,施名流食,施過中食。不著花香,施以花香。如是施者,施名流使。修梵行者,施與女色。斷酒肉者,施以酒肉。不過中(經經門等少欲知足,不受不畜不淨物者,當施其人奴婢、僕

「楞伽」 求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』卷一「如是我聞:「楞伽」 求那跋陀羅譯『楞伽山頂,種種寶華以爲莊嚴,與大比一時,佛住南海濱楞伽山頂,種種寶華以爲莊嚴,與大比一時,佛住南海濱楞伽山頂,種種寶華以爲莊嚴,與大比一時,佛住南海濱楞伽山頂,種種寶華以爲莊嚴,與大比是等所緣境界法身」(大正一六・四八四上)。同卷一「世尊」。

394

「及興」「及以」と同義(佛典では更に「以及」という逆の表現dya,「肉」は Skt. māṃsa,「葱」は Skt. malāṇḍu。リット語現存本の表記を比定できる。「酒」は Skt. ma-これ以下に「酒」「肉「葱」は數囘現れ,それぞれサンスク

せん」,原文「臭穢無名稱」。これにそのまま對應する詩〔彼らの食する〕臭く穢れたものに讚えるべき譽れはありまを付し,「酒肉及び葱と」と訓ずるのは不適。

397

396

もある)。

大正藏が當該箇所に「酒肉及與」葱」と返り點

こでは表現が逆になり、

ねじれている。

406

は罪過であり、

酒肉を攝取しないのは功徳であるが、こ

(讃えるべき譽れ)を意味する。 (讃えるべき譽れ)を意味する。

- り・過誤・罪過)。 guṇa(直譯:功德・德質),過惡は Skt. doṣa(直譯:誤り・過誤・不食罪福」 後掲注(娰)「食不食功德過惡」。功德は Skt.
- よって質問してから)。 paripṛcchya(直譯:諸のガーター〔偈頌=詩節=韻文〕に(勁) 「偈頌で問い訊ねてから」 原文「說偈問已」,Skt. gāthābhiḥ
- (⑪)「**更に再び」** 原文 <mark>[復],Skt. punar api(直譯:もう一度)。</mark> よって質問してから)。
- 肉を食することにおける德目と過失を)。酒肉を攝取するの(娰)「〔酒や肉や蔥を〕攝取する功德と罪過を」 原文「食不食肉(直譯:願った・欲した)。
- (昭) 「願わくは……お說きください」 原文「願……說」。Skt. deśayatu (直譯:示せ)。
- 方で〕教えを辨別して説示したいと切望し」 原文「當(糾)「過去と未來に樣々に命ある生きものを食肉し〔かつその一

爲種種悕望肉食眾生分別說法」。次注を見よ。

うようにさせる」 原文「令彼眾生慈心相向」。「かの命ある生きものたちを慈しみの心に〔互いに〕向かい

405

[比較1] Skt. yenāham cānye ca bodhisattvā mahāsattvā anāgata-pratyutpannakāle sattvānām kravyāda-sattva-va-gati-vāsanāvāsitānām māṃsa-bhoja-gṛdhrāṇāṃ ra-satṛṣṇāprahāṇāya dharmaṃ deśayāma (直譯:それにより(人そうすれば) 私も他の菩薩摩訶薩たちは,食肉する命ある生きものの轉生先への熏習に熏習された,肉の享受を欲求した命ある生きものたちが〔肉〕味に對する渴望から離れるために、教えを示せるでしょう)。

一三・三八四上~中)。 乃至禪正受善住心、 生利益心、不動心、 一切苦惱及不善法, 怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦, 畜生之中互相殘食等苦,閻魔羅界飢渴等苦, 復作是願 ——,隨我住定時節已來,欲滅地獄種種諸苦. 語例[北涼]曇無讖譯『大方等大集經』卷五七「又菩薩 而演說之,令捨肉味, [比較2]實叉難陀譯「爲未來、現在報習所熏食肉眾生: 不迷惑心,及滅眾生愚惑之心」(大正 無怨心、無諍心、無鬭訟心、哀愍心 成就一切善法, 令諸眾生慈心相向, 求於法味, 於一切眾生起大慈心」。 隨願分齊, 及寒熱苦、

緣覺自地止息已,亦得逮成無上菩提」。 慈心已,各於住地淸淨明了,疾得究竟無上菩提。聲聞、慈心已,各於住地淸淨明了,疾得究竟無上菩提。聲聞、らかでありかつ明瞭であれば,直にこの上なきボーディ「慈しみの心を得てから,それぞれが〔自ら〕住まう地で淸

[比 較 1] Skt. yathā ca te kravyāda-bhojinah sattvā virāgya rasa-tṛṣṇāṃ dharma-rasāhāra-kāṅkṣayā sar-va-sattvaikaputraka-premānugatāh parasparaṃ kṛta-yogyāḥ kṣipram anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃ-budhyeran. (直譯:ちょうど動物を食することを喜ぶ命ある生きものたちが、「肉の」味への貪欲を離れて、「ブッダの」教生きものを唯だ一人の息子のように愛おしむ思いに隨順し、互いに結び付つく〔ならば、その命ある生きものたちは〕、この上に結び付つく〔ならば、その命ある生きものたちは〕、この上なく正しい完全な悟り(ボーディ)を迅速に體得するに違いない)。

409

「聲聞緣覺自地止息已,亦得逮成無上菩提」 [比較] 菩提留「聲聞緣覺自地止息已,亦得逮成無上菩提」 [比較] 菩提留

407

[比較1]Skt. śrāvaka-pratyekabuddha-bhūmyā vā viś

から,如來のこの上なき地/段階に近づくに違いない)。譯:あるいは vā 聲聞と緣覺〔=獨覺〕の地/段階に安らいで譯:あるいは vā 聲聞と緣覺〔=獨覺〕の地/段階に安らいで

無上正覺」。 [比較2]實叉難陀譯「或二乘地,暫時止息,究竟當成

常、顚倒計著,尙有遮法,不聽食肉」。て許さないのです」 原文「惡邪論法諸外道輩邪見、斷、ブッダの〕教えを妨げることすらしても,食肉など決し見・常見とによって眞逆に誤解します〔が,彼らさえ「惡く邪に教えを論(あげつら)う非佛教徒たちは,邪見と斷

[比 較 1] *Skt.* durākhyāta-dharmair api tāvad bhagavann anya-tīrthikair lokāyata-dṛṣṭy-abhiniviṣṭaiḥ sadasat-pakṣoccheda-śāśvata-vādibhir māṃsaṃ nivāryate bhakṣyamāṇaṃ, svayaṃ ca na bhakṣate (直譯:他はさておき,世に尊き御方よ,〔ブッダの〕教えを悪く言い,順世(外道) の見解に執着する,存在と非存在の兩側を否定する常見論者である非佛教徒たちにすらも食肉を禁じ,自分でも食さない)。

食肉」(大正一六・六二三上)。 路迦耶等諸外道輩起有無見,執著斷常,尙有遮禁,不聽[比較2][唐]實叉難陀譯『大乘入楞伽經』卷六「世尊

「況復如來世閒救護,正法成就而食肉耶」。 ら,〔その御方が〕食肉するなどあり得ません」 原文「況んや如來という世閒の救護者の正しい教えが成就してか

410

[比較1] *Skt.* prāg eva kṛpaika-rase samyaksaṃbuddhe praṇīte loka-nātha tava śāsane māṃsaṃ svayaṃ ca

bhakṣante bhakṣyamāṇaṃ ca na nivāryate 實叉難陀譯『同』 而許自他俱食肉耶」(大正一六・六二三 卷六「何況如來應正等覺大

411 佛告大慧, 用例は多い。 原文「當爲汝說」の「當」は未來形を表す。佛敎文獻に 諦聽諦聽。善思念之」(大正一五・二四四中)。 鬘白佛,善哉世尊,唯然受敎」(大正一二・二一九中)。(大正二・五三五中)。『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』「勝 鬘白佛, 善哉世尊, 利與央掘魔羅俱白佛言, **教**」(大正二·五中)。『央掘魔羅經』卷三「爾時,諦聽諦聽,善思念之,當爲汝說。羅睺羅白佛, 大慧白佛, 『禪秘要法經』卷上「阿難白佛. 「善哉善哉, 「唯然受敎」」 諦聽諦聽。善思念之,當爲汝說」。 世尊,善哉善哉,唯然受敎」地魔羅經』卷三「爾時,文殊師 |爲汝說。羅睺羅白佛,唯然受『雜阿含經』卷一「佛告羅睺羅| 唯然受教。佛告阿難。(大正一二·二一九中)。

416

412 「**思念**」『國語』楚語下「吾聞君子唯獨居思念前世之崇替者, 與哀殯喪,於是有嘆,其餘則否」。荀悅『漢紀』 五「上思念, 李夫人不已」。 一武帝紀

417

413 414 「有無量因緣,不應食肉」 法顯譯『大般泥洹經』 迦葉,善男子,若常食肉國一切食皆有肉現。 「到大司馬記室牋」(『文選』卷四〇)「況昉受教君子, 我聽却肉去 將二

418

復制令不應食肉。 我今日說有因緣者制不食肉。 汁壞其本味然後可食。 『戰國策』魏策四「信陵君曰, 是名能隨問答。 若魚鹿肉等自分可知。 無因緣者因說大般泥洹。 『無忌謹受教』」。 善解因緣者」(大正一 食者得罪。 任昉

- 二‧八六九中)。鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷三「佛知童 廣佛華嚴經』卷三三「佛子, 及諸神通事」(大正九・二六下)。 宿世之所行,以無量因緣、 以無量因緣乃能得成」(大正九・六一二下)。 譬如三千大千世界. 種種諸譬喩: 佛馱跋陀羅譯『大方 非少因
- **「今當爲汝略說」**『雜阿含經』卷三四「佛告婆蹉。我今當爲 今之「諾」也〉」(大正五四・三二〇下)。すなわち慧琳は **慧琳『一切經音義』卷二「唯然〈惟癸反。『周禮』云** 汝略說善不善法。諦聽善思」(大正二・二四六中)。[唐] 唯」を「諾」と解する。 唯者應辭也」。『蒼頡篇』 云「唯恭於諾」。案「唯」, 刨

- ·從本已來」 『雜阿含經』 卷四四 「爾時, 世尊告梵天曰 二·三二五上)。『大般涅槃經』卷八「佛言, 我義,從本已來常爲無量煩惱所覆,是故眾生不能得見 者,卽是如來藏義。一切眾生悉有佛性,卽是我義。如是 今復起是見。『從本已來,未曾見有過我上者』不」(大正 (大正一二・六四八中)。 善男子, 我 汝
- 「展轉」『戰國策』趙策一「韓與秦接境壤界,其地不能千里, nyam の譯。「次々と」または「相互に・互いに」のいず れかの意。 展轉不可約」。佛典漢譯における「展轉」は Skt. anyo
- 親想 卷一「善業日, 常生親想無瞋恚心」(大正三〇・九九四中)。『大明度經 以行道也。所以者何。 「願我莫與一切眾生作惡因緣」。於諸眾生不作怨想: [南朝宋] 求那跋摩譯『菩薩善戒經』卷六「常作是 吾不樂菩薩艱難行。 行艱難苦想者, 而大士者無艱難想 不能爲無量人民建

八·四八一中)。 想者,善權大悲也〉。若被形截, 於一切天下不分別, 若己身〉,都一切於身,不明是外內〈菩薩都一切持心 安隱導利。 斯一切爲吾子。菩薩當度此無量苦性,不有怒意〈法 如賢者言, 以是想將導之 非有癡貪戀之想〉。見眾生爲若己 『此弟子行疲, 菩薩無起。以其無起,故爲菩薩」(大正 是以當爲安隱易行之想 〈行菩薩道者, 爲眾生建若母想、 當生是想行菩薩道 親者爲內, 疎者爲外矣也〉, 心無欝毒, 一切如視五親也。 父想、 一切人爲己親 終不爲苦想 昆弟想、姉 〈當念一切 切人,

屠者」「賢愚經 驢騾、駱駝、 羊。以草養此四大形」(大正二·八〇一中)。『未曾有因緣 而諸屠者雖貪其利, 持金錢,等重買索」。 玳瑁、琥珀、 逐」。漢·陸賈『新 復八千世,畜生罪畢」(大正一七·五八三中)。劉向「九 馬,隨其主人所受福處, 償其主人, 先世供養。業報因緣, 或作駱駝、驢騾、牛、 經』卷下「如是展轉, 卷四七「我自念生死無數。或作驢騾、駱駝、象、 **愍命(『楚辭』卷一六)「卻騏驥以轉運兮,騰驢騾以馳** 狐狗、牛、 珊瑚、翠羽、珠玉,山生水藏, 卷四 王法嚴重 「時優婆夷聞是事已, 語』道基「夫驢騾、駱駝、犀、 爾時, 經八千劫, 餓鬼罪畢, 受六畜身 常以筋力,報償主人。如是展轉 人、獸等肉」 使人雖持金錢, 懼失命根 心憂惱言, 『增壹阿含經』 無敢與者。 擇地而居」。 如敕推求 馬、 象、 猪

420

是往返,了不能得」

(大正四・三七五上)。

『莊子』徐無鬼

屠者之閒」。『史記』魏公子列傳「臣迺市井鼓刀屠者」。『戰國策』韓策二「軹深井里聶政,勇敢士也,避仇隱於「不知屠者之一旦鼓臂布草操煙火,而已與豕俱焦也」。

有乳味」(大正一二・八九四下)。

其販乳者亦復如是。以水雜賣,展轉相欺。人買食之,無土城邑聚落有賣乳者。或持水雜,欺誑他人,而求財物。

421

膽論』「尋所受之終始,推氣分之所由」。 生人及萬物鳥獸昆蟲,各有奇耦,氣分不同」。嵇康『明生人及萬物鳥獸昆蟲,各有奇耦,氣分不同」。嵇康『躬』之

422

則盜,得無楚之水土,使民善盜耶」。也」。『晏子春秋』內篇・雜下「今民生長于齊不盜,入楚也」。『倭子』形勢解「故春夏生長,秋冬收藏,四時之節

423

424

419

| **眾生聞氣悉生恐怖**] 「斷酒肉文」引『大般涅槃經』(大正一二·六 「大正五二·三〇一中)。南本『大般涅槃經』(大正一二·六 其食肉者,若行若住若坐若臥,一切眾生聞其肉氣悉生恐 其食肉者,若行若住若坐若臥,一切眾生聞其肉氣悉生恐 「**眾生聞氣悉生恐怖**」「斷酒肉文」引『大般涅槃經』「迦葉,

·**栴陀羅**(旃陀羅)」『一切經音義』卷一「旃荼羅 三一五中)。同卷九「(放光般若經卷二一) 旃陀羅 或復搖鈴打擊爲聲, 標顯自身, 守獄之人也,彼國常法制勒此類行, 不切也, 古云旃陀羅, 上之然反, 次宅加反, **荼羅。此云嚴熾** 如此國有嚴刑王,則治罰此人, 謂屠殺者, 正梵音云奴雅反,『經』 皆訛略也, 種類之名也。一云主殺人獄 彰淨穢有異〉」(大正五四・ 恐悞觸突淨行之人,若不 『西域記』云屠膾主殺 則關於路左執持破竹 文作茶音 〈梵語也 〈或云旃

サンスクリット原文「domba_

Vaman

Shivaram Apte

(ed.),

The

Practical

譚婆」[唐] 借爲談紺反。 晉言主殺人獄卒〉」(大正八・九七上)。 『法顯傳』 摩頭羅 卷一四「須菩提,當知是貢高菩薩輩如旃陀羅〈旃陀羅者] (Skt. Mathurā) 國「舉國人民悉不殺生,不飮酒, 擊木以自異, 不賣生口, 唯除旃荼羅。 一慧琳『一切經音義』卷三一「譚婆 漁獵師賣肉耳」(大正五一・八五九中)。 謂西國食狗肉人也〉」(大正五四・五一一中)。 市無屠、沽及估酒者。貨易則用貝齒 人則識而避之,不相搪揬。國中不養猪、 旃荼羅名爲惡人, 與人別居, 〈徒南反。 若入城市 不食葱 唯

429

1957), q. v. "**domaḥ**": A man of a very low caste; also Sanskrit-English Dictionary (Poona: Prasad

Prakashan,

卒也。

『西域記』

則搖鈴自

若不然王卽與其罪也〉」(同三五八上)。

同卷二六

旃陀羅

〈此云治狗人。亦名爲獄卒〉

大 集』(一 九 一 六)「3873(17)**dombah**〔藏〕 榊亮三郎『Mahāvyutpatti 梵藏漢和四譯對校 」屠家」 翻譯名義

上記大正五四卷資料は後者に近いか。

「又令脩行者慈心不生故不應食肉」「斷酒肉文」「問爲是慈心 九下)。同「『經』言, 凡大慈者皆令一切眾生同得安樂。若食肉者一切眾生皆爲 非殺耶。答理中常應不得。約事故如此」(大正五二:二九 故食肉。無慈心故食肉。答此非慈心。問若非慈心。豈得 食肉者斷大慈種。何謂斷大慈種。

度論』卷一二「卽命旃陀羅,

令除身肉,破骨出髓以塗病

以血飲之」。同卷六九「復次,

須菩提,

說法者欲過

賊怖、旃陀羅怖、獵師怖、惡獸毒蛇怖。聽法者欲

或云殺人謂屠殺者種類之總名也〉」(同四九〇下)。 『大智 持標幟其人若行搖鈴自標或杖破頭之竹若不然者王與之罪

427

七「(妙法蓮華經安樂行品) 旃陀羅

〈旃茶羅云嚴熾惡業自

云險惡人也。卽屠兒膾子等是也〉」(同四六九上)。同卷二

同二五「(大般涅槃經音義卷上) 旃陀羅

(同四七五下)。 (大般涅盤經卷一九)

持乃至正憶念,心厭,不欲追隨。以是少因緣故,

兩不和

428

怨對同不安樂」(大正五二・二九五下)。

合,當知是爲魔事」(大正二五‧五三九下)。『放光般若經|

賊怖乃至毒蛇怖。聽法者聞之,知其不欲與般若波羅蜜書 隨逐去。說法者言,善男子,汝何用到彼。彼中多有諸怖

- **「臭穢不淨」**「斷酒肉文」引『楞伽經』「愚夫所貪著。臭穢無 卷七「迦葉言。「諸天亦爾。此閻浮利地,臭穢不淨, 名稱。虎狼所甘嗜」(大正五二·三〇一下)。『長阿含經』 天在上,去此百由旬,遙聞人臭,甚於廁溷」(大正一:四
- ·無善名稱」『雜阿含經』卷四五「如來亦如是,慧光照世閒 明集』卷五)「盛以爲。夫美惡之名, 功德善名稱, 有邊」(大正二・五四四上)。孫盛「老子疑問反訊 羅經』「無邊善名稱, 而發於事業」。又曰, 悪不積, 則有善名。 不足以滅身」。 叉曰, 周遍滿十方」(大正二・三二九中)。 頑嚚聾昧, 「韶盡美矣, 無邊明力士。如來無邊身, 則有惡聲。 「美在其中, 未盡善也」」(大正五二・ 生乎美惡之實。 暢於四支 『央掘魔 (『廣弘

- 一二○上。『集古今佛道論衡』卷甲,大正五二·三六六下)。
- 「令諸呪術不成就」 師持此 就。何等爲呪術章句」(大正一三·一二六中)。國土疾疫,如是等事起時,以呪術力故,卽. 句召故 難。所謂若王大臣駈遣出國 當說章句召護世四天王天、 賢士, 經經 護世四天王天、 如是等事起時,以呪術力故,右王大臣駈遣出國,若得重病, 諦聽諦聽: 曇無讖譯 說此世所難信甚深經典時. 善思念之。吾當爲護此『經』故, 帝釋、梵天王 ,即令消滅不得成,若鬬諍時起,若 皆當擁護諸說法 。以此章
- 431 見形起識」 有龍, 以有更樂便有痛, 含經』卷三五「若眼見色而起識想,三事相因便有更樂. 狼柔善調順,悉任乘御」(大正一二・六三八上)。『增壹阿 令如是諸惡毒龍、金翅鳥等、 聲見形、或觸其身,無不喪命。有善呪者,以呪力故, 一切師子、虎、 性甚憋惡, 南本『大般涅槃經』卷六「復次,善男子, 豹、 欲害人時, 以有痛便有所覺, 豺、狼、 狗犬皆生怖畏。是等惡獸聞 或以眼視、或以氣噓。是故 惡象、師子、虎、豹、 以有覺便有想, 以有 譬如 能

433

·味著」 南本『大般涅槃經』卷一「自觀己身如四毒蛇。 常爲無量諸蟲之所唼食。是身臭穢, 便稱量之, 以有更樂便有痛, 味、身更細滑、意知法, 想便稱量之, 如 心王處中。 皮裹其上, 於中起若干種想著之念」(大正二・七四三中)。 是身不淨, 起若干種想著之念。耳聞聲、鼻嗅香、 手、足以爲却敵樓櫓, 如是身城 以有痛便有覺,以有覺便有想, 九孔常流。是身如城: 而起識想, 三事相因便有更樂 諸佛世尊之所棄捨 貪欲獄縛。 目爲竅孔 щ 是身可惡 凡夫愚人 以有想 頭爲殿 舌甞

- 弘明集』卷二八)「竊聞 二·六〇六下)。 之少者膚貌光澤」(大正五三・一二九上)。 味甜於蜜。以手取甞。遂生味著。食之多者顏色麁悴。食 是身不淨九孔常流。凡夫愚人常行味著。 常所味 女尊卑隔異。故曰眾生有自然地味。 命旣盡。化生爲人歡喜爲食。身光自照神足飛行。 (大正五二·三二四中)。[梁] 寶唱撰 水災既起壞第二禪。風災吹結世界得成。光音諸 轉輪聖王諸國王部第一、劫初人王始原一「劫欲成 梁簡文帝 『涅槃經』 恚 「四月八日度人出家願文」(『廣 愚癡 言 羅 ||刹止住其中」(大正 **猶如醍醐**。色如生酥 身如畫水隨畫隨合。 愚癡羅刹止住其 『經律異相』 無有男

434

- 「**令口氣臭**」 『後漢書』卷八五、東夷傳、夫餘傳「王令置於 五・一五八上)。 業因緣。九者,身壞命終當墮地獄。十者, 得便。三者,雖有實語人不信受。四者,智人語議常不參 有十罪。何等爲十。一者, 五者,常被誹謗, 雖有敎敕人不承用。七者,常多憂愁。 豕以口氣嘘之,不死」。『大智度論』卷一三「妄語 如是種種不作, 醜惡之聲周聞天下。 是爲不妄語, 口氣臭。二者, 名口善律儀_ 六者, 若出爲人常被 八者, 善神遠之非人 人所不 (大正二
- 「多惡夢」 [參考] [北魏] 瞿曇般若流支譯『正法念處經』卷

若有得者

佛聽服食酥肉等藥。

其食肉時.

洗令無味。

樂臥處。本曾聞法, 若見城邑村落人民, 安不安,作何等業。 六六 「復次, 若不調順, 觀亂風已, 無緣生厭 脩行者內身循身觀。 如實知身」(大正一七・三九二上)。 妄見丘聚。 皆悉忘失。四大惱亂, 見爲空聚, 彼以聞慧或以天眼見。有亂風住在身 睡眠驚悟 若風調順 或見黃色, 有何等風住於身中, 雖住溫煖而常覺冷。 則無如上所說諸 其所食味住於 少於言語, 不

441

- 鼻聞香臭,口知味,身知軟麁」(大正三二・七〇二下)。(欿)「虎狼聞香」 失譯『那先比丘經』卷下「今眼視色,耳聽聲,
- 不知節量,則貪欲生」(大正三二・三〇九下)。(大正二・七三下)。鳩摩羅什譯『成實論』卷九「又於飮食(鉛)「飮食無節」『雜阿含經』卷一一「飮食知節量,覺知諸心相」
- 439 440 「不生厭離」 作食子肉想」 優婆夷三昧正受者, 肉想。迦葉菩薩復白佛言,「世尊,云何如來不聽食肉」。 不聽聲聞弟子食肉。若受檀越信施之時,應觀是食,如子 如屠獵等」(大正三二・三四七下)。 『成實論』卷一三「又人雖見無常亦不生 夫食肉者斷大慈種」(大正一二・六二六上)。『禪 卷上「佛告阿難, 南本 『大般涅槃經』 卷四 「善男子, 汝當教是易觀法, 若有比丘、 愼勿忘失此四大觀 比丘尼、 從今日始 厭 離

(大正一五·二四九中~下)。 於舍衞國,敕諸比丘,爲脩禪故,得食三種淸淨之肉」如飢世食子肉想,我今此身。若不食肉發狂而死。是故佛如飢世食子肉想,我今此身。若不食肉發狂而死。是故佛

作服藥想」 niya =食物)。 毘尼摩得勒伽』卷六「云何蒲闍尼(ボージャニーヤ bhoja 提, う意味か。律において、 一、方便品「又舍利弗, 糞屎想」(大正二三・五九九中)。 若魚肉等, 食が認められている。 體を囘復するための藥を服用するという想念を抱けとい (大正九・七下)。 是最後身, 究竟涅槃, 當知此輩皆是增上慢人。所以者何。若有比丘實得阿 若不信此法, 肉を攝取する時は、 是名蒲闍尼。食蒲闍尼時, 有五種。世尊聽諸比丘噉烏陀那貴摩沙曼陀 無有是處,除佛滅度後現前無佛. [南朝宋] 是諸比丘、比丘尼自謂旣得阿羅 體力が衰弱した者は薬として肉 便不復志求阿耨多羅三藐三菩 それは享樂のためでなく 鳩摩羅什譯『法華經』卷 僧伽跋摩譯『薩婆多部 治病想、 服藥想、

Abhidharmakośa II 12bc, Pradhan 2d ed., 46, 25f.)女性が梵と サンスクリット原文:asthānam anavakāśo yat strī 無理女人作梵。 下)。眞諦譯『阿毘達磨俱舍釋論』卷二「如經言。無處 なるであろうことは場所 nam etad vidyate yat puruṣa iti. (*Abhidharmakośabhāṣya* ad brahmatvam karayişyati. nedam sthānam vidyate. sthā-無處無容女身爲梵。有處有容男身爲梵。 [參考]玄奘譯『阿毘達磨俱舍論』卷三「如 がない。 この道理はない。 有處有理丈夫作梵」(大正二九・一七五下)。 (道理) がなく、 男が (梵となるであろう (大正二九・一六 空閒 『契經』言。 (可能性の

- -『多界堅N。 こと)は場所(道理)が存する(出典は Bahudhātukasūtra
- 過 去有王……斷其俸祿」 唱言, 比丘,莫食人肉」(大正四・三七五中)。唐・智嚴譯 世尊告日 塞聞婆羅門罵佛法僧, 飴之。 夫聞是已, 我婦何由有疾。 優婆夷品」第二一「時婆羅門卽召彼婢, (大正四・四二三中~四二七下) に對應。 今沙門釋子, 於多人處,高聲唱言,罵佛法僧, 沙門釋子, 汝等何故,愁慘不樂。 婢以實答, 食噉人肉, 食噉人肉, 於佛法僧, 憂愁不樂, 「賢愚經』 大家當知。爲病比丘故 如駮足王。爾時 亦復如是。願佛世尊、 生患害心, 自言, 卷一一 往世尊所, 昔駮足王, 同卷四 世尊 便於街巷. 於隱屛處問言 「無惱 頭面禮足。 有 篤信優婆 食噉人 『師子 一婆羅 敕諸

446

(鉛) 「**師子蘇陀娑」**未詳。 駮足王(班足王、斑足王 *Pāli*

素駄娑王斷肉經』も同內容。

447

は赤沼(一九六七:二七一)参照。 【參考】『法苑珠林』卷八八「故此過去有王名師子蘇陀婆、「參考」『法苑珠林』卷八八「故此過去有王名師子蘇陀婆、「「一九六七:二七一)。『四分律删繁補闕行事鈔』経」(大正五三・九二八上)。『四分律删繁補闕行事鈔』経種肉、遂至人肉。臣民不忍、即便謀反。如『班足王食種種肉、遂至人肉。臣民不忍、即便謀反。如『班足王

- 志』吳志‧朱桓傳「愛養吏士,贍護六親,俸祿產業,皆奉其母。母曰,子安得此金。對曰,所受俸祿也」。『三國(44) 「俸祿」『韓詩外傳』卷九「田子爲相,三年歸休,得金百鎰
- "諸殺者爲財利故殺生屠販_ 畏故, 槃經』 或僞」(大正一二・六〇九下)。 實論』卷八「若人爲財利故起不善業,如爲金錢殘殺眾生 衒賣女色. 不識好醜故殺眾生」(大正三二・三〇五下)。南本『大般涅 或以瞋故, 亦莫親近 爲誑他故,爲財利故, 卷一「世尊, 如殺怨賊。或有不爲財利亦不瞋恚, 如是之人, 皆勿親近」 屠兒魁膾 若有善男子善女人,爲供養故, **畋獵漁捕** 鳩摩羅什譯 爲隨他故, 受是大乘, (大正九・三七下)。『成 爲利殺害 『妙法蓮華經』 販肉自活. 但以癡力
- ·**愚癡食肉眾生**」 佛馱跋陀羅譯 『大方廣佛華嚴經』 隨顚倒, 如來道, 于世」(大正九・六〇七上)。 應說法, 是微少說,何以故。一切如來、應供、等正覺爲受化者隨 爾時, 普賢菩薩摩訶薩, 告諸菩薩言, 愚癡眾生諸纏所纏, 生邪見惑, 爲如是等諸眾生故. 起邪虚妄, 計我、我所, 如來、 爲縛所縛, 應供、 「佛子,如向所說 等正覺, 著吾我見 流轉生死 卷三三 出興
- 飾羅網」(大正一○・八五七下)。 (級) 「以錢爲網」 [參考] 聖賢譯『羅摩伽經』卷上「連錢半月校

449

便。譬如捕魚人見一魚深入大水,鉤網所不及,則絕望憂無、非有非無等六十二諸邪見魔網,我今無有法可得菩薩毒。何以故。以是菩薩深入十二因緣畢竟空中,不著有、「鉤網」 鳩摩羅什譯『大智度論』卷八十「爾時,諸魔極大愁

亦如新喪父母」(大正二五・六二三上)。

鳩摩羅什等譯

·**空行水陸**」「斷酒肉文」引『大般涅槃經』「四相品」「水陸 空行有命之類悉捨之走」(大正五二・三〇一中。『大般涅槃 原文大正一二・六二六中)。 「十誦律」 一卷九 (大正二三·六五中)。

454

 $\widehat{450}$

- 451 種殺害屠販求利」 親近, 女色, 達貨二里。里內之人,盡皆工巧屠販爲生,資財巨萬」。 [參考][北魏]楊衒之『洛陽伽藍記』卷四「市東有通 如是之人,皆勿親近」(大正九・三七下)。 屠兒魁膾, 鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷五 畋獵漁捕, 爲利殺害, 販肉自活. 「亦莫 衒賣
- ·**五種肉**」 [參考] 『四分律』 卷五十九「有五種肉不應食。象 六上)。 肉、虎肉、豹肉、熊肉、羆肉是爲五」(大正二二·一〇〇 肉、馬肉、人肉、狗肉、毒蟲獸肉是爲五。復有五。 師子

 $\widehat{452}$

453 「十種」「斷酒肉文」「何以知之。先明斷十種不淨肉。次令食 三種淨肉。未令食九種淨肉。如此漸制。便是意欲永斷。 種淨肉異想, 同彼尼揵所見。如來所制一切禁戒,各有異意。故聽食三 皮革、金銀、盂器。如是等物亦不應受」。善男子,不應 漿、生蘇、熟蘇,胡麻油等,及諸衣服、僑奢耶衣、 種不淨乃至九種淸淨而復不聽」(大正五二・三〇一上)。同 法超常日講。恒作如此說」(大正五二·二九九上)。同引 「迦葉復言,「如來若制不食肉者,彼五種味,乳、酪、酪 『大般涅槃經』 「四相品_ 『大般涅槃經』 異想故. 故斷十種肉」(大正五二・三〇一上~中)。南 卷四「禁戒各有異意。 異意故, 斷十種肉。 」「復白佛言。 世尊,何因緣故十 異想故, 一切悉斷 聽食三 及自死 珂貝、

- 二·六二六上)。同卷十六「或言如來不聽比丘食十種肉。 猴」(大正一二・七一六中)。 何等爲十。人、蛇、象、 我從今日制諸弟子不得復食一切肉也」 狗、 師子、猪、狐、 (大正 獼
- 如來應供等正覺」 應供、 沙刹, 尼如來, 云何住無生際, 十五「若如來、 五三上)。 無有明照」(大正二・一〇六下)。 苦集聖諦、苦滅聖諦、 佛告央掘魔羅, 等正覺, 在世敎化, 有國名無量樂, 應供、等正覺不出世閒時, [南朝宋] 求那跋陀羅譯『雜阿含經 汝今當與文殊師利俱,至北方過一恒河 佛名無量慧功德積聚地自在王如來 苦滅道跡聖諦現於世閒, 而復住於娑婆世界」(大正二・五 汝等俱往。問彼佛言,釋迦牟 同譯『央掘魔羅經』卷三 不說苦聖諦、 世閒盲冥
- 「**大悲前行**」『荀子』議兵「武王之誅紂也,非以甲子之朝而 子』論書「〔定〕公曰,先君僖公功德前行,可以與於報 後勝之也,皆前行素脩也。此所謂仁義之兵也」。『孔叢

455

456

- 「視一切眾生,猶如一子」 求那跋陀羅譯『央掘魔羅經 足。菩薩成就如是八相, 一子。六者,近善知識。七者, 不貪財物。四者,慈悲喜捨忍。 說摩訶衍。二者,分明演說如來之藏, ·復次,菩薩摩訶薩成就八相非爲新學。何等爲八。一者, 非爲新學」(大正二・五三八下)。 離惡知識。八者, 五者, 視一切眾生, 而不厭捨。三者: 世利知 猶 如
- 爲六親。以親想故,不應食肉」(大正五二·三〇二上)。 『大方便佛報恩經』卷一「如來本於生死中時 於

「曾悉爲親屬」「斷酒肉文」「謂一切眾生從本已來展轉因緣常

462

父母。 足一切萬行, 是等微塵數不思議形類 一切給與, 今得速成阿耨多羅三藐三菩提」(大正三・一二七下)。 一切眾生亦曾爲如來父母 國城妻子, 不休不息, 心無疲倦, 象馬七寶, 常修難行苦行, 一切眾生中, 輦輿車乘. 戒施多聞. 如來亦曾爲一切眾生而作 爲孝養父母知恩報恩 具足受身。 禪定智慧 衣服飲食 以受身 頭目髇

及諸穿孔床, 盆承, 得。佛言「不應總棄, 污染不合禮他, 安樹葉。其盆雖洗臭氣不除應用油塗」。如佛所教應看病 迴轉下部瘡痛, 割爲孔, 易」。卽於好床穿破作孔。佛言「應取故床, 本說一切有部毘奈耶雜事』卷一五「時有苾芻忽患腹痛 去迴轉致有疲困。苾芻白佛。佛言「於床穿孔隨時轉 時有老少苾芻咸來問疾,少至便禮病人,老來病人致 緣此祗接病苦轉增,佛言「彼身不淨不應敬禮 (大正二四・二七二下~二七三上)。 勿令高舉」。 糞臭外棄更覓餘盆, 若絛編者擘開爲穴,若病差後隨事料理」。 以彼諸細蟲, 佛言「於床孔邊可安軟物,不淨墮地以瓦 設他禮時亦不應受。若有違者俱得越法 可畜一一盆洗而曬乾。無第二盆應 於中極恐怖」[參考]義淨『根 如是展轉無器可 若藤織者應 由數

覺」鳩摩羅什譯『成實論』卷一四「具足善覺者辭若人雖不 其也不死覺・利他覺・輕他覺等。寧當睡眠勿起此等諸 不善覺」(大正三二・三五二中)。求那跋陀羅譯『雜阿含 不善覺」(大正三二・三五二中)。求那跋陀羅譯『雜阿含 經』卷一六「告諸比丘。汝等莫起貪覺覺。莫起恚覺覺。 經』卷一六「告諸比丘。汝等莫起貪覺覺。莫起恚覺覺。 輕別之一一〇九中)。

> ⑩) 「貪令心迷醉」(大正一六·五六四中)。 ⑩) 「貪令心迷醉」 [參考] 菩提流支譯『入楞伽經』對應箇所

461

死墮叫呼獄_ 至邪見。又以不善業因緣故, 一・一二五中)。鳩摩羅什譯 殺生因緣, 壽命不盡」(大正一二・六一四下)。 佛陀耶舍、竺佛念譯『長阿含經』 殺生血汚手。造諸雜惡行。墮叫喚地獄」(大正 故墮地獄。 若生人中, 『成實論』 久受苦惱, 則受短命。 卷九「如 如阿鼻地獄 卷一九 如是乃 「瞋 過

「ダーキニー」 原文は「陀夷尼」。これに對應するサンスク リット語は,『楞伽經』サンスクリット原文(The Lankāvatāra Sūtra edited by Bunyiu Nanjio [南條文雄], Otani University Press, 1923)によれば ḍākinī である。「荼枳 尼」「吒枳尼」「拏吉尼」も同義。人肉を食す鬼神女。 尼」「吒枳尼」「拏吉尼」も同義。人肉を食す鬼神女。 「愛考] [唐] 慧琳『一切經音義』卷四二「拏吉尼〈上傳 選反。梵語也。亦諸女天名。此女天有大神力,能成世間 種種諸願〉(大正五四・五八四中)。

六・五六二中)。 卷八「過去曾作羅刹眷屬。虎狼師子猫狸中生」(大正一卷八「過去曾作羅刹眷屬。虎狼師子猫狸中生」(大正一虎狼や猫狸だったものとする。菩提流支譯『入楞伽經』によると羅刹は過去に「羅刹猫狸」 菩提流支譯『入楞伽經』によると羅刹は過去に

463

「生生常癡冥」 生生に常に癡冥。癡冥は愚冥(おろか)に通と『象腋經』に,『大雲』は曇無讖譯『大方等無想大雲と『象腋經』に,『大雲』は曇無讖譯『大方等無想大雲』(講象』與『大雲』、『央掘利魔羅』」『縛象』は『無希望經』

464

「生生」は「生生世世」(輪迴)を指すと解した。

- (蚧) 「故生食肉處」 [比較] 菩提流支譯『入楞伽經』「故生食肉

[參考] 道宣『釋迦方志』卷上(大正五一·九五六下)。

- 四三中)。 四三中)。
- (例) 「多丁丁之子」 Ctt : 22d. was samsawat (ヨーガを故不應食肉。聽食肉者,無有是處」(大正一六・五二三下)。經』卷四「我常說言,凡所飲食,作食子肉想,作服藥想,(鍛)「食如服藥想,亦如食子肉」 求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶
- 行者は乞食を行うべし)。 (纲) 「**修行行乞食」** Skt. v. 22d: yogī piṇḍaṃ samācaret(ヨーガ修

471

「永背正解脫」

Skt. v. 24c: mokṣadharmaviruddhatvād(解脫

478

爲貪價直,而作是事」(六二四上)。

という眞實と矛盾するから)。

多,於沙門威儀不能悉備」(大正二五・四九上)。 表裏相應,所適皆悅。難陀三十相。阿難二十相。表相雖表裏相應,所適皆悅。難陀三十相。阿難二十相。表相雖表がある)。失譯『分別功德論』卷五「形容端嚴,於外

479

- (切)「**梵志**」 婆羅門(ブラーフマナ brāhmaṇa)。
- 八·三四五中)。 神足第一,出婆羅門種。姓目揵連,字拘律陀也」(大正三神足第一,出婆羅門種。姓目揵連,字拘律陀也」(大正三(鉛) 「種」 種族。『注維摩詰經』卷二「〔僧〕肇曰,目連,弟子中
- (铅)「上座迦葉」 [參考] [日本江戶初期] 澄禪『三論玄義檢幽

- Kāśyapa)° 付屬。『十誦律』序云, (Uruvela-Kāśyapīya)° 11' (大正七〇・四五三下)。 此中付屬,是菩薩迦葉」。今謂, 耶 卷五 迦 葉 「『涅槃疏』 曰, 珏 (Gayā-Kāśyapa)。四、十力迦 菩薩迦葉。六、上座迦葉。眞諦三藏云 迦葉是第四上座, 那提迦葉(Nadī-Kāśyapa)。川、 有六迦葉。一、 此是上座迦葉, 今正付屬已上_ 優樓頻螺迦葉 藥(Daśabala-爲如來
- 「冬末~」「冬冬」「食く推花睪『大枣(芳加巠」を1、「大小・美食也。人中美物,皆名珍膳也)」(大正五四・四六四下)。「甘膳」 [唐] 慧琳 『一 切經音義』卷二五「甘膳(音善。謂

477

- 方便,罝羅網罟,處處安施。水陸飛行皆被殺害。設自不於人身肉尚取食之。況於鳥獸有不食者。以貪味故,廣設於人身肉尚取食之。況於鳥獸有不食者。以貪味故,廣設過去有王名師子生,耽著肉味,食種種肉,如是不已,遂「肉味食」 [參考]實叉難陀譯『大乘入楞伽經』卷六「大慧,
- 惡想。始終常一,苦樂無變」(大正二・五二一中)。 饍之食,捨肉味食,受持修行不食肉法,家家乞食,不惡 求那跋陀羅譯『央掘魔羅經』卷一「上座迦葉棄捨種種甘 大座迦葉捨種種甘膳之食,捨肉味食,受持修行不食肉法」
- "央掘魔羅經』 譯出〉。……。右十三部, 僧祐『出三藏記集』卷二「『央掘魔羅經』四卷 釋寶雲及弟子菩提、 摩訶乘法師求那跋陀羅 にあるので、意をもって「二」を「四」に改める。 四五三)及孝武 第四卷 (四五三~四六四) 原文は第二卷とするが、引用は卷四 法勇傳譯」(大正五五・一三上)。 (Guṇabhadra) 凡七十三卷, 以元嘉中 宣出諸經。 宋文帝時, 〈道場寺 (四二四 天竺

- れ,小乘經典には現れない菩薩。(緞)「マンジュシュリー」 Mañjuśrī(文殊師利)は大乘のみに現
- 因 如 如瓶中燈」(大正二·五三九上)。「如來藏(tathāgata-garb-……。佛告文殊師利,一切眾生有如來藏,爲無量煩惱覆 魔羅經 ha)」は, 眾生不能得見」(大正一二・六四八中)。 來藏故」 南本『大般涅槃經』卷八 何義。 如是「我」 5.告文殊師利,一切眾生有如來藏,爲無量煩惱覆,若一切眾生悉有如來藏者,一切眾生皆當作佛。 卷四 「爾時, 誰もが將來ブッダとなれる可能性をもつと說 即是如來藏義。一切眾生悉有佛性, 從本已來,常爲無量煩惱所覆。 文殊師利語央掘魔羅言, ¹¹魔羅言,如來藏者 求那跋陀羅『央掘 佛 卽是 1男子.

484

無非父母、兄弟、姉妹一「後漢]安玄譯『法鏡經』「眾生先sāra(輪迴)の漢譯。ここでも同樣に解す。「無始」は Skt. amādi-(始めなき)。「生死」は Skt. saṃ-

我等父母、兄弟、妻子、親屬、師友、知識」(大正二・二跋陀羅譯『雜阿含經』卷三四「如是眾生過去世時,必爲世亦曾我子,吾亦曾爲眾生子」(大正二二・一八下)。求那(無非父母、兄弟、姉妹)[後漢]安玄譯『法鏡經』「眾生先

四〇上~中)。求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』 四二上)。 不應食肉」(大正一六・五一三下)。下揭注「自肉他肉, 一切眾生, 切男子皆爲兄弟, 本經卷四 有無量因緣 從本已來, 「一切眾生有如來藏。 一切女人皆爲姉妹」(大正二・五 展轉因緣, 不應食肉。 常爲六親。以親想故 切眾生有如來 卷四 則

猶如**伎兒變易無常**」 如彼伎兒, 〇中)。求那跋陀羅譯 無始已來, 變現諸趣,離我我所」(大正一六・五一〇中)。 生。文殊師利, 如來一切智知一切, 傷損。諸佛世尊亦復如是, 譬如幻師,於大眾中自斷身分,以悅眾人,而實於身無所 世尊亦復如是。種種變現, 能知者,譬如伎兒: 然後得度無量眾生, 如來之藏是善不善因, 無非父母、兄弟、 數數轉變。是故如來淨修梵行」(大正二:五四 本經卷四 於大眾中種種變現, 『楞伽阿跋多羅寶經』卷四 令出生死無邊大海,而彼眾生莫 能遍興造一切趣生, 如彼幻師, 種種變現, 以度眾生,而彼眾生莫能知者 「佛亦如是。示因父母現同人 姉妹,昇降無常,迭爲尊卑 觀察世閒一切眾生 以悅眾心。諸佛 譬如伎兒 以度眾

本體。故常行放生,生生受生」(大正二四・一○○六中。船我父母,亦殺我故身。一切地水是我先身,一切火風是我不從之受生,故六道眾生皆是我父母,而殺而食者,卽殺不從之受生,故六道眾生皆是我父,一切女人是我母,我生生無不從之受生,故六道眾生有如來藏。一切男子皆爲兄弟,一切如作是說。一切眾生有如來藏。一切男子皆爲兄弟,一切不是說。一切不是說。一切那生有如來藏。一切男子皆爲兄弟,一切不過,

為眾生子」(大正一二·一八下)。 「眾生無始世界無際,往來五道,輪轉無量。我亦曾為眾生父母、兄弟,眾生亦皆曾為我父母、兄弟。當來亦爾。生父母、兄弟,眾生亦皆曾為我父母、兄弟。當來亦爾。「眾生無始世界無際,往來五道,輪轉無量。我亦曾為眾生父母、兄弟,當來亦爾為國際工工工,一五二頁)。鳩摩羅什譯『大智度論』卷一四山二〇二三:一五二頁)。鳩摩羅什譯『大智度論』卷一四山二〇二三:一五二頁)。鳩摩羅什譯『大智度論』卷一四

(中村二〇〇一・一〇四頁)。 (中村二〇〇一・一〇四頁)。

491

486

(紹)「宿る肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「宿る肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「宿る肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「宿る肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「福香肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「福香肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「福香肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「福香肉體」原文「所宅之肉」。『高僧傳』卷一一、玄高傳(紹)「福香肉體」原文「新香」(AST)

(器)「自界」上記注(30)[眾生界、我界]參照。

如來遠離一切世閒] 夫知足者 近空閑處 是名少欲。 菩薩摩訶薩聞是經已,親近修習, 遠離慣開 既出家已, 常樂空寂」。 南本『大般涅槃經』卷二五 不生悔心, 是名寂靜。 (大正一二・七七二上)=曇無 是名知足。 不知足者, 遠離一切世閒之 「復次, 既知足 不樂空

譯『大般涅槃經』卷二七(大正一二·五二七中)。

490

習 近世閒物」 眾事, 六・七一六中)。 不堪忍。四者, 德福利。二者, 當知有六事。一者, 觀世音白佛言, 親近修習」。求那跋陀羅譯 見聞覺識。 直前注 於諸善法不勤方便。 隨其所欲 世尊, 六者,世閒戲論,作福利見」(大正一 欲樂錢財, 「如來遠離一切世閒」『大般涅槃經 何等爲違波羅蜜事。 縱身口意。三者, 『相續解脫地波羅蜜了義經 自在增上主, 五者, 習近世閒雜亂 佛告觀世音 於他輕慢心 自見安樂功

[東晉] 僧伽提婆譯『中阿含經』卷四七『多界經』「阿難· 舍利弗,是諸比丘比丘尼,自謂旣得阿羅漢,若不信此法· 增上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢,若不信此法· 增上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢,若不信此法· 等是繫,便不復志求阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩皆是 無有是處,後秦‧鳩摩羅什譯『法華經』卷一、方便品「又

RTT p 200)· Atthānam otam anavakāso vam ekiesā RTT p 200)· Atthānam otam anavakāso vam ekiesā Bahudhātukasutta(多界經: PTS Majjhima Nikāya III. p. 65. Bahudhātukasutta(多界經: PTS Majjhima Nikāya III. p. 65.

BJT p. 200): Aṭṭhānam etaṃ anavakāso yaṃ ekissā lokadhātuyā dve rājāno cakkavattino apubbam acarimaṃ uppajjeyyuṃ, netaṃ ṭhānaṃ vijjatī'ti pajānāti. Ṭhānaṃ ca kho etaṃ vijjati: yaṃ ekissā lokadhātuyā eko rājā cakkavattī uppajjeyya, ṭhānam etaṃ vijjatī'ti pajānāti.

sthānam etad vidhyate yad ekas tathāgataḥ, yathē 玄奘譯 in Sanskrit aus Gilgit, Vandenhoeck & Ruprecht in Fragmente des Dharmaskandha : Ein Abhidharma-Texi tathāgata evam cakravartināv" iti. Cf. Siglinde Diez ekatra loka) utpadyeyātām nedam sthānam vidyate arhantau samyaksambuddhau loka (184, 14: tathāgatāv nam anavakāśo yad apūrvācaramau dvau tathāgatāv *Abhidharmakośabhāṣya* 184, 17-18: sūtra uktam, "**asthā** 王生一世界。 容非前非後有二輪王生一世界, 王生一世界。 容非前非後有二輪王生一 有容非前非後有一如來生一世界」(大正二六・五〇二中)。 有容非前非後有一如來生一世界」(大正二六・五〇二中 『阿毘達磨法蘊足論』 無處無容非前非後有二如來生一世界, 無處無容非前非後有二如來生 世界, 卷一〇「復如實知見無處無 有處有容非前非後有一輪 有處有容非前非後有 一世界, 有處 一輪

496

- 法」(大正一六·五〇三中)。 諸論種種辯說,愼勿習近。若習近者,攝受貪欲,不攝受(妣)「若習近者」 求那跋陀羅譯『楞伽阿跋多羅寶經』卷三「世閒の故》,
- 不應受者,是比丘法」(大正四〇・六九上)。 据經』,繒綿、皮物,若展轉來,離殺者手,施持戒人,(绍)『若展轉來離殺者手』[引用]『四分律行事鈔』卷中二「『央

498

- 五八頁左)。
 五八頁左)。
 五八頁左)。
 二八百左)。
 二八百左)。
- 「佛告文殊師利,若自死牛,牛主持皮,用作革屣,施持戒人「佛告文殊師利,若自死牛,牛主持皮,用作革屣,施持戒人爲應受不。若若自死牛,牛主持皮,用作革屣,施持戒人爲應受不。若不受者是比丘法,若受者非慈悲,然不破
- ·諸小僧輩看經未遍」「斷酒肉文」「依 ……」(大正五二・二九七下~二九八上)。 問。其餘小僧故自妄言, 唯取老舊者、最多門徒者。此二種人,最宜先問。何以故 動視聽。推計名德大僧, 治一無行小僧,不足以改革物心。治如是一大僧, 一切諸佛在此, 非直一切尊法在此, 今日集會, 不應有此。設令有此,當依法治 此是大事因緣, 『涅槃經』 非直一切聖僧在此。 還俗策使。 足以驚 非直

497

「革の履物」 原文「革展」。 革製の履き物(革のサンダル)の「革の履物」 原文「革展」。 立までは高い。 平川原語はパードゥカー Skt. pādukā の場合が多い。 平川をま材とするならば殺生戒に抵觸するということを論じを素材とするならば殺生戒に抵觸するということを論じを素材とするならば殺生戒に抵觸するということを論じる。 革製の履き物(革のサンダル)の

「所以唱此革屣文者」『央掘魔羅經』卷二「……,我出於世

502

三〇中~五三〇下 往來經行 目連宜善聽。 受持具足戒, 周行於世間。 如薪盡火滅。 剪爪剃鬚髮。 九道流諸 得成阿羅漢。 若實若諦者, 常於爾所時, 如是等一切 身中種種患, 我受用革屣, 我受諸飲食, 所謂如來藏。 不淨此妄語。 諸餘虛僞法。 隨病服諸藥。 楊枝及服藥。 建立他施事 (大正二・五

500

正爲此二十三日法雲法師講『涅槃』 眾各以次列坐」(大正五二・二九九上)。 義,法雲解釋。 上。 法雲法師解說。今二十九日,不復重唱〉」(大正五二·三〇 槃經』「四相品」上第七〈此品今月二十三日會已唱此文: 諸僧尼常聽涅槃經。 前登東向高座爲法師,瓦官寺慧明登西向高座爲都講, 『大涅槃經』「四相品」四分之一,陳「食肉者斷大慈種 一今日重令法雲法師, 死者, 同「〔五月〕二十三日旦,光宅寺法雲,於華林殿 亦不許食」(大正五二・二九五下)。 同「『大般涅 輿駕親御, 地鋪席位於高座之北, ……佛經中究竟說, 爲諸僧尼, 講「四相品」四中少分。 斷肉事」「斷酒肉文」 斷一切肉, 僧尼二 唱

503

は,ジャイナ教白衣派(シュヴェータ・アンバラ空衣派とも言う。因みに後の時代になるとジャイナ教に 着衣しない」。裸形ジャイナ教徒を指す。ジャイナ教 (乾)Skt. nirgrantha は尼乾子。意味は という別派も生まれた。 「裸の」

于 時僧正慧超、 乃至自死不得食者, 皮革得着革屣者, 法寵法師難云,若『經』 此則同尼揵斷皮革, 亦應開食肉」 「斷酒肉文」「二十三 文究竟斷一切 不得着革屣。 肉 若

505

數若恒沙」

鳩摩羅什譯

『金剛般若波羅蜜經』「須菩提

加

504

也。 門人追思德澤,乃爲立碑。 製文,俱鐫墓所」(大正五〇・四六八上~中)。「斷酒肉文」 遷神於寺房。行路殞涕, 建安寺沙門慧通。……。吏部謝籥每稱之曰,君子哉若人 寺沙門釋慧超傳 (大正五二·二九九上)。『續高僧傳』 「宣武寺法寵奉答」(大正五二·三〇〇下)。 咸稟成訓。……。以普通七年(五二六)五月十六日 尋有別敕, 梁祚伊始, 又善用俳諧, 避難於鍾離之朝哥縣焉。……。 會其後諸僧尼或猶云, 乃授僧正。 超現疾新林, 尤能草隸兼習朱許, 學徒奔赴。 湘東王繹、 姓廉氏, 戒德內修, 律中無斷肉事及懺悔食肉法 情存拯溺。 卷六、梁大僧正南澗 趙郡陽平人。 凡厥喪事出皆天府。 八歲出家 叉工占相。 陳郡謝幾卿,各爲 威儀外潔。 信次之閒聲馳日 從臨番縣 中原喪

「自仍通云」 ここに言う「通」は, 男子,不應同彼尼揵所見。 されていないため、 「一切悉斷, 釋」の「通釋」を承けた言葉。具體的には【④co】に できない。 故,聽「食三種淨肉」。 含まれる『大般涅槃經』四相品の一節,すなわち「「善 しかし残念なことに、 及自死者」」に對する法雲釋を指すに違いな 法雲自身の行論を詳しく知ることは 異想故,「斷十種肉」。 如來所制一切禁戒,各有異意 法雲釋は「斷酒肉文」に載錄 直前「法雲法師乃已有通 異想故.

「就一食中,便害無量身命」 戶、四 蟲。如是者應名殺生 「譬如士夫常日再食。 求那跋陀羅譯 (大正二・五四〇下)。 愛樂法故, 日唯一 u唯一食,則殺八萬 呼『央掘魔羅經』卷

善女人。以七寶滿爾數恒沙數世界」(大正八・七五四上) 恒河沙寧爲多不。 七五〇上)。菩提流支譯『金剛般若波羅蜜經』「佛言須菩 七寶滿爾所恒河沙數三千大千世界」(大正八・七四九下~ 況其沙。 寧爲多不。 河 何況其沙。 如恒河中所有沙數。 中所所沙數。 須菩提言。甚多世尊. 佛言須菩提,我今實言告汝。若有善男子 我今實言告汝。 須菩提言。 如是沙等恒 如是沙等恒河。 甚多世尊, 若有善男子善女人。 於意云何。 但諸恒河尚多無數。 於意云何。是諸 但諸恒河尚多無 是諸 何

「**于時諸僧乃無復往復**」「斷酒肉文」「其月二十九日. 異此, 能生慚愧者 戒非戒。道恩不復奉答」(大正五二・三〇〇中)。 得復食一切肉」,「一切悉斷,及自死者」。如此制斷, 群僧」。僧辯不復奉答」(大正五二・三〇〇上)。 同「問: 教亦不明食肉。且涅槃前,迦葉已持修行不食肉。法律若 ……」(大正五二·二九九上)。同「問,「若言接近教, 莊嚴寺法超、奉誠寺僧辯、光宅寺寶度等三律師昇高座: 義學僧一百四十一人、義學尼五十七人於華林華光殿, 『涅槃』云,「夫食肉者斷大慈種」,「我從今日制諸弟子不 義亦如此。若正作罪, 席地施座, 則非優波離律, 是異部家律。云何用此講說, 乃是上服」。法寵無復答」(大正五二・三〇一 餘僧尼亦爾。制旨問法超等三律師 雖云慚愧 終無所益。 同 問, 以化 近 日 使

512

「『經』文道, 始已來,無非父母、兄弟、姉妹_ 「昔與眾生經爲父母親屬」 如來一切智知一切。觀察世閒 (大正二・五四〇中)。 『央掘魔羅經』 切眾生。 無、四

- 509 508 投身餓虎 (大正四·三五二中~三五四上)。
- 割肉貿鷹 卷一 (大正四・三五一下~三五二上)。

510

すると假に解した。 るが、ここでは、 讀誦しながら佛像や佛殿を儀禮的に巡り歩くことを意味 行道には佛教修行をするという廣い意味も一方にあ 狹義の行道すなわち僧が行列して經を

二四・一〇八七上)。 膝著地。 於彼有佛名光明吉。一日一夜六時行道禮拜。 [參考] [梁] 僧伽婆羅譯 合掌向佛而說此言。我禮 一切諸佛如來」(大正 『菩薩藏經』「下方大名世界。 偏袒右肩右

511

·**周捨**」『梁書』「周捨字昇逸, 軍。服闋,除侍中, 辯。……。爲右衞, 既長,博學多通,尤精義理,善誦書,背文諷說,音韻清 顒異之, 臨卒謂曰, 「汝不患不富貴, 但當持之以道德」。 之八世孫也。父顋, 太子左衞率。頃之,加散騎常侍、本州大中正,遷太 領步兵校尉, 母憂去職,起爲明威將軍、右驍騎將 齊中書侍郎, 汝南安成人,晉左光祿大夫韻 未拜,仍遷員外散騎常 有名於時。捨幼聰時

本『大般涅槃經』卷一二「愛亦如是。隨所愛處業結亦住。 愛。凡有九種。一如債有餘。二如羅刹女婦。……。云何 復次,善男子,譬如濕地則能生牙。愛亦如是。能生一切 盡復食眾生。 愛羅刹女亦復如是。隨諸眾生生善根子隨生隨食。 刹女隨所生子。生已便食。 如羅刹女婦。善男子,譬如有人得羅刹女納以爲婦。是羅 業煩惱牙。善男子,菩薩摩訶薩住是大乘大般涅槃深觀此 令墮地獄畜生餓鬼。 食子既盡。復食其夫。善男子 唯除菩薩是名如羅刹女 善子旣

鳩摩羅

『禪秘要法經』

「復當諦觀。

今我此身。

八萬戶蟲。

從於身口有無作色。

以是無作色因緣故,

不名失戒,

猶名持戒。

以何因緣

九孔膿流。

筋

纏血塗。

生藏熟藏。

大小便利。

婦」(大正一二・六八二上)。

- 513 奉 寺僧辯律師弟子。俊, 可期神幽冥, 1 誠寺僧辯」 勤辛好學, 精進勇勵 太子中庶山賓之兄子也。……。 (五一七) 卒,春秋三十有五」 從光宅寺法雲諮稟『經』『論』。…常講『十誦』。〔僧〕詢後住治城寺, 『續高僧傳』卷六、 〔僧〕辯性廉直, 長濟愛海。年十二,敕令出家, 僧詢 父奉伯篤信大法, (大正五〇・四七五上)。 戒品冰嚴, |『論』。……以天監十 傳 「僧詢傳 好仁履信 持操高尚 爲奉誠 知其聰
- (品) [參考] 菩提流支譯『入楞伽經』「食肉之人有如是等無量諸過, 食肉者,亦無有人殺害眾生,由人食肉若無可食處處求買, 食肉者,亦無有人殺害眾生,由人食肉若無可食處處求買, 食肉者即是無量功德之聚。大慧、而諸凡夫不知如是食 不食肉者卽是無量功德之聚。大慧、而諸凡夫不知如是食
- 515 『大般涅槃經』卷上「比丘當觀此身,有諸不淨,肝膽腸胃心 清淨, 以是故是菩薩無是戶蟲。是菩薩功德增益,隨其功德得身 越致菩薩摩訶薩身無是蟲。何以故。是菩薩功德出過世閒 又爲虎狼鵄梟鵰鷲之所吞噬。世人愚癡。不能正觀」(大正 又其死時。膖脹腐爛。 肺脾腎, 屎尿膿血, 一:一九四下)。鳩摩羅什譯『摩訶般若波羅蜜經 惟越致菩薩摩訶薩」(大正八・三三九下~三四〇上)。 得心淸淨。須菩提, 須菩提, 常人身中有八萬戶蟲侵食其身, 充滿其中,八萬戶蟲居在其內。…… 節節支解。身中有蟲。而還食之。 以是行、類、 相貌, 當知是名 卷一六 是阿惟

作是思惟時。自見己身」(大正一五・二五三中)。一一蟲復有八十億小蟲。以爲眷屬。如此之身。當有何淨。

517

- [参考] [南朝齊] 僧伽婆陀羅譯『善見律毘婆娑』卷一一姓戒を犯す罪。(『佛教語大辭典』)。 性戒を犯す罪。對としては遮罪、犯してはいけないと決性罪」 在家、出家の別なく、行爲そのものが罪惡である罪。
- (大正二四·七二五中) (同·七七九中)。

518

- 口四道者,惡口、妄語、兩舌、無義語。心三道者,妬、作是戒體。此說十善戒。身口七支,從作色生無作色,無作是戒體。此說十善戒。身口七支,從作色生無作色,無身口七支」 [參考] 『大般涅槃經集解』卷六五「僧亮曰,無
- 畫夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常增長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常増長」」(大正三二·二九○上)。蓋夜常増長」」(大正三二·二九○上)。

519

〇六七上)。

邪見。是十惡業,悉是一切眾罪根本」(大正二四・一

- 520) 「常生」 上注 (51) 參照
- 522 521 念念 無作」上注 極短的時閒,猶言刹那。南本『大般涅槃經』 鑒其念念隨滅, 無常念念不住。 極短的時閒。刹那。 518 參照。南本 生生不斷, 猶如電光暴水幻炎」(大正一二·六〇六下)。 「顏氏家訓」 豈可不怖畏邪」。 『大般涅槃經』卷三一「戒有 一歸心 「若有天眼 卷一「是身 佛教語。謂

其心雖在

[參考] 未詳撰者『大般涅槃經集解』卷六五「僧亮(=道[參考] 未詳撰者『大般涅槃經集解』卷六五「僧亮(=道之戒皆失,則無戒可持。故於身口七支說得無作戒也」之戒皆失,則無戒可持。故於身口七支說得無作善戒,身口七支,從作色生無作色。無作爲色,餘三不從作生,身口七支,從作色生無作色。無作爲色,餘三不從作生,之戒皆失,則無戒可持。故於身口七支說得無作戒也」之戒皆失,則無戒可持。故於身口七支說得無作戒也」 (大正三七・五八○中)。

「チャンダーラ」 漢字音寫「旃陀羅」(Skt. caṇḍāla) は, 愍心, 足名爲戒。刀名爲慧。侍從名爲善知識也」(大正一二・七 是故菩薩觀於五陰, 陀羅惱一切人。五陰亦爾。以諸煩惱常惱一切生死眾生。 旃陀羅。復次,菩薩觀察五陰,如旃陀羅。旃陀羅人無慈 五陰亦爾。有諸結過,常能害人。是故菩薩深觀五陰, 諸癡人, 令墮諸有。善男子, 如旃陀羅有過之人得便害之. 鎧, 若矟, 旃陀羅種種器仗以自莊嚴,若刀,若楯,若弓,若箭. 人貪近不善之法,遠離一切純善之法。復次, 旃陀羅者,常能令人恩愛別離,怨憎集會。五陰亦爾。『大般涅槃經』卷二一「云何菩薩觀於五陰,如旃陀! 殺・漁獵・獄守等の職に攜わる賤明階級。 怨親俱害。 爾。無足,無刀,無有侍從,則爲五陰之所賊害。 人無足、 。旃陀羅人常懷害心。 能害於人。五陰亦爾。以諸煩惱牢自莊嚴 『大智度論』 刀杖、侍從, 五陰亦爾。無慈愍心,善惡俱害 如旃陀羅。復次,菩薩觀察五陰 卷七六 當知必爲旃陀羅人之所殺害 五陰亦爾。常懷諸結惱害之 「是名菩薩旃陀羅, 善男子, , 如旃陀羅。 害 令 若 如

恭敬」(大正二五・五九六下)。門被服中賊。如是人諸求佛道者,所不應親近,不應供養樂諸菩薩,是人似像菩薩,實是天上人中之大賊,亦是沙

- 正三二・三〇二下)。「善律儀」『成實論』卷八「七善律儀,不殺乃至不綺語」(大
- 不具足,皆名不善律儀人」(大正三二・三〇二中)。 姪、兩舌、惡口、妄言、綺語。若人於此七事,若具足若好、兩舌、惡口、妄言、綺語。若人於此七事,若具足若不善律儀,謂殺、盜、邪

525

524

「八戒齋」 八關齋とも。南本『大般涅槃經』卷一九「爾時「八戒齋」 八關齋とも。南本『大般涅槃經』卷一九「爾時

526

527

- 「惡律儀」 南本『大般涅槃經』卷二七「云何復名修習於戒。 「惡律儀」 南本『大般涅槃經』卷二七「云何復名修習於戒。 「惡業,是名修戒」(大正二二·七八三中)。曇無讖譯『優婆 塞戒經』卷七(大正二二·七八三中)。曇無讖譯『優婆 塞戒經』卷七(大正二三·五一〇上)。
- ○中)。

 ○中)。

 ○中)。

 ○中)。

528

「是知善律儀人受諸殺分。 是不殺戒, 卽時便缺別解脫戒」

遠藤	赤沼	四、					530
(110111)	(一九六七)	先 行研究】	待 考。	口、般護、武、波法、法、	戒得清淨,風交を作った。	三種とこれでである。	ニャーカ 「心 (チ 「心 (チ 「本) 「本) 「本) 「本) 「本) 「本) 「本) 「本) 「本) 「本)
菩薩金輪王としての皇帝」,『武藏野大學佛遠藤祐介「梁武帝における理想的皇帝像:館。	赤沼智善『印度佛教固有名詞辭典』,法藏		待考。 若力降伏諸魔。願力成就,行不違言」(大正八・七一五中)。	口意戒。何以故。爲聞思修故。以方便力教化衆生,以般於若波羅蜜經』卷五「菩薩摩訶薩行般若波羅蜜,應淨身般若波羅蜜經』卷五「菩薩摩訶薩行般若波羅蜜,應淨身護正法」(大正一三:五八下)。[陳]月婆首那譯『勝天王	戒得淸淨,具大神通遊諸國,不退菩提具六度,是人皆由〔參考〕〔北涼〕曇無讖譯『大方等大集經』卷九「身口意文を作った。	三種)に分類する際の三種の精神的行いと考えて假の譯業,三種)・言語的行い(口業,四種)・精神的行い(意業,そして「心戒=意戒」を,十種の行いを身體的行い(身「心戒」は「意戒」とも言い換え可能であると解した。	ニャーナ vijnāna)」を同義語とするので、今の場合も、「心(チッタ citta)」「意(マナス manas)」「識(ヴィジュ名為戒,亦名善行,亦名律儀」(大正二三・五九七下)。名為戒,亦名善行,亦名律儀」(大正二三・五九七下)。『雜阿毘曇心論』卷三(大正二八・八八九下)。
平 川 (二 九九三 b)		西山(一九九五)		竺沙 (二) (二)	淨秀行狀(二〇二〇)	諏訪(一九八八)	宮內省(一九三〇)
平川彰『二百五十戒の研究Ⅱ』,平川彰著作集第一四卷,春秋社。	二中	進「說儿」廣	大學通言『互○,二〇〇〇)。 二〇〇一,二七一~二八八頁(初出『大谷大學廣報委員會編『佛教傳來』,大谷大學,	竺沙雅章「佛教傳來:大藏經編纂」,大谷報』京都九五,一八九~二二六頁。	「中國在家の教理と經典」研究班編「沈約館。 館。 諏訪義純『中國南朝佛教史の研究』,法藏	版社。 「お藤隆一「都講の再檢討」,同『中國中古古勝隆一「都講の再檢討」,同『中國中古	◇大藏經細目〉。◇大藏經細目〉。◇大藏經細目〉。◇大藏經細目〉。◇大藏經細目〉。◇大藏經細目〉。

道端(一九七九b)	道端(一九七九a)	船山 (二〇二三)	船山 (二〇二二)	船山 (二〇二一)	船山 (110110)	船山(二〇一九)	船山(二〇一三)	平
佛教思想史の研究:中國民眾の佛教受容』,道端良秀「梁武帝の斷酒肉文」,同『中國教受容』,平樂寺書店,二七一~二九一頁。同『中國佛教思想史の研究:中國民眾の佛	端良秀「中國佛教と肉食」	梵網經:最古の形と發展の歷史』,臨川書船山徹『增補改訂東アジア佛教の生活規則佛教理解』,臨川書店。		資料價値」,『東方學報』京都九六,四〇八船山徹「未詳撰者『慈悲道場懺法』十卷の「四〇二頁	四)にす。 の晉寫語」、『東方學報』京都九五,五二二 船山徹「『出要律儀』佚文に見る梁代佛教 方學報』京都九四,三三~六六頁。	へ:サンスクリット語 sattva 漢譯史」,『東船山徹「眾生から有情へ,そして再び眾生トラが經典になるとき』,岩波書店。	船山徹『佛典はどう漢譯されたのか:スー作集第一七卷,春秋社。	平川彰『二百五十戒の研究Ⅳ』,平川彰著作集第一六卷,春秋社。年第第一六卷,春秋社。年期彰『二百五十戒の研究Ⅲ』,平川彰著作集第一五卷,春秋社。
顏尙文(一九八八)	徐立强(一九九八)	梁武帝索引(三〇〇一)	李秀花 (二〇〇八)		郭麗英(一九九三)	陳思遠 (二〇二〇)	陳思遠(二〇一三)	柏俊才(二〇〇八)
立臺灣師範大學歷史學報』一六,一~三六探:以「斷酒肉文」形成的背景爲例」,『國顏尙文「梁武帝的君權思想與菩薩性格初二(中華佛學研究所),一七七~二〇六頁。	徐立强「「梁皇懺」初探」,『中華佛學研究』國文化研究所。	刊・集部第十二種,香港:香港中文大學中集逐字索引』,魏晉南北朝古籍逐字索引叢劉殿爵・陳方正・何志華主編『梁武帝蕭衍	論壇』二○○八年二期,三五 李秀花「《慈悲道場懺法》成:	北京:中華書局,一〇五~一一九頁。學論文選萃』,法國西域敦煌學名著譯叢,	英 吳 吳 偉	博揚文化。 陳思遠『六朝佛教史研究論集』,新北市: 三期,九三~一二一頁。	酒肉文》」,『中華文史論叢』二〇一三年第陳思遠「梁武帝與僧團素食改革:解讀《斷	社。 社。 社。 一 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本

頁。 夏德美(二〇一〇) 同『梁武帝』,東大圖書公司。 「論梁武帝的《斷酒肉文》與佛敎中國化」, 「知臺大學學報(哲學社會科學版)』二三/三, 八六~九二頁。 Chen, Jinhua 陳金華, "Buddhist Establishments within Liang Wudi's Imperial Park."

Development and Practice of Humanitarian Buddhism: Interdisciplinary Perspectives, edited by Mutsu Hsu, Jinhua Chen and Lri Meeks, Hualian: Tzuchi University Press, pp. 13–29.